
魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

アガイル・グレイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

【Nコード】

N1395W

【作者名】

アガギル・グレイン

【あらすじ】

あの『JS事件』から四年……青の重騎士ことサリエル・フォーゼオンは傷ついた体を休めながら、のんびりと過ごしていた。

しかし、ある少女との出会いがサリエルの運命を加速させていく……

この作品は作者の拙作、「魔法少女リリカルなのはStriker s 蒼の重騎士の再誕」の続編として書いています。

もし読まれるのであれば、是非そちらから読む方をオススメします。また、こういう二次創作が嫌いな方はご遠慮ください。

人物紹介（原作キャラ含む）（前書き）

ここではオリキャラの紹介をしています。

話が進めば改変していきますので時々チェックしてくださいね。

人物紹介（原作キャラクター含む）

サリエル・フォーゼオン（本名：ラグナ・イシュバロン）

年齢 21歳

身長 177cm

体重 81？

性別 男

性格 基本的に真面目だが、飄々としていてつかみ所がない。愛妻家。

所属 機動六課 戦技教導隊

階級 二等空士 空曹

魔力ランク A-

魔導士スキル 総合B - 総合A A-

魔法術式 近代ベルカ式

魔力色 ちよつと暗い青

所持資格 バイク免許、教官資格、教導官資格、小隊指揮官。

趣味 園芸、読書、ツーリング

特技 一度覚えたことは絶対に忘れない事

好きな物 綺麗な花、バイク、仲間、ココア、フェイト、フェイトの手料理。

苦手な物 黒豆、蜂蜜、退屈、コーヒー、紅茶。

外見 マクロスFの早乙女アルトを髪を青に、目の色も青にした感じ。

概要

本作の主人公。Strikersから四年経ち、夢だった戦技教導官になった。

また青の重騎士の再誕終盤から付き合いだしたフェイトとは見事ゴールイン。今では新婚ホヤホヤの熱々夫婦である。

基本的な性格は変わっておらず、時々フェイトやヴィヴィオをいじっては面白がっている。

有事に備えて今も鍛錬を怠らない。そのため、非常に引き締まった体を維持している。

そのためか、管理局でも有数の実力者として広く知られている一方、四年経った今でも元六課隊長陣には勝てない。

なぜか教導の仕事がひっきりなしに入ってくる。教導期間は短くて三日、長くて一ヶ月。これは自分の教えが半日や一日で伝わると思っていないため。

教導方針は「体力は技術の土台」。そのため、教導初日は大体一日中ランニングである。後は実戦重視の模擬戦を行う。

時々はやてやフェイトから調査または潜入任務の仕事を頼まれるこ

とがある。サリエルはこれを休養代わりに受けている。
使用するデバイスは入局当初からの相棒、そして今は教導用に調整したアームドデバイス「グラディアス・トライ」と六課解散時にマリーナから新たにもらったインテリジェントデバイス「ヘルメス」。

【デバイス】

名前 グラディアス・ツヴァイ グラディアス・トライ

規格 人格型アームドデバイス

人格 女性型

形状 待機状態は懐に入れるほどのカード型。起動状態はやや反りの入った小太刀となっている。カートリッジはオートマチック式のを片方5発、合わせて10発。

アグレッサーフォーム

教導用に新たに作られたフォーム。小太刀に白基調の軽鎧、黒のグローブを装着し、濃紺の陣羽織を着る。

なのはのアグレッサーモード同様、軽量で機動性に優れ、魔力消費も押さえることで長時間の行動を可能にしている。また防御力も目に分かるダメージを見せるためにあえて落としている。

この状態でもヘルメスを展開して、銃を取り出すことは可能。右手に剣、左手に銃といったスタイルも取ることもできる。

アサルトフォーム

前作同様双剣に青のフルプレートと黒のグローブ、銀のインナーと

白銀のマントのバリアジャケットを装着する。
主に犯罪者を取り押さえる時にこのフォームを選択する。

ブレイブフォーム

サリエルの中でもっとも強力なフォーム。アサルトフォームにバイザー型のヘルメットと刃の付いたガントレットを追加で装着する。昔はかなり制限が付いていたが、サリエルの技術が伴ってきた今は全ての技がこのフォームから繰り出せるようになった。現在封印中で、滅多なことではこの封印は解けない。

備考

航空武装隊に所属していた頃からのデバイス。天才デバイスマイスター、マリーナ・イシュバロンが初めて作ったデバイスであり、最高傑作である。

近接格闘に特化したデバイスであり、頑丈さはピカイチ。また擬似感情が試験的に導入されているため、インテリジェント型並に感情が豊かであり、秘書代わりにもなる優れもの。

サリエルとは7年もの付き合いであり、サリエルは「これ以外のアイテムドバイスは考えられない」と言い、グラディアスも「サリエル様以外のマスターは考えられない」と言っているほどで、両者の絆は想像を遙かに超えるほど深いものである。

名前 ヘルメス

規格 インテリジェント型

人格 男性型。

形状 待機状態は羽の紋章が入ったペンダント。起動状態はプラチナのリボルバーが二丁展開される（イメージはS & amp; W M 29）カートリッジは六連装回転シリンダー式で口径が小さいものを搭載しているが、使用する魔法がまだ存在しないため既存の魔法の威力を上げるときぐらいにしか使われない。

ガンナーフォーム

名前の通り射撃に特化したフォームである。リボルバーを両手に持ち、モニター構造のゴーグルに黒の軍服と音が出ないブーツを装着する。軍服はフェイトのインパルスフォームを参考にしてデザインされている（もちろんズボンである）
主にショートレンジからミドルレンジの撃ち合い、多対一との戦闘、潜入任務などに使用される。また教導でも射撃魔法を教えるときに使われている。

無論ワンハンドモードも搭載されている。

またアサルトフォーム、アグレッサーフォーム、ブレイブフォームの時にはフォトン・ステップを制御するためにブーツの形態をとる。

備考

青の重騎士終盤で失った「マグニフィ・ダンサー」の代わりとして作られたデバイス。マグニフィ・ダンサーの基礎データを流用している。

サリエルが教導官になることを決意したため、マリーナはノーヴェがつけていたガンナツクルの射出機構を研究、改良して作り上げられた魔力弾核形成補助装置を搭載。これにより魔力弾核形成不良のハンデはほぼ無くなった。

インテリジェント型にしたため、きめ細かい制御が可能になった。先輩デバイスのグラディアスを姉様と呼ぶ。

使用魔法、技

破掌

サリエルが独自に編み出した体術。飛んだ勢いを利用して相手の肩関節にチョップを入れて、肩を外す。

ヴァリアブル・バレット

サリエルの基本的な射撃魔法。他の魔法より威力はないが連射力と燃費が勝るものがあり、牽制や弾幕を張る時によく使われる。

シヨット・クラスタ

近距離で拡散する射撃魔法。近距離でのケンカシヨットで威力を発揮する。強力な分連射性と燃費が犠牲になった。

ピアッシング・シヨット

強力なバリア貫通力を誇る射撃魔法。連射性はないが何発も撃ちこむことで相手のシールドを確実に破る。またスタン効果もあるため、拘束や逮捕時にも良く使われる。

ハドウン・ブレイカー

前作から引き続き使用。巨大な魔力刃をグラディウスに纏わせて斬りつける魔法。サリエルの基礎筋力と相まって非常に強力。

スワロー・ブレイカー、デイレイ・ブレイカー、オールレンジブレイカー

前作から引き続き使用。魔力刃を飛ばす簡単な魔法だが応用が利く。デイレイ・ブレイカーはその場に魔力刃を止まらせ、好きなタイミングで撃ち出せる。オールレンジブレイカーは相手の周りにフォトンステップを駆使して超高速でデイレイ・ブレイカーを展開し、絶

妙なタイミングで相手に撃ちこんでいく。

なお、エンドブレイカーやフォトンブレイカーはフォトン・ステップを多用するため、膝の影響を考えて使うのをやめた。

原作キャラの説明

高町なのは

原作同様、ヴィヴィオといっしょに住んで、教導官をしている。家が隣通しなので、フェイトはもとよりサリエルとも親しい関係である。

フェイト・テストロツサ・ハラオウン

Vividが始まる一年前にサリエルと結婚。フェイト・テストロツサ・イシュバロンとしてサリエルの妻になった。

売れっ子の執務官であるため、なかなか時間が取れないながらもサリエルとは今も熱々な関係である。

ヴィヴィオ

原作同様にストライクアーツに頑張るスポーツ少女。今作では準主人公扱い。

サリエルの事を兄として、格闘術の先生として慕っている。

ナンバーズ

ウーノ

海上隔離施設を出た後、正式にイシュバロンの養子になった。今はマリーナの元でデバイスマイスターとして補佐している。

本来ならのんびりとスカリエツティに付き従う以外の生きる意味を見つけていこうと思っていたところに、マリーナが強引にマイスタ―見習いとして引ッ張っていった。

サリエルとの関係はグラディアスとヘルメスの専属整備士であり、パートナーとして良好である。

トーレ

ウーノ同様、イシュバロンの養子になり、今年グライドに恩を返すため、管理局に入った。

本人の考えでは警備隊に入って、人の役に立ちたいと考えていたのだが、ウーノと同じくサリエルにセツテといっしょに教導官補佐として引ッ張って行かれた。

サリエルとの関係は部下として、ドミニランスを倒した男として一定の信頼を置いている。

チンク

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

サリエルとの関係は相談相手。よく妹の愚痴とか仕事の愚痴を話しているようだ。

セツテ

トーレと同じくイシュバロンの養子になり、今年から管理局に入った。

理由としてトーレと同じ場所で自分の価値を見つけていこうと考えていたところ、サリエルにヘッドハンティングされてしまった。

サリエルとの関係は無口ながらも一定の信頼を置いている。

ノーヴェ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

ヴィヴィオの師匠でもある。

サリエルとの関係は遊び友達とアドバイザー。ヴィヴィオの成長に合わせて訓練メニューなどの相談をよくしている。

デイエチ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

前作でサリエルに救ってもらったせいから、友達以上の感情を抱いている。

サリエルとの関係は遊び友達と買い物相手。センスがいいため、よくサリエルの服を選んでいる。

ウエンディ

原作同様、ナカジマ家の娘となった。

ナンバーズのムードメーカーとして、どんなときでも明るい雰囲気を作ってくれる。

サリエルとは遊び仲間で騒ぎ仲間。サリエルのテンションが高い時にウエンディと騒ぐと、大変な事になる。

第一教導 四年後……いきなりびっくり展開！？（前書き）

作者「新作スタートだああああっ！！ ひゃっほー！！ 初めての人も青の重騎士の再誕から読んでいる人もこんにちは！！」

サリエル「うるせえ……前作から引き続き主人公を務めるサリエル・フォーゼオンだ。」

作者「いや、新作ですよ、新作 まさか自分が続編なる物を書けるなんて思っていましたか、サリエル君？」

サリエル「これっぽっちも思っていなかった。むしろ前作でいつ更迭されなくなるかが心配でしょうがなかった。」

作者「……俺も一時期そう思っていたときがあったよ。ですが……現実とは違った！！ こうして続編まで書き上げているのだから！！」

サリエル「はあ……このバカに付き合っているとこっちまで疲れる。それでは、どうぞ閲覧してください。できるなら前作「魔法少女リリカルなのはStrikers 蒼の重騎士の再誕」を読んでから見てくださいな。」

作者「感想、意見、質問はいつでも待ってます。」

第一教導 四年後……いきなりびっくり展開!?

次元の海の中心世界『ミッドチルダ』

都市型テロ『J S 事件』の発生と解決からは……

すでに4年が経過して……

対処に当たった『機動六課』も既に解散……

そして、蒼の重騎士として復活を遂げ、最強の敵・ドミニランスに打ち勝ったサリエルは……

現在は有事に備えて爪を研ぎながらも、その傷ついた体と翼を休めていた。

これは次世代にその経験を伝え、育んでいく現役戦技教導官サリエル・フォーゼオンの鮮烈な物語。^{ヴィヴィッド}

ヴィヴィオ「……私が主人公じゃないの?」

……あくまで主人公はサリエルですから。

ヴィヴィオさんは準主人公って位置になっちゃいますね。

ヴィヴィオ「うゝ……なんか、納得いかないんだけど?」

納得してください。それでは……スタートです!!

魔法少女リリカルなのは Vivid 蒼の重騎士の日常

第一教導 四年後……いきなりびっくり展開!?

朝日が眩しくし目を覚ます。

ボリボリと頭を掻きながら起き上がり、いつもの日課である体の総

点検をする。

……うん。疲れは残っていない。昨日は一日オフだったから、全部抜けたな。

カーテンを開けて、まだ昇ったばかりの太陽に目を細める。

「う……ん……」

同じベットで寝ていた妻もその光が眩しいのか、布団を被って背を向ける。

そんな妻を愛おしく思いながら頭を撫でて、手早くランニング用のジャージに着替える。

音を立てないように外に出て、ストレッチをしていると……

「お兄ちゃん、お待たせ!!」

「よし、じゃあ行くか」

「うん!!」

妹分の高町ヴィヴィオがジャージ姿でやってきた。昔の危うい所はもう見受けられず、すっかり成長したと感じられる。

毎朝ヴィヴィオとランニングするのが日課だ。しかし、ヴィヴィオが普通に走るのに対して俺は……

「ヘルメス、今日は10キロで行こう」

『All right.』

両手両足に10キロのおもりをつけて走る。始めた頃は重くて仕方がなかったが、今では普通に走っているのと変わらない。

しばしランニングコースを二人で無言で走る。いつものことだ。

ヴィヴィオは昔なのはさんと約束した事を果たすために……俺もライバルのドミニランスと誓ったことを成すために強くなる。

それが分かっているから、こういうトレーニングではしばし無言だ。二人とも分かっているので苦ではない。

そして、いつもの市民公園内にある魔法練習所にたどり着いた。

「ふう〜……気持ちいい!!」

「大分息が切れなくなってきたな。感心感心」

「そりゃ、毎日ちゃんと走っていますから」

「だな。それじゃ、体ほぐしてから組み手な」

「は〜い」

適当にストレッチをしたら、いつものように組み手を始める。

ヴィヴィオはしなりを利かせたパンチをサリエルにかますが、サリエルはそれを苦ともせず打ち払う。

ストライクアーツをやっているので、それなりに体捌きもいい。

確か……スバルに基礎を教えてもらって、普段はノーヴェを師にして友達と頑張っていると聞いているけど……

だったら、この年でこの打ち込みは納得だ。

こうして時々見ているが……その実力はみるみる伸びていくのが分かる。

30分ぐらい組み手を続けて、サリエルがヴィヴィオの攻撃にカウンターを入れて終了する。

「ありがとうございました!!」

「ああ。しかし、ヴィヴィオ……お前も大分良くなってきたな」

「ホント!?!」

「俺が言うんだから間違いないよ。体の動きもいいし、その年でそれだけできたら十分だ」

「やったー!!」

「さあ、帰るぞ。今日は始業式だろ? ヴィヴィオももう四年生か

あ………」

初めて会った時が五歳の時だったから、あれから四年。もうすっかり大きくなっちまって……泣き虫で甘えん坊だった子供が今ではすっかり強くなった。

「うん。始業式だけだから、早く帰れるよ」

「俺も今日は早めに上がるから、夜になったらみんなでお祝いしような」

「はーい!」

来た道をクールダウンがてら走って戻り、ヴィヴィオを家に送ってから自宅に帰る。

すでに家の中はカーテンが開け放たれて、燦々と太陽の光を取りこんでいる。

リビングの方ではいいにおいがしている。あと少しすれば、朝飯にありつけるだろう。

ランニング用のジャージを脱いで、シャワールームに飛び込む。

汗を落としている間に、ヘルメスに今日の予定を聞いておく。

「ヘルメス、今日の予定は？」

『今日は教導最終日です。一日をかけて模擬戦をし、仕上がりを確認してもらいます』

「何時ぐらいに終わる？」

『早くて4時ぐらいでしょうか？ ですが、事後報告や書類がありますので……』

「それはトーレ達に任せよう。今日はヴィヴィオの進学祝いがあるからな」

『……代わってもらえるでしょうか？』

「それも仕事だと言って、無理やり代わってもらおう」

『……さいですか』

適当に汗を落としたところでいつの間にか用意されていた航空隊の制服に袖を通して、リビングに向かう。

テーブルの上にはすでに朝ご飯が並べられていて、キッチンには……

「おはよう、サリエル」

「おはよう、フェイト」

「朝ご飯、ちょうどできたから食べようよ」

「もちろん」

サリエル・フォーゼオンの妻、フェイト・テストロツサ・イシユバロンが制服の上にしたエプロンを外して席に着く。サリエルもそれに倣って席に着いた。

二人は一年前に結婚して、この新居で幸せな新婚生活を築いている。フェイトは執務官、サリエルは戦技教導官でなかなか二人の時間はとれないながらも、二人で入れる時間をできるだけ多くしようと努力している。この朝食もその一環だ。

手を合わせて、フェイトが作った朝食をパクパクと食べていく。

「今日は早く帰ってこれるの？」

「ああ。事後報告とかはトーレ達にやらせて、早めに上がってくる予定だ。フェイトはどうなんだ？」

「私も大丈夫かな？ マリーさんのところに例の物を取りに行つて、そのあとちよつと書類を整理する位だから……」

「おつ、できたのか？ ヴィヴィオ専用のデバイス？」

「昨日マリーから連絡が来たの。何とか間に合つて良かったね」
「だな。ヴィヴィオ驚くだろうな」

二人は笑顔で雑談をかわしながら、朝食を終わらせる。

ありふれた幸せであるが、二人にとって極上の幸せ……

ここ四年、サリエルはその幸せをありがたく享受している。
俺……今死んでも未練はないわ。あっ、せめて子供の顔を見れたら

……

「どうしたの、サリエル？」

「うんにゃ、何でもねえ。それじゃ、行ってくる」

「いつてらっしゃい、あなた」

ガレージに止めてあるヘリオンを玄関まで移動させ、行ってきますのキスをして教導している隊の隊舎に走らせる。

今はこうして新婚ほやほやだがあのやりとりがいつまで続くか……まあ、ゆっくりと慣れていけばいいさ。口では言わないけど通じ合っている……そんなおしどり夫婦になっていればいいのだから。

サリエルはちよつとだけ口元を綻ばせて、教導に向かうのであった。

ヴィヴィオside

私、高町ヴィヴィオはミッドチルダ在住の魔法学院初等科4年生。

「公務員」のママと二人暮らしで……自分で言うのもなんだけど、結構仲良し親子です。

お隣はもう一人のママ、フェイトママとサリエルお兄ちゃん。二人はなのはママと私のことを考えてくれて、ここに新しい家を構えたみたいです。

「ヴィヴィオ、今日は始業式だけでしょ？」

「そだよー」

「今日はママもちよつと早めに帰ってこられるから、晩ご飯は4年生進級のお祝いモードにしようか？」

「いいねー」

「さて、それじゃ……」

「行ってきま〜す」

パチンと手を合わせて、自分が通っているSt・ヒルデ魔法学院に向かう。

着いたら、早速掲示されていたクラス分けの発表を見て、ガッツポーズ。

「ごきげんよう、ヴィヴィオ」

「おはよ〜」

「コロナ、リオ」

「クラス分け、もう見た？」

「見た見た！！」

「三人一緒のクラス」

「『イエーイ！！』」

仲良しの友達と……

「選択授業で応用魔導学を選択した皆さんは、これから授業も難しくなってくると思いますがいっしょに学んでおけば将来きっと役に立ちますからね。」

結構ハイレベルだけど楽しい授業……

「は〜、終わった終わった！！」

「寄り道していく？」

「もちろ〜ん」

「また図書館寄っていきよ〜！！ 借りたい本があるし」

「あっ、でもその前に教室で記念写真撮りたいな。お世話になって

いる皆さんに送りたいんだ……皆さんのおかげで、ヴィヴィオは今日も元気ですよ……って」

リオとコロナと私が寄り合った写真をみんなに送り、その後図書館に入り浸る。

続々と先ほどの返信が自分の通信端末に返ってくる。

やっぱり嬉しいな……メールが返ってくるって……

「そういえばヴィヴィオって、自分専用のデバイス持ってないんだよね？」

「それ、フツの通信端末でしょ？」

「そ〜なんだよ……うち、ママとその愛機レイジングハートが結構厳しくて……それにお兄ちゃんも欲しいって言うとおんまりいい顔はしないし……」

実際なのはママに「基礎を勉強し終えるまでは自分専用のデバイスとかいりません」って言われて、レイジングハートを代役させているし……

お兄ちゃんも「早い時期にデバイスを手に入れるとどうしてもそれを頼りにしてしまうからな。まずは自分の体をまともに動かせるようになってから……それができてやっとデバイスが扱えるようになるんだ」って結構厳しいこと言われたし……

やっぱり教導官の二人から見たら、まだまだ私って基礎ができていないのかな？

「リオはい〜な〜……自分用のインテリ型で」

「あはは……」

『I'm sorry』

愚痴っていると、また通信端末がメールを受信した。

送信者は……ママ？

「何かご用事でも？」
「あっ、へいきへいき……早めに帰ってくるとちょっと嬉しいことがあるかもよ……だって」
「そっか」
「じゃ、借りる本決めちゃおー！」
「うんー！」

本を借りて、図書館の前でリオ達とお別れ。

いい事が待っているとしても小走りになっちゃうな。

……実は私はその昔、生まれ方関係でちょっといろいろあったりした。

なのはママとも血の繋がった親子でもないし……

今は仲良しのみんなとも、ほんの数年前には本当に……本当にいろいろな事があった。

助けてくれたいろいろな人たち……

わたしがわたしのまま、高町ヴィヴィオとして生きることが許してくれた人たちのおかげで……

わたしは今、なんだがすごく幸せだったりします。

ヴィヴィオside out

時間を遡り、午前中。

サリエルは教導している隊の最終チェックをしていた。

自らをアグレッサーとして、廃墟で構成された訓練フィールドを駆け巡る。

正面と左から誘導制御弾……一般的なアクセル・シューターが飛んでくる。

それらを避けられるものは避け、直撃しそうなものだけグラディウスで切り払う。

「ふむ……誘導の仕方は合格。後はミドルレンジでの撃ち合いだな」

「わたしの出番ですか？」

「ああ。ヘルメス、ガンナーフォームだ」

『All right.』

白基調の軽鎧の上から羽織った陣羽織から一転して、アサシンと思わせる黒の軍服と音を吸収するブーツ姿のバリアジャケットに切り替わった。

手には二丁拳銃。サリエルは教導官になってから、射撃を教えるときはこの姿を一貫して取っている。

二年半前に教官刺客を習得して以来ずっと訓練を積んでいるため、今では一般の局員では対抗できないほど銃捌きが上達している。

地面スレスレを飛んで、四人一組で固まっているチームに接近する。それで自らの距離に置き、ヘルメスの引き金を引く。

『Variable Barrett』

二丁の拳銃から引き金を引くたび、青の魔力弾が撃ち出されていく。四人は一斉に散開し、俺を取り囲もうとするがそうはうまくいかない。

もともとこのガンナーフォームは多対一を重要視して作り上げたフォームだ。

ミドルレンジからのバラ撒きはもちろん、二丁拳銃での左右の撃ち分け、多種多様の弾丸セレクト、アサルトフォームを比べても柔軟性があることは間違いない。

サリエルは瞬間的に二対一の状況に持ち込むように仕掛ける。

しかし、そうは簡単にさせてはくれない。

ここ一週間みっちりとそういう状況にさせるなという事を叩きこんでいたので、さすがに動きはいいか……

「教官！！もらいました！！」

「それで決まるほど、現実には甘くない」

『Change Barreret・Shot Cluster』

すぐさま弾丸を変え、銃口を接近戦を挑んできた一人に向け、近接向けの拡散弾を撃ち込む。

一瞬で広範囲にはらまかれたため、攻撃を中断せざるを得ず、プロテクションで拡散弾を防ぐ。

さらにサリエルは……プロテクションの上から何発も撃ち込む。

「さて……どれほどで抜けるかな？」

『Change Barreret・Piercing shot』

一発一発丹念に撃ち込んでいき、相手のプロテクションは見る見るうちにヒビが広がる。

そして、五発目を撃ち込んだ時にプロテクションが砕け散り、隊員はのけぞってしまう。サリエル相手にそれは命取りだった。

とどめを刺そうと、銃口をそいつに狙い定めるが他の隊員がそれをさせまいと援護射撃を繰り返す。

しかし、それをものともせず、左手の銃で全て撃ち落とし、狙いを定めた隊員にとどめを刺した。

それと同時に模擬戦終了を知らせるアラームがフィールド全体に響き渡る。

「よし、模擬戦終了。一旦集合しよう」

このチームの他にも、二カ所で模擬戦を行っていたチームも集めて、

評価を下す。

他のチームのアグレッサーを勤めていた……トーレとセツテも俺の後ろで腕を組んで並んでいた。

「え〜と……全体的にフォーメーションは良くなった。だけど、まだまだ一対一に持ち込まれすぎる。そのことだけ注意するように」

「……はいつ!!」「……」

「トーレ、お前の所はどうだった?」

「どうも何も、接近戦がお粗末すぎる。わたしがちよつと仕掛けた程度でもうアタフタしているぐらいだから……それ以外は及第点だな」

「セツテの所は?」

「私の所はそつなくできていました。ただ言わせてもらおうと誘導の仕方や攻撃が素直すぎると……」

「そこら辺は経験で補っていくしかないだろう。まあ、何はともあれ、一週間俺の訓練によくついてきてくれた。本当にありがとう」

それを聞いた瞬間、隊員達の顔にようやく安堵が浮かんだみたいで、全員大きなため息をついていた。

解散を命じて、別の場所で待機している残りの隊員に通信をつなげる。

「残りは午後から!! 昼食食ったらすぐに始めるからな。それじゃ、休憩!!」

サリエル達も昼食をとるためにフィールドの外に出る。

展開したフィールドを修復するためにコンソールを展開し、慣れた手つきで叩いていく。

トーレとセツテはこの作業を終わるのを待っているようだ。

「……どうだ？ 補佐官になって、初めての教導は？」

「私はノーヴェエやウエンディ達を教えていたからそれほど苦ではないが……」

「私は少々疲れましたが……人に教えて、アグレッサーまでやって……これで疲れないって言うのがおかしいです」

「俺もそうだったよ。最初なのはさんの教導について行った時も、かなり疲れた」

セツテの様子を見てみると、言葉通りどこかぐったりした様子を見せている。

うくん、これは午後の教導はちょっと厳しいかな？

トーレは全然疲れた様子は見せていないけど……さすがに午後は軽めにさせるか。

そんなことを考えて、コンソールを叩いているとグラディアスからメールを受信したという報告を受ける。

叩きながら、メールを開いてみると……

「……お嬢、いい笑顔していますね」

「確か、4年生になったんですね？」

「ああ。さて、調整も完了したし、メシ……食いに行こうか」

コンソールを閉じて、二人と食堂に行く。

これがサリエルの教導風景。

教導期間は短くて三日、長くて一ヶ月のスパンで教導を受け持っている。半日や一日の教導を受けない理由として、自分の教えがそんな短い期間で伝えられないと考えているから。

まだまだ数が少ない近代ベルカ式の使い手であり、腕も確か……そして、あの奇跡の部隊の出身だからだろうか、ひっきりなしに教導依頼が舞い込んでくる。

四月から教導官補佐としてトーレとセツテを迎え入れて、より充実

した教導を行っている。
教導官資格を取り、正式に戦技教導官になってから二年半……ようやく板についてきたと言うところか。
食堂に向かっている途中、何かを思い出したかのように手を叩き、トーレ達の方に向き直る。

「あつ、セツテ……午後からの教導、アグレッサー役はやらなくていいぞ。隊員と一緒にモニターでチェックしてくれ。」

「……分かりました」

「トーレも午後は二チームだけ担当してくれ。それからはセツテと同じように頼む」

「私はそれほど疲れていないぞ」

「精神的に疲れてるだろ？ そんなに仕事がしたいのなら……報告書作成と部隊長への完了報告、セツテと一緒に頑張ってくれ」

「……残業か？」

「いや、こういう事にも慣れておかないとダメだろ？ これも教導官の仕事の内だから我慢しろ」

「そういえば……朝に陛下のお祝いしなくちゃ……とか言っていましたよね」

「〜」

凶星を突かれ、口笛を吹いて誤魔化そうとするが、すでにサリエルの行動を知り尽くしている二人がその程度で騙されるわけがない。しかし、それを咎めたところで意見を変える事はないと分かっている。盛大にため息をついて諦める。

トーレとセツテ、そしてウーノは海上隔離施設から出た後、正式にグライド大将の養子に入り、イシユバロンの実家に住み込んでいる。その関係で、サリエルはいろいろと三人の世話をしている。トーレとセツテが働きたいと言った時も、こうして教導官補佐として自分の庇護を受けられるよう便宜を図った。

本来なら教導官補佐になるためにある程度キャリアを積まなければいけないのだが、そこは自身のコネをフルに活用して管理局に入った直後にこの二人を補佐にした。

……自分でこういうのもなんだが、未だにトーレ達の事を悪く言う輩はたくさんいる。

確かにあのJ S事件の首謀者だ。しかし、今ではこうしてちゃんと更生して、社会に順応している。

それなのに、管理局の古参の人間はトーレ達のことを指さしてこう言う。

「犯罪者」「人ではない」「贖罪のつもりか？」

そんな声がそこら中から聞こえてくる。いくら偉いからって、そんなことを言っている道理は無いはずなのに……

しかし、三人はそういった逆風にめげず、逆にこう言いかけた。

「ならば、そういう声が上がらないほど努力すればいい。お前のようにな」

なんて強い覚悟と思い知った。

だが、むかつくものはむかつくので基本的にそういうことを言った輩には闇討ち一発。フェイクシルエットでやっているから誰が犯人かは分からない。

気づいたときには病院のベッドの上……老害はしばらく長期療養に入ってもらうことにしよう。

まあ、何はともあれ……今、俺はこうして恵まれた環境で働いている。

昔の仲間とも頻繁に連絡を取り合っているし、他のナンバーズ達ともよく会っている。

これが……今の俺の日常。

改めてこんないい環境に身を置けることに感謝しながら、サリエルは昼食に向かうのであった。

午後の教導が終わり、隊員を集めて最後の訓示が終われば……これで教導は終了である。

この後に報告書作成や、教導が終わったことをその隊の部隊長に仕上がり具合の報告、その他諸々の仕事が続いているが今日はそれらを全てトーレ達に任せて（押しつけて）、帰宅する。

お祝いするって言ったしな……早めに帰って、俺もその祝いに加わるか。

外に出てみると、すでに夕日が西の地平線に落ちかかっている。

すでにヘリオンがエンジンをかけて、俺のことを待っていた。

全く……主人思いのバイクなこと……

「さて……我が家に帰るか」

『実家に寄らなくても？』

「別格ヴィヴィオへのプレゼントを受け取りに行くつもりはないし、親父達なら多分郵送するだろう。さっさと行くぞ、ヘリオン」

『畏まりました』

スロットルを思いっきり回して、1070ccのエンジンが股下で唸りを上げる。

家までの道のり……人気の少ない道路を一筋の黒い流星が駆け巡る。サリエルは、このバイクで感じる風が好きだった。空とは違う、この風を切っていく感触。

何も考えず、ただ風を感じるままに運転しているとあっという間に自宅に着いてしまった。

玄関の前で降りて、自宅に入って行く。着替えている間にヘリオン

が勝手に車庫に入ったようだ。
しかしまあ……こう、家があるのに電気がついていないって、何か悲しいな。
仕方ないけど……ほとんど隣のなのはさんの家に入り浸っているからな。
そんなことにため息をつきながら、隣の家へ入っていく。

「ただいまあ〜」

「あつ、お帰りー!! お兄ちゃんー!!」

「お帰りなさい、サリエル君」

「お帰り、サリエル」

ちょうど晩ご飯を食べ始めるところだったのか、三人ともテーブルについて、俺を迎えてくれた。

サリエルのいつもの定位置、フェイトの隣に座って一息つく。その間にフェイトがご飯をよそってくれた。

「それじゃ、ちょうどサリエル君も帰ってきたことだし……ヴィヴィオ、4年生進級おめでとうー!!」

「おめでとうー!!」

「えへへ〜、ありがとう　なのはママ、フェイトママ、サリエルお兄ちゃん」

満面の笑みを浮かべるヴィヴィオを見て、俺までいい気分になってきた。

こうやって、人を祝うっていうのもいいな。

会話も弾み、テーブルの上にある料理も見見るうちに無くなっていく。

「しちそうさま〜」

「ゴチ……ふう」

「はい、お粗末様でした」

食器を運ぶのを手伝って、洗い物は女性陣に任せる。

その間、ヴィヴィオと一緒にテレビを見る。

いつもの定位置、俺の膝の上に座って何やら嬉しそうに揺れている。……4年生になっても、こうやってくっついてくれるのは嬉しいんだけど……やっぱりまだまだ子供だなんて、思ってしまう。

いつかは離れていくのはわかってるし、年頃の女になれば近寄らなくなるかもしれない。

何か……まだ子供はいないけど、子供をもったような父親のようだな。悲しい悲しい……

フェイトとなのはさんも洗い物が終わったらしく、一息ついていた。そろそろ……かな？ ヴィヴィオが動き出すのは。

「さて、今夜も魔法の練習しとこ〜っと」

「あ、ヴィヴィオ、ちょっと待って」

練習に行こうとするヴィヴィオをなのはさんが呼びとめる。

その後ろではフェイトが何やらごそごそとあるものを取り出そうとしている。

「ヴィヴィオももう4年生だよね？」

「？ そ〜ですが？」

「魔法の基礎もだいぶできてきたし……そろそろ自分の愛機デバイスを持つてもいいんじゃないかなって」

「ホ、ホントツ！？」

「ああ。言っただろ？ 体の動きがいい！基礎ができてきたってことだ」

「実は今日私がマリーさんから受け取ってきました」

フェイトの持っていた箱を開けると……

「……ウサギのぬいぐるみ？」

「違うよ、サリエル。ちゃんとしたデバイス」

ウサギのぬいぐるみにしか見えないが……

そうサリエルが思っていた時、ぬいぐるみが空に浮いた。

ヴィヴィオも目を丸くして、二人の後ろに隠れて指をさす。

「と、飛んだよ！？ 動いたよ！？」

「そのウサギは外装……っっていうかアクセサリーだね。飛ぶのはおまけ機能だつてマリーさんが」

「へえ……あの人、こういうところは凝るんだ」

ぬいぐるみを纏ったデバイスはフヨフヨと二人の後ろに隠れているヴィヴィオに近づく。

ヴィヴィオは小さく声を漏らして、浮いているデバイスに見とれる。

「色々トリサーチもしてヴィヴィオのデータに合わせた最新式ではあるんだけど、中身はまだほとんどまっさらの状態なんだ」

「名前もまだ無いからつけてあげてって」

「えへへ 実は名前も相性ももう決まっていたりして……そうだ、

ママー！！ リサーチしてくれたって事はアレできる！？ アレ！！」

「もちろんできるよ！！」

「へえ……アレもできるのか？」

「……？」

フェイトだけ頭にハテナマークを浮かべるが、まだ教えない。

アレもできるように設定しているのか……だったら、これから教え

るときはそれを使ってもらって教えていこう。
ヴィヴィオはぴよんぴよん跳ねながら外に出て、魔力陣を展開する。

「マスター認証、高町ヴィヴィオ。術式はベルカ主体のミッド混合ハイブリッド。私の愛機デバイスに個体名称を登録。愛称はマスコットネーム『クリス』。正式名称『セイクリッド・ハート』。いくよ、クリス……セイクリッド・ハート!! セーリット・アープ!!」

魔方陣が発光すると同時に、セイクリッド・ハート……クリスの基本設定も行われる。

そしてセットアップが終わり、光の中から出てきたのは……聖王モード、つまり大人のヴィヴィオだった。

何も知らないフェイトはその姿に目を白黒させて驚いている。事情を知っているのはさんは無事にセットアップしたことを褒め、サリエルはフェイトの様子をニヤニヤと見ているだけ。

「なのは、サリエル!? ヴィヴィオが、ヴィヴィオが!!」

「落ち着け、フェイト。これは大人モードって言って、あの事件のように聖王化している訳じゃないんだ」

「こっちの方が魔法や武術の練習に向いてるから、きちんと変身できるように私とサリエル君が監督していたって訳」

「でも……」

きちんと説明されてもどうやら納得いかないようだ。

確かに大人モードは一時的にはいえ、聖王の姿をとるのだ。

その姿での暴走を懸念しているのだろう。レリックも取り込んでいない今はそんなことは滅多と起こらないと思うのだが……

んー……とどう説得するかを悩んでいるヴィヴィオはポンと手を叩いて、一旦元の姿に戻った。

「大丈夫だよ、フェイトママ。変身したってヴィヴィオはちゃんと高町ヴィヴィオのまんま。ゆりかごもリックももう無いんだし、だから大丈夫。クリスもちゃんとサポートしてくれるって。」

「うん……」

「心配してくれてありがとう、フェイトママ。でも、ヴィヴィオは大丈夫です。いざとなったら、サリエルお兄ちゃん達が助けてくれるしね」

「もうそんなに若くないが……全力で助けてやるよ」

「ありがとう、サリエルお兄ちゃん。それにそもそもですね……ママ達だって、今のヴィヴィオぐらいの頃にはかなりやんちゃしていたって聞いているよ？」

「そ、それはその……」

「あはは〜」

二人はアタフタと誤魔化しているが、実際にそうです。かなり無茶していました。

でもそれが、この二人の出会いであり、物語の始まりなのだ。

初めはどうであれ、今はこうして大親友なのだから万事OKだろう。

「そんなわけでヴィヴィオは早速魔法の練習に行ってきたと思います。」

「あ、私も」

「俺もついて行こうかな。フェイト、エリオ達の連絡は頼んだ」

こうして、ちょっとハプニングがあったが三人はいつもの練習場所、市民公園内の公共魔法練習所に向かう。

一人になったフェイトは別の次元世界で自然保護隊に所属している家族のエリオとキャロに連絡を取る。

「……ってことになってね。本当にびっくりしたんだけど、キャ

口とエリオは聞いてたりしてた？」

「はい。兄さんからバツチリと。」

「お兄ちゃん、フェイトさんを驚かすためにあえて言うなって言うってききましたから」

「も〜、サリエルの意地悪！！ 何も隠すこと無かったと思うのに……」

「多分フェイトさんの驚く顔が見たかったんじゃないですか？」

「お兄ちゃん、そういうイタズラ大好きですし……」

「それでも……ひどいよ」

シユンと頂垂れるフェイトを見て、エリオとキャロはこの熱々な二人の関係ににんまりとする。

何度も繰り返し返されている光景だが、そこに飽きは来ない。あるのは……暖かい愛のみ。

「でも大丈夫ですよ。ヴィヴィオ、魔法も戦技も勉強するのが好きですから、できることは何でも試してみたいんですよ」

「ヴィヴィオはあれでしっかりしています。心配ないと思いますよ。兄さんもボク達に詳しく報告してきますし、大丈夫ですよ」

「……うん？ それでそっちはどう？ お仕事の調子は？」

「今日もホントに平和でしたよ」

「今やっている希少種観測ももうすぐ一段落ですから、来月にはフェイトさんのところに帰れそうです」

「本当？ じゃあ、私も休暇の日程調整してみるね」

「はい」

「お買い物行きたいです〜」

それから、三人は最近あったことをお互いに報告しあい、楽しい時間をご過ごした。

一方市民公園に向かっていているサリエル達は……

「…………ん？」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

後ろの方から何か強い気配を感じて、その方に目を向けてみる。

住宅街で適度に身を隠せる木々が生い茂っている。先ほどからつけられている感覚もあるが……

もし、なのはさんかヴィヴィオのストーカーだったらここらでボコボコにしておいた方がいいな。

「いや、ちよつとヘルメスを忘れちまってな。取りに戻るから先行つていてくれねえか？」

「珍しいね。サリエル君がデバイス忘れるなんて…………」

「俺も人の子ですから………… ヴィヴィオのこと、頼みますね」

「わかったよ。それじゃ、先行つているからね」

俺はその場に立ち止まって、ヴィヴィオとなのはさんが見えなくなるのを待つ。

そして、二人の姿が完全に見えなくなったら、先ほど強い気配を感じた方向に再度目を向ける。

ヴィヴィオ達が動いてもついて行かないか？ なら、俺のストーカー？

やれやれ………… テレビとか雑誌とかによく出ているからな。今の内に止めさせるか。

「そこに隠れている奴、出てきな。」

「………… お気遣い感謝します。」

と、影から出てきたが曇っているせいか、顔がよく見えない。

しかし、声から若い女性ということだけが分かった。

まあ、若いから年上に憧れるってあるからな……しょうがないか。しかし、少女の発した言葉がサリエルの考えを打ち砕く。

「……時空管理局戦技教導隊所属、サリエル・フォーゼオンとお見受けします」

「ああ。そういう君は？」

「カイザーアーツ正統、ハイディ・E・S・イングヴァルト。『霸王』と名乗らせていただきます」

雲の合間から出てきた月明かりに照らされて、バイザーで顔を隠した16、7歳の少女が悠然と名乗り上げた。

第一教導 四年後……いきなりびっくり展開！？（後書き）

新作連載スタート。とにかくがむしゃらに頑張っていこうと思います。

Vividはまだ連載中という事もあり、先の見えない道のりになりそう。

とくにDSAAの辺りどうしようかと今から悩んでいます。

こんな駄作ですが、これから付き合い合ってください。

それでは、次回にまたお会いしましょう。

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。 (前書き)

作者「今作のモットーは……一週間に最低一回更新!! 皆さん、こんにちは!!」

サリエル「それはいいが……で、なんだこのタイトル?」

作者「ん?何か文句でもあるのか?」

サリエル「クライマックス過ぎるだろ!? もうちょっと考えてタイトルつけるよ!!」

作者「いいじゃん。別に間違っていない。」

サリエル「はあ……せっかく続編だっていつの……もっと新鮮味を出していいこつぜ?」

作者「私は古き良き時代が好きだね」

サリエル「ダメだこりゃ。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待ってます」

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。

サリエルが霸王と名乗る少女と会っている頃、ナカジマ家では……

「……連続傷害事件？」

「ああ、事件ではまだ無いんだけど」

「どゆこと？」

自宅で困らんしていたチンク、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディはギンガからの通信に耳を傾ける。

この四人は海上隔離施設から出た後、ゲンガ・ナカジマの娘として社会に復帰している。

チンクは管理局へ勤め、ノーヴェも救助隊とバイトに精を出している。デイエチ、ウエンディも同様だ。

「被害者は主に格闘系の実力者。そういう人に街頭試合を申し込んで……」

「フルボッコってわけ？」

「そう」

「あたしそーゆーの知ってるツス！！ 喧嘩師！！ ストリートフアイター……！」

「ウエンディ、うるさい」

「ウエンディ正解。そういう人たちの間で話題になってるんだって。被害届が出てこないから事件扱いではないんだけど、みんなも襲われたりしないよう気をつけてね」

「そう……」

「気をつける？ 来たら逆ボッコだ。」

「物騒なことを言うな、ノーヴェ。それで……これが容疑者の写真か？」

「ええ。自称『霸王』イングヴァルト」

「それって……」

「そう。古代ベルカ……聖王戦争時代の王様の名前」

ギンガの話聞いて、四人の顔が一気に曇る。

何せこの霸王という古代ベルカつながりで関係がありそう人物を二人も知っている。

そして、この連続傷害……その二人の命が危ないかも知れない。

「とにかく気をつけること。帰ったら、詳しいことは話すからね」

ギンガの通信が終わり、再び弛緩した空気が部屋を包み込むが……四人の顔はまだ強張ったままだ。

そこに一番上の姉であるチンクが最初に切り出した。

「イクスとヴィヴィオが危ないかもしれんな。」

「ああ。いつ襲ってくるかもわかんねえし……」

「私、一応サリエル達に連絡しておくね」

「頼む……後は私達か」

直接本人に危害を加えられないとなると、身内に危害を加える可能性がある。

しかも相手はただの喧嘩師の可能性もある。狙われるのは必然的に二人に近い存在で、ある程度強い人物となる。

「ノーヴェはこれから気をつけた方がいいツスね」

「ああ。もしあったら返り討ちにしてやるけどな」

「でもサリエルも危ないよね？ 頻繁にテレビとか雑誌に出ているし……」

「……」

デイエチの一言で三人はサリエルがもしその霸王と会ったときのことを考えてみる。

たっぷり数瞬、三人は同じ結論に達した。

「……………注意したところで聞くような奴だったら苦勞はしない」

「そうツスね。サリエルって、どこかドミニランス姉と似ているし」

「まあ、あいつなら心配ないか」

三人はのんきに笑って、結論を出す。

あのサリエルにそんな心配は余計だと。

しかし、サリエルを慕っているデイエチだけは……………拭えない不安をどう処理するか困っていた。

かくして三人が考えている通りになっていた。

霸王と名乗った少女の言葉を聞いた瞬間、サリエルは一気に警戒を強めた。

何せ、最近管理局でも噂になっている。

「霸王」と名乗る喧嘩師まがいの野郎が時々ストリートファイトをしていると。

まさか……………俺が狙われるなんてね。

「……………モテる男は辛いつてね。で、俺に何の用？」

「あなたにいくつかお聞きしたいことと確かめさせて頂きたい事が……………」

「では、質問から受け付けようか？」

「伺いたいののはあなたの知己である「王」達についてです。聖王オリヴィエの複製体クローンと冥府の炎王、イクスヴェリア。あなたはその両

方の所在を知っていると思います。」
「……………」

なるほどね……………古代ベルカ絡みか。
所在を聞いて、積もり積もった恨みを現代で晴らす……………お決まりの行動だな。

だとすればここはバカ正直に答えるのはただのアホだ。
炎王については俺は別件でミッドチルダを離れていたからあんまり知らねえけど、オリヴィエの複製体クローンについては思い込みがありすぎる。

何せヴィヴィオの出生はまさにそれだからだ。ここら辺でこいつを分からせておかないとヴィヴィオが危ない。

「悪いが……………どちらも知らねえな」

「なぜですか？現にあなたは先ほどそれらしき人物とっ」

「あれは俺の姪っ子だ。そんな大それた血筋は引いていないぜ？」

「……………分かりました。この件は他を当たる事にしましょう」

俺に聞いても無駄だと知ったのか、意外にあっさり引いてくれた。しかし、これ以外に確かめたいことって……………何があるんだ？

「ではもう一つ……………確かめたい事はあなたの強さと私の強さ……………一体どちらが上なのかです」

「……………いいだろう。ここじゃ人目が付く。場所を変えよう。」

サリエルが背を向けて、歩き出す。それに霸王も付いて歩く。
なるほど……………自分の強さを知りたい輩か。

どうして武道の道を進む人は、こういう事を知りたがるのかねえ？
望みが高ければ高いほど、強さを知りたがる傾向がある。

そんな物知ったところでなんにもならない。俺はそれをよく知って

いる。

まあ、大きな壁にぶつかるとはいいことだからな……遠慮なくぶつかってもらおう。

そうしてついたのは豪邸の建設予定地だった。ここなら広いし、壊れるものは何もない。

「お気遣い感謝します。」

「あそこら辺は人目がつくからな。俺も困るし、お前も嫌だろ？」

「はい。では防護服と武装をお願いします。」

「いらねえよ。俺はそんじゃそこらの輩とは鍛え方が違うからな。」

背を向けていたサリエルが胸ポケットから紐を取り出し、下ろしていた髪を結ぶ。

イングヴァルトはその間、軽く体をほぐしながらサリエルを疑う。

こんな軽薄な男が管理局でも有数の実力者？

信じられない。先ほどから注意深く見ているけど、強者特有のオーラが見受けられない。

実力者には少なからずオーラがあるのに……この人はそれを感じられない。

話を聞いていて偶然見つけたのはよかったものの、なんとという徒労感。

王の事も聞けなかったし、今回は収穫はなさそうだ。

「強さを知りたいなら……まずは大海を知る事だな。」

「っ!？」

「どうした？ 間合いませ？」

髪を結び終え腰を落として構えたサリエルを見た瞬間、自分の考えが間違っている事に気づいた。

先ほどはこれっぽっちも感じられなかったオーラが湯気のように立

ち上り、構えから来る威圧感も半端無い。

そして何より違うのはオーラの質。今まで闘ってきたスポーツマンとは違う、まさにむき出しの武術を体現しているようだ。

イングヴァルトの胸が一段と高鳴る。

この人なら、私をさらなる高みに連れて行ってくれるかも知れない。そんな淡い期待を込めて、イングヴァルトは威圧感に挑むように構える。

「……ふっ!!」

「っ!？」

鋭い踏み込みからの貫手。それをサリエルは首を振って辛くもかわす。

続けざまにステップを軽快に踏み、胴体の下から一撃を繰り出す。

しかし、サリエルは体を捻ってそれを避けた。

さらに踏み込んで、ハイキック。頭を屈んだ避けたところに返す刀で踵落としを出す……

屈んだ体勢から張り付かれる。踵落としは止められ、軸足を払うように蹴られて体勢を崩す。

慌てて攻撃に備えて体を捻って空中で立て直すが、当のサリエルは一旦間合いを取った。

先ほどから思ったが、あの人から攻撃する意志はこれっぽっちも感じられない。

「……どうして攻撃しないのですか？」

「ん？ いや、戦いの中で見るって大切だからな。俺はそれを実行したまだよ。」

「ふざけてるのですか？」

「全然。さっきの一攻防で大体の実力は分かったよ。スピードもあるし、手数も多い。いやいや……その年でそれだけできれば十分だ。

「こんな寝め倒しているのに、先ほど感じた威圧感は消えない。来る……そう思ってたイングヴァルトは、防御を固めた。」

「だけどさ……当てられないようじゃ、意味ないよね？」

「さっきの踵落としなんか惜しかったと思いますか？」

「あんなもの……あなたが勝手に俺の誘いに乗って来たただけだろ？ 普通ちよつと実力のある奴でもハイキックはあんな風に屈んで避けようなんて思わない。バックステップを取るか、打点を殺すために前に出るかだろ？」

「それは……」

考えてみれば、あんな風に屈んで避けるのは素人がやる事だ。

それをこの人がやるとは考えにくい。ならば私は誘われていた？ そしてまんまとそれに乗って体を寄せられて、軸足を刈られた。

「本当の攻防って言うのはな……こういう事を言うんだよ！！」

構えもせずにはぼノーモーションで突っ込んできた。

サリエルは頭狙いの肘打ち。イングヴァルトはそれに合わせてカウンターを取るうとするが……

「ボディをカバーしな。」

「えっ……っ！？」

サリエルはそう呟くと、ヒョイと肘を引いて合わせられたカウンターの右拳をいなす。

肘打ちはフェイントで、本当の狙いはボディ。左拳が唸りをあげてイングヴァルトを肉薄する。

呟かれてとつさにボディをガードするが、その上から叩かれた。ガードしたにもかかわらず、胴体にその衝撃が響く。イングヴァルトはこの理不尽な重さに目を白黒させる。

「響くだろ？ 今流行のスピード重視の格闘は確かに見栄えがいいが……一撃の重さが無い。」

「くっ……」

「本来ならスピードとパワーを両立してこそ一流なんだが……今回はお前向けに見せてやるよ。」

無造作に踏み込んで、最短距離で拳を突き出す。

そのまったく無駄のない動作にイングヴァルトは驚きながら、何とか捌く。

相当の腕はあると見ていたが、これほどとは……

負けじと自分も攻撃するが……クリーンヒットが取れない。

見に徹していた先ほどとは違い、こちらの攻撃も当たる。だが、拳に手応えを全く感じない。

攻撃が当たる瞬間、微妙に芯を外されているのだ。

なんて巧妙なディフェンスワーク。

イングヴァルトに焦りが生まれる。いいのを入れないとリズムに乗れない、技をつなげられない。

「いい攻撃が入れられなくてどうしようって焦ってるな？」

「っ!？」

「顔に出すぎ。それじゃあ心理戦で常に風下に立つ事になるぞ。」

「余計なお世話です!!」

仕方がない。ここは一度流れを戻すために……

スタンスを広く取って、足先から足先から練り上げた力を拳足に乗せて撃ち出す。

狙いは胴体。クリーンヒットすればダウンは必須、そうでなくても相当なダメージを負うはずだ。

「霸王断空拳！！」

イングヴァルトの放った直打がサリエルのボディを襲おうとするが……両手を回転させてまるで葉っぱが水の流れに乗るかのようになされた。

不可解な回避法に驚き、自ら一度距離を取った。サリエルは後退を潰そうとせず、まるでしてやったりとニヤニヤしながら、腕をさすっていた。

「つと……あぶねえあぶねえ。」

「……なぜ、あれがいなせるのですか！？ あれは受け流すだけじゃ到底っ」

「ちよつとしたマジックさ。さっきみたいに腕を回転させて攻撃の軌道を変えたのさ。俺は職業柄色々な技法を知っていてな……格闘教導でよく使っているんだよ。」

「……なんて人」

軽いサリエルの言動に衝撃を受けているイングヴァルトを尻目に、サリエルは冷めていった。

拳を合わせて分かった事……この霸王様は過去の事にご執着している。

そんなもの……執着したところで強くなるわけがないのに……なっ
たとしてもすぐに頭打ちだ。

過去の自分を省みて、そのことは痛いほど分かっている。

ここで勝たせて、これ以上被害出されてもこっちが困るし第一負けてやる趣味はこれっぽっちもない。

なら、差を見せつけて負かそう。

そんな事を考えているサリエルを隙だらけと感じたのか、貫手を放つてくる。

首を振ってよけたものの、多少タイミングがずれたのか頬を浅く切ってしまう。

それほど鋭い貫手を持っていないから……

吹き出た血を舐めて、サリエルは改めて考えを固める。

ちんたら闘うのはやめだ……

ミドルキックをかましてくるイングヴァルトに、体を滑らせて肉薄し蹴りを殺す。

滑らせた勢いをそのままに掌底……いわば突っ張りを喰らわす。

小柄なイングヴァルトはその掌底で体を宙に浮かせながら、少々後ろに吹き飛んだ。

サリエルは一度呼吸を整え、終わらせるために前に出る。

「でえええい!!」

「っ!？」

やっと体勢を立て直した所に顔面への強打。その実にわかりやすい狙いでイングヴァルトは両手をクロスさせて頭部をカバーするが……その衝撃に驚いた。

先ほどボディに受けたときは別次元の攻撃。こうしてガードしても頭を揺らされる。

返す刀でがら空きのボディを殴る。まともに喰らってしまい、悶絶する。殴られた衝撃で肋骨がミシミシと悲鳴を上げる。

倒れかけたところを何とか堪えて、攻撃しようとするが……そんな暇はくれない。

「せえいりいやあ!!」

またも顔面狙いの打ち下ろし。なんとか防ぐが、またもガード越し

で衝撃が伝わってくる。

これはもう……殴るじゃなくて、叩きつけるに近い。それぐらい威力があるのだ。

攻撃は単発で終わるものの、そのつなぎに全く隙がない。先ほどより若干スピードは落ちたものの、パワーは先ほどと段違いだ。

無駄のない純粹な格闘術、綺麗事を嫌ったむき出しの武術。

インクヴァルトはサリエルの攻撃をできる限りさけ、直撃のみガードに徹した。攻撃も考えたが、実行に移した瞬間倒れているのはこちらだ。

何せこの人はこうして圧倒的に攻めているにもかかわらず、いつでもカウンターを撃てる状態なのだ。

残された攻撃手段として……カウンターがある。幸い攻撃は見えているので合わせれば……

そう思い、サリエルのストレートに被せてクロス・カウンターをかまそうとするが……一番必要ないものが頭をよぎってしまった。

この攻撃に……カウンターを成功させる？

例えるなら導火線に火がついたダイナマイトを点火する直前で消すようなものだ。

失敗すれば、自身に多大なダメージを喰らう。そんな恐怖がインクヴァルトの頭によぎった。

「はっ!？」

集中力の欠いたカウンターが成立するはずがないと自身が一番よく分かっている。慌ててカウンターを止めて、かすりながらも避ける事に成功した。

だが、サリエルはその隙を逃さない。鋭くミドルキックでインクヴァルトの胴体を蹴り、余りある脚力で吹き飛ばす。

それに合わせて、サリエルも宙を飛ぶ。狙いは左肩関節……外せば激痛で戦闘不可能だ。仮に続行してもその部分を執拗に攻撃すれば、

誰だって音を上げる。

何とか持ちこたえたインクヴァルトは万事休すと思われたが、ここでサリエルの打ち方に奇妙な隙を見出す。

……あそこにカウンターを打ち込めれば!?

もうここしかない。自身の持つ最高の技で勝負を決する。

すぐさま構え、先ほどと同じように直打を放つ。

サリエルも足を地面につけて、着地した勢いをそのままにチョップを打ち込む。

「おおおりやつ!」

「霸王断空拳!」

チョップがあたった瞬間、左肩からボキリと嫌な音が聞こえた。

しかし、それでも自分の拳は見事に隙があつた胴体……水月に……目に見えたのは……片手ながらも水月を見事にカバーされた自分の拳だった。

嘘ッ……あれほど大きな隙だったのに?

インクヴァルトは激痛が走る肩を押さえて、一度距離を取る。サリエルもその場で何もなかったかのように構え直す。

「安心しな。折れちゃいねえ……ちよつと肩を外させてもらっただけだ。」

「痛い……あれだけ大きな隙があつたのに、なぜ防御できたんですか?」

「俺は人一倍目がよくてな……見えたから空いていた右手で防御できた……さ、分かっただら帰りな。」

「なぜです!? 私はまだやれます!」

「さっきまでの攻防で分からねえかな? 俺は相手の弱点を躊躇無く攻めるタイプだぜ?」

「っ……」

確かに……この人なら左肩を徹底して狙ってくるだろう。今なお走る激痛がさらにひどいものになれば、勝負にならない。

悔しそうに唇をかみしめ、肩を押さえてインクヴァルトはその場から立ち去った。

完全に立ち去った事をわかったら、ようやく緊張の糸を緩め……吐いた。

「ゲエエエエ……ウエ……ゴホツ、ゲホツ……」

終わった安堵感からではなく、間違いなく先ほど片手でガードした霸王断空拳のダメージだ。

くそっ……やっぱり避けとくべきだったな。片手じゃ到底防ぎきれない事は分かっていたのに……

ひとしきり吐いて、仰向けになる。体がひどく重い上に鈍痛に犯されている。

インクヴァルトは巧妙なディフェンスワークと評したが、あれはあくまでクリーンヒットさせないだけでダメージを無しにするのではない。

ただサリエルはやせ我慢していただけだ。しかし、顔に出さないのもまた技術。相手に弱みを見せた時点でこちらの心は負けている。

しかしまあ……破掌まで出してこの様か……本気を出さなかった俺も俺だがな。

『マスター、大丈夫ですか？』

「ああ。これくらいの傷、何ともないが……これじゃ、家に帰れない」

『どうしますか、主？』

「とりあえず実家に連絡する」

コンソールを操作して、この時間実家にいるはずである人物に連絡を取る。

しばらくして、通信が繋がりモニターに映ったのは……

「はい、どうしました？」

「悪い、ウーノ……喧嘩で相打ちになっちゃった」

「またそんな……で、私にどうしろと？」

「このままじゃ、家に帰れない。とりあえずそっちに行きたいから迎えに来てくれ。場所は追ってグラディアスが送る」

「はあ……分かりました。迎えに行きますので、フェイトへの言い訳を考えておいてくださいね」

頭を抱えて嫌みたっぷりに言われてしまった。

さて……なのはさんとフェイトにはどうやって言い訳しようかな？ そのことをウーノが車で迎えに来るまでずっとうんうん言いながら考えていた。

その頃、インクヴァルトはというと……

「ッ……」

息をするたびに肩に激痛が走る。

ガードした腕がじんじんと痛む。

脇腹も回し蹴りを受けた腹部もひどい痛みだ。

本来なら、負けていて当然……だけどあの人は勝負をつけなかった。とにかく今はこの痛みを止めたい。

辺りを見渡したインクヴァルトは一番平らそうな場所に肩と垂直になるように拳を置く。

そして……勢いよく押し込む。ボコツと音と共に肩関節がはまったが……

「~~~~~っ!?!?」

想像を絶する痛みにはばらくその体勢のまま動く事ができなかった。やがて痛みが治まり、肩を回してちゃんとはまっている事を確認して自分の荷物が置いてある場所へ歩き出す。

その道中、先ほどの戦いを顧みる。

私は……弱いからあんな風に押された?

違う。私の体は間違いなく強い。それなのに押されたのは私の心が弱いからだ。

あまつさえ相手に自分の土俵が上がってもらってこの体たらく。今回の相手の本分は剣。それすら抜いてもらえなかったという事は本気で相手にしてもらってなかったのだ。

涙が出てきそうなほど情けない。カイザーアーツをコケにされたも同然だ。

一体どのように鍛えたらあのように強くなれるのか?

私は……このままじゃいけないのに……

今は亡き霸王の悲願を達成しなくちゃいけないのに、私は……涙を堪えながら、インクヴァルトは一人夜道を歩く。

そして、決意する。失った尊厳を……自分の存在意義、カイザーアーツを証明するために……

もう一度鍛え直して、あの人に再選を申し込む。

その時は……本気で来てもらう。

インクヴァルトが決意している一方サリエルは実家にいた。

ウーノの部屋で傷の手当てを受けている間、家にいた全員……グラ

イド、エレア、ウーノ、トーレ、セツテから質問攻めにあった。

「一体どこのどいつにやられたんだ？」

「最近噂になっっているだろ？ 格闘系の実力者を襲っている奴……イテテテテツ！？ ウーノ、もつと優しく！！」

「自業自得です。あなたはどうしてこうも厄介事に首を突っ込むんですか？」

「……わかんねえ」

「全く……我が息子ながら、もう少し自重を持って欲しい物だ。せつかく管理局でも評判のフェイト君を嫁に迎えたというのに……これでは愛想を尽かされてしまうぞ」

シヨットグラスに入ったブランデーを煽りながら、父……グライド・イシユバロンは釘を刺してくる。

現在はシユバリエネットワーク事件の事後処理の功績が認められて、大將に昇格。これにより現職の管理局員でもっとも発言力がある地位へと上り詰めた。

しかし、当の本人は年だから一歩引くと言ってあまり発言はしない。主に名義貸しをしている程度である。

「大丈夫ですよ。この子達の絆は生半可なものじゃありませんから。そう簡単に別れたりしませんよ」

「そうだろうか……しかしまあ、すっぱりと切れたものだな。」

「貫手だし、結構実力あったからね……それに俺も剣も銃も抜かなかつたし、これぐらいは許容範囲だよ」

「全く……余裕を見せるからそうなる。サリエルは剣を持って一流銃を持って二流、それ以外は三流だ。なのに相手の土俵で闘う真似なんてするから……」

「分かっていてやっている事だよ、トーレ」

「軽くスキャンしましたが、目立つのは頬の傷程度で後は打撲だけ

でしょう」

「ありがとう、セツテ」

一応消毒して、止血パッチを張ったらこれで完了だ。

釘を刺す意味かウーノは叩くようにパッチを張って、ときばきと救急箱をしまう。

その横でトーレがフェイトと通信している。言い訳……頼んだ通りにしてくれるだろうか？

「ああ。帰る途中に偶然会ってな……家で呑もって事になったのだ」

「そうなんだ……今日中に帰って来れそう？」

「……無理だな。なぜかベロンベロンに酔っぱらっている」

「それじゃ帰ってくるのは無理そうだね」

「とりあえず今夜はこちらに泊めるといふ事でいいか？」

「うん。制服もそっちに置いてあるだろうし、私は構わないよ」

「すまない」

「いって、トーレ。サリエルには飲み過ぎないように注意してね」
「分かった。それじゃ」

どうやら簡単に信じてくれたようだ。良心が痛むが素直に家に帰ってあれこれ聞かれるよりマシだ。

フェイトの場合、執務官という地位を存分に使ってあいつをすぐさま捕まえるかも知れないし……

拳を合わせてもう一つ分かった事は、あいつは性根は素直である事。素直で何かに打ち込んでいる奴に基本悪い奴はいない。

性根が曲がっていて、悪ならば俺が捕まえている。だから、ああやって逃がしたのだ。

「……まったく、私にこういう事を頼むなんて……」

「悪いな。それで……明日の予定は？」

「休息がてらの書類仕事です。しかし、部隊長が私達だけで事後報告をした事に大層ご立腹でしたので……」

「俺だけ、何か追加されると？」

「ああ」

「はあ……まあ、いいや。とりあえず明日考えよ」

「では、これでお開きかな？」

「そのようですね。じゃ、皆さん……お休みなさい」

親父と母さんが出て行き、続いてトーレとセツテも出て行った。俺も出て行くこととするが……

「今夜はここで寝てください」

「おいおい、俺だって男だぜ？ ウーノみたいな美人といっしょに寝たら……」

「体、簡単に動かないと思いますから」

確かに……打撃を受けたせいではなかなかどうして……

自分の部屋まで行くのは億劫だな。かと言ってベットでいっしょに寝るのは……

「失礼します。お布団一式をお持ちしました」

「ありがとうございます、じいや。ベットの横に敷いて置いてください」

「畏まりました」

……まあ、それが普通か。

敷いてもらった布団に横になりながら、じいやに礼を言う。

横になれば、今日の疲れが一気に出てきたようで眠気が襲ってきた。ウーノはというと、預かったグラディアスとヘルメスのメンテナンスに取りかかっている。

イシュバロンの養子になってすぐにマリーナがデバイスマイスターとして育成するため、強引に弟子にした。

当初ウーノはドミニランスが言ったようにゆっくりとスカリエッテイに従う以外の生きる意味を見つけていこうと考えていたが、この時点で破綻。

以後、マイスターとしての道を進む事になった。元々興味があったことなので、よかったらしい。

今ではマリーナの助手をしながら頑張っている。そして、マリーナからグラディアス、ヘルメス専門の整備士として任されている。

この希代のマイスターが作ったデバイスは他の技師では到底まともに整備できないほど精巧に作られているため、それを任せられるという事はマイスターからしたらすごい事である。

「……………ヘルメスの調子はどうですか？」

「ん〜……………一年使って、感触はいい。だけど、もう少し引き金を軽くできないか？」

「調整しておきますね。他には？」

「ヴァリアブル・バレットの弾速をもう少し速くしたい。それから……………」

サリエルが眠りに落ちるまで、二人は世間話を絡ませながらデバイスの調整をしていった。

今日もまたミッドチルダの夜は更けていくのであった。

第二教導 決闘……青の重騎士VS霸王。 (後書き)

漫画にオリジナルストーリー付け加えるのって大変だね。

しかも……サリエルの圧倒的だけど、頑張れば倒せる感を出すのが難しかった。

次回はアインハルトの思いがけない再会を書きたいと思います。
それでは

第三教導 日常……教導官の一日。(前書き)

サリエル「……え、予定より二日も遅れてすいません」

作者「理由はといいますと……考えがまとまらなくてダラダラと書いていたのが原因です」

サリエル「それだけじゃないだろ!? 今更こち亀を一巻から読み始めやがって……あれ、全部で175巻もあるんだぞ!? 正気か!?」

作者「正気だ!! その上で書き上げて見せりゃ!!」

サリエル「その言葉、絶対忘れないからな!! それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待っています。」

第三教導 日常……教導官の一日。

翌日、サリエルはひどい筋肉痛に悩まされながら起床した。

すでにベットの上で寝ていたウーノはおらず、枕元に新品の航空隊の制服が置いてあった。

制服を手早く着て、みんなが揃っているであろう食堂に向かう。

ウーノの姿はすでに無く、親父、母さん、トーレ、セツテがのんびりと朝飯を食べている。

俺もそれに倣って席に着き、朝飯が運ばれてくるのを待つ。

「そういえば、ラグナ……これからは気をつけた方がいいぞ」

「はっ？ 何で気をつけないといけねんだ？」

「お前が逃したという霸王……喧嘩師は少なからず自分の強さに自信を持っていた。その自信がお前によって粉々に打ち砕かれたのだ。復讐してくるかもしれないし、もっと卑劣な手でお前を傷つけるかもしれない。そのことを頭に入れておくんだな」

「はっ！！ 不意打ち上等、闇討ち上等。行状坐臥の気持ちがないや、教導官なんてやってらんねえよ」

「……もう一つ忠告しておく。お前の体はもうお前一人のものではない。独身ならばその考えは許されるかもしれないが、所帯を持つとそうも行かない。愛する者、お前を慕う者、目をかけてくれる者、それら全てのものになるのだ。そのことを噛みしめて、これからの行動を考えるのだな」

「……ごちそうさん」

付き合ってもらえないとばかりに、サリエルは席を立つ。

じいやに二、三言付けてから一度部屋に戻る。

その様子にグライドは深いため息をついて、トーレ達を見る。

あれはどうにもならないと肩をすくめて意見するトーレ。

無関心で黙々と朝飯を食べ続けるセツテ。

その様子にさらにため息をつくグライドであった。サリエルはというと、一旦自分の部屋に戻り机の上に置いてあったグラディアスとヘルメスの起動テストをしていた。そこに先ほど言付けたじいやが入ってきた。

「ラグナ様、頼まれたものをお持ちしました」

「悪いな、じいや」

「いえいえ……それでどれを選びになりますか？」

そう言つて差し出してきたのは、タバコ……普通の紙巻タバコから噛みタバコ、葉巻に電子タバコ……果ては嗅ぎタバコまである。

迷わず電子タバコを手に取り、スイッチを入れて吸い始める。部屋いっぱいには柑橘系のさわやかな香りが漂い始める。

サリエルは教導官になり立ての頃、格好つけるためにタバコを始めた。

最初は普通の紙巻タバコを吸ったのだが、猛烈な煙たさと匂いが嫌で一本で止めた。フェイトや他の知人から注意された事も起因である。

そのため、代わりに吸い始めたのは電子タバコ……ニコチンを含まないフルーツカートリッジを装着したものだ。

これならニコチンやタールを摂取しないので体に害はないし、ちょっとした香水代わりにもなる。

……タバコを吸い始めた理由は他にもあるのだが……いつか説明しよう。

一度大きく水蒸気を吐き出し、一服つける。

「……なあ、じいや」

「なんでしよう？」

「もし……俺が死んだら、じいやは悲しむ？」

「もちろんでございます。あまりの悲しさに後を追ってしまつかも
しれません」

「そうだよな……」

親父の言いたい事はよく分かる。天涯孤独ならまだしもこうして多くの人とつながりを持っている以上、この体は自分一人のものではない。

そんなことはとっくの昔に分かっている。結婚してまだ半年も経ってなかった頃、ある調査でちょっと重い怪我をした。その時のフェイトの取り乱しようとなたら……

自分を大事にしなくちゃいけないのも分かる。だけど俺は大事にして大切な人が傷つくぐらいなら、大切な人を守って自分が傷つく。矛盾しているが、おれは常にこう思っている。

もう一度吸い、思いを吐き出すかのように水蒸気を吐く。

「サリエル、そろそろ行くぞ」

「ああ。じいや、行ってくるよ」

「いつてらっしゃいませ」

最後の水蒸気を吐きだして、電子タバコをじいやに返す。

所属する班の自分の机の中にまだ予備がある。

とりあえず今はこれで落ち着いた。

制服を羽織り直して、サリエルはトーレの車に乗り込み、職場へ向かう。

所属している戦技教導隊……本部は本局にあり、そこから教導官と事務官を数名から数十名集めた「班」といういくつかのチームで編成されている。

サリエルが所属している班は、かつて1562航空隊の部隊長であり、機動一課を経て昨年戦技教導隊に転属してきたガロン・ナイベル二佐の班で、なのはもこの班に所属している。

職場……ミッドチルダ中央の郊外にある隊舎につき、三人はセキユリテイシステムにIDカードを差し込んで中に入る。ロビーで新聞を読みながら、くつろいでいるのは……ガロン班長であった。

「おはようございます、班長」

「ああ。今朝はチームでご出勤か？」

「ええ。実家に帰っていましたから」

「そうか。サリエル、三十分後に俺の部屋に来い。それまでは書類仕事だ」

「了解であります」

妙にかしこまった口調で返事しているが、内心げんなりしている。突っ立っていても意味がないので、とりあえず自分の部屋に向かう。入ってすぐに目についたのはちょっとした山になっている書類……おそらく前にやったテスト装備の書類評価やその他諸々の確認事項の書類だろう。

はあ……とため息をつきながら、自分の机に座る。

トーレもセツテも与えられた机に向かい、少しだけ何もしなかった。

「……案の定、呼ばれたな」

「しょうがないさ。班長の言う事だし、ちゃんと行ってあげますよ」
「……その潔さがたまに羨ましいです。それはそうと、サリエルはなぜ班長とあんなに親しいのですか？」

「私も気になるな。経歴にはそれらしいつながりはないと思うのだが……」

「うーん……長くなるから、帰ってきてからな。さて、仕事するぞ」
「了解」

適当に書類を分けて、三人は一斉に取りかかる。

しばらくはコンソールの叩く音と時折、確認を促す声と質問する声が部屋に響き渡る。

真面目にやっていたいれば時間が経つのは早いもの。あっという間に三十分たった。

「サリエル……そろそろ三十分かと？」

「ん？ ああ、それじゃ行ってくるわ。基本的に二人の判断に任せるけど、重要そうな書類は俺の机に回しておいてくれ」

「分かった」

引き出しから電子タバコを一本取り出し、胸ポケットに入れて班長室に向かう。

三階建ての隊舎の一番隅……本来物置などに使用するのだが、ガロニ班長は隅がいいと言って、強引にこの部屋にしたらしい。

昔から性格が変わってないと失笑したものだ。そんな事を思いながら、ドアをノックして入る。

「サリエル・フォーゼオン空曹、参りました」

「よし……まあ、適当にかけてくれや」

「失礼します」

近くにあったソファに腰掛けて、班長の言葉を待つ。

最初出会った頃から少々老けたが、逆に渋みが増したため昔より貫禄が出ている。

そう思っていると、凜々しいひげを蓄えた口から重く、硬質な声が出てくる。

「どうだ……お前が引き取ったあの二人は？」

「トールは元々教育していたせいか、そつなくこなしていました。セツテに関してはまだまだ慣れが必要かと……」

「そうか。お前の予想通りというわけだな」

「はい。後体力もまだまだ足りてないと感じましたね」

「それはこれからつけていくものだ。お前みたいにアホほど鍛えて
いる奴はそうそういない」

しゃべりながら、班長はタバコに火をつけて一口吸う。

うまそうに煙を吐くのを見届けて、サリエルも自前の電子タバコの
スイッチを入れて吸う。

「……つたく、本物のタバコにしろよ」

「タバコは体力落ちますから……隊長も禁煙したらどうですか？」

「できていたらとっくにやっている」

「ですよね……航空隊の時から、禁煙すると言ってはすぐに吸って
いましたから」

「……あれからもう何年経った？」

「……八年ですね。俺と班長が出会ってから……もう八年ですよ」

二人は遠い目をして、あの頃の事を思い返す。

夢と希望……そして強さを追い求めていた十代。

そんなとき、当時1562航空隊の部隊長であったガロン・ナイベ
ル三佐と出会った。

出会ったばかりの時はただの一隊員として覚えられていなかったが、
ある事件を境に目をかけてくれるようになった。

サリエルが隊員から陰湿ないじめを受けていて、それが任務にまで
持ち込んだため、それを知ったガロンはサリエル以外の隊員を半殺
しの目にあわせた。

この時、これほどまでに部下思いで熱い人はいないと思った。これ
以降、サリエルはこの隊長についていくことを決意した。

ガロンもあれだけ陰湿ないじめを受けたにもかかわらず、やめなか
ったサリエルを強い子だと思い、期待を持つようになった。

それから隊の空気が一変して、サリエルをよくする先輩隊員も増え、サリエルもそれに応えるかのように強くなっていた。

「最初入ってきた時は……まあ、強くはなるだろうと程度のイメージだった。しかしな、いじめを知ってからこいつは精神的にも強いなどイメージが変わったよ」

「あの頃はひどかったですよ。さすがにリンチはありませんでしたが、ロツカーへのいたずら、陰口、訓練中の故意の誤射などいろんなことされましたからね。まあ、あれがあったからあの後起こった事件もあの程度で済んだと思います」

「あれかあ……俺はいまだに後悔しているよ。あの時なんで強引でもいいから連れて行かなかったのかって……」

「過ぎたことを後悔しても何もできませんよ。今はこうして、一緒の隊になれたのですからいいじゃないですか」

「そうだな。それで今回呼んだのは……」

こういう昔話をして、ようやく本題に入った。

二人ともここからは真面目に話し合い、今度の教導先、装備のテスト日程、休暇などの調整などを詰めてサリエルは部屋を後にした。時計を見てみると呼ばれてから結構な時間がたっていた。急いで部屋に戻り、すでに半分以上自分の分を終わらせていたトーレとセツテに謝りながら、書類仕事に取り掛かる。

「……それでどうだったのだ？」

「ん？ まあ何もなかったよ。ちよつと昔話をして、これからの予定詰めていただけ」

「意外ですね。昨日私達と話していたときはあのクソ野郎と罵っていたのに……」

「口ではそう言っているけど、意外と部下思いなんだよ」

「それはひしひしと伝わってくる。それはそうと、何で親しいか話

してくれるか？」

「ああ。あれは……」

そこから仕事をしながら、身振り手振り交えて班長との出会いを語り、自分の過去を話していく。

トーレとセツテは出会いの話は素直に耳を傾け、過去については自分達が独自に入手したものはほとんど違う事に驚きながら、サリエルの過去に同情する。

午前の勤務時間も過ぎ、昼食まで続いた話も佳境に入った時に通信が入った。

「ここからはお前らも知っているように……っと、はい？」

「あっ、サリエル？ 今大丈夫？」

「おう。どうした、ディエチ？」

通信してきた主はディエチだった。どうやら休憩時間に合わせてかけてくれたらしい。

ナカジマ家の娘になったチンク、ノーヴェ、ディエチ、ウエンディとはよく連絡を取り合ったり、トーレ達といっしょに買い物などしている。

しかし、今回はそういう誘いではなさそうだ。ディエチの顔がそう語っている。

「最近格闘技者が襲われるっていう噂、聞かない？」

「まあ、よく聞くがな。それがどうした？」

「実はその噂の犯人……古代ベルカ絡みでヴィヴィオが狙われているかもしれないかも……だから、私達の方でヴィヴィオの周辺を注意していこうって思っているんだけど……」

「……そ、そうか」

「ん？ どうしたの、サリエル。顔が青いよ？」

「そ、そんな事はないぞ。至って、普通だ」

サリエルの背筋にたたりと冷たい汗が流れる。

実はディエチが言った噂の犯人とは……すでにやり合っているので知り合いも知り合い。殴り合った関係だ。

この心配性で俺の事を慕ってくれるディエチにそれが知れたら……無用な心配をかけてしまう。

俺としてはそう言うのは勘弁願いたい。フェイトもそうだし、このディエチも何かと俺は無茶しがちと思っっているらしい。

昔はそうだったが、今では分別のできた大人だ。もうそういう事は何かとんでもない事が起こったときにしかしないと決めている。

ちらりとトーレ達を見てみると、口パクでなぜか……言っておくと伝えてくる。

(おい、何でだよ!? 無用な心配かけるじゃねえか!)

(すでに会敵したならその事実を言っておく方がいいではないか。追い払ったと言えば、余計な面倒をかけなくても済む)

(でもなあ……本当に言うの?)

(ああ。ディエチは強い子だ。お前が言い聞かせれば、ちゃんと理解してくれるはずだ)

そうだといいいんだが……仕方がない。

ここは素直に言って、後はこっちで何とかするっていう方向で収めようか。

「……その犯人、霸王って名乗っているだろ?」

「うん。古代ベルカの王様の……って、何でサリエルがそれを知っているの?」

「実はもうその霸王と会った。ていうか、闘った」

「ええっ!? まさか、そのほっぺの傷も……」

「その時にできたものだ。だけど安心しろ。俺がきつちりっ」
「他に怪我は！？ 打撲とか切り傷とかないよね！？ あと骨折とか大けがしていない！？」

闘ったと聞いた瞬間、デイエチはアタフタとして他に怪我はないかと聞いてきた。

予想はできていたが、いざやられると何もしていないのに悪い事をした気分になる。

…… 実際悪い事に近いのだから、その感覚はおおむね正しいのだが…… 釈然としない。

とりあえず落ち着かせよう。これじゃ、話もままならない。

「デイエチ、落ち着け。とりあえず、話を聞こうか？」

「本当に大丈夫！？ 肩胛骨の裏側の肋骨はギブスも当てられないから厄介なんだよ！？」

「お前がどうしてそんな医者しかわからないような骨折を知っているかは分からないが…… 話を聞いてくれ」

「う、うん……」

「確かに俺は霸王と会って、やり合った…… だけど、この傷以外は何も怪我しちやいないし、きつちり追い払った。まあ、炎王と聖王の事について聞かれたが、知らぬ存ぜぬを通したぞ」

「そ、そうなんだ。だけど…… 本当に大丈夫なの？」

「ああ。お前が思っている無茶はしていないし、なんにも心配ないよ」

嘘も方便…… 実際は相手の土俵で闘うという無茶をしたし、全身筋肉痛あの強烈な打撃を受けた水月も未だに痛い。

正直に言ったところで何も生まない。生むとしてもさらなる心配のみだ。

そんな自分勝手な言い訳を自身に聞かせながら、安心させるために

言葉を紡ぐ

「サリエルがそう言うのなら……信じるけど、昔みたいに無茶だけは絶対しちゃダメだよ？」

「わかってるよ。いざとなればトーレやセツテも守ってくれる。だから、ダイエチが心配しなくても大丈夫だ」

「……それなら、安心かな」

「安心なのだ。それはそうと、今何してるんだ？」

「イクスのお見舞いに来てるんだ。よかったら、ノーヴェ達に代わるるか？」

「いや、いい。ノーヴェはともかくウエンディはうるさくて敵わないからな……」

イクスの所つてことは……聖王教会か。

予想だけど、チンク辺りが騎士カリムと霸王について何か対策していそう。

それならこちらとしても安心だけど……後はヴィヴィオか。

俺が追っ払ったとはいえ、また襲来してもおかしくはない。

ちよつと警戒だけしておくか。

「じゃあ、そういう事だから……無茶だけは絶対にダメだよ？」

「わかってるって。また今度買い物行こうな？ ダイエチに服、選んでもらいたいし」

「うん！！ それじゃあね〜」

ダイエチとの通信を終え、食べかけの昼食を処理していく。

セツテもそれに倣って自分の昼食を再開し、トーレも再開しながらこちらにフツと柔らかい笑みを向けてくる。

「……なんだ？」

「いや、ホント……お前って私の妹達に好かれているなって、思っ
ていてな」

「今更何を……」

「姉上達はお前の事を心から信頼しているし、かと言う私もお前の
事を信頼している。チンクもお前によくいるんなことを相談してい
るみたいだし、セツテやオットー、デイドも顔に出さないがお前
を好いている。セイン、ノーヴェ、デイエチ、ウエンディは言わず
もがな……元々敵同士だった私達がいまやお互いを認め合い、信頼
し合っている。これは一つの奇跡だと……私は時々思うのだ」

確かに……この四年間、時々思っていた。

ドミニランスとは競い合うライバル。ウーノはグラディアスとヘル
メスの専属マイスター。トーレとセツテは部下。チンク達は友達。
今はこうして仲良くやっているが、四年前のJS事件では敵同士と
して対立し合っていた俺達。

普通なら今も憎み合っているもおおかしくはない。ましてやドミニラ
ンスとなど、会った瞬間殺し合いを始めてしまうくらい憎み合っ
ているかもしれなかった。

しかし、蓋を開けてみれば……こうしてうまくやっている。

昨日の敵は今日の友ということわざを聞くが……これほどうまくい
った例は過去無いだろう。

「それは……多分俺の人柄だろう?」

「断じてあり得ません……と言えないところが悔しいです」

「そうだな。八神やテストロッサ、高町にはよくしてもらったが、
お前ほど私達の事に尽力を尽くしてくれた奴は他には知らない」

「スバルもティアナも頑張ってくれたぞ。あいつらに比べたら、俺
は毛のほどもしてない」

そうしらばっくれるサリエルだが、二人はしっかりと理解していた。

サリエルは相手を認めない限り、上司でも頭を下げる事はない。しかし、私達が入局する時色々な所に頭を下げにいったらしい。その中に毛嫌いする古参の幹部や陸の連中、グライドも含まれている。

仲間が困りそうな環境になる前に、自分を犠牲にしていい環境を作ってくれた。

……と、ある夜に酒が入ったグライドから語られていた。その時の衝撃といったら……

「さ、メシ食ったら地上本部に行くぞ。何でもこの前のテスト装備の改良が終わったらしい。その視察に行けだ」とさ

「了解」

ちよつと慌ただしくなった昼食を終わらせ、三人は地上本部に向かう。

教導隊といってもただ他の隊を教導するだけではない。武装隊が使う重装備や、地上部隊や航空隊が凶悪犯を確保するための道具などのテストも行う。

今日本部に来たのは、先日サリエル達がテストした凶悪犯確保の飛び道具なのだが……

「……これが改良された奴ですか？」

「ええ。犯罪者捕獲トリモチランチャー「トーチャ・ラック」です。あなた達から頂いた注意点を元に、徹底した改良を加えた事でより一層よい物へと進化いたしました」

「具体的にはどのような変化が？」

「まず、無誘導から誘導式にしました。誘導方法は赤外線、レーダー、熱源反応の三つを両立。そして弾頭に設置されたセンサーで犯人の目標の三メートル手前で破裂。高速で吐き出されたトリモチで犯人を確保するという画期的な物になりました」

「ふむ……」

制御室から外の実験風景を見る。

確かに高速で動くターゲットを確実に捕捉して、きっちり三メートル手前で弾頭からトリモチが発射されている。

これなら並の犯罪者なら捕まるが……

「カタログデータを」

「ここに……」

今時珍しい紙資料で書かれたデータをじっくりと見ていく。

弾速、総弾数、発射動作の手間……数々のデータを見て、サリエルは一言きっぱりと告げる。

「……使い物にならないな」

「えっ？」

「なぜ弾頭をもっと犯人の手前で破裂させる事ができない。これでは逃げられてしまうぞ？」

「それは……」

「世の中には三メートルも距離があれば避ける奴がいるんだ。それぐらい考えればすぐに分かるだろ……それと、トリモチで捕らえた後はどうするんだ？」

「専用の除去剤を使って剥がしますが……」

「現実的じゃないな。テストを見てみる限り、トリモチは結構多いしそれを剥がすとなると大量の除去剤が必要になってくる。それに広がりすぎて一般市民にも被害が出るかも知れないしな」

「……」

「分かったら、再提出。今度はもっとマシな物を頼むよ」

カタログデータを返して、三人は出て行く。

後ろでは技術者がデータを挟んでいるクリップを渾身の力で握っているのが感じ取れた。

しかし、サリエルはそれを知っていながらも辛辣な言葉を出したのだ。

「サリエル、ちょっといいすぎではないのか？」

「いいや、むしろ足りないくらいだね。トーレ、セツテ……お前達があれば使う側だったらどう思う？」

「取り回しが悪そうですね。弾速を出すために長くしたバレルが原因だと思います」

「単発式ではな……しかも次弾装填に10秒もかかれば犯人に逃げられる」

「だろ？ しかもコストも高いと来ている……あれがもし正式採用されていたら、たちまち現場から苦情が殺到する事になるぞ」

「なるほど……」

「しかも今更トリモチ弾って……拘束網も効果があることを知っていてこれだからな……まったく、あのマッド共が……」

確かに重く、初速の遅いトリモチより、初速が遅くてもトリモチより軽く、範囲が広い網を使った方が効果的だ。

やはりあくまで現場重視……データ上の話なんて端っから信用しないのがサリエルだ。

実際に使ってみて……肌で感じ取ってできあがった物しか使わないのだ。

徹底した現場主義……だから、サリエルは信頼できる。

しかし、この主義のおかげでよく上層部から嫌われているみたいだ。もつとも、そんな物はどこ吹く風と本人は気にしていないようだが

……

「さて……後2、3カ所回らないと……早く終わらせて、定時には

帰るぞ。今日は直帰でいいって言っていたしな」

「久しぶりにゆっくりできそうだ」

「そうですね。昨日なんて誰かのおかげで夜遅くまで仕事させられていましたからね」

「〜」

口笛を吹いてしらばっくれるサリエルに二人は大きなため息をついた。

だが、それでも……この男は信頼できる。

やるときはやってくれる。だから、私達はついて行くのだ。

口には絶対出さないが、トーレ達はサリエルには分からないように笑みを浮かべて後ろをついて行くのであった。

午後いっぱい技術部を回り、通信で班長に報告したら今日の業務はそれで終了だった。

とにかくトーレ達に家まで送ってもらって、そこで別れた。

「ただいま〜」

家に帰ってきてみるも、まだ誰もいない。どうやらフェイトはまだ仕事しているらしい。

とりあえず服を着替えて、ほっぺに張つてある止血パッチを剥がす。鏡を見て、傷が残ってないかチェック……大丈夫そうだ。

「さて……たまには自炊するか」

『今日は何にしますか？ 参考レシピを開きましょつか？』

「いや、いい。俺は適当、フェイトにはしっかり食べてもらおう」

『……どこまでも妻思いなことだ』

いつもいつもなのはさんのところでお世話になるわけにはいかない
しな……

昨日みたいに特別な事がない限り、二人はなるべく自炊するように
している。

どちらかが先に帰れば、帰ってきた方が作る。そうした方が夫婦の
絆も深まるし、どちらかが倒れたときでも困らないからだ。

実際サリエルは航空隊時代に趣味程度に料理していたので、それな
りに作る事はできる。

冷蔵庫の中身を確認して、何が足りないかを頭に記憶する。

大体記憶したら、ヘリオンに乗り込み近くのスーパーへ向かう。

所持持ちで男がスーパーに向かうって……なんか、虚しいな。

『その考えは至極古いものです。女性の社会進出が当たり前になっ
た今、夫も台所に入るべきです』

「いや、それはわかってるけど……」

『それなら早く買い物しましょう。奥さまもいつ帰ってこられるか
分かりませんからね』

「OK」

スーパーに入って三十分後、両手に野菜、肉など諸々が入った袋を
持って帰宅する。

急いで冷蔵庫に入れて、自分が食べるために必要な食材をまた取り
出す。

とりあえず今日は……

「鶏肉が安かったから、グリルにして……後は、サラダとみそ汁だ
な」

『……なぜみそ汁を？』

「なんとなく飲みたいし、たぶんフェイトも飲みたいだろう。作り

置きしておけば、明日の朝も飲める」

『そうですね。ではレシピを……』

「いらね。こんなものは自分の感覚で作るもんだ」

手際良く鶏肉に下ごしらえをして、野菜をちぎっていく。主食であるご飯は出かける前に炊飯ジャーのスイッチを入れてきた。

鶏肉をオーブンに入れたら、次は味噌汁の具材を用意する。わかめ、大根、えのき……真正銘日本の味噌汁だ。

材料を切り分け、粒状ダシを入れて、煮立ったら具材をダシに入れて味噌をとかす。

完全に溶かしきったら、一煮立ちさせる。その間に焼き上がった鶏肉にガーリックを軽くかける。

全ての動作がよどみなく、それでいて丁寧だ。

『……主、主夫になるっていう手もっ』

「うるせえ！！ 今度言ったら無理矢理解体するぞ！！」

『すいません』

どうやらやぶ蛇だったようだ。

さっきは分かっていると云ったが、やはり根本的に台所に立つのは嫌らしい。

取り決めがあるため、仕方が無くやっているのだと言いたそうだ。

だが、それにしても動作があまりに洗礼されている。そのことをグレイdiasが突っ込もうとするが、先ほどのヘルメスの件があるのでやめておいた。

そうこう言っている内に、全てできあがったらしい。テーブルに一人分のご飯、チキングリル、サラダ、味噌汁が並べられる。

「よし、こんな物だな。自分で作った割にはうまそうだ」

『今メールを受信しました。奥様、三十分もすれば帰ってくるそう』

です』

「そうか。それじゃ、ちゃっちゃと食っちゃまうか」

軽く手を合わせて、器用に箸でご飯を食べていく。この男、本当にミッドチルダで生まれたのだろうか？

テレビを見ながら二十分で食べ終わり、食器を流しに持って行って、ちよつと書籍データを展開していると……

「ただいま」

「おかえり」

フェイトが帰ってきた。すぐにサリエルが玄関まで迎えに行く。

「今日はサリエルの方が早かったんだ？」

「定時だからな。メシ、まだだろ？」

「うん。お腹ペコペコだよ」

「作ってやるから、リクエストしろ」

「ん……それじゃ、あっさり系でたくさん食べられるもの」

「了解。ちゃっちゃと作るから着替えてきな」

「はい」

そう言つて、フェイトはシャワールームに入っていく。

さて……リクエストにあっさり系でたくさん食べられるもの、かそんなレシピあるか？

『マスター、ここはオーソドックスに野菜炒めでも……』

「だめだ。先週もやし炒めをしているから、二番煎じだ」

『では主、ここはポトフでも……ヘルシーな上に数も用意できます』

「だめだめ、あんな時間がかかる料理……煮込むのに三十分はかかるぞ？」

『じゃあ、どうするのですか？』
「そっだな……」

冷蔵庫の中身を確認して、今作れる物を手当たり次第思い出す。牛肉があるが、これであっさりした物は考えれない。豚肉は厚く切った肩ロースだから冷しゃぶ用じゃないし……やっぱりここは鶏肉か。
大根を買ってきたから、下ろしてポン酢かけて……

「そっだー！ みぞれカツレツにしようー！ これならあっさりしているし、量的にもばっちりだー！」
『では、すぐにレシピを……』

「一度作った事があるから、大丈夫だっ。よし、まずはパン粉を……」

カツレツに必要なパン粉と卵数個、豚肉を冷蔵庫から取り出し、取り出した豚肉を取り出して、包丁で叩く。こうする事で肉が柔らかくなる。

次に卵を割って、その中にパルメザンチーズ、オリーブオイル、塩を混ぜ合わせて卵液を作り、豚肉をくぐらせる。

パン粉をつけて、フライパンに油を多めにひいた頃にフェイトがシヤワーから上がって私服に着替えていた。

「わあ……凝ってる物、作っているね」

「ああ、カツレツだからな。大根下ろしをつけてあっさり仕上げる予定だ」

「楽しみ〜」

パン粉をつけた豚肉をフライパンで焼きながら、味噌汁を温め直す。ついでにサラダの用意もしながら、フェイトにお茶を出しておく。

くどいようだが、その動作は本当に主婦顔負けの物だった。

「……サリエル、やっぱり主夫には……」

「止めてくれよ、フェイト。それ言われると、結構傷つくんだぜ？」

「あはは、ごめんね」

妻にまで言われたら、もうどうしろって言うんだよ。

そう独りごちながら、きつね色に揚がったカツレツを皿に盛りつけ、その上にポン酢がかかった大根下ろしをのせる。

その後、適温に温まった味噌汁をお椀につき、千切ったレタスとキヤベツ、缶詰のコーンを小鉢に盛りつけて、上からごまドレッシングでサラダ完成。

やっとこさ、フェイトの夕食ができあがった。

「よしっ……上出来だな」

「すごい。あの短時間でこんな凝った料理ができるなんて……」

「そう褒めるな。さて……食べてくれ。味は保証できないがな」

「サリエルの作る料理にハズレなんて無いよ。いただきま〜す」

男の俺が作った料理を嬉しそうに食べるフェイト。

それを見ていると、なんだがちよっと嬉しくなってきた。

やっぱり……愛する人に何かできるって、幸せな事だよな。

親父も何かするときはこういう気持ちになるのだろうか？

……ってか、何で親父のことが出てくるんだ？

かんがえてもしょうがない。何か飲むものは……

そう思っただてきたのは……ちよっと前にもらったワインだ。

確か班長からもらった物だよな。基本酒は飲まないけど……たまにはいいか。

「珍しいね。サリエルがお酒って」

「たまにはな……それになんにもなしでフェイトの食事に付き合っ
のはなんかつまんねえし……」
「ふふふつ、ありがとうね」

軽く飲んでみると、意外にうまい。ワインって、安物だと渋かった
りするんだけど……これはちがうな。

ワインの味を楽しみながら、フェイトと今日あった事や昨日の事を
おもしろおかしく話していく。

フェイトが食べ終わっても話は弾み、いっしょに洗い物をして、一
息つけるために一度ソファに座る。

サリエルは読みかけの本を開け、フェイトもなにやら料理雑誌を開
いてゆつくりする。

そこに……

「やつほ、サリエル」

「ん？ スバルか、どうした？」

意外にも珍しい人物から連絡が来た。

スバルやティアナ達とは定期的に連絡を取っているが、まだその時
期じゃなかったはず。

頼み事か、もしくは遊びの誘いだな。

「明日って、大丈夫？ 予定が合えば、いっしょに遊ぼうよ」

「ん……ちょっと、待ってくれ」

ヘルメスに今日更新したばかりのスケジュールを展開させて、明日
の予定を見る。

……休みになつたら。あの班長、昔は教導終わった後にまた教導入
れたぐらいこき使ってたのに……

所帯持ちになるとやっぱり待遇も代わってくるのかな？

まあ、休みは休み。そうなれば、後はフェイトの予定だな。

「フェイト、明日は仕事か？」

「うん。朝早くから調査があるんだ。サリエルは？」

「悪いな……休みだ。スバル達に誘われているけどいいか？」

「スバル達なら行ってあげなよ。私の事は気にしなくてもいいからさ……」

「すまないな。スバル、許しが出たからいいぞ」

「ホント！？じゃあ、明日十時にいつものカフェで待ち合わせね」

「分かった。それじゃ、明日な」

「うん　バイバイ」

明日の約束を取り付けたスバルは上機嫌で通信を切った。

俺も読んでいた本に目を戻そうとするが、そこになにやらクッションを抱いてこちらをじっと見てくるフェイトが目に入った。

……ははあく。どうせ、また嫉妬してるんだろう……まったく。ちよつとからかってやろう。

「なんだ、また妬いてるのか？」

「別に……いいな、休みて。ここしばらく二人で休日過ごした記憶無いし」

「しょうがないだろ？六課時代に付き合ったときから覚悟していた事なんだから……」

「そうだよね……サリエルは教導官だし、私も執務官……お互い忙しいのは分かってるけど……」

珍しく弱音を吐いている。何か仕事で嫌な事でもあったのか？

元気づけるためにフェイトのそばにより、肩を抱いてやる。すると、甘えるかのごとく肩に頬をすり寄せてくる。

フェイトが俺に甘えるときの動作だ。これは付き合ってからすぐに

発覚した。

普段シャキツとしている分、仕事から離れたときの反動が結構ある。それが今の状態だ。

「……いつそのこと、専業主婦になろうかしら？」

「フェイト……」

「そうすればいつでもサリエルのことを考えられるし、サリエルに主夫みたいな真似させなくても済むし、それに家だって……」

「フェイト」

髪を撫でながら、優しく名前を呼ぶ。

まずいな……大分ストレスが溜まっている証拠だ。

こんなに弱音がポンポン出てくるほど今抱えている案件はきついのか？

これは、教導官でたまにはやてさんやフェイトの捜査の手伝いをする俺には……わからないことだ。

それでも……すこしでも支えてやりたい。

「……今日は抱きしめて寝てやるうか？」

「うん。ずっとギュツとしていて欲しいの……」

「わかった」

……強壮薬、飲んでおい。

どうせ抱きしめると我慢できなくなるし、最近ご無沙汰だったからなおさらだ。

フェイトが人の温もりを求めているときはOKの合図だったことも知っている。

その後、しばらく寄り添って静かに髪を梳いてフェイトの温もりを感じていた。

こうして、サリエルの夜は更けていった……

第三教導 日常……教導官の一日。(後書き)

どうしてこうなった？

本当ならアインハルトと再会させる予定だったのに……

いろんな事書いていたらいつの間にか一万文字超えていた!?

しょうがない……次回回そう。

では、次回は再開にヴィヴィオとのスパーリングを一気にやっちゃ
つたいと思います。

それでは

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。 (前書き)

作者「もうすぐ夏休みも終了か……みなさん、こんにちは」

サリエル「この作品も早くも四話目か……約一ヶ月つて所だな。」

作者「再誕の頃は序盤ハイペースで書いていたからな。今回は比較的落ち着いて書いているよ」

サリエル「……こち亀読みながらか？」

作者「記念すべき110巻まで読み終えたぜ!!」

サリエル「……とりあえず、この作者を一回ぶち殺さないと……この性格は直らないな」

作者「そんな物騒なことを言つな。それでは、どうぞ閲覧してください」

サリエル「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ。あと、人物紹介も更新したので是非見てくれよな!!」

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。

午前九時、サリエル自宅にて……

「た、太陽が黄色い……」

憔悴しきったサリエルが布団から這い出てきた。

昨日は頑張りすぎた。まさか、フェイトがあんなに求めてくるなんて……

すでに朝早く出て行ったし、うる覚えのベットから出る顔は……ものすごくつやつやしていて、すっきりしていた。

どうやらちゃんとストレスを発散できたようだ。役に立てたなら何より。

俺も……そろそろ用意しないと。

のろのろと起き上がり、適当な服を出して寝間着のまま下へ降りていく。

リビングのテーブルには、朝食が用意してあった。それに書き置きも……

（昨日はありがとうね。おかげですっきりしました。朝食を作っておいたので食べてください。今日は楽しんできてね。愛してるわ、あなた。フェイトより）

「……まったく、俺にはもったいないくらいの妻だな」

昨日作り置きした味噌汁を温め直して、置いてある朝飯を食べていく。

サラダ、オムレツ、ほうれん草とベーコンのソテーと典型的な洋食だが、フェイトが作った物なのでうまい。

ゆっくり味わって完食し、洗い物を軽くして身支度する。

白のワイシャツにネクタイ、その上に黒のジャケットを羽織って、ちよつと色あせた黒のジーンズを穿く。フエイトからもらったシルバーのロケットをつけて、バックルを巻いたら着替え完了。

髪は軽く梳いて、緩やかに流す。今日は荒事はなさそうだけど、一応まとめ紐を持っておこう。

リビングに戻って、テーブルの上に置いてあるヘルメスを首にかけ、グラディアスを胸ポケットにしまう。

戸締まりをちゃんとして、車庫からヘリオンを出させて出発した。

やっぱり車よりバイクの方がいいなあ……この風を切る感触、気持ちいいよ。

『今日はどちらまで？』

「スバルと会うんだ。いつものカフェで待ち合わせ」

『それは楽しみですね』

スバルと会うのは久しぶりだからなあ……実際にちよつと楽しみだ。しかし、この時期に何で遊ぼうなんて言い出したんだろう？
会ってから詳しく聞いてみるか。

バイクをクラナガン中央まで走らせ、適当なコインパーキングに止めて、待ち合わせのカフェに着くと……

「サリエル、こつちこつち」

「おう、久しぶりだな……って、ティアナもいたのか？」

「あら、悪いかしら？」

「いや……そんな事はないぞ」

席に着いて、やってきたウェ이터にココアを注文して下がらせる。しかしまあ……ティアナもいっしょだったのか。

たまに本局でちよくちよく会う事があるから久しぶりという感覚が

ない。

「それにしても……あなたのお子様趣味も変わらないわね？」

「ほつとけ。コーヒーとか紅茶は一切受け付けねえんだよ。オフィスにも専用のインスタントを置くぐらいだから」

「あはは、サリエルらしいね」

「てか、今日は何でまた集まったんだ？ たまたま俺だけ休みだったからよかったもの……」

「それは後で説明するわ。さ、まずは買い物するわよー！！」
「……」

とてつもなく嫌な予感がしたため、スツと席を立とうとするが二人に腕を掴まれる。

もしかすると……いや、こういう場合の予感はずっと絶対を外れない。

二人はにこやかに笑って、こう告げてきた。

「荷物持ち、して」

……はははっ、今日の俺はなんてついてないのだろう。

この分だと何品か奢らされる羽目になりそう……

紙カップで来たココアを受け取った途端に、スバルがその細腕からは考えられない馬鹿力で引っ張られていったのであった。

その頃、St・ヒルデ魔法学院初等科校舎図書室では、昼休みを利用してヴィヴィオ達がある調べ物をしていた。

「あった、あった！！これがオススメ。「霸王インクヴァルト伝」と「雄王列記」……あとは当時の歴史書」

「ありがと、コロナ？」

「前にルーちゃんにおすすめてもらったんだ」

「コロナから受け取った歴史書を早速開いて、読んでいく。」

「でも、どーしたの？ 急にシュトウラの昔話なんて？」

「うん……ノルヴェエからのメールでね、この辺の歴史について詳しくに勉強したいって」

理由を説明して、三人は歴史書を読み進めていく。

クラウス・G・S・イングヴァルト。

戦乱のベルカの歴史に名を残した武勇の人であり、初代の霸王。

火炎の煙で薄暗く覆われた空と戦乱で荒れ果てた大地。

人々の血が河のように流れて、それが乾く間もなく続いた戦乱の時代。

誰もが苦しみ、乱世を終わらせたいと願いながら……だけどそのためには力を持って戦うしかなかった暗黒の時代の中で、クラウスは霸王としての短い生涯を全うした。

その短い生涯は、決して薄いものではなく濃密なもので悲しい事ばかりではなかった。

オリヴィエ・ゼーゲブレヒト。聖王家の王女として「最後のゆりかごの聖王」との共に笑い、共に武の道を歩み、研鑽の日々もあった。

「……なんか、ちょっと切ないね」

「最後の方はオリヴィエがクラウスのために自ら犠牲になった感じだし……」

「うん……この話を見ていると、放課後ノルヴェエと会うんだけど……まさか、霸王の血を受け継ぐ人に会わせるんじゃないかって、思

って……」

「……」

三人は顔を見合わせて……嘖いた。
図書館なので、あくまで控えめに爆笑する。

「そ、そんなわけないよね？ プククツ……」

「そうだよ。まさかそんな偶然……クククツ……」

「私もそう思う……クフフツ……新しく格闘技やってる子って言うているから多分違うと思うけど……」

「まあ、今は置いといて……イングヴァルトの歴史について勉強しよう」

「うん」

ひとしきり笑って、再び三人は本に向かう。

一度本の世界に入れば、真面目に読み続ける。

それを昼休みが終わるまで続けて、午後の授業に望んだ。
もともと……先ほど三人が言った事が現実になるとも知らずに……

一方、強制的にスバルとティアナの荷物持ちをさせられたサリエルはというところ……

「さて……このくらいかな？」

「服に、生活用品に、食材……これだけ買えばいいよね？」

「そうね……うん、久しぶりに買い物した」

「この光景を見て、何でそう脳天気にもその言葉が吐けるんだ！？」

現在サリエルの両手には衣服数十着が入った紙袋が片手に五個ずつ、合わせて十個。

背中にはちよっと膨れあがったりリュックの中に、生活必需品が多数

……その重量8キロ。
トドメに首からつり下げられた買い物袋が二つ……重量にして一つ三キロが首にぶら下がっているのだ。袋の間からネギがぴよろんと出ている。
はつきり言つて……いつも厳しく教導する凛々しい姿からこの姿を見せられると……あまりにも哀れである。

「あら、これでもまだ少ない方よ？ 本当なら後二、三件は回る予定だったんだから？」

「ふざけんな！！ こんな丁稚奉公みたいな事させて、まだ回るつもりだったのか？」

「後、アイスクリーム屋さんにも行く予定だったんだよ？」

「お前は黙ってる、スバル！！ バカみたいに食材買いやがって……一ヶ月分だぞ、これ？」

「ううん、一週間分だよ？」

「……こんなに買って、挙げ句の果てに奢らされたっていうのに一週間分……死んでいいですか？」

「そんな事言わないの。ほら、ここのカフェで待ち合わせだから」「へいへい……」

買い物の途中で聞いたのだが、今日は午後から誰か合流するらしい。それはいいのだが……これ以上荷物が増えるのは勘弁してもらいたい。

何かいい案はないかと考えたが……ふと閃いて、スバルの住所を聞いてからすぐに宅配代行サービスに連絡する。

今の時代、どんな商売でも成り立つのだ。この宅配代行サービスもその一つ。電話一本で自宅に多くなった荷物を全て運んでくれるのだ。

しかし、料金もそれなりにするので基本的に富裕層が利用するのだが、今回は四の五も言ってもらえない。

前払いで振り込み、すぐに取りに来ると言われて、来るまで午後から合流する人物を待つ事にした。

「サリエル、何か頼む？ 奢ってあげるわよ」

「いや、そこまで落ち潰れちゃいない。自分の分は自分の分で……」

「さつきチラツとクレジット確認したけど、三桁下回っていたよね？」

「……ゴチになります」

服を数種類奢らされたあげく、最後の食材でとどめを刺されたクレジットの残高を見て、どん底まで落ち込む。

給料日まであと一週間……俺、生きていけるかな？

「フェイトさんにお弁当作ってもらえばいいじゃない？」

「頼めていたら苦労しないんだよ。フェイトだって、執務官で忙しいんだ。補佐しているお前が一番分かっているはずだ。」

「それはそうだけど……」

「てか、サリエルも教導官じゃん？ それなりにいいお給料はもらつてると思うんだけど？」

「実際の所、一般社員とそんなに変わらんぞ？ 教導手当とかが付いて、ようやく上層部クラスに追いつくんだ。それだったら、スバルは特別救助隊だから基本給＋危険手当とか、金一封とかももらえるじゃねえか？」

「あつ、そっか」

「ティアナだって執務官だし、経費も出るんだ。おそらく俺の1.5倍はもらっているはずだ」

「……何であんたはそんなに私達の給料の事を知っているの？」

「一度経理の退役社員と飲んでね……その時にあれこれ教えてもらった」

さつき言った事はほとんど事実だ。

戦技教導隊と言えば聞こえがいいが、結局の所普通の管理局員が集まったものなので給料が上がるわけではない。

基本給は階級で決まるので、昇格すれば上がるが上がらなくてはそのままである。

そこに色々な手当が付いて、税金が引かれてようやく手元に来るのだ。

サリエルの場合、基本給＋教導があつた場合のみ教導手当が付き、これが相当な額である。

そして、他にも捜査依頼や手伝いなどがあつてさらに給料を増やしていく。

本来なら相当な額の貯金があるはずなのだが、半年前に一戸建てを現金払いで買ってしまつたため、現在貧困に窮しているのだ。

「はあ……ホント、どうやって生きていこう？ やっぱり班長に奢つてもらうしか……」

「何とかなるって……あつ、来たみたい!!」

スバルが手を振って、ようやく合流する人物と相まみえる事となつた。

遠くからでも分かるワインレッドの短髪……まあ、大体予想はしていたけど。

「よお、サリエル」

「ノーヴェか……久しぶりだな」

「ああ。それと今日はあたしだけじゃないんだ……」

「？」

後ろを親指でクイクイとさしているの、目を向けてみると……

すでに着席したチンクにオットー、デイエチにウエンデイ、ディー

ドが思い思いにくつろいでいた。
まさに……金魚の糞みたいだな。

「あたしが呼んだのはチンク姉だけだぞ!? 何でお前らまで揃ってんだよ!？」

「え、別にいいじゃないツスかあ」

「時代を超えた聖王と霸王の出会いなんてロマンチックだよ」

「ん? 他にもまだ誰か来るのか?」

「ああ、ヴィヴィオとその友達。後はあたしが知り合った格闘技やつてる子だ」

「ふ〜ん……」

なるほどね。何となく読めてきた。

多分今回集まったのはノーヴェが知り合ったという格闘技者とヴィヴィオを合わせるためか。

でも、これだけ集まるとなると……何か一騒動あったようだな。席を移動して、デイエチの隣に座る。

「みんな、久しぶりだな。オットーとデイドなんて前に仕事で教会に行つたとき以来だ」

「そうですね。あつ、サンドイッチ作ってきたのですが、食べますか?」

「気が利くねえ、オットー。お前はいい嫁さんになれる」

差し出されたサンドイッチをハムハムしながら、話を核心に持って行く。

「それで今日は何で集まつたんだ? お前達がここまで集まるなんて滅多なことじゃないぞ?」

「実は昨日ノーヴェが噂の霸王に襲われたツス」

それを聞いた瞬間、ピシツと効果音が出そうなほどサリエルが凍り付いた。

ノーヴェが……あの霸王に？

だとすれば、俺が襲われた事も必然的に……

みんなの様子を注意深く観察する……しかし、誰も俺の事を追求してくる様子はない。

ホツ……ディエチは誰にも言っていないようだな。

「そういえばサリエルもングツ！？」

「腹が減っただろ、ディエチ？ この俺自らが食べさせてやるよ」

「ムゲグツ……」

無理矢理サンドイツチを押し込んで、ディエチの口をふさぐ。

それからきつく睨んで、俺が襲われた事を言わないようにと釘を刺しておく。

今ここで言えば、大騒動になるのは間違いない。言わぬが花だ。

「それで？」

「で、ノーヴェがうまい事その霸王つ子を捕まえて更生させたから、今日ヴィヴィオ達と会わすって事になったツスよ」

「私達も陛下にもしもの事があつてはと言う事で護衛に來た次第です」

「体のいい口実だな、まったく……」

「私も姉として一応止めたのだがな」

「仕方がないって。こういうお祭り事になるとこいつらは誰もとめられない」

「ホントそうだよ……まあ、見学自体はかまわねーけど、よけいなチャチャは入れんなよ？ ヴィヴィオもアインハルトもお前らと違って色々繊細なんだからよ」

「は〜い」

ノーヴェの注意にデイエチとウエンデイが元気よく返事し、オットーとデイードは親指をグツと立てる

その様子にサリエルとチンクは深い深いため息をついたのであった。

「ノーヴェー!! みんな〜!!」

「「こんにちは」」

「あれれ? スバルさんとティアナさん……それにお兄ちゃんまで
!!!」

「よっ」

ようやくヴィヴィオが友達連れてきたようだ。

がやがやとみんながヴィヴィオを迎えて、デイードとオットーが恭しく席を用意する。

「あつ、お兄ちゃんにはまだ紹介してなかったね。コロナは去年の合宿旅行で紹介したから……リオだね。この子が友達のリオ」

「はわわっ……」

「どうしたの、リオ? そんな声出して?」

「あつ、あの!? サリエル・フォーゼオンさんですよね!?!」

「ああ。いかにもそうだが?」

「きゃー……!? 本物だ!! 雑誌見ました!! TVも拝見しています!!」

いきなり素っ頓狂な悲鳴を上げて、俺の手を取ってぶんぶん握手してくる。

サリエルも最初はこの反応にビックリしたが、何度も同じ経験をしているのすぐに対応した。

その様子にティアナとスバルは目をパチクリさせて、疑問を口に出

す。

「……そういえば、サリエルって雑誌やTVに出ていたんだっけ？」
「管理局が誇る有数の若手ってことでイメージキャラとして登用されてるのよ。ルックスもまあまあだから、ちゃんとおしゃれして人前に出ればモデル顔負けよ。それにあいつ……仲間内ではああやってしているけど、基本的な性格は真面目だから好印象を持たれやすいからって理由で、選ばれたみたいよ」
「へえ……」

今思えば、確かにサリエルは有名人の一員だ。
まだその筋の人……格闘技者や一部のマスコミに限ってたが、その中でも頑張っているんだ。
いつもいっしょにいて慣れてしまったけど……改めてすごいと思った。

「噂には聞いていましたけど……本当にヴィヴィオのお兄さんだったなんて……」

「ヴィヴィオ、言っでなかったのか？」

「忘れてた……許して、お兄ちゃん」

「ったく……」

渋々ヴィヴィオを許しながら、先ほどやってきた宅配代行サービスの社員に荷物を渡していく。
その間に胸ポケットに常備してあるサングラスをかけておく。こっぴど騒がれたら、何が起こるか分からない。

「それより……ノーヴェ、紹介してくれる子って？」

「さっき連絡あったから、もうすぐ来るよ」

「あっ、ありがとう、オットー。何歳ぐらいの子？ 流派は？」

「流派はまあ……旧ベルカ式の古流武術だな。あとアレだ。お前と同じ虹彩異色」

「ホント〜!?!?」

オットーに進められた席に座らず、そわそわと待ち人を立って待つ。少しは落ち着けばいいのに……こういうところはまだ子供だな。

つと、俺もその待ち人の事をあんまり知らないや。あくまで霸王つてことしか分かってないからな。

「スバル、ノーヴェが紹介する子のこと、分かるか？」

「ん〜と、ヴィヴィオに聞かれるとまずいからそんなに言えないけど……名前はアインハルト・ストラトス。ヴィヴィオといっしょの学校で中等部に通ってるんだって」

「まだ中坊？ ……そんな奴に俺は……」

「どうしたの？ いきなりブルーになって？」

「いや、ちよつと心の傷をグサツと抉られただけさ」

マジかよ……中坊であんだけ強いってか？

世の中どうやってやがるんだ？ 昔のイキがっていた自分を今すぐ殴り倒したい。

ヴィヴィオにしろ、今俺が教えている秘蔵っ子にしろ、みんな才能ありすぎだろ!?!?

やっぱり時代の変化かな……俺もこの時代に生まれていたら、才能があつたかも……

そんな風にサリエルが落ち込み、他のみんなが思い思いにくつろいでいると……

「失礼します」

凜として、透き通るような声がこの喧噪の中に響いた。

皆が声のした方へ一斉に目を向ける。

「アインハルト・ストラトス……参りました」

まだできあがっていない体。品のある歩き方。それら全てがサリエルがやり合ったインクヴァルトと合致した。

しかし、ここで俺が出て行っても話がややこしくなるだけ……大人の風格を醸し出して、あとでゆっくりと話を聞こう。それに今回はヴィヴィオが主役なんだから。

「すみません、遅くなりました」

「いやいや、遅かね〜よ……でな、アインハルト、こいつが例の……」

「えと、初めまして！！ ミッド式のストライクアーツをやっています。高町ヴィヴィオです」

「……ベルカ古流武術アインハルト・ストラトスです」

握手を交わしながら、アインハルトは受け継がれてきた記憶とヴィヴィオを比較する。

（この子が……小さい手、脆そうな体……だけどこの紅と翠ロートグリーンの鮮やかな瞳は、霸王わたしの記憶に焼き付いた間違うはずもない聖王女の証）

古に亡くなったオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。

その末代……とは言っても複製体クローンだが、目だけはまさに生き写しだった。

「あの、アインハルト……さん？」

「ハッ……ああ、失礼しました」

「あ、いえ！！」

「まあ、二人とも格闘技者同士、ごちゃごちゃ話すより手合わせでもした方が早いだろ？ 場所は押さえてあるから早速行こうぜ」

ノーヴェの提案に全員承諾して、押さえてある場所に向かう。

ぞろぞろと歩く中、アインハルトに近づこうとするがノーヴェとヴィオに囲まれてできなかつた。

ちよつと話そうかなって思ったんだけど……アレじゃ無理そうだな。そしてついた場所は区民センターのスポーツコートだった。

「よく押さえられたな」

「ちよつとしたコネでな……さて、ヴィオ、アインハルト、着替えてきな」

「はい」

二人が着替えてくるのを待っている間、座っていたサリエルにノーヴェ、ティアナ、スバルの三人がなにやら詰め寄る。

「なつ、なんだ？」

「サリエル……あんた、何か隠してない？」

「アホくさ……俺が一体何を？」

「とぼけんな。アインハルトのこと、知ってるんだろ？ 例えば……

…霸王だつたってこととか？」

「なつ、何を根拠に……」

平静を装うサリエルの背中にはまたしても冷たい汗が流れる。

ティアナは執務官のごとく吐くまで俺のことを解放しない構えだし、スバルはじつと俺の顔を見ている。ノーヴェはゴキリと拳を固めて、力尽くで聞こうとしている。

「なつ、万事休すか……」

スバルのあの目は細かい傷を探している目だ。六課時代から本人で

も気づかないような傷でも見つけていたから、これはまずい。

「さあ吐きなさい！！ 吐いたら、カツ丼ぐらい奢ってあげてもいいわよ？」

「刑事ドラマか！？ 言っておくけど、何も知らないぞ」

「嘘言つな。お前が嘘つくときは大概目を逸らす」

「あっ、ヴィヴィオ達来たぞ！！ ほら、ノーヴェ、お前が行かなくてもいいのか！？」

「おっ、もう来ちまったか？ まあ、この話は帰りでもできるからな」

「覚悟してなさい。自白剤使っても吐かせるから」

恐ろしい……自白剤なんて最近の安い漫画でも使っていないぞ？

帰りは尋問か……それまでは、ヴィヴィオの成長具合でも見ておくか。

アインハルトの実力も見ておきたいし……実力があれば、俺の秘蔵っ子とやらせてみよう。

「んじゃ、スパーリング4分1ラウンド。射砲撃とバインドは無し
の格闘オンリーな」

「はい！！ アインハルトさん、よろしくお願いします！！」

「……はい、こちらこそ」

二人は間合いを取って構える。アインハルトの胸の内にはある思いがよぎる。

諸王戦乱の時代。武技において最強を誇った一人の王女がいた。

名はオリヴィエ・ゼーゲブレヒト。後の「最後のゆりかごの聖王」
かつて「霸王イングヴァルト」は彼女に勝利することができなかった。

そして、今のこの時、時代を超えて再戦することになった。

私の中に流れている霸王の血は歴史の中で薄れていくけど……時々その血が色濃く蘇るときがある。

碧銀の髪やこの色彩の虹彩異色。霸王の身体資質と霸王流。カイザーアーツそれらと一緒に少しの記憶もこの体は受け継いでいる。

私の中にある記憶は「彼」の悲願。天地に覇を持って和を成せる……そんな「王」であること。

しかし、弱かったせいでも……強くなかったせいでも……彼は彼女を救えなかった。守れなかった。

そんな数百年分の後悔が……私の中に堆く積もっている。それが今日……ようやく受け止めてくれる相手が現れた。

だが、この子が本当に霸王の拳を……霸王の悲願を受け止めてくるのか？

「それじゃ……レディ・ゴー!!」

ノーヴェの合図と共にヴィヴィオが前に出て、鋭く相手の下からアツパー気味に拳を突き出す。

それを驚きながらもしっかりガードするアインハルト。周辺の野次馬はその攻防だけで感嘆の声を上げる。

そんな中、サリエルは二人の攻防を冷静に見極めていく。続けざまに軽快にステップを踏み、左、右と連打を打ち込んでいく。

「ヴィ……ヴィヴィオって変身前でも結構強い？」

「練習頑張ってるからねえ」

「だけど、攻撃がまだまだ素直だな。もっとフェイントを入れてかないと……」

「それはあんだだけよ。全く……捻くれてるからそういう発想しか浮かんでこないのよ」

「なんだと!? フェイントを入れることは至極当然のことなんだぞ!!! 武術でも虚実と言って、本命の攻撃を確実に当てるために

フェイントやわざと隙を作って攻撃を誘発させる技法があるんだ！

「はいはい、あとで聞いてあげるから」

「今はこのスパーに集中しようよ」

「ぐぬぬっ……覚えておけよ」

フェイントの大切さを言えなかったサリエルが歯ぎしりしている間にもスパーは続く。

ヴィヴィオ特有の回転の速い連打をアインハルトはじっくりと捌く。コンビネーションの変化にハイキックを繰り出すも、スウエーでうまくかわす。

連打を見極めながら、アインハルトは素直な感想を胸に吐く。

（真っ直ぐな技……きっと真っ直ぐな心）

拳を打ち込んでくるヴィヴィオの目はどこまでも真っ直ぐで純粹に輝いている。

（だけどこの子は……だからこの子は……）

頭部に来たパンチをフツと腰を落として避け、カウンターで掌底を胸に打ち込んだ。

その勢いは凄まじく、体重の軽いヴィヴィオはいとも簡単に吹き飛ばんでしまった。

（私が戦うべき「王」ではないし……私とは違う）

吹き飛ばされたヴィヴィオは壁に激突する前にオットーとディードが受け止めてくれた。

すぐさま構え、ブルルツと体感激で震わせる。

しかし当のインハルトは……

「お手合わせ、ありがとうございました」

背を向けて、もう用済みとばかりに礼を言った。

その態度にサリエルが無言でインハルトに詰め寄ろうとするが、すぐにスバルとティアナに取り押さえられた。ヴィヴィオは自分に非があるかのように謝る。

「あの……あのっ！！ すみません。わたし、何か失礼を……？」

「いいえ。趣味と遊びの範囲内でしたら十分すぎるほどに……」

それを聞いて、サリエルがさらに激昂する。スバル達が必死に押さえるがいつ解かれるか分からない。

ヴィヴィオのストライクアーツが……遊び？

ふざけるなよ……お前はヴィヴィオがどんな思いでストライクアーツを始めたか知ってるのか！？

それを知りもしないで……今度こそ、再起不能までぶちのめしてやる。

予想以上の力で解かれそうなので仕方なくディエチとチンクが加わってさらに押さえかかる。

そんなサリエルの空気とヴィヴィオの残念そうな顔を見たせいか、慌てて訂正する。

「申し訳ありません。私の身勝手です」

「あのっ！！ すみません……今のスパーが不真面目に感じたなら謝ります！！ 今度はもつと真剣にやります。だからもう一度やらせてもらえませんか？ 今日じゃなくてもいいです！！ 明日でも

……来週でも！！」

「……」

ヴィヴィオの懇願にアインハルトは困り、チラリとノーヴェに目線を送って助けを求める。

それを見たノーヴェは頭を抱えて、妥協案を提案した。

「あゝ……そんなじゃまあ、来週またやつか？ 今度はスパーじゃなくて、ちゃんとした練習試合でさ」

「ああ。そりゃいいツスねえ！！」

「ちよつとサリエル落ち着いて……私も二人の試合が楽しみだよ」

「ウガー！？ 収まらねえ！！ スバル、ティアナ、オットー、デイド！！ 相手しろ！！」

「正気なの！？ 四対一って……その前にあたし達に八つ当たりしないで！！」

「うるせえ！！ オラオラオラオラオラオラ！！」

ついに押さえきれず、スバル達を吹き飛ばしてヘルメスを乱射しまくる。

そうなれば、みんな手加減知らずで仮借ない攻撃をぶち込んでサリエルを黙らせようとするが……百戦錬磨のサリエルはそれらの攻撃を全て捌いていく。

泥沼の乱戦を尻目に、アインハルトは言葉を紡ぐ。

「……あれ、放って置いてもいいのですか？」

「いいんだよ。いつものことだから……それで、どうする？」

「ノーヴェさんの提案を受けることにします。時間と場所をそちらにお任せします。」

「あつ、ありがとうございます」

何とかノーヴェの妥協案を受けてもらえたことを、ヴィヴィオはしっかりと礼を言う。

それを背中に受け止めながら、アインハルトは更衣室へ帰っていった。

その横では未だに乱戦が続いている。

「いい加減にしろ、サリエル！！ ランブルデトネイター！！」

「そんなものが通用するか！！ 俺を止めたきゃ、なのはさんかシグナムさんを連れてきな！！」

「だったら、これで……ファントムブレイザー！！」

「ハッハー！！ 久しぶりに血が滾るぜ！！」

チンク、デイエチ、ウエンディも加わって七対一と非常に不利な状況にもかかわらず、サリエルは生き活きして戦っていた。

それを目にしたノーヴェはため息をつき、ヴィヴィオは笑いながらも浮かぬ顔をしていた。

何とかサリエルの暴走を収めて、センターを出たらずでに夕日は沈み、辺りは夜の闇に包まれようとしていた。

今日の所はここで解散のようだ。アインハルトはボロ切れになったサリエルを持ったスバル達と帰り、ヴィヴィオはウエンディ達と帰宅するようだ。

別れ際、ノーヴェがアインハルトに気づかれないようにヴィヴィオに謝る。

（悪い、ヴィヴィオ。嫌い悪くしないでやってくれ）

（全然……私の方が「ごめんなさい」だから……）

そうアイコンタクトを取って、二組は別々に帰路についた。

引きずられていてようやく気づいたサリエルは、アインハルト側に回っていたことを知らずちょっとだけ自分に泣きそうになった。

さすがに七対一はきつかった……やっぱり五分が限界だな。

「で、これからどうするんだ？」

「メシ食って解散。とりあえず、暴れたサリエルの奢りな？」

「はあっ！？ 俺、こいつらに奢らされてほとんどすっからかなんだぞ！！ そこからどうやってメシ代を捻出しろと！？」

「カードがあるでしょ？ それで払えばいいじゃない」

「……お前らは悪魔か？」

「よし、じゃあ適当な所に……」

スバル達がどこかゆっくり食べられる場所を探している間、サリエルはアインハルトとちよつとおしゃべりしようと考えた。

こいつがインクヴァルトって言うのがまだ信じられない。だけど今日の動きを見ている限りでは……

「今日はどうだった？」

「……収穫はありました。聖王に会うこともできましたし……」

「そうか。ハイキックもスウェーでかわすことができていたしな……

…感心感心」

「……この前はすみませんでした」

「気にしてねえって。ちよつと誤魔化すのに苦労したがな」

こうしてしゃべってみるとやはりまだまだ子供だ。

素直に悪いことを悪いと受け止められる。そんな根の素直な子。

昔の俺とは大違いだ。頑固一徹、人の話を受け入れようともしなかったからな。

ポケットから電子タバコを取り出して、スイッチを押し込んで一口吸う。

「……タバコを吸われるのですか？」

「これはフェイク。ただの格好つけさ。それで……今日のことなんだが、ああやって自分の心を素直に吐き出すと敵を作るぞ？」

「でも、私は……」

「ヴィヴィオがアレを始めた理由は重い。詳しくは言わないが、自らの誓いを果たすためにストライクアーツを始めたんだ」

水蒸気を吐き出して、一息つける。辺りはミントの匂いで充満した。吸ってから少しすると……サリエルの目に暗いものが宿り始める。

「今日お前はそれを汚す暴言を吐いた。俺はそれが許せなかったから、お前をあの場でボコしてやるうかと思った……ま、全員に止められたがな」

「それは本当に悪いと思っています。ですが……私が求めていた聖王とはかけ離れていて……」

「……格闘技者に限ったことじゃないけど、なんでそこまで強さを求める？」

「えっ？」

「強さとは常に不平等の上にある。ある者は才能に負け、ある者は超えることのできない壁に諦め、ある者は届かぬ目標にひたすら走り続け、絶望する……そんな物をなぜ求めるのか？俺にはよく分からないな」

「私は強くなければならないのです！！先人の想いや後悔を晴らすために……だけど、それをぶつける相手は今の時代にはいないのです！！いつか現れるまで私は少しでも強くならないと……あなたもそういう思いをしたことがないのですか！？」

「あるよ。亡くなった人に追いつこうと必死に訓練して、工夫して……だけど無理だった、追いつけなかった……それに気づいて、ようやく俺は前に進めたんだ。今の俺を支えているのはある一人のライバルとの約束だけだ。それだけが今の俺の強さの支えになっている」

四年前にドミニランスと約束した「勝ち続ける」という枷。

これが今の俺の強さを支え続ける物だ。
勝ち続けるというのは、言葉にするのは簡単だが実行するととてもない困難がつきまとう。

ドミニランスならまだしも並の才能しかない俺にとってこれは非常につらい。

しかし、ずっと守り続けている。いかなる時でも鍛錬を続け、暇があれば技法を取り入れようとしている。

約束を破るのは最強と評されて負けたあいつに失礼だと思っし、自分のプライドも負けることが許さない。

故に勝ち続けている。今のサリエルに与えられた使命である。

「俺が考えるに強さっていうのは、いかに自分を信じられるかだ。

私は強くない、強くならなければ……と言っている時点で自分を信じていない証拠だ。だったら、どう信じればいい？」

「それは……」

「日々の鍛錬、体を傷つけながら培った経験……この二つが自分を信じてやれる元だ。お前はそれが足りないから、そうやって昔のことを引っ張り出して支えにしまってるんだ。それだと、いつかポッキリと折れる。昔の……俺みたいにな」

タバコを吸って、一区切りつける。水蒸気を吐き出すと、先ほどまで宿っていた暗いものは消えていく。

アインハルトは悟ったように話すサリエルの手を見してみる。

ごつごつと男の手をしていたが、ささくれだっている指先はこれまでどれほど鍛錬してきたかを雄弁に語っている。

アインハルトからは見えないが、手のひらは岩のように硬い皮膚に覆われていて、指紋などほとんど消えていた。

血が滲み、デバイスの持ち手についた血が乾く間もなく鍛錬し続けなければ、こうはならない。

先ほど語っていたことは全て事実だと、納得せざるを得なかった。

「サリエル、アインハルト。見つかったから、行こうぜ!!」
「わかった。ま、よく考えることだな。これから自分はなんのために強くなるか、なんのために闘うのか……しっかり意味を考えてな」
「……はい」

タバコをポケットにしまい、アインハルトを連れてティアナ達に追いつく。

うくん……これはちょっと、頑固かな？

でも人の話にちゃんと耳を傾けているし……とりあえずの効果はあったかな。

あとはこいつ次第。うまくヴィヴィオと打ち解けてくれるといいんだけど……

それは俺がどうこうする問題じゃねえ。

さて……今から何を食べようかな？

サリエルは少しばかり今からのことを考えて憂鬱になりながら、夜の街を歩いていった。

その後は、夕食を奢って、ティアナにコインパーキングの所まで送ってもらったが……ここでもカードを使う羽目になって、ガチで泣きかけていたのであった。

第四教導 再会と出会い……霸王と聖王。 (後書き)

うん……思っている展開がどんどんずれていく。

所々オリジナルを入れすぎかな？

まあ、これからはちょこちょこ修正していこう。

今回は、二度目の練習試合をお送りしたいと思います。

第五教導 再戦……想い伝えるために。 (前書き)

作者「今回は何とか日曜日に投稿できたぞ」

サリエル「それが当たり前だ。まったく……まじこいSの体験版に浮かれやがって……」

作者「いや……まじこいSはかなり期待できそうだ!! 体験版だけでもOPばりのアニメーションが5つも入っているのだから!! これが製品版だったら……今から考えるだけでもワクワクしてくる!!」

サリエル「おい……そんなテンションに大丈夫か?」

作者「大丈夫だ、問題ない」

サリエル「エルシャダイ乙。ま、浮かれるのも無理ないか……10月には劇場版マクロスFのBD、12月にはビッグオーのBD BOX、1月にはまじこいSだもんな」

作者「金が減るが、そんなことは些細な事じゃない!!」

サリエル「キリがない……それでは、どうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ。燕先輩とマルギツテは俺の嫁!!」

サリエル「どうでもいい事を口に出すな!!」

第五教導 再戦……想い伝えるために。

翌日、サリエルはヴィヴィオの朝練に付き合うため、区民公園に来ていた。

夜にヴィヴィオから付き合っただけというメールが来たので、こ
うして来たのだが……

隣にはノーヴェがいる。

「何でサリエルもいるんだ？」

「ヴィヴィオに付き合ってくれて言われたからだよ。お前もそう
だろ？」

「おう」

「……ヴィヴィオの奴、落ち込んでいなかったか？」

「あいつはそんなヤワじゃねえよ。昨日の夜から特訓始めているし
な」

「バイアリティ溢れることで……」

まあ、ヴィヴィオならそんなもんだらうな。

自分に失礼があると感じれば、一生懸命直そうとするからな。

だから今日俺達を呼んだのも今度は失礼がないように頑張るんだ。

ちよっと待つとヴィヴィオもやってきて、三人はアップがてらラン
ニングをする。

「……アインハルトのこと、ちゃんと説明しなくて悪かった」

「ううん。ノーヴェにも何か考えがあつたんでしょ？」

ランニング中、ノーヴェがヴィヴィオにアインハルトのことを詳しく
教えなかったことを謝る。

ヴィヴィオも教えなかった意図を分かっていたみたいで気にしてな

いと笑う。

「あいつさ、お前と同じなんだよ……旧ベルカ王家の王族、「霸王」
イングヴァルトの純血統」

「……そうなんだ」

「あいつも色々迷ってたんだよ。自分の血統とか、王としての記憶とか……でもな、救ってやってくれとかそういうでもねえんだよ。ましてや聖王や霸王がどうこうとかじゃなくて……」

「わかるよ、大丈夫……でも、自分の生まれとか何百年も前の過去のこととかどんな気持ちで過ごしてきたのかとか、伝えあうのって難しいから、思いつきりぶつかってみるだけ!!」

シユツとシャドーをして、自分の考えを言葉にする。

そんなしつかりした考えを持つヴィヴィオをサリエルがグシャグシヤと頭を撫でてやる。

「この年で言葉で伝え合おうって言うのは難しいからな……子供はそれで十分だ!!」

「ちよ、お兄ちゃん……髪がグシャグシヤになるよ」

「ゴチャゴチャ考えるより、そっちの方が手っ取り早いしな」

「仲良くなれたら教会の庭にも案内したいし」

「あそこか……いいかもな。悪いな、お前には迷惑かけてばかりだよ」

「迷惑なんかじゃないよ!! 友達として信頼してくれるのも、コ
ーチとして私に期待してくれるのも、どっちもすごく嬉しいもん!
! だから頑張る!!」

俺を置いてけぼりにされている気がするが、なかなか絵になるので
口出さないでおこう。

しかしまあ……ヴィヴィオは本当に行動力がある。

俺がヴィヴィオぐらいの年の時は……ちょうど兄さんが亡くなる前か。

あの時は自分でも明るい奴で素直に人の話を聞く……今のヴィヴィオみたいな感じだ。

しかもフェイド兄さんにべったり……状況的にはそっくりだ。

やれやれ……俺も、兄さんみたいになつてきたのかな？

「おし、決意を言葉にしたところで……特訓、始めるか!!」

「うん!!」

「ノーヴェ、基本的な方針はどうする？」

「そうだな……相手はこっちとは違う流派だ。対策のしようがないから、やっぱり基礎能力の向上、後はカウンターの精度を上げるぐらいかな？」

「俺もそう思う。後前々から思っていたけど、ヴィヴィオはスピードがあるけど攻撃力も防御力もいまいちない」

「サリエル……」

ノーヴェがそれはあまり……といった表情を向けて、俺を止めてくる。

しかし、こちら辺で言っておかないと後々修正が効かなくなってくる。今年からD S A Aに出られるし、早い目に対策しておいた方がいい。

「じゃあ、どうすればそれを克服できるの？」

「簡単さ。体の動きを効率のいい物にして、打撃の威力を限りなくロスしないようにすればいいのさ」

「どうやって？」

「今日から技法をお前に教える。この一週間、フィジカルはノーヴェが、俺はテクニックを担当する」

「ま、乗りかかった船だしな……任せておけ」

「はい!!」
「じゃあ、まず……」

ノーヴェから教えることにして、教えている間俺は何を教えるかを真剣に考える。

骨法の亜流を教えるのは……もうちょっと先だな。一旦この勝負が終わってからにして……一番いいのは中国拳法だな。

無限書庫で大量の技術書が置いてあったから、読破したんだよな

……

後空手の技法も教えないと……

サリエルが何を教えるか迷っている間、ヴィヴィオとノーヴェの特訓は続く。

そうして、それが一段落したところで……

「おし、あたしが教えてやれるのはここまでだな。次はサリエルだ」
「はい!!」
「じゃあ、今回教えるのは……」

近くにあった木に向かって構え、パンと小気味のいい音を立ててパンチする。

ノーヴェとヴィヴィオはその動作に、首を傾げる。

「……ただのパンチじゃねえか？」
「これのどこがテクニクなの？」
「まあ見てな……はっ!!」

サリエルがほんの少し木に向かって押し込むと……ドシンと大きな音を立てて、木が揺れた。

二人の目が点となり、自慢げに拳を戻す。

「第97管理外世界に存在する拳法、中国拳法の寸頸……一番ポピュラーな技だ」

「すげえ……」

「すごいけど……私にできるかな？」

「できるようにさせる。後は……ストレートのフォーム改造だな。」

「待て待て、一週間でフォームを変えるのか！？ 無茶にもほどがあるぞ！！」

「そこまで改造する訳じゃない。ちょっと改善するぐらいさ。じゃあ、簡単なフォーム改造から……ヴィヴィオの場合、こうやってパンチを打つことが多いだろ？」

シユツとシャドーでヴィヴィオのフォームを真似てみる。

一見すると、女性格闘技者が打つパンチと同じなのだが……

「そのどこが悪いんだ？」

「いや、悪いつてことはないんだ。しなりを効かせる鋭い打ち方は必然的に筋肉量が少ない女性に適したパンチだからな。だけど軽い体の芯に残らないパンチだ。それにヴィヴィオの場合、背負い投げみたいに豪快な打ち方になってるから、見栄えがいいけど必要以上にロスしているんだ。ノーヴェ、パンチの源はどこだ？」

「そりゃ、広背筋だろ。後は三角筋と上腕三頭筋だな」

「そうだ。今回教えるフォームは……」

グツと脇を締めて、再度シャドーする。

先ほどより鋭く、筋肉の力が乗っているように感じられた。

「こうやって脇を締めることで、背中筋肉を引っ張る。これだけで一直線にねじり込めるパンチができるって訳だ。この矯正だけで精度とパワーが二倍になると考えていい。試しに打ってみろ」

「えっと……こうやって！！」

パシンとサリエルに打ち込むが……音がまだまだ軽い。

「そのまま押し込んでみる」

「んっ……ダメだよ」

「脇をもつと締めて!! もう一度やってみる」

「はっ、はい!!」

再度フォームを確かめて、打ち込んでみると……

ビシッといい音を立ててサリエルの手に打ち込まれた。

ヴィヴィオは以前の自分のパンチとは違う感触に戸惑いながらも感激に震える。

打たれた手のひらをひらひらとさせて、サリエルが不適に笑う。

「おゝいてえ……な、全然違うだろ？」

「確かに……ヴィヴィオにしては重そうなばんちだったな」

「これだけのことでこんなに違うなんて……」

「後は腰のキレも重要だ。腰をうまく回転させて、そのまま乗せることができるれば威力とスピードが跳ね上がる」

サリエルが見本を見せるかのようにシャドーをする。

流れるような動作の中に、確実に丁寧に先ほど言ったフォームを実戦していく。

腰のキレを意識して、打ち込む際に脇を締める。ヒュッと風切り音がするほど鋭いパンチが打ち出される。

ノーヴェもヴィヴィオもそれに見入った。

一通り流したところで、止める。

「これができるようになれば、自然とパンチがよくなるはずだ。しっかり覚えような」

「うんっ！..!」

すぐさまヴィヴィオはフォームを確かめるようにシャドーを繰り返す。

その様子をサリエルとノーヴェが見守る。

「……やっぱりすげえな、教導官って」

「そんなことないさ。ノーヴェの方がすごいって。ここまでヴィヴィオの基礎を作ってくれたのだから……」

「あ、あたしはちよつと稽古を見てやったただけだぜ!？」

「謙遜するな。それでも立派なことだ」

「……へへっ、照れるぜ」

鼻の頭を掻いて、ガラになく照れるノーヴェ。

そんな様子に柔らかい笑みを浮かべて、サリエルは柵に腰掛ける。

「……武術には「先に開展を求め、後に緊湊に至る」という言葉がある」

「なんだ、それは？」

「最初は威力と正しい動作を重視し、その基礎を身に着けてから実戦的な命中精度や動作を重視するという事だ。だけど俺は、自分が教えられる間に少しでも多くのことをヴィヴィオに伝えたいって思っている」

「教えられる間って……サリエルはまだまだ現役じゃねえか？ ピークもこれからだろうし……」

「いや、十代に無茶しすぎたせいだな……体はすでにボロボロなんだ。技術的なことはまだまだ伸びていくだろうけど、体力とかはな……」

「……初耳だぞ、それ」

「シヤマル先生からあんまり言わないようになって釘刺されているか

らな。まだフェイトとなのはさんにしか言っていないことだ」

右手を撫でて、両膝も労るように撫でる。

六課解散後もシヤマル先生による定期検診は続いている。

右手は二度ほど骨折している。完璧に治ったのが奇跡と言われ、次複雑に骨折したら復帰できないと宣告されている。

膝も同様だ。ちゃんと治ったとはいえ、爆弾を抱えているのに等しい状態だ。そのためフォトン・ステップの多用は極力止めるようにと言われた。

こんなボロボロなのだ、サリエルの体は……十代の時にあまりにも多くの出来事に巻き込まれすぎたのだ。

普通の人が手に入れられる幸せを犠牲にして管理局に入ったら……この様だ。

長くて20年、早くて半年後には現役を引退して後方職へ移らなければならぬ。

「……無茶だけはするなよ。姉貴とか……デイエチ達が悲しむから」

「大丈夫だ。よほど大きな事件が起きない限り、無茶はしない」

「絶対だぞ」

「ああ……よし、ヴィヴィオ。それは毎日のシャドーでやることにして次は寸頸を教えるぞ」

「うん!」

柵を降りて、次の技術を教え始めるサリエルの背中を見て、ノーヴエは一抹の不安を覚える。

確かにサリエルは強い。あのドミニ姉も認めるほどに……

しかし、その強さ故に頼まれる事件も厄介な物が多い。

よほどのこと……それは元六課のメンバーが招集されるほどの出来事だろうけど……

その強さが壊れるのは……やはり悲しい。

少しでも現役でやってもらうには周りの協力も必要だ。
あたしも……少しでもいいから力になろう。

そう決意して、ノーヴェもサリエルの指導の仕方を盗むために近くに寄っていった。

そして、一週間後……アラル港湾埠頭PM13:20 廃棄倉庫区画
試合時間10分前にヴィヴィオは待っていた。

この一週間毎日ノーヴェが……時間を許す限りお兄ちゃんも練習に付き合ってくれたんだ。

今回の再戦で私の気持ちをしっかりとアインハルトさんに伝えないと……顔向けできない。

周りではこの前いたメンバーが野次馬で集まり、アインハルトの登場を今かと待っている。

ちなみにサリエルは仕事で来ていない。

「お待たせしました……アインハルト・ストラトス、参りました」
「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん」

スバルとティアナと一緒に来たアインハルトに礼をする。

来てくれた……これで私の気持ちを伝えられる。

精一杯頑張ろう!!

「ここな……救助隊の訓練でも使わせてもらっている場所なんだ。
廃倉庫だし、許可も取ってあるから安心して全力出していいぞ」

「うん。最初から全力で行きます!! セイクリッド・ハート、セ
ット・アップ!!」

すぐさま大人モードで臨戦態勢に入るヴィヴィオ。

アインハルトもそれに呼応して……

「……武装形態」

自らも多少成長した大人の姿をとる。

両者にピリピリとした緊張の空気が流れる。

「今回も魔法は無しで格闘オンリー五分間一本勝負。それじゃあ、試合……開始ッ……！」

間合いをそのままに試合が開始した。

ヴィヴィオは教わったとおりの構えを取り、相手の出方を見る。

アインハルトはまだ構えずに一度ヴィヴィオの構えをじっくりと見る。

(……この前と威圧感が違う。この一週間でここまで鍛え込んでくるなんて……)

おそらくあのサリエルさんが直に指導したのだろう。それならば、この構えが納得できる。

しかし……見れば見るほど綺麗な構え。油断も甘えもない。サリエルさんと比べるならあの人にはむき出しの武、ヴィヴィオさんは磨かれた武だ。

いい師匠や仲間に出まれて、この子はきつと格闘技を楽しんでいる。私とはきつと何もかもが違うし、私の一拳(痛み)を向けていい相手じゃない。

ここでようやくアインハルトも構えを取る。ゆったりとした余裕の構え……

ヴィヴィオは多少気後れを取るが、グツと足を踏みしめて堪える。

すごい威圧感……一体どれくらい、どんな風に鍛えてきたんだろう。

勝てるなんて思わない。だけど……だからこそ、一撃ずつで伝えなきゃ……

ここでヴィヴィオが動き出した。アインハルトもそれに合わせて、動き出す。

（この間はごめんなさいってー！）

先制はアインハルト。真っ直ぐに打ち込まれたストレートを両腕をクロスさせて、しっかりガードする。

その衝撃でガードが若干ゆるむ。アインハルトは返す刀で左を繰り出す。

頬にかすりながらも何とかかわし、続けざまに襲ってくる右ストレートをいなす。

ここまででは防戦一方……ヴィヴィオは左フックをダッキングしてかわし、そのわずかな隙を狙って教えてもらった技を繰り出す。

（私の全力ー！）

脇を締めて、最短距離でパンチを走らせる。カウンターで繰り出されたそれはアインハルトのから空きの胴体に見事に突き刺さった。その威力で後ずさりを余儀なくされたアインハルトは驚く。

この前やったときは雲泥の差。あまりにも威力が違いすぎる。

ヴィヴィオも休む暇を与えない。続けざまに拳を突き出して、アインハルトの前で止める。

その行動に一瞬呆気を取られてしまった次の瞬間、アインハルトは宙へ吹き飛んだ。

サリエルは書類を片付けながら、時計をちらりと見る。

すでに一時半を過ぎている。

(ヴィヴィオの奴……今頃やっているだろうな)

一週間でできる限りのことを教えてやった。

フォームも大分改善されたし、寸頸も威力が出るところまで教えられた。

後はヴィヴィオ次第なんだけど……

「サリエル、お嬢の再試合……今日なんだろ？」

「……誰から聞いた？」

「デイエチからメールが来ました。それでお嬢様に勝ち目はあるのですか？」

「相手が悪すぎる。よくて善戦、悪くて一分で轟沈だろうな」

あんまりにもきつぱりと告げるサリエルに二人はため息をつく。

こと武術関係に関してはサリエルは相手の心を折るくらいすっぱりと物を言う。

武術に嘘をついたところで死ぬのは自分という考えから来ているらしいが……もう少しオブライトに言えないのだろうか？

「まあお互いの実力も相当あるし、今回の再試合はヴィヴィオにとってもアインハルトにとってもいい経験になるだろう」

「先ほどは勝てないと言っていたのに……」

「違う違う、精神的に……ことだよ。二人の境遇は対極と……いほど違う。俺たちに優しく教えられてきたヴィヴィオが陽、一人孤高に稽古を重ねてきたアインハルトが陰だ。そこから学びとれるものは非常に多い」

「なるほど……」

「あわよくばお互いを高め合う好敵手になってくれたらいいのだが

……」

実際の所、あの二人は絶対に通じ合うだろう。

真剣に拳を交えたら、お互いの気持ちや拳を通じて分かる。

アインハルトは聡い子だ。ヴィヴィオの深層にある気持ちを知れば、あの考えも変わるはず。

そして……好敵手同士になれば、ヴィヴィオ達の歳だったら天井知らずに実力が伸ばし合えるだろう。

「好敵手を作るだけならば、お前の愛弟子をぶつけなければいいのではないか？」

「あれはD S A A用に取っておくのさ。そうした方が面白いし、いい勝負ができそうだ」

「そうですか……それより、言わなくていいのですか？」

「何を？」

「お嬢様の戦い方です。今のポジションで戦っていけば、いずれ壁に突き当たってサリエルも分かっているのでは？」

「……分かってる。ヴィヴィオはフロントアタッカーにしては攻撃力も防御力もいまいち物足りない。かと言ってスピードだけで戦えるほど甘いポジションでもない。求められるのは生存力と最前線の激しい攻撃を耐えられる強固な防御力だからな」

「じゃあなぜ言わないんだ？」

「俺はヴィヴィオの好きにさせたいと思っている。努力して努力して……それでも壁にぶち当たり、分岐点に立つ。その時に選択するのはヴィヴィオだ。俺はその背中を押してやることしかできない……その時選んだ道に後悔しなかったら、俺はそれでいいと思っている……いいじゃねえか、攻撃も防御もなくてスピードで頑張るフロントアタッカーがいても……」

かつて、サリエルも六課でフリーアタッカーをする前はフロントア

タツカーだった。

スバルみたいなタイプでないとフロントアタッカーは大成しないと
言われている事は前線に出る輩の常識だ。

しかし、過去例外はいくつも存在する。

サリエルにしる、攻撃とスピードがあつたからこそフロントアタッ
カーという激務をこなすことができたのだ。

ヴィヴィオも……分岐点に立つまでに自分の中で確固たる技術を培
って欲しい。

今のままではウィングバック、よくてセンターガードが待っている。

「さ、無駄話していないで仕事片付けるぞ。明日からはまた教導な
んだから」

「そうだな。セツテ、その書類を……」

三人はヴィヴィオの試合結果を楽しみにしながら、仕事をこなして
いった。

ヴィヴィオの攻撃を続く。

吹き飛ばされたアインハルトは辛くも体勢を立て直すが、ダメージ
が足に来ているのか若干ふらつく。

さっきの攻撃は一体……？

手を寸前で止められて……その後にもすごい衝撃が腹部を襲った
のは分かるけど……

どういう原理なのかがまったくわからない。

しかし、驚いている暇も考えている暇もない。

今は目の前の相手に集中しないと！！

ヴィヴィオの鋭い連打の合間を縫って、勢いを止めるローキックを
入れる。受けてしまったヴィヴィオの勢いが一瞬で止まる。

止まったのを見て、アインハルトは攻勢に出る。右、左とテンポよく繰り返し出し、ガードの隙間を縫って顔面に拳を叩き込む。負けじとヴィヴィオも反撃するが、相手の方が一枚上手なのかリズムよくパンチを打たせてくれない。その間にアインハルトは確実にダメージを与えていく。

「~~~~ツ!?」

実力の差に歯がみする。やはり一週間程度の特訓では付け焼き刃に過ぎなかった。

だけど、アインハルトさんもこんなに頑張っているんだ。

私だって……諦めない!! まだ伝えたいことだってたくさんあるんだ!!

鋭い右ストレートを間一髪で避けて、合わせるように自身の最高のフォームで右ストレートをクロスカウンター気味に入れる。

霸王が……先ほどよりひどくぐらついた。

「やったっ!!」

周りから歓声上がるが、アインハルトは倒れない。ヴィヴィオも声を上げて再度攻勢に出る。

両者、バリアジャケットを削りながらお互いに一步も引かない。

しかし……悲しいかな。実力に劣るヴィヴィオが徐々に押され出した。

だが、ヴィヴィオも諦めない。ダメージを受けながらも必死に攻撃を繰り返す。

その姿にアインハルトは一つの疑問が浮かんだ。

(この子は……この子はどうしてこんなに一生懸命に?)

師匠が組んだ試合だから？ 友達が見ているから？
防御の上から叩き込みながらこんな頑張る意味を考える。
一方ヴィヴィオもある思いが胸の中によぎっていた。

（大好きで大切に……守りたい人がいる。小さな私に強さと勇気を
教えてくれた。世界中の誰よりも幸せにしてくれた）

なのはとフェイト……ヴィヴィオにとってはかけがえのない、大切
な母^{ひと}

幸せにしてくれると同時に、強さと勇気の大切さを教えてくれた。
そしてサリエル……ヴィヴィオがわがままを言っても、嫌な顔一つ
もせずに付き合ってくれたり、時には厳しく接してくれた大切な兄
代わり。

その背中がどんなにも頼もしくて……壊れる怖さを知っていて……
だから、この三人を守るために……強くなるって約束した。

「ああああっ！！」

強くなるんだ！！どこまでも！！

この試合最高のストレートがインハルトの防御を打ち砕こうとし
たが……

冷静に打点をずらして、スタンスを広く取る。そこから繰り出され
るのは……

「霸王断空拳！！」

ヴィヴィオも何とか対応しようとショートアッパーを繰り出すがす
でに遅し。

ストレートで撃ち出された霸王断空拳はヴィヴィオの胴体に突き刺
さった。

吹き飛ばされて、倉庫にぶつかる。そこから立ち上がってくる気配はない。

試合を見守っていたノーヴェはヴィヴィオが戦闘不能と判断し……

「一本！！　そこまで」

アインハルトの勝利が宣告された。勝者のアインハルトは荒い息を吐いて、構えを解いた。

吹き飛ばされたヴィヴィオを心配してコロナ達がそばに駆け寄る。自分の拳を見て、アインハルトは先ほどの戦いを思い返す。

……紙一重だった。下手したら私が負けていた。

それに……ヴィヴィオさんの気持ちはしっかりと伝わってきた。ちやんと……謝らないと。

オットーとデイドに介抱されているヴィヴィオは、きゅっ……と目を回している。

まだ気絶しているようだ。近くに駆け寄って、状態をしっかりと見る。

「……怪我はないようです。大丈夫」

「アインハルトが気をつけてくれていたんだよね。防護フィールド抜けないように」

「ありがとッス、アインハルト」

「ありがとッございます」

「ああ、いえ……私はっ」

そんなことはないと弁解しようとしたら、足下がふらつきそのままティアナの方に倒れてしまう。

立とうにも膝が笑って言うことを聞かない。

「あらら」

「ラストのショートアッパーが顎にかすっていたんだな。時間差で

効いてきたか？」

「だ、大丈夫……大丈夫ですから」

何とか自分で立つが、すぐさま足下がおぼつかなくなりスバルに倒れてしまう。

「いいからじっとしている」

「そのまま……ね？」

「……はい」

「それで聞きたいことがあるんだ。断空拳はさっきのが本式か？」

「……足先から練り上げた力を拳足から打ち出す技法そのものが「断空」です。私はまだ拳での直打と打ち下ろしでしか撃てませんが

……」

「そうか……で、ヴィヴィオはどうだった？」

「……」

この戦いを通じて、自分がどんなに間違った味方をしているか思い知らされた。

ヴィヴィオさんは、自分で誓った事のために格闘技をしている。

それもその誓い事がとても純粹で……一人でやり遂げるのは難しい物だ。

私みたいにああだこうだと悩まず、ただひたすら強くなるうとしていた。

だから……

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼な事を言ってしまった……訂正します、と」

「そうしてやってくれ。きっと喜ぶ」

……彼女は霸王わたしが会いたかった聖王女じゃない。

「ただ私……この子とまた戦えたらと思っっている。」

「まだ気絶しているヴィヴィオの手を握って、改めて自己紹介をする。」

「初めまして……ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

「それ、起きているときに言っただけよ」

「……恥ずかしいので嫌です。どこかゆっくり休める場所に運んであげましょう。私が背負います」

「はい」

「じゃあ、私はサリエルに連絡を入れておくれ」

「ああ、頼んだ。デイエチ」

こうして、二人の再試合が終わった。結果はヴィヴィオの負けであったが、その代わりに新たな友情が芽生えた。

アインハルトとヴィヴィオ、この二人の出会いがこれからどんな運命を作り出すかは誰にも分からない。

みんな、ゆっくり休める場所を探すためにワイワイと動き出す。

アインハルトもヴィヴィオを背負い、廃倉庫を後にするのであった

……

「そうか、負けたか……ま、ヴィヴィオにとっていい経験になるだろう」

夕方仕事が終わって、ヘリオンに寄りかかってデイエチからの通信に相槌を打つ。

結果はやはり予想通り。ヴィヴィオが負けた。

しかし、送ってきた映像を見る限りいい勝負をしている。寸頸も一発だが決まっているし、教えたフォームをしっかり守ってストレ

ートを打っている。

ここから伸びていくだろう…… ヴィヴィオの成長が一層楽しみになつてきた。

「それで、アインハルトはどうした？」

「さっきまで私達といたよ。もう帰っちゃったけど……」

「ヴィヴィオとの関係は？」

「……仲良くなれそうだよ。これで肩の荷が下りそう？」

「むしろ重くなったね。教える人数が増えて大変だ」

ヴィヴィオを筆頭にコロナちゃんにリオちゃん、それにアインハルトも加われば教える方としては結構な負担になる。

すでにヴィヴィオ達には内緒の教え子も一人抱えているっていうのに…… 大変だ。

その所はノーヴェとうまく分担してくしかないな。

「サリエルはお弟子さんも抱えているからね…… でも、楽しみでしよ？」

「どうだが…… 映像悪かったな？」

「ううん。これぐらいならお安いご用だよ」

「ありがとうな。それじゃ、おやすみ」

「おやすみ」

通信を切りながらポケットからタバコを取り出し、一口吸う。

好敵手ができましたか…… そいつは結構。

ならば、後はもっと決定的な敗北を知ってもらおう事だな。

DSA A予選開始まであと三ヶ月…… ちょっと鍛え込んでやろうか？と、コンソールを操作してあるところに通信を繋ぐ。

「はい…… どうしましたか、先生？」

「久しぶりに稽古をつけてやる。今日の7時に区民公園な」

「わぁ……分りました！！ 万全のコンディションで待ってますね！！」

ヴィヴィオ達も知らない自分の教え子……正確に言えば、一番弟子が目を輝かせて承諾した。

まだまだ子供……しかし、それ故に吸収も早い。

才能だけで言えば俺を遙かに超えている。

これが俺の歳になれば……格闘技者なら絶対王者、管理局員ならエースオブエースは堅い。

それには今からしっかり育てていかないと……指導者のエゴを押しつける指導ではなく、自身の経験をしっかりと受け継がせられる指導をしなくては。

カートリッジに残っている香料を全て吸い出すかのように吸い、盛大に水蒸気を吐いてヘリオンのエンジンをかける。

今日はどのように稽古をつけてやるかを考えながら帰路についた。

新暦79年春。

高町ヴィヴィオ、サリエル・フォーゼオンとインハルト・ストラトスはこうして出会った。

これが彼女たちの鮮烈な物語の……始まりの始まり。

第五教導 再戦……想い伝えるために。 (後書き)

ふう……とりあえず一巻の部分は全て書き終えたつと。

次回からはついに合宿旅行編へ突入。

サリエルの戦闘がついに解禁!! これを見逃すわけにはいかない!

それでは次回に期待しろ!!

第六教導 出発……合宿旅行!! (前書き)

作者「二週間も待たせてしまって、本当にすみません!!」

サリエル「……早速言い訳を聞こうじゃないか？」

作者「1 大学のゼミが凄まじく忙しかった。2 その余波で睡眠時間が激減。絞り出すために執筆時間の削減。3 ベルセルクを読みながら書いていたため、さらにスピードダウン」

サリエル「1、2は納得しよう……しかし、3の言い訳は許し難い」

作者「それに……どうやって話を進めていくかでも迷った」

サリエル「よし、お前死刑な(シャキン)」

作者「やれやれ……これだから最近の若者は……」

サリエル「グダグダ言わずにさっさと書け!! ハドウン・ブレイカー!!」

作者「によわあああああつ!?(バタツ)」

サリエル「これからは何とか一週間以内に仕上げられるように頑張らせる。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、質問、意見はいつでも待っています……す(ガクッ)」

第六教導 出発……合宿旅行！！

ヴィヴィオとアインハルトとの試合から一週間……

それほど変わったことはなく、日は進んでいった。

普通の日常の繰り返し……それがどんなに心地いいか。

今日も……

「ハツ……ハツ……ハツ……ゴール！！」

「ふう……よし、これで朝練は終わり。学校へ行く準備しな」

「ありがとうございます」

ヴィヴィオとサリエルは朝練に出かけていた。

試合以降ヴィヴィオの気合の入り方は全然違う。

アインハルトという好敵手を得たからであろう。

教える側の俺としては嬉しい限りなので、すこし力を入れて稽古をつけている。

どう成長していくかが……本当に楽しみだ。

さて、来週には合宿旅行もあるし気合い入れて仕事するか。

サリエルが一人気合いを入れてしばらくすると……今度はなのはとヴィヴィオと一緒に家を出るようだ。

「そっいえばヴィヴィオ、新しいお友達アインハルトさんだっけ？

ママにも紹介してよ」

「ん……お友達っていうか、先輩だからね……もっとお話ししたいんだけど、なかなか難しくくて」

また今度会わせると約束してヴィヴィオが学校へ走っていく。

校舎に入ると、見慣れた背中が見えた。

「あつ、アインハルトさん!!」
「はい」

Set・ヒルデ魔法学院中等部一年生、アインハルト・ストラトスが
ヴィヴィオの呼びかけに振り向いた。

アインハルトさんは実力のある格闘技者で真正古流ベルカの格闘武
術、カイザーアーツ覇王流の後継者。

それに加え、ベルカ諸王時代の王「霸王」イングヴァルトの正統な
子孫。

私もこの間試合をさせてもらったけど、全く敵わなくて……
しかし、できれば今より仲良くなって、一緒に練習したり、お話し
たりしたんだけど……

雑談をかわしながら、そんなことを考えていると自分の入る校舎を
過ぎてしまった。

「ヴィヴィオさん、あなたの校舎はあちらでは？」

「あつ!!? そうでした!!」

「……それでは」

「あ……ありがとうございます、アインハルトさん」

だけど、なかなかうまくいかなかったり。

それでも……

「……遅刻はしないように。気をつけてくださいね」

「はいっ!! 気をつけますっ!!」

何気ない一言が嬉しかったり。

そんな一喜一憂の日々だけ……

今はもうなくなってしまった旧ベルカの出身者同士、「強くなりた
い」格闘技者同士……

触れ合えるときはきつとあるから。
そんなことを考えながら廊下を歩いていると、ある男の子が目についた。

「あつ……ユウ君!!」

「ヴィヴィオ」

「久しぶり!! どうして始業式の時はいなかったの?」

「親の都合ですつと本局に泊まってたんだ。今日からもう大丈夫だから」

「そうなんだ。教室行こ!! 話したいことたくさんあるんだ!!」
「うん」

ヴィヴィオに引つ張られていく男の子……睦月ユウはそんな元気なヴィヴィオにされるがまだだった。

彼はヴィヴィオが入学したときからの友達で、幼なじみ。家も結構近いので時々ヴィヴィオの自主練に付き合っている仲だ。

教室に入り、先にいたりオとコロナの所にユウと一緒に行く。

今は中等部も初等部も前期試験の真っ最中だ。周りは教科書などを開けて、最後の追い込みと必死に勉強している。

ヴィヴィオ達も例外ではない。

「つていうか……今日も試験だよ!! 大変だよ!!」

「そうなんだよね……ユウ君は大丈夫なの?」

「俺は一応勉強しているから……それに先生達も事情を知っているからある程度見込み点か……」

「ずる〜い!! なんでユウ君だけ……」

「コロナ、ユウ君は事情があるからいいの。それよりも試験が終われば、土日とあわせて四日間の試験休み!!」

「うん!! 楽しい旅行が待ってるよ」

「宿泊先も遊び場ももう準備万端だつて!!」

「「おおっ!!」」

三人がはしゃぐ中、ユウだけがキョトンと状況を把握しかねている。それに気づいたヴィヴィオは説明をし始める。

「あつ、そっか。ユウ君は知らなかったね。今度の試験休みを利用して、旅行行くんだ!!」

「へえ……よかったね、ヴィヴィオ」

「もしよかったら、ユウ君も行かない？ 人数は多ければ多いほど楽しいから!!」

「一度親に聞いてみるよ。ウチってこういう事は結構厳しいから」

「そっかぁ……一緒に行けるといいね」

「うん」

「よし、じゃあ楽しい試験休みを迎えるためにっ!!」

「目指せ、平均点!!」

「コロナ……そこは1000点満点でしょ？」

「あつ、そっか。じゃあ改めて……目指せ、1000点満点!!」

「「「オー!!」」」

四人が気合いを入れて、勉強に励む。

その中でユウはちよつとウキウキした気持ちが湧いてきた。

友達と旅行か……初めてだからちよつと嬉しいかな。

多分父さんも母さんも許してくれるだろうし……それに……

格闘技者の羨望的、ヴィヴィオのお兄さんであるサリエル・フォ
ーゼオンに直に会えるのだ。

このチャンスを逃す手はない。

反対されても……絶対行つてやる!!

ユウがそう決意している時、高町家では……

「エリオ、キャロ、そっちはどう?」

「予定通り週末からお休みです!!」

「そう、よかった!! サリエルも今休暇を調整するために教導頑張っているんだ」

「お兄ちゃんらしいですね。久しぶりに会うから楽しみです」

「みんな、予定通りにいけそうだね。春の大自然旅行ツアー&ルーテシアも一緒にみんなでオフトレーニング!!」

なのは達がエリオ達と話している時、ナカジマ家では……

「みんなで旅行あたしも行きかけたツス!!」

ウエンデイが駄々をこねていた。

しかし、一緒にいるチンク、ノーヴェ、デイエチは慣れっこなのかその様子に口を出そうとせずおやつを食べている。

「ノーヴェとスバルだけってズルいッス!!」

「あくうるせえな……あたしらだって別に遊びに行くわけじゃねえ

!! スバルはオフ取れだし、あたしはチビ達の引率だ」

「とか言っ……通販で水着とか川遊びセットを買ってるのをお姉ちゃんが知らないとでも?」

デイエチがどこからともなく、通販の箱を取り出して見せびらかす。誰も知らないはずの物が姉の手にあつた事を知ったノーヴェは、顔を真っ赤にして箱をひったくる。

「お前!? 人の物勝手にっ!?!」

「いや……発送データに中身書いてあるし……まあ、いいじゃない。

ノーヴェはバイトも救助隊の研修も頑張ってるんだし」

「全くだ」

「だから……遊びじゃねっって」

「そういえば、あの子……アインハルトも一緒か？」
「そのつもり。これから誘うんだけどね」

すぐにアインハルトに通信を繋ぎ、旅行の説明をしていく。

「合宿……ですか？ すみませんが私は練習がありますので……」
「だから、その練習のために行くんだって。あたしや姉貴もいるし、
ヴィヴィオも来る。練習相手には事欠かねえ。しかも魔導師ランク
AA-からオーバースのトレーニングも見られる」
「はい……」

そのことを聞いて、アインハルトは少し心が躍る。

私の実力の遙か上にいる強者達のトレーニング……是非とも知りた
い。

何をやったらあそこまで強くなれるか……いつも不思議でたまらな
かった。

特にサリエルに関しては……

「ついでに歴史に詳しくて、お前の祖国のレアな伝記本とか持って
いるお嬢もいる。まあ、たった四日だ。騙されたと思って来てみる
って。つまんなかったら、走り込んだり一人で練習するなりしてて
いいんだし……」

「あの……」

「いいから来い！！ 絶対いい経験になる！！ 後で詳しいことメ
ールすつから、とりあえず今日の試験頑張れな」

「……はい」

強引に押し切られたアインハルトは、旅行に同行することを承諾し
てしまった。

その様子には三人は柔らかい笑みを浮かべる。

「ノーヴェのああいう強引さって、つくづくスバルと姉妹だよねえ」

「ああ……そうだな」

「うう、あたしも行きたかったツス……」

それとは別に我らが主人公サリエルはというと……

「よし、今日はこれで終了だ。各自ストレッチして上げれ!!」

ミッドチルダ北部の警備隊へ教導に来ていた。

どっぶり日が暮れるまで訓練をつづけ、ようやく終了を告げる。隊員達から一斉にため息をつく音が木霊してくる。

自身も大分体を酷使したので、隊員の輪に交ざってストレッチをする。

こういう場でのコミュニケーションも大切である。自然と隊員の本音が聞けたり、性格が分かったりして後の教導がやりやすくなるからだ。

会話しながらしっかりとストレッチをして、今日の疲れを残さないようにする。

徐々に隊員の数が減り、ついにサリエルだけが残った。

いまだにストレッチを続けて、訓練場の片付けに取り掛かる。

「ああ、それは私がやっておこう。練習もかねてな」

「悪いな」

「それで、来週は休むのか？」

「ああ。ヴィヴィオ達とオフトレ……いつもこの時期にやってるかな。体力の限界まで追い込むつもりだ」

「そうか……私達は同行できないのか？」

「無理だな。まだ入って一ヶ月しか経ってないんだぞ？ 有休は出ないし、そんなに休みも取れない。実地を兼ねた軽い教導を入れて

おいたから安心しろ」

「……鬼」

「セツテ、そう言うな……」

いつの間にか後ろに立っていたセツテのつぶやきに少しばかり遺憾を覚える。

俺だってお前達の事を思ってたな……

そう言おうとしたとき、思わぬ人物から通信が来た。

「サリエル、今大丈夫ですか？」

「ウーノ、珍しいな……お前から通信をかけてくるなんて」

「春の旅行に行くと言いましたので、グラディアスとヘルメスの整備をと思ひまして……」

「いや、帰ってからでいいよ。酷使はするだろうから、しっかり頼むよ」

実際去年の春旅行では、行った後グラディアス達を見てもらったら六課時代の疲労が蓄積されていた。

間違いなく今回も激しい物になるので行く前に整備してもすぐに疲労するのは目に見えている。

「……分かりました。楽しんできてくださいね」

「ありがとうな。用はそれだけか？」

「ええ。それでは」

薄く笑いかけられながら、通信が切れた。

その表情を見たサリエルの顔に不安が張り付く。

あの笑い方は何か企んでいる時の物だ……一体何を考えているんだ？
ウーノとの関係は至極良好で、最近喧嘩した記憶もない。

仮に喧嘩しても仕返しするような性格でもないし……

思い当たる理由もなく、サリエルは考えるのを止めた。こう言つときはドンと構えていればいい。

トーレ達がちょうど訓練場の片付けも終わり、自身のストレッチも切り上げて滞在先の宿舎にトーレ達と戻っていった。

そんな日常が続き、ヴィヴィオ達の試験期間も無事終了。

三人はなのはの家に集まつて、自分達の試験結果を見せていた。

「はい。試験お疲れ様」

「みんな、どうだった？」

「花丸評価を頂きました!!」

「三人揃つて」

「優等生です!!」

バツと成績表を広げ、自分達のできばえを見せる。

三人とも平均点を遙かに超えていて、コロナに至ってはオール満点と非常に優秀だ。

その成績にフェイトとなのはも満足げに笑う。

「みんなすごいすごい!!」

「これならもう堂々とお出かけできるね!!」

「じゃ、リオちゃんとコロナちゃんは一旦お家に戻つて準備しないとね」

「はい」

「お家の方にもご挨拶したいから、車出すね」

「あつ、じゃあ準備済ませて私も行く!!」

「あゝ……ヴィヴィオは待つて。お客様が来るから」
「お客様？」

『It seems to have come』.

ベルの音が鳴り、玄関に駆け寄つてみると……

「こんにちは」

アインハルトとノーヴェが準備万端の状態で来た。さすがのヴィヴィオも予想はしていなかったのか、眼をキラキラさせて感激する。

テンションも上がりまくり。ブンブン握った手を振り回すほどである。

「ほら、ヴィヴィオ。上がってもらって」

「あ、うん！！ アインハルトさん、どうぞ！！」

「お邪魔します」

恥ずかしさで多少顔を赤く染めながら、アインハルトを中へと案内する。

その後ろではフェイトとノーヴェがこそこそと話している。

「あの子が同行するって教えなかったのが正解だね、ノーヴェ」

「はい。予想以上に……」

中に入り、アインハルトはリオ達と挨拶を交わしていく。

そして、今回初めてなのはと顔を合わせる。

「初めまして……アインハルトちゃん。ヴィヴィオの母です。娘がいつもお世話になっています」

「いえ……あの、こちらこそ」

「格闘技強いんだよね？　すごいねえ！！」

「は、はい……」

ぐいぐいと聞き込んでくるのはにたじたじのアインハルト。

その間をヴィヴィオが割って入る。

「ちょ、ママ!! アインハルトさん、物静かな方だから!!」

「え〜?」

「さて……ここから出発するメンバーは……」

「ユウ君がまた来ていないよ?」

「ああ、ユウ君は空港に直接来るって、さっき連絡があつたよ」

「そっか。なら、全員かな?」

「じゃあ、途中で二人の家に寄ってそのまま出かけちゃおうか?」

「……はあ〜い」「」

元気よく返事をして、ヴィヴィオは慌ただしく着替えを始める。

今回の春旅行……相当賑やかになりそうだ。

いつものメンバーに加え、アインハルト、睦月ユウがいる。

これで盛り上がらないわけがない。

「賑やかになりそうですね〜」

「ああ。」

「そういえば、スバルさん達は別行動なんですか?」

「スバルとは次元港で待ち合わせ。ちょうど仕事を終えている頃じやねーかな?」

「そうなんですか……あつ、サリエルさんは?」

「あいつも昨日まで泊まりで仕事だったからな。直接現地に向かうって」

ノーヴェが各々の事情を話している時、サリエルは本局の公共通信所で班長に教導完了の報告をしていた。

「とりあえず仕上がりは先方も満足していました。今回の報告は以上です」

「ん、ご苦労だったな。今から旅行だろ？」

「はい、二日間留守にします。トールとセットを置いていきますのでき使ってあげてください」

「実地を兼ねた教導入れやがって……俺がついて行ってやるよ」

「お気遣いありがとうございます」

「んじゃ、楽しんでこいゃ」

班長からのお墨付きも出て、ようやく胸をなでおろす。

さて……今から送ってもらうか。

サリエルは無限書庫に向かい、ユーノに会いに行く。

知り合いで転送魔法が使えるのはユーノだけであり、加えて久しぶりに会えるので少しばかりテンションが上がる。

「スクライア司書長、いますか？」

「ああ、いるよ。中にどうぞ」

「失礼します。お久しぶりです、ユーノさん」

「サリエル君!？」

いきなりの訪問に驚くユーノ。

書類から手を離して歩み寄り、がっちり握手を交わす。

「三ヶ月ぶりぐらいかな……元気にしていた？」

「はい、それはもう……フェイトも元気になっていますよ」

「それは良かった。で、今日は何の用かな？」

「ちょっと転送してもらいたいですけど……いいですか？」

「うん……今は大丈夫かな？ いいよ、送ってあげる」

「ありがとうございます」

「それじゃ、転送ポートに向かおうか？ 次元世界を渡るとなるとポートを介してじゃないと……」

仕事があるだろうに、自分の私事に付き合ってくれるユーノさんに感謝。

昨日の夜に教導が完了し、本局の方に用があったのでそのまま泊る形になってしまった。

結局空港に行くことを断念して、直接転送してもらおうと考えてた。

「ユーノさん、なのはさんとはどうなんですか？ そろそろ一年ですよね？」

「うーん…… ヴィヴィオがいるから会えてはいるんだけど…… なかなか君たちみたいにはなりそうにないよ」

ユーノとなのはは一年前、サリエル達の結婚式に付き合い始めた。

男のけじめと言って、ユーノさんが俺に相談してきたことは今でも覚えている。

しかし、なのはさんは筋金入りのワーカーホリック。ヴィヴィオが小学校に入ってからはマシになったが、それでもまだまだ仕事が恋人状態だ。

その中で告白したのだが…… 結果は付き合っこととなった。

だが、それはただ単に今の関係がそのまま恋人関係に変わっただけで、生活まで変わるわけではなかった。

聞いた限りではキスとかはするみたいだが…… その先には進めないようだ。

「たまにはグワツて行かないとなのはさんみたいなタイプはずっとそのままですよ？」

「行きたいんだけど…… 嫌われたらって思うとね」

「男が好きな人を求めて何が悪いんですか？ それぐらいで嫌われるようでしたら、それまでの愛だったってことですよ」

「そういうものなのかな？」

「そういうものなんです。さ、カルナージまでお願いしますよ」

転送ポートにつき、準備を促す。

俺は違ったけど、ユーノさんは奥手だ。こうやって後押ししてやらないと先に進まない。

加えてなのはさんも自分からは決して行くことはしない。普通こういうカップルは成立しないのが常識なのだが、なのはさんとユーノさんは例外だ。

見ているこちらとしてはやきもきさせられるので、非常にストレスが溜まる。

早くくつつけばいいのに…… ヴィヴィオならユーノさんとも仲がいいからすぐに馴染むだろう。

「……まあ、気が向いたら……かな。なのはを傷つけたくはないしね」

「過保護なこと……」

「さ、準備完了。魔方陣の上に乗って」

転送ポートに魔方陣を展開し、いつでもいける状態になる。

サリエルはその上に乗って、手を挙げて礼を言う。

ユーノは礼に対して微笑みで返し、転送魔法を発動する。

激しい光と共に自分の体が伸びるかのような感覚に陥る。

しばらくしてそれが収まると、目の前に緑が広がった。

どうやら転送成功らしい。遠くを見ればロツジ風の建物が目に入る。

「……まゝたパワーアップしたな」

荷物を肩に背負って、歩き出す。

教導の疲れはない。睡眠時間もそれなりに取れている。コンディションとしては悪くないだろう。

これなら……今日の訓練で全開でいける。

「あ、兄さん!!」

「お兄ちゃん!! 久しぶりです!!」

「サリエル、久しぶり」

「エリオ、キャロ、ルーテシア。久しぶりだな」

ロツジに近づくと、なにやら用意をしていたエリオ、キャロ、ルーテシアが出迎えてくれた。

中から出てきたメガー又さんにも挨拶して、とりあえず荷物を置く。

「早かったですね。フェイトさん達と一緒に来ると思っていました」
「本局から直行でな……キャロ、身長伸びたか？」

「分かります!？ これでも1.5?伸びたんですよ!! それなのにルーちゃんが……」

「1.5?なんて伸びた内に入らないわよ。サリエル、また遅しくなったわね」

「そりゃ、鍛えていますから……で、なんの用意していたんだ？」

「今から薪を取りに行くんですよ。兄さんもどうですか？」

「用意してくるから待っている」

一旦中に入って、制服の上着だけを脱ぎ袖をまくる。

せめて私服が用意できればよかったのだが……あいにく昨日は宿舎に泊まりだ。そんな用意はとつくの前に無くなっている。

脱いだ上着の胸ポケットから結び紐と電子タバコを取り出し、髪をまとめながらタバコを口にくわえる。

これで準備完了。

「よし、行くつか？」

「兄さん……タバコは止めませんか？」

「安心しろ。これは電子タバコだ。体に害のあるニコチン、タール

は一切入っていない」

「……タバコ吸っていても格好良くありませんよ?」

「キヤロ……そこを突っ込んでくれるな。行くぞ」

わかってんだよ……タバコ吸っているからってカツコイイなんて事はないなんて……

だけどこうでもしねえと、貫禄がでねえんだよ!?

俺の苦勞も少しは分かってくれよ……

一人心中で落胆しながら、スイッチを入れて吸う。

吐き出された水蒸気が口の周りに広がり、辺りは柑橘系のさわやかな匂いで充満する。

「いい匂いですね」

「だろ? これも案外捨てたもんじゃない」

「でも……どうして吸っているんですか?」

「かっこつけが一番の理由だけど……自分のスイッチだな。今の自分と心の奥に潜んでいる狂気の自分との……」

「えっ?」

「犯罪捜査とかがしていると……どうしても冷酷にならないといけない。優しくすれば犯人はつけあがってくる。そうなれば、やられるのは自分だ。だから、冷酷に……残酷にならないといけない」

フェイトやはやてさんから来る捜査協力の多くは、密輸、違法取引、テロ組織の摘発などだ。

当然、その性質上荒くれ者も多いので取り押さえなければいけない状況もままある。

その中で自分の心に暗く、汚れた感情が流れてくる。それが溜まると今度は自分がそちらの立場になっている。

フェイトなどは使命感や正義感と言った天然の濾過装置を備えているが、少年時代に重い事件に巻き込まれたサリエルは今もそう言っ

た感情が火種としてくすぶっているのでいつ燃えるかが分からない。ふとした拍子に修羅道に陥る可能性を秘めている。

そこで考案したのが、もう一つの自分を作り上げ、必要な時にその自分を呼び出すという物だ。これならばある程度はマシになるらしいし、時間が経てばネガティブな感情も薄れてくる。

シヤマル先生と一緒に構築し、ミントフレーザーの電子タバコを吸うことでもう一人の冷酷で氷のような自分を呼び出せるようになった。

サリエルは捜査協力の他に昔の話をするときや、過去の自分を振り返りながら諭すときはいつもこうしてもう一人の自分を呼び出す。エリオ達も漠然ながら理解したのか、それ以上タバコの追求はしてこなかった。

「悪いな……せつかくの旅行なのにこんな重い話しちまって……」

「いいですよ。この際、全部吐き出しちゃってください」

「私達は仲間なんです。お兄ちゃんの感情を受け止めるくらい何ともないですから」

「……お前ら、本当にいい弟と妹だな」

二人の優しさと器のでかさに感謝する他無かった。

こんなにも傷つき、小さな俺を包み込んでくれる。

それがどんなに暖かいことか……

「あつ、ありました。ここにある薪を少し持って行けばいいですね」

「でも……私とエリオ君じゃ、そんなに持てないよ？ お兄ちゃんなら結構持てそうだけど……」

「お前らの分しか薪がねえよ。だけど……」

薪小屋にはもう少しの薪しか残っていなかった。

多分後でガリユーとかが割ると思うけど……

よし、トレーニングがてら薪を割ろう。
来ていたロングTシャツを脱いで、切り株に丸太をセットする。

「お兄ちゃん、今から割るんですか？」

「ああ。見とけよ……」

手に持った斧を上段に構えて……勢いよく垂直に振り下ろす。
バカンツと音と共に、丸太が綺麗に割れる。
それを二回繰り返し返せば、薪のできあがりだ。

「どうだ？」

「すごいですね……僕にもやらせてください」

「薪割りは原始的ながらも効果的なトレーニングだ。背中全体の筋肉が鍛えられるからな」

エリオに斧を渡してやらせてみる。

しかし、エリオが振り下ろした斧はまともに薪に刺さらず、側面で丸太を打ってしまった。

手が痺れたのか、斧から手を離してブラブラさせる。

「ハハハッ……最初はそんなもんだ。慣れるまでやり続けな」

「イテテッ……笑い事じゃないですよ」

「もう降参か？」

「こういうのは兄さんに任せます」

「おう、任された」

再度斧を持って、振り下ろしていく。

その手際いい割り方であつという間に薪の山ができあがった。
必要な分だけ分けて、残りは薪小屋に規則正しく積み上げた。割っていたサリエルの体からは湯気が出ている。

「よし、これだけあれば十分だろ。戻ろうか？」

「まだ皆さん来ていないのに、そんなに体力使って大丈夫ですか？
お兄ちゃん」

「アップと思えばどうってことはない。いいトレーニングにもなっ
たしな」

「まったく……変わりませんね」

薪を持ってコテージに戻ると、すでにみんなが到着していてルーテ
シアとメガーヌさんに挨拶していた。

おやおや……アインハルトに加えて新顔がいるじゃないか？
ヴィヴィオの友達か。結構多いんだな。

「エリオ、キャロ それにお兄ちゃんも」

「わーおー！エリオ、また背伸びてる！！」

「そ、そうですか？」

「私もちよこつと伸びましたよ！？」

みんながエリオ達を囲み、久しぶりの再会に喜ぶ。

そんな中、置いてかれ気味のアインハルト・ストラトスとユウにフ
エイトが二人を紹介する。

「アインハルト、ユウ君。紹介するね」

「あつ、はい」

「二人とも私の家族で……」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエと飛竜のフリードです」

「アインハルト・ストラトスです……二人はサリエルさんの子供と
なるのですか？」

「……ハアッ！？」

なんというポケをかましてくるんだ!?

しかも、ごく普通の表情で……まさか、アインハルトって天然じゃ

……

「違う違う。フェイトがこの二人の家族で、俺は二人の兄貴分だ。それに俺達に子供はまだいない」

「そうですか……」

「それで、隣にいる君は?」

「ヴィヴィオの友達の睦月ユウです。サリエルさんに会えて、光栄です」

「またこの手の……ヴィヴィオがいつも世話になっている」

握手をしあつて、ユウとの顔合わせを終える。

手を握つて分かったが、この子も格闘技をやっているみたいだ。それも結構強い。明日の模擬戦で実力を計つてやるとするか。

その時、ガサツと茂みから音がした。アインハルトはそれに反応してすぐさま構える。

出てきたのは黒の甲殻で覆われた人型の虫だ。その姿のせいか、アインハルトはさらに警戒を強める。

「大丈夫だ、アインハルト。アレは敵でも何でもねえ」

「そうよ。私の召喚獣で大事な家族。ガリユーって言うの」

「し、失礼しました」

「私も最初はビックリしました」

スツと礼をして、コテージの中に入っていくガリユー。

背中には自分で獲つたであろう獲物が入った籠が背負われている。

アレが昼食に出てくるのか……よだれが出そうだ。

「さて、お昼前に大人のみんなはトレーニングでしょ？ 子供達はどこに遊びに行く？」

「やっぱりまずは川遊びかなと……お嬢も来るだろ？」

「うん！！」

「アインハルトとユウもこっち来いな」

「はっ、はい」

「分かりました」

「じゃ、着替えてアスレチック前に集合にしよう！！」

「……………はいっ！」「……………」

「こつちも水着に着替えてロッジ裏に集合！！」

「……………はい！！」「……………」

ここで各々着替えるために部屋に移動する。

サリエルはエリオ、キャロ、フェイトと一緒に部屋になった。

家族で押し込められたか……ま、こつちの方が気を遣わなくていいけどな。

「始まったね、サリエル 今年もたくさん思い出ができるといいね」

「ああ、久しぶりに本気も出せるし……いい旅行になりそうだ」

「に、兄さん……手加減はしてくださいね？」

「エリオ……すまん、手加減できないかも知れない」

「そんなあ！？」

エリオの悲痛な叫びに笑い声が部屋に木霊する。

実際こしばらく教導ばかりで本気を出した記憶がない。捜査協力も無かったわけだから、ここ数ヶ月アサルトフォームを展開した記憶もない。

だから……今回は思いっきりやらせてもらう。

サリエルは知らず知らず好戦的な笑みを浮かべる。

そんなことを思いながら、春の合宿旅行が幕を開けたのであった。

第六教導 出発……合宿旅行！！（後書き）

今回から出てきた睦月ユウ君は紅先生からアイディアを頂きました。
この場を借りてお礼を言いたいと思います。

さて……この後はどうやって展開させていこう？

水浴びして……訓練して……その後は？

……どうしよう、何も思い浮かばない！？

ま、何とか頑張っていきます。

それでは

第七教導 驚愕……化け物揃いの訓練風景（前書き）

作者「ふう……何とか書き上がった」

サリエル「一日遅れで何言ってるやがる。アサシンクリード買いやがって……さらに時間が減るだろうが」

作者「大丈夫、それと両立して書いてみせるから」

サリエル「いつもそう言うができていないのではないか？」

作者「……さて、頑張ってる書くか？」

サリエル「おい、目を逸らすな。こつちを見て話せ」

作者「それではどうぞ閲覧してください」

サリエル「目を見ろって！！ あゝ……感想、意見、質問はいつでも待っているぜ」

第七教導 驚愕……化け物揃いの訓練風景

サリエル達が着替えてアスレチックに向かい、ヴィヴィオ達はロツジ裏にある川に泳ぎに来ていた。
久しぶりの旅行にみんなのテンションが天元突破しそうなほど上がってる。

「あたし、いちばくん!!」

「あーリオ、ずるい!!」

大はしゃぎで川に走り込んでいくヴィヴィオとリオ。その後ろからコロナもルーテシアも川に入っていく。

ただ、アインハルトとユウだけはまだパーカーを羽織ったまま、川辺で戸惑っていた。

「ユウくん、アインハルトさんも来てくださーいっ!!」

「ホレ、呼んでるぞ。ユウだったか? 話はヴィヴィオから聞いているよ。一年生から友達なんだってな?」

「はい。ヴィヴィオとはずっと仲良しです」

「なら、なおさら行ってやらねえと……な?」

「ふう……分かりました」

ユウがパスツとパーカーを脱ぎ捨て、上半身をあらわにする。
その体にノーヴェは感嘆のため息を吐く。

(……なかなか鍛えてやがる。この年でうっすらと筋肉が盛り上がっているのは相当な稽古をしている証拠だ)

ユウの体は同世代と比較しても発達している。

子供特有のプニプニとした体ではなく、すでに青年と見違えるほど筋肉がついているのだ。

ユウは川に入ってヴィヴィオ達に合流するが、アインハルトはまだ躊躇しているみたいだ。

「ほら、お前も行けって」

「ノーヴェさん、できれば私は練習を……」

「まあ、準備運動だと思って遊んでやれよ。それにあのチビ達の水遊びは結構ハードだぜ？」

「……」

ノーヴェに促されて、渋々パーカーを脱ぎ、ヴィヴィオの達の所に向かう。

アインハルトが来てすぐに川遊びが始まった。

「じゃあ、向こう岸まで往復みんなで競争〜!!」

コロナの提案に、みんながすぐに賛同する。

いざ泳いでみると、ユウとアインハルトはすぐにヴィヴィオ達に離されていく。

「みんな、速い!？」

「俺達も気合い入れないと置いてかれますよ!!」

グンツとユウが蹴り足を強めて、加速する。

負けじと自らも加速してヴィヴィオ達に追いつく。しかし、そこからさらに驚くことが続く。

(………んたというか、皆さん本当に………)

向こう岸についても元気いっぱいにはしゃぎ回る五人。
アインハルトはそれについて行こうとするが……

（元気いっぱい……というか、その……元気……過ぎるような……？）

泳いでも泳いでもみんなの勢いは止まることを知らない。

最初にユウが音を上げて岸に上がり、アインハルトも続けて岸に上がる。

全身がずっしりと重い。水の中で動くのがこんなにも疲れるなんて……

ユウは大の字で寝転がって肩で息をしている。

そんな二人に飲み物を持って、ノーヴェが声をかけた。

「二人ともやつぱり水の中はあんまり経験ないか？」

「体力には少し自信があったんですが……」

「同じく……」

「いや、たいしたもんだと思うぜ。あたしも救助隊の訓練で知ったんだけど、水中で瞬発力出すのはまた違った力の運用がいるんだよな」

「じゃあ、ヴィヴィオさん達も……」

「なんだかんだで週2くらいか？ プールで遊びながらトレーニングしてつからな。柔らかくて、持久力のある筋肉が自然と出来てんだ」

確かにそれは納得できる。

プールでのトレーニングは、足腰に負担がかからない代わりに全身の筋肉を使う。

だから、あそこまで粘り強い土台があるんだ。

「どうだい？ ちょっと面白い経験だろ？ 何か役に立つことがありやさらにいい」

「はい……」

「んじゃ、せっかくだから面白いもんを見せてやろう。ヴィヴィオ、リオ、コロナ！ ちょっと「水斬り」やってみせてくれよ！！」
「……はあ〜いつ〜！！」

ノーヴェに言われて、三人が一同に同じ構えを取る。

まずコロナが水面すれすれに拳を撃ち込むと、拳圧で水面が軽く割れ水柱がほんの少し立つ。

続いてリオが同じように撃ち込む。コロナより高く水柱が立ち、割れ方も長いものだ。

そしてヴィヴィオ……ずっとサリエルに教わってきたフォームを確かめるように、撃ち抜く。

三人の中でもっとも割れ方が長く、水柱も立った。

アインハルトは三人の見せ物に素直に驚いた。

「ちょっとしたお遊びさ。おまけに打撃のチェックも出来るんだけどな」

「すごいです……こんな練習方法があっただなんて……」

「アインハルトも格闘技強いんでしょ？ 試しにやってみる？」

「……はいっ！！」

もう一度水辺に入って、ヴィヴィオ達と同じように構えを取る。

足を踏みしめるが、地面と立っているときは雲泥の差だ。少しでも踏ん張ると滑る。

大きな踏み込みは使えない……なら、抵抗の少ない回転の力でできる限り柔らかく……

足首、腰の回転を一気に拳に伝えて、水面に撃ち込む。

ものすごい打音と水柱が上がり、辺り一面に霧雨を降らした。

「あはは……すごい天然シャワー!!」

「水柱5メートルくらい上がりましたよ!!」

「……あれ?」

おかしい……私の予想だともっと走る予定だったのに……

どこがおかしな点でもあったのか?

それを考えていると、ノーヴェが川に入ってきた。

「お前のはちよいと初速が速すぎるんだな。初めはゆるっと、途中はゆっくり……インパクトに向けて鋭く加速。これを素早くパワー入れてやると……」

説明しながら実演してみる。蹴り足から伝えられた力が見事に水面を……文字通り割った。

一瞬茶色い物が見えたのは地面だろう……その脚力もさることながら、水中での身体方法にも舌を巻く。

まだまだ私も勉強不足だ。こんなにも知らない技術が存在しているのだから……

「……はっ!!」

いつの間にか入ってきたユウも、ノーヴェの真似をするかのように水斬りをする。

水柱の立ち方や割れ方はヴィヴィオの物に及ばないものの、それなりにいい感じで打っている。

アインハルトも先ほどノーヴェが言ったことを反芻しながらもう一度水斬りに挑む。

……構えは脱力。途中はゆっくり、インパクトの瞬間にだけ……撃ち抜く!!

先ほど打った物より少しだけ割れ方が長いものになった。

「あっ!!! さっきよりちょっと前に進みました!!!」

「すごい!!!」

「俺だつて……負けない」

ユウも負けじとよりいい水斬りをしようと挑戦する。

打撃のチェックにいいと思ったのか、アインハルトもさらに水斬りを重ねる。

その様子にルーテシアとノーヴェは満足げな笑みを浮かべて、ヴィオオ達の水斬りを見守っていた。

一方アスレチックでトレーニングしているのは達はというと……

「アインハルトちゃん、楽しんでくれてるかな？」

「ヴィオオ達が一緒ですし、きっと大丈夫です」

「今頃水斬りでもやっているでしょうね……あれは、子供の遊びにはちょうどいい」

「あゝ、またそんなこと言う。アレは歴とした打撃のチェック方法の一つなんだよ?」

「俺はそうは思わないね。水斬りするぐらいだったら、鏡の前で打撃フォームの修正していた方が百倍効率的だと思うんだが?」

実際サリエルが水斬りをする……水面は割れない。少し深く割れる程度だ。

しかし、その割れる長さが半端無く長い。目標の遙か遠くを撃ち抜くフォームでなければそうはならない。

だからこそ、剣でも銃でもあれほどのバリア貫通力が発揮できるのである。

「ところでみんな大丈夫?」

なのはががけの下に向かって呼びかける。
そこには死屍累々のフェイトとティアナ、二人と肩で息をしている
エリオとキヤロがいた。
先ほどまでアスレチックで存分に体を動かしていたのだ。息が切れ
るのも、へたり込むのも当たり前だ。
しかし……スバル、なのは、サリエルの三名に至っては息一つ切れ
ていない。

「まったく、これぐらいで息切れるなんて……衰えたんじゃないの？」
「うっさい！！ 最近デスクワークが多くて鈍ってただけよ！！」
「フェイトも……だらしねえぞ？」
「ごめん……」

「はいはい、いじめるのはそこまで。もうちょっと休憩時間延ばす
？」
「大丈夫です！！」
「バ……バテてなんか……いないよ？」

嘘つけ、見るからにバテているじゃねえか？
これはもうちょっと回復に時間がかかりそうだな。
……フェイトのあの姿、ちょっとグツとくるな。
やべえ、ここ一週間まともにやってないから溜まっている。
サリエルの胸の奥で情欲の火種にポツと火がつくが、すぐさま消え
る。

ま、夜になればいくらでも時間は取れる……か？
場所はいくらでもあることだし？

「じゃあ、もう一週してきますね。あの二人の回復がもう少しかか
りそうですし……」
「毎度のことだけど、大丈夫？」

「ああ。伊達に走り込んでないってね」

サリエルはまたもアスレチックを駆け巡る。しかもポケットに手を突っ込んだまま。

だが、その軸がブレることはまったくくない。魔法の補助をかけている様子も見当たらない。

自身の考えで魔法よりまず身体が大事と想っているため、この四年間徹底的に体幹と足腰の強化、効率的な身体運用を取り込んできた結果、ちよつとやそつとじゃバランスを崩さない重心を手に入れ、なおかつ無駄が多かった身体運用から効率のいい物に変わったことで体力の消耗も押さえられるようになった。

つまりスタミナがついたのだ。今のサリエルをシグナムが負かそうとすれば、短期決戦でないと逆にやられてしまう。

なめらかに凹凸の激しいフィールドを駆け巡り、崖はさすがに手を使ってだが難なく駆け上がる。

スタートからわずか数分でゴール、ここでようやくサリエルの額にじっとり汗が浮かんできた。

「よし、休憩終わり。次のメニューに行こうか!？」

「了解!!」

「バッチコイですね」

「はい……」

「が、頑張る……」

「はいっ!!」

体を引きずりながらティアナとフェイトが崖を上がり、息を整えながらエリオとキャロが二人を支えてなのは達の所にやってくる。

その後も結構ハードなトレーニングが続き、太陽が空の中央に来た頃でようやく午前のトレーニングが終わった。

「はい、お疲れ様。そろそろご飯だから、戻ろっか？」

「っ、疲れた……」

「だらしねえな。なのはさん、先食べておいってください。俺もうちよつとやりますから」

「あんたの体力はどこから来るのよ……」

「適度な教導。それ以外に思い当たる節はない」

そう言つて、サリエルは止める間もなくまたもアスレチックを駆け回る。

サリエル自身、フェイト達の二倍以上トレーニングしているにもかかわらず、未だに少々の汗しかかいていない。

その体力さることながら、精神力もすごい。

手のつけようがないため、仕方なくサリエル抜きで昼食に行くことにした。

すでに川遊びから上がってきている子供組が昼食の準備に取りかかっていた。

「あれっ？ お兄ちゃんは？」

「まだトレーニング中。去年と同じように私達だけで食べよう」

「サリエルさんって、そんなにトレーニングが必要なんですか？」

「体力の限界まで追い込むって言うていたよ。リオ達にはオーバーワークもいいところだから真似しちゃダメだからね」

「はい」

「それじゃ、バーベキューするからコンロに火をつけるね」

ゴウツと音を立ててコンロから火が立ち上る。

すでに準備してあった串を手際よく並べていき、しっかき火が通るまで焼く。

ジウジウと音がする頃、サリエルは一人孤独にアスレチックを駆け巡っている……逆立ちで。

「はあ……はあ……はあ……」

誰の助けもない。強制でもない。

すぐに止めていいんだ。そうすれば、この息苦しさと肩の痛み、腕のきしみから解放される。

しかし、そんな考えを首を振って頭から追い出す。

追い込め……自分を。

疲れたときに動けなかったら、意味がない。

長時間戦闘していれば、疲労が溜まってくるのは自明の理……なら、そこから勝負を決めるのはなんだ？

答えは精神力と普段の追い込み方。この二つに限る。

不安定なアスレチックを結構なスピードで動く。その額からはポタポタと汗が滴り落ち、乾いた地面をほんの少しだけ潤いをもたらす。ようやくゴール前の崖にたどり着き、逆立ちの姿勢のままロープを掴んで上がっていく。

一気に腕の負担と背筋への痛みが増し、ずっと逆立ちをしているため頭に血が溜まってめまいを引き起こす。

それでもサリエルは諦めない。一手一手確実に昇っていく。

そして、ようやくゴール。受け身を取りながら、大の字に寝転んで休憩を取る。

「……さすがにきついな。これをティアナ達の前でやると、凹ましちまつからな」

午前のトレーニングはなんとセーブしていたのだ。

もうこの男……ほとんど規格外に分類してもいいだろう。

息を整えて、滴り落ちる汗をそのままにロッジに戻ると、ちょうど昼食も終わりに差し掛かっていた。

「あつ、サリエル」

「ちかれた〜……とりあえず、ご飯」

「そんなに汗だくになるまで頑張つて……はい、これがサリエル君の分」

「ありがとうございます。メガーヌさん」

サリエル用にとつてあつたバーベキューの皿とスープを受け取つて、席に着く。

スツとフェイトから差し出されたタオルで汗を拭いて、豪快に串に齧り付く。

その様子を初めて見るリオとユウ、アインハルトは啞然とそれを見る。

「ングング……ふおれでひひおたちははにをしてはんだ？」

「食べながら話さないの。行儀が悪いでしょ」

「おう……それでヴィヴィオ達は何してたんだ？」

「水斬りやってたの！！ だけどやりすぎて体が……」

「何事も限度つてもものがあるだろ……どうせアインハルトもそのクチだろ？」

「そうです……」

体をプルプルと震わせて、相当エラそうだ。

水中で動くとき全身を使うから、いつもの倍以上体力を使う。

それなのに水斬りという激しく体を動かす運動をすれば……そうなるのは必然だ。

ぐびぐびと熱いスープを水のように飲み、見る見るうちに刺さっていた食べ物を食べ、串を皿に盛っていく。

ちょうどみんなが終わるころに、サリエルも食べ終わった。

『いちそうさまでした〜！！』

「ごちそうさまと……」

「いつも思うけど……そんなに早く食べてお腹痛くならない？」

「全然。片付け終わったら、いつもの場所で寝ているから始める時に呼んでくれ」

テキパキと食器をロッジの流しに持って行き、コンロを片付ける。網はエリオが洗ってくれるみたいだし、食器は女性陣がやるみたいだ。

まだ熱を持っている炭をバケツに張った水に放り込んでいく。ジュワツと音を立てて、炭が急速冷却されていくのが分かる。

ある程度熱を取ったら、日当たりがよくて風通しのいい場所に置いておく。こうすればまた使えるからだ。

辺りを見渡して、自分の手伝いが必要ないか確認してから外で体を休める場所……木々の間にハンモックが張つてある所に向かう。

ぎしぎしとハンモックを揺らしながら、サリエルは横になる。

「大分お疲れのようですね、主」

「そりゃそうだろ？ あんだけ動いてんだから」

「午後からの戦闘訓練は大丈夫ですか？」

「グラディアス、それは聞くまでもないだろ？」

「……そうでしたね。では、誰かが来たら起こしますので……」

それを聞いたサリエルはスツと瞼を下ろす。

疲れたならとにかく寝る。クールダウンもしているので筋肉に疲労が残ることはあまりない。

そして、これが超回復に繋がりをわずかながらでも自分を成長させる。こうでもしないとこの体はもう成長の見込みがない。10代の時に頑張りすぎたせいでもあるが……

まどろみながらそんなことを考えていると、グラディアスが誰か来たと知らせてきた。

この至福のひとつきを邪魔する奴はどいつだと片目を開けて確認する……

「隣、いいかな？」

「……ああ」

フェイトだった。器用にハンモックによじ登って、サリエルの隣に収まる。

しかし、大きめとはいえ一人用のハンモックで二人入るのは少々狭い。

そう思ったのか、フェイトは少しでも面積を縮めようとサリエルに抱きつく。

「汗臭いぞ？」

「ううん……サリエルの匂いしかないよ」

「どんな？」

「……雄々しい匂い」

「それって、結局汗臭いってことじゃん……」

フェイトの手を握りながら、突っ込みを入れる。ひんやりとした手が熱を持っている俺の手を冷やしてくれる。

甘えるかのように胸板に頬をすり寄せてくるフェイトがいつもより愛おしい。

キュッと抱きかかえるように体勢を変え、向かい合わせに寝転ぶ。

「……久しぶり、この感触」

「一週間教導だったからな。寂しくなかったか？」

「全然……仕事ってことが分かってるから」

「ダウト。本当は？」

「……寂しかったなあ。一人の食事があんなに寂しい物だったこと、

思い出したよ」

できる限り、二人の時間を作ること。

結婚してから誓い合ったことだが、お互いの仕事の都合もある。

どうしても片方が休暇の時もあるし、仕事の時がある。

サリエルに関しては孤独に慣れているのでそれほど苦ではないが、フエイトはそうでもないみたいだ。

無駄な寂しさを感じさせてしまったと後悔し、さらに強く抱きしめる。

「ごめんな。連絡でもすればよかったんだけど……」

「いいの。サリエルだって、報告書とか訓練内容の打ち合わせとかでプライベートな時間取ることが難しいって分かっているし、そこまで望んだら贅沢だよ」

「……ありがとな」

「うん。その代わり、今はこうやって包んでいて欲しいの」

頬を軽く朱に染めて上目遣いで言うフエイトを見て、サリエルは先ほどの情欲の火種にまた火がつく。

しかし、さすがにまだ自制心が働いたのか苦勞しながらも火種を消化した。

フエイトから漂ってくるシャンプーのいい匂いをかぎながら、サリエルは眠りに落ちていった。

後に呼びに来たスバルとティアナがその様子に微笑ましそうに見て、歯ぎしりをして嫉妬したのはお約束……

午後のトレーニングは実戦形式の模擬戦をすることになった。

サリエルにとっては僥倖。久しぶりに本気を出せる機会だからだ。

まず最初のマツチアップはスバルとティアナとだ。

「初っ端からあんたとなの？」

「気にするな。ボッコボコにしてやるからよ」

「シヤレにならないわよ、それ……」

「まあまあティア、あたし達がボッコボコにすればいい話だから」

やれるもんならやってみろって。俺だってそう簡単にやられるような奴じゃないぜ？

一ヶ月に一回はある教導。仕事の合間を縫ってやっている自主練。腕はそれほど落ちていないはず。

多少疲労が溜まるうともそうは動きに影響はないはずだ。なのはさんはエリオ達とやるみたいだ。

「それじゃ……午後のトレーニング、始め!!」

「スバル、クロス・シフトA!! まず動きを止めるわよ!!」

「OK!!」

「ガンナーフォーム、先に先制するぞ」

『All right』

合図と同時にスバル達が一齐射撃をする。的なんて絞らない。ただ足を止めればいいのだから、当たれば御の字だ。

それに対してサリエルはその場を動かない。当たりそうな物だけ撃ち落として、爆煙が舞うを待つ。

地面に魔力弾が突き刺さり、思惑通り爆煙が両者の間に朦々と立ちこめる。

視界が効かない状況でも、ティアナ達は冷静だ。

「……散開!! 挟み込むわよ!!」

「分かった……キャツ!？」

撃ち込んでこられる前に散開して挟み撃ちで行こうとするが、スバルが何か喰らったらしい。

爆煙が晴れて、それを確認してみると……プロテクションを展開したまま、スバルは動けないでいた。

今もバリアを破ろうとしているのは、一発の細めの弾丸だ。

「挟み撃ちはさせないぜ？」

『Piercing shot』

さらに撃ち込み、プロテクションを貫通させてダメージを与えようとする。

ピアッシング・ショットはサリエル流のバリア貫通弾だ。弾丸を細くして、着弾点を一点に集中させる事で強力なバリア貫通能力を生み出すことに成功した。

威力も十分あるが、その分魔力消費と連射性に難がある。

スバルの動きを止めたと見ると、今度はティアナを相手にしようとする向きを変える。

相手は本職のガンナー……こちらの実力は相手の方が上だ。

だが、撃ち合いで勝とうなんて端から思っていない。自分の距離に近づければいいのだ。

「付き合ってもらうぜ!!」

『Change Barret, Variable Barret』

「そつちこそ、舐めてんじやないわよ!!」

ティアナも魔力弾を展開して、次々に発射していく。

サリエルも一歩一歩確実に前に進みながら、引き金を引いていく。

二丁の拳銃から交互に魔力弾が発射され、時には反らし、時には撃ち落とす。

数瞬均衡を保ったが、すぐにティアナが押し始める。
やっぱり撃ち合いは不利だな……だが！！

「ほら、腕は鈍ってないでしょ!？」

「だな。だけど……経験はさび付いているぞ!! アサルトフォーム」

『Set Assault Form』

すでにいつもの距離に入ったサリエルは、すぐに見慣れた青のフルプレート姿に変わる。

飛んでくる魔力弾を全て切り払って、ティアナの懐に潜り込む。

しかし、ここで嫌な予感がよぎる。

ティアナにしてはあまりに簡単に懐に潜り込まれたのではないか？
そう考えた瞬間、背筋に電流が走る。

フォトン・ステップを使って、すぐに後退する。次の瞬間、強大な砲撃をサリエルのいた場所を通り過ぎた。

「惜しいっ!？ やっぱりサリエルだと気づかれるね？」

「勘はいいから……こいつは」

「懐に潜り込ませたのデイベインバスター（偽）……コンビネーションは衰えてないようだな」

余裕たつぷりに言い放つサリエルだが、額に冷や汗が浮かぶ。

ティアナ達はさっきのデイベインバスター（偽）で俺を引き離し、
なおかつきつちりと挟み撃ちの形に持って行った。

しかも正面と真後ろではなく、俺から見て斜めに位置取っている。
これが意味するのは、サリエル流の多対一に巻き込まれないため
ある。

さて……どうするかな？

アサルトフォームのツインブレイドモード。防御に秀でている分、

攻撃はそれほどの物ではない。

……結論、我慢の時間だな。

「おおおおっ！！」

斜め後ろからスバルが突っ込んでくる。サリエルはそれを難なく受け止める。

しかし、止めた瞬間ティアナが魔力弾を連射。剣で切り払って、その場から動こうとするが……スバルに止められる。

一人がクロスレンジで、一人がミドルレンジで足止めする。これがサリエルの多対一に対抗できる唯一の戦法。

動いて一対一の状況に持って行こうとするが、動こうとすればティアナに足下へ魔力弾が撃ち込まれる。

……昔の俺なら打破できなかったが、今の俺は……

「ヘルメス、ショットクラスターだ」

『Set Shot Cluster』

アサルトフォームのまま、ヘルメスを展開してスバルに銃口を向ける。

ショットクラスターはショットガンのように近距離で拡散する魔力弾だ。

ショットレンジで絶大な威力を有するが、連射性を犠牲にし魔力消費が大きいのが難点である。

やられると直感で感じたのか、スバルが急いでその場を退く。それと同時にショットクラスターが発射され、スバルがいた場所に爆煙を巻き上げる。

スバルが退いたことによって、サリエルはティアナに集中することが出来る。

すぐにカートリッジをロードしてショットクラスターを足止め代わ

りにぶち込む。

さすがのティアナも拡散する魔力弾を全て打ち落とせないのか、プロテクションを用いて防御する。

しかしそれが命取り……サリエルに接近させる隙を見せてしまった。さらに追撃とスワローブレイカーを打ち出しながら、ハドウン・ブレイカーで斬りかかる。

「っ!？」

「センターガードが足止めるなんて、自殺行為だぞ!!」

辛くも転がって避けるが、執拗に追撃する。その間、後ろを向かずにヘルメスを撃つ。

その先には攻撃を止めようと、拳を振りかぶっていたスバルが……反応できずに喰らっていた。

超絶的な勘もさることながら、きっちりと当てるサリエルもすごい。おそらく想像を絶する射撃訓練を重ねてきたことが伺える。

何とか体勢を立て直したティアナだが、さすがにサリエルとのクロレンジは分が悪すぎる。

しかし、ここで退けば流れはサリエルに傾いてしまう。ダガーモードを展開してその場に踏みとどまる。

スバルも起き上がってまたも挟み撃ち……だが、先ほどとは状況は違う。

距離にして剣二本分……完璧にサリエルの距離だ。

「挟み込んだはいいが……この距離じゃな？」

「ええ……そんなことは百も承知よ」

「ここで退いたら、サリエルは一気に斬り込んでくるからね」

「英断だな……だが、真つ当な二対一で俺に勝てると思ったら……それは間違いだぜ？」

その言葉を聞いて、二人同時に突っ込む。サリエルはそれを落ち着いて、いなす。

まずはスバルから、その後にティアナだ。いなされてバランスを崩したスバルに膝を叩き込む。

苦悶の表情を浮かべて耐えているところに追撃の振り下ろし。

リボルバーナックルで辛くも防御して、左でボディを叩き込まれる。

「ちっ!?!」

「はあああっ!!」

同じく体勢を立て直したティアナがダガーを振りかざすが、サリエルが空いている右手を目の前にかざして……魔力を爆発させた。

「きゃっ!?!」

「フラッシュ・マイン。目つぶしにはちょうどいいだろう」

強烈な光をモロに喰らって、目を押さえて後退する。

あくまでティアナは今倒す相手ではない。優先すべきはスバルだ。

正面から猛スピードで拳を振りかぶってくるが、サリエルはそれを見切りカウンターでミドルキックを叩き込む。

そして、そのあまりある脚力でスバルの体を吹っ飛ばす。

『Photon step』

爆発的な魔力放出でサリエルがロケットのごとく、スバルを追撃する。

まず胴体に振り下ろしを叩き込んで、地面に激突させる。

次にヘルメスを展開して、ピアッシング・ショットをその場から可能な限り速い速度で連射する。

仕上げに落下速度が加わったハドウン・ブレイカーを叩き込んで、

ジ・エンド。

しこたまサリエルの攻撃をモロに喰らったスバルは目を回して気絶していた。

そして残ったティアナは、できる限りの弾幕を張ってサリエルを近づけさせない。

しかし、すでに勝負は決まっている。横槍の入らない一対一で、この程度の止め方でサリエルが足を止めるはずがない。

全てを受け流しながら前に進み、十分な距離入った瞬間ショットクラスター。

避けることも出来ずに大きく被弾したティアナはそのまま倒れてしまふ。ここで一旦終了の合図が聞こえて来た。

「ま、こんな物だな」

「アイタタツ……あんた、こういうときはホンットに容赦ないわね？」

「その分いい経験が出来るだろ？」

「はいはい……あゝあ、スバルを気絶させるくらい打ち込んだじゃって……」

「それはちょっとやり過ぎた……スバル、起きろ」

ペチペチとほつぺを叩いて未だ寝ているスバルを覚醒させる。

それほど強くは打ち込んで……いや、強く打ち込んだか？

しかし、目覚めたスバルは何事もなかったかのように立ち上がった
くれた

「う……やっぱりサリエルは強い」

「ありがとな。ティアナ達も久しぶりに組むっていうのにコンビネーションが全然衰えていないな」

「そりゃ、あたしとティアのコンビだもん　何年離れてたって衰えないよ」

「ああ、そんな恥ずかしいこと言わなくていいからなのはさん達の所に行くわよ!!」

「はっい」

「うっい」

そこから休憩を挟みながら、マッチアップを変えて模擬戦は続けられた。

無論サリエルは常に多対一で模擬戦をこなしていたのはお約束……

第七教導 驚愕……化け物揃いの訓練風景（後書き）

どうでしたか？

多少糖分が入ったと思いますが、今回は訓練風景を重点に置いて書いてみました。

サリエルの強さが垣間見れたら、こちら側としては嬉しいです。

次回は……どうやって行こう？とりあえず陸戦試合の前まで行きたいと思います。

それでは

第八教導 驚き……なんでこんなにがんばれるのですか!?(前書き)

作者「よ、ようやく書き上がった……」

サリエル「二週間か……大分ペースが落ちてきたな。さて、どうする?」

作者「今回に関しては大分行き詰まった……いや、ちゃんとネタがあるのよ? ただいざ向かうと……」

サリエル「集中力が続かなくてついつい他のことに手を出しちゃうと?」

作者「……(コクリ)」

サリエル「はあ……今に始まったことでもないしいや。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待つてまゝす」

サリエル「とりあえずみんなの要望で作者はフルボッコしておくから」

作者「orz」

第八教導 驚き……なんでこんなにがんばれるのですか!?

サリエル達が激しい訓練をしている時、子供組は午後の一時を過ぎ
していた。

ヴィヴィオとアインハルトは森の中を散歩がてら歩いている。

通り抜ける風が気持ちいい……。そよそよと昼間の熱をじっくりと取
り払ってくれる。

「……ヴィヴィオさん」

「はい?」

「一つ、お聞きしたいことがあるのですがいいですか?」

「私で答えられることなら何でも」

「ありがとうございます……。以前サリエルさんから聞いたのですが、
ヴィヴィオさんはなぜストライクアーツを始めたのですか?」

「うん……」

「サリエルさん曰く、始めた理由は重いと言われていました。なぜ
あなたのような優しい人が格闘技を始めよう?」

「あゝ、お兄ちゃんは大げさに言うからね……」

ヴィヴィオはちょっと困った顔を浮かべてアインハルトの質問に答
える。

「……遠い昔に私が事件に巻き込まれて……ママやお兄ちゃんが私
のことを助けてくれました。傷つくことを気にしないで……。その姿
を見て、私は強くなるうつつで思ったのです」

「それだけで……格闘技を?」

「ああ、気に障ったならごめんなさい。強くなるうつつで思ったこと
とで行動にしないと意味が無いじゃないですか? だから、私はス
トライクアーツを始めたんです。私が立てた誓いと思いを成すため

に……」

誓いと思いを成すため……か
確かにサリエルさんが言ったとおり、重い。

まだ十歳の子供がここまで強い決意をするのは並大抵のことではない。

それ相応の理由があったからだ。私はあの時本当に申し訳ないことをしてしまった。

「……そうだったんですか」

「ママもそうだけど、お兄ちゃんはママよりもっと無茶するんです。いつか私が大きくなって、ママ達を守ってあげられたらなって、考えてます」

「二人ともそんなに無茶なさるのですか？ 冷静そうに見えますが

……」

「とんでもない！！ ママなんて私達のことになると無茶を重ねるし、お兄ちゃんに至っては私達のことになると自分の命を投げ出すぐらい無茶するんですよ！！ やられるこっちからしたら心配で頭が痛くなっちゃいます……」

意外だ。ヴィヴィオさんのお母様はともかく、あのサリエルさんまで……

普段の様子を見ているとどこか飄々とした感じで、いかにも無茶しないタイプに見えるけど……

オーラもそれほど荒々しい物でもない。本当にあの人がそこまで無茶するとは考えづらい。

…… 今度機会があったら聞いて見よう。

「じゃあ、私からも一つ聞いてもいいですか？」

「あっ、はい」

「アインハルトさんが言っていた……オリヴィエって一体どんな人だったんですか？」

「太陽のように明るくて花のように可憐で、何より魔導と武術の強い方でした」

アインハルトは遠い目をして、オリヴィエとクラウスのことを話し始めた。

そんな彼女も乱世という理から逃れることは出来なかった。

ゆりかごの運命通り、その命を賭してゆりかご最後の聖王になった。その運命を霸王クラウスは止めることは出来なかった。

皮肉なことに、オリヴィエを失ってからクラウスは強くなった。

全てをなげうって武の道に打ち込み、一騎当千の力を手に入れ……それでも望んだ物は手に入らないまま彼も短い生涯を閉じた。

「望んだもの……？」

「本当の強さです。守るべき物を守れない悲しみをもう繰り返さない強さ。彼が作り上げ磨き上げた霸王流は、弱くないなんかと証明すること。それが私が受け継いだ悲願なのです……！」

「……」

ヴィヴィオは深刻な顔でアインハルトの言葉を受け止める。

ここでお兄ちゃんなら気の利いたことが言えるのだから……私じゃ何も思いつかない。

言葉を思いつかず、どうしようかと悩んでいると……

「……すみません。自分の話ばかりで」

「ああ、いえそんな……！」

「昔話ですのあまり気にしないでください」

「はい……みんなの所に戻りましょうか？」

「はい」

ヴィヴィオに促されて、ロッジに戻ろうと足を向ける。

アインハルトはその道中、自らの話に後悔していた。

私のお話で……ヴィヴィオさんを悲しい顔にさせてしまった。

これまでのやりとりで思いやりの深い子だということは分かっていたのに……

何かこの子が喜ぶような話は……

考えるが……何も思いつかない。自分の発想の乏しさにアインハルトは心の中で絶望する。

これは困りました……一体どうすれば？

とその時に助け船が意外なところから飛んできた。

「お、ヴィヴィオ、アインハルト……！」

「あつ、ノーヴェ」

「ブラブラしてんなら向こうの訓練見学しにいかねーか？ そろそろヒートアップしてきた頃だろうしよ？」

「アインハルトさん、見に行きませんか？」

「……はい」

よかった。ようやく笑ってくれた。

今回はノーヴェさんのアシストに感謝です。

ですが、模擬戦となるとサリエルさんやスバルさんは当たり前として……

「ヴィヴィオさんのお母様方も模擬戦に？」

「はい！！ ガンガンやってますよー！！」

「お二人とも家庭的でほのぼのとしたお母様で素敵だと思っただんですが……模擬戦にも参加されてるなんて少し驚きました」

「ブツ！？」

アインハルトの言葉にノーヴェが噴き出す。それもそうだろ。普段の二人を見ていれば、誰だってそう言いたくなる。

しかし、少しでもその名前を知っているなら、調べればすぐにたどり着く。

その二人の……笑顔に隠された本当の強さを。

「ええ、参加というかですね……」

開けた場所に出て、その先には……

クラスター型の魔力弾を展開しているのはとその攻撃を迎え撃とうとしているスバルとティアナの姿があった。

さすがのアインハルトもこの光景にはビックリしたのか目が点になっている。

「うちのママ、航空武装隊の戦技教導官なんです」

拡散攻撃を展開して、スバル達を撃墜しようとするがティアナが魔力弾を相殺しスバルがその隙間を縫ってなのはを肉薄する。

しかし、歴戦の強者であるのはも負けてはいられない。貫通力のあるスバルの攻撃をプロテクションで難なく受け止める

先ほどやってきたコロナ、リオも目を輝かせてそれに見入っている。一緒に見ていたアインハルトの目の端に新たな戦闘が飛び込んでくる。

エリオとキャラとフェイト……そしてサリエルだ。

キャラがフリードに乗ってエリオとフェイトをサポートし、二人が挟み込む形でサリエルと戦っている。

「あれはアルザスの火竜!？」

「キャラさん、竜召喚士なんです」

「エリオさんは竜騎士」

「で、フェイトママは空戦魔導師で執務官。サリエルお兄ちゃんもなのはママと一緒に戦技教導官をやってます」

「はあ……」

目を点にして目の前の事実を飲み込みながら、サリエルが置かれて
いる状況に気づく。

どう見てもこれは……多対一で戦っていますよね？

無茶にもほどがある。普通ならば同じ人数で模擬戦を行うのが常識
だ。

「ヴィヴィオさん、サリエルさんはあれで大丈夫なのですか？」

「はい。お兄ちゃんはいつもああやって模擬戦やるんです！！」

「ですが、三体一だなんて……」

「まあ、見ていてください。お兄ちゃんああやっていつも不利な
状況をひっくり返しますから」

ヴィヴィオの言葉を鵜呑みにするほどアインハルトも格闘技をやっ
ていない。

多対一がどれほど不利かは素人でも分かる。慣れるためだとしても
あのような方法では……

しかし、目の前に広がった光景はアインハルトが考えている三体一
とは全然違った。

狭み打ちの形で戦っている三人に対して、サリエルさんは一歩も引
かない。それどころか押している感じもある。

これは一体？ 押している理由を見極めるためにアインハルトはじ
つくり観察していく。

「今日こそ落としてみせます！！」

「やってみな。俺はそこまで腕は落ちちゃいねえよ」

エリオがキャロのブーストを受けてサリエルと斬り結んでいるが、なかなか崩せそうにない。

サリエルは余裕を見せながらも後ろにいるであろうフェイトを警戒する。

しかし、気配を探っても見当たらない……さっきまではこちらの際を窺っていたのに……

不審に思っていると不意にエリオが大きく後退した。追撃しようとするが足に何かが巻きついてきた。

「アルケミック・チェーン!? しまった!」

「フェイトさん、エリオ君、今です!」

「プラズマスマッシュァー、シュート!」

「ストラーダ、フォルムツヴァイ!! ブースト全開!」

「J a w o h l F o r m z w e i . S p e e r a n g r i f f
! ! !」

空で砲撃をチャージしていたフェイトが高速の雷砲をサリエルに向かって撃ち出す。

それに合わせてエリオも自らを弾丸として目標を貫こうとする。

轟音と共にサリエルは雷砲とエリオに倒された……かのように見え
た。

爆煙が晴れてその中からは……

「……えっ?」

「そんな」

「ふう……危ねえ危ねえ」

「A l l e W ? n d e z u O i s h i s c h ? t z e n
F i e l d」

青色のフィールド型の防御に包まれたサリエルの姿があった。
フィールドの前で自らの槍を止められたエリオ、幾多の相手を倒してきた砲撃を止められたフェイト。
二人の顔が驚きに染まっている。

「やっぱり消費が激しいや。それにこれ以上多数の攻撃を受けると破られるな」

『改善の余地があるだけ十分です』

「だな。さて、そろそろ反撃に出ようか？」

『もちろん。やられっぱなしは性に合いませんからね』

双剣から片方をしまい、攻撃重視の片手剣に切り替える。
まずはアルケミック・チェーンを解かないとな……

「フォトン・ステップ。出力最大だ」

『よろしいので？ 膝に大きな負担がかかりますが？』

「構わねえ。一度くらい使ったところで壊れるかよ」

『分かりました。ヘルメス』

『Photon step Maximum』

音速の壁を突き破りながら、強引にアルケミック・チェーンの拘束を解いた。

その際膝が無理矢理伸びるような感触があつたが大丈夫。筋とかに異変が起きた感じはない。

勢いをそのままに後衛のキャラに攻撃を仕掛ける。

『Swallow breaker』

「キャラアツ!？」

一筋の蒼い燕がキャラを煽り、鞍から落ちそうになる。

自衛のためにフリードが火球をサリエルに吐き出すが、すでにサリエルの姿が消えていた。
どこにいるかというところ……

「悪いな、キヤロ。ちょっと怖いかも知れねえけど……」
「えっ……ああっ!？」

バランスを崩していたところに蹴りを入れる。

キヤロは完全にバランスを崩し、鞍から落下してしまう。しばしの自由落下……

フリードが懸命にキヤロを拾おうとするが、サリエルのハドウン・ブレイカーが翼に思いつき叩き込まれて、自らも錐揉み回転するほど落下していった。

地面にぶつかろうとした時、一筋の雷光が走る。

「フェイトさん!？」

「キヤロ、もう大丈夫だよ。全く……サリエルもなんて危ないっ」

「フェイトさん、後ろ!!」

「えっ……はっ!？」

この時ようやく気づいた……これ自体が畏だつてことが。

不意に影が差して振り向いてみるとサリエルがハドウン・ブレイカーを振り上げている姿があつた。

サリエルの腕ならキヤロを単独で落とすことは可能だ。

エリオが空を飛べない以上、私がフォローに回ることは出来るけど……それをさせないためと手の塞がった私を楽に倒すためにあえてキヤロを餌にしたのだ。

なんて効率的で……狡猾な戦法。

「悪いな、エリオは1 on 1じゃねえときついんだわ。だから……」

な!!」

タイミング的にエリオは間に合いそうにない。かと言ってキャロの射撃魔法ではサリエルを止めることが出来ない。

フェイトはサリエルの攻撃を受ける他無かった。重い衝撃の後、体が地面に叩きつけられることを感じて意識が飛んだ。キャロも叩きつけられた衝撃で目を回している。

ハドウン・ブレイカーを解除して、排気ダクトからでる圧縮魔力の残滓を振り払いながらサリエルはエリオに向き直る。

誰からの支援のない状況に覚悟を決めたのか、挑むように構え直すエリオ。

二人が踏み出そうとしたその瞬間……終了のブザーが訓練場に鳴り響いた。

「はい、一旦終了了」

「ありがとうございます!!」

「ちっ、せっかくいいところだったのよ」

「まあまあ、それはまた今度の機会に……それよりフェイトさん達、大丈夫なのですか?」

「一応手加減はしてある。まあ、起こしに行つてやるか?」

エリオはキャロの介護に向かい、サリエルはフェイトの方に向かった。

さすがにモロに喰らったからな……大丈夫かな?

未だ目を回しているフェイトから起きる気配は伝わってこない。

さて……どうした物か? そんなこと決まっている。

イタズラするしかないだろ!!

「……………」

サリエルは周りを見渡して、つんつんとフェイトの胸をつつく。久しぶりの感触にウヒョーイと心の中で小躍りする。それはさておき……どうやって起こそうか？
どのようにイタズラするか考え始めるがそんな時間はなかったようだ。

「兄さん、フェイトさんはどうですか？」

「あ、ああ……まだ目を回している。今から起こすよ」

ちっ、さすがにイタズラする時間はくれないか。

フェイトの頬を優しく叩いて意識を無理矢理覚醒させる。

「うっ……あれ、私……」

「大丈夫か？ 俺の攻撃、そんなに強かったか？」

「サリエル……大丈夫、手加減してくれたんでしょ？」

「もちろん。じっとしている」

頭を打っているかも知れないフェイトを立たせるわけにはいかない。気絶させたのも俺のせいだしこれぐらいは……

そう思っただけサリエルはヒョイツとフェイトをお姫様抱っこで持ち上げた。

さすがのフェイトもいきなりのことに驚くが、フェイトとて一人の女。男性にお姫様抱っこされることぐらい一度は夢を見ている。

数瞬してやってきた甘美な揺れ心地にサリエルの首に腕を巻き付けて自らを委ねる。

なのは達の所にそのまま歩いていき、そこで丁寧に下ろした。

「おっお……お熱いことで……」

「気にするな。俺達にとっぴつものことだ」

「にはは……スバルとティアナはこの後ウォールアクトをやるん

だっけ？」

「はいっ」

「フェイトさんとエリオも一緒です」

「じゃあ、キヤロとサリエル君は私とやろうか？」

「「お願いします！！」」

ここから各人別々のメニューに入る。

スバル、ティアナ、エリオ、フェイトの四人はフィジカルトレーニング中心のメニューに。

なのは、キヤロ、サリエルは射撃訓練中心のメニューに。

先ほどあれだけ激しかった模擬戦をやっておきながら、まだ動くという事に……子供達は驚きのため息をつく。

「……みなさん、ずっと動きっぱなしですね」

「そうだな」

「魔法訓練もすごいけど、あんなフィジカルトレーニングまで……」
局の魔導師の方達は、皆さんここまで鍛えていらっしやるんでしょ
うか？」

「ですね」

「ま……まあな。スバルは救助隊だし、ティアナは凶悪犯罪担当の
執務官。他のみんなも頻度の差はあってもみんな命の現場に働いて
るわけだしな……力が足りなきゃ救えねえし、自分の命だって守ら
なきゃならねえ……だから、みんなあんなだけ頑張っているんだ」

ノーヴェの言葉にアインハルトは頷く。その間も訓練は続く。

射撃訓練をしているサリエルは、ターゲットをいかに効率よく殲滅
できるか直感で判断しながら明日のことを考えていた。

陸戦試合……開発中の物を試すにはうってつけなんだが……

アレはまだ10%程度しかできあがっていない。現状使うことは可
能だがやれて一回限りだ。

姉さんかウーノがいれば、調整しながら何回か試せることが出来る
んだけど……

とにかく一回でもデータが取ればいいか。

不意にターゲットを外してしまった。他事を考えていたせいだろう。

「ほらっ!! もっと集中しないとダメだよ!!」

「すみません!!」

「ターゲットの選定ももっとはつきりしないと。サリエル君の場合、
いかに相手の懐に潜り込むだから先に先に潰していかないと足止め
られるよ!!」

「分かりました!!」

なのはのアドバイスを聞いたサリエルは直感だけではなく、経験を
交えてターゲットを選定していく。

ここで一つ、今のサリエルの戦闘スタイルを説明しておこう。

四年前まではフォトン・ステップを存分に駆使して素早く自分の距
離に入り戦うスタイルだったが、膝の爆弾を抱えている以上それが
出来なくなってしまった。

そこで射撃魔法を覚えたサリエルはさらにブリッツ・アクションも
習得して、剣と銃で相手の魔力弾を捌きながら確実に前に出るスタ
イルに変えた。

このスタイルなら、攻撃しながら前に詰められるしフォトン・ステ
ップを使わずにスピーディな攻撃が出来る。

その反面、フォトン・ステップを頼った攻撃をすることはほとんど
無くなり、エンドブレイカーやフォトンブレイカーといった斬撃技
も使用しなくなった。

しかし、それを嘆いてはいない。むしろよかったと思っている。

どのみち前のスタイルだったら壊れるのは目に見えていた。この膝
の怪我こそ、俺をさらなる高みへ連れて行ってくれたと言ってもい
い。

それにどっちのスタイルもロングレンジ対策はフォトン・ステップのみだからな……結局の所変わりはない。

だが、クロスレンジはもとよりショート、ミドルレンジにおける攻撃の幅が広がった。

嬉しい限りだが、全く……

にやりと笑いながら、訓練を続けていく。

そして日がとっぷり暮れる頃によろやく午後の訓練が終了した。

「じゃあ、午後のトレーニングはここまで……！」

「……お疲れ様でした……！」

「この後は自由だから、各自何してもいいよ」

「じゃあ俺はもうちょっと頑張ろうかな？」

「あたし達は戻るね」

「私とフェイトちゃんももう少し残っていくね」

あれだけ動いたにもかかわらず、サリエルはさらに100？のウェイトとタイヤをつけてランニングに繰り出す。

なのはとフェイトも再度バリアジャケットを展開して、空を舞う。

それを見送りながら、ひたすらランニングをする。

しかし、1？もしないうちに息が上がってくる。

体自身がそろそろオーバークと警告しているのだ。

なら……寸前で切り上げるか。明日に響いても困ることだし……

結局5？走ったところで切り上げ、同じく切り上げていたなのは達の所に向かう。

「お疲れ様です」

「お疲れ、今日はこれで終わり？」

「はい。オーバーク寸前なもので……」

「すごいよね……そこまで追い込めるなんて……」

「いざというときにこれが支えになるからな。さて……」

地面に座ってクールダウンのストレッチに入る。
どうせ夜には軽く素振りするんだ。足は限界だけど上半身はまだいける。

180度開脚して地面に胸をぺったりとつけながら、なのは達が見ている物を聞く。

「何見てるんすか？」

「明日の組み合わせ。サリエル君も見る？」

「見ます。さて……どんな風に……」

受け取った紙を一通り見て、相手を見る。

……あれっ、二試合目から？

去年は一試合目からだったのに……何で？

「ああ、これ組んだのノーヴェなんだ」

「多分インハルトやりオ達が陸戦試合初めてだから、まずは慣れさせるためじゃないかな？」

「なるほどねえ……だからエリオも外れているのか」

「サリエルとエリオは二試合目から参戦」

「ふう〜ん……いい感じに振り分けられているな」

紙を返して、ストレッチを続ける。

しばらくは二人も組み合わせ表を見てキャツキャとはしゃぐ。

「さて、私はそろそろ戻ろうかな？ フェイトちゃんはどうする？」

「あっ……ええっと、サリエルと一緒に……戻ろうかな？」

「わかったの、それじゃ先に戻ってるね〜」

なのははフェイトの意図が分かったのか含みのある笑いを向けて、

ロツジに戻っていった。
残された二人は、しばらく無言……フェイトはサリエルのストレッチが終わるのを待った。
そしてようやくストレッチを終えたサリエルが立ち上がって、伸びをする。

「……ちょっと歩くか？」

「うん……」

二人は寄り添ってゆつくりと道を歩み始める。
どちらとも無く手を繋ぎ、指を絡める。

この距離、この時間を共有できることを幸せに思う。

「……綺麗だな、星」

「そうだね。手で掴めそうなほど……近いよ」

雲一つ無い空には満点の星が輝いている。

星を見て、少しばかり昔を思い返してみる。

例えば……六課が結成されなかったら二人は出会ったことはなかったんだよね……

ここまで来るのにお互い大きな苦勞をしてきた。

J S 事件を筆頭に色々な困難を乗り越えてきた。

だからこそ、今この時間があるのだろう。

ゆつくりと噛みしめ、感じる。

教導官であり、武人であり、求道者であるサリエルを唯一一人の男として戻ってこれられる時間。

二人はそのままロツジには戻らず、昼間行ったハンモックがかかっている木の所に歩く。

「……」

「……………」

お互い見つめ合って、惹かれ合うように唇を重ねる。
一週間ぶりのフェイトの感触……………何度も味わってきたサリエルにまるで飽きは来ない。

もはや麻薬のような物だ。吸っても吸っても足りないと思う……………これも似たような物だ。

次第にそれは激しい物となり、フェイトを木へ強引にもたれさせる。しばらく堪能した後、ゆつくりと離れる。二人の間には名残惜しいように銀の糸が繋がっている。

「ぷはっ……………」

「んっ……………はあ……………はあ……………サリエル……………」

頬を上気させて、フェイトがその先を求める。
しかしサリエルは……………

「……………続きはまた今度な」

「ええっ!？」

「だって、俺は別にいいけどフェイト……………声、押さえられるか？」

「あっ……………」

「外でしていいのなら俺は全然モーマンタイなんだがな？」

にやりと笑って提案するサリエルなのだが、その内心自身の中に潜んでいる情欲を消すのに精一杯だった。

はあ……………ムードに任せてキスするんじゃないかなあ……………

消している傍ら、悪魔のもう一人の俺がこう囁く。

ここでやっちなまえ。その身が溶けるくらい抱いてやれ。

そんな悪魔の言葉を振り払いながら、フェイトから離れる。

「うん……」

「むくれるな。ガキ共に気づかれてみる。速攻で俺達は変態扱いだぞ?」

「それは……嫌だな」

「帰ったら……後悔するぐらい抱いてやるからよ」

「……うん?」

頭をくしゃくしゃと撫でてやって、二人はロツジに戻る

露天風呂の方ではなにやら子供達が大はしゃぎだが……元気のいいことだ。

さて、メシの手伝いして素振りでもするか。

こうして旅行1日目の夜が更けていった。

深夜、みんなぐっすり眠っている中アインハルトはむくりと起き上がる。

昼間あれだけ動いたのに全然寝れない。

何度か寝ようと目を瞑って羊を数えたりしたのだが……それでもダメだった。

……外の風に当たりにでも行こう。

そお……と起こさないように寝室を抜け出して、外に出る。

さわやかな風がアインハルトの体を撫でる。

その風の中に微かな熱気を感じる。

……一体なぜ? 温泉の熱気だったらもっと強く感じるはず。熱気のを歩いて探してみると……

「480……481……482……」

上半身裸でなにやら棍棒のような物で素振りをしているサリエルさ

んの姿があつた。

その体からは夥しい湯気が出ていて、それが風に乗って私の所に来たのだ。

こんな深夜まで頑張っているんだ……本当にすごい。

私はしばしその姿を見入ってしまった。

「499……500!! はあ、今日の日課終了!!」

「……お疲れ様です」

「おつ、アインハルト……寝れないのか？」

「はい。だから少々風に当たろうかと……」

「ふうん……」

汗だくな体を拭きながら、適当な場所に腰を下ろす。

月明かりに照らされたサリエルさんの体は……傷だらけだった。

至る所にある切創、腕や肩に刻まれた弾痕、腹部に大きく残っている貫通痕。

一体どれほどの戦闘を重ねればここまで傷が残るのだろうか？

この人が歩んできた戦いの道がどれほど苛烈だったかが伺える。

「……ん？ 俺の体が気になるのか？」

「……どうしてそこまで傷を……」

「ああ、これはな……たった一人のライバルにつけられたものなんだ」

「えっ？」

「例えばこの方の弾痕、そいつの銃によって撃ち抜かれた物だし、体中についている切創もそいつの刃が付いた鞭によって斬り刻まれた後だ。極めつけはこの腹……そいつが本気を出した時にしか使わない槍によって思いつきり貫かれた」

「一人の相手に……ですか？」

「ああ。足にも傷跡は多く残っている。多くの戦闘でついた物じゃ

ない。本当にたった二回……そいつと戦っただけでこれだけの傷がついたんだ」

傷を撫でながら感慨深そうに語るサリエルさん。

その顔の裏側には当時の激闘を思い返しているのだろう。

それを見て私は今まで聞きたいと思っていた気持ちが強くなった。

「今度会わせてやるよ。そいつはノーヴェ達の姉でもあるからさ」

「……一つだけ、聞いてもいいですか？」

「俺に答えられることなら何でも」

「なぜ、武術を始めたのですか？」

接してきて分かった……サリエルさんは優しい。

仲間のことを第一に考えられていて、場にいるだけで雰囲気がよくなる。

目に見えないさりげない気遣いや、自ら冗談を言ったり出来る。

その中に優しさを感じた……そんな人がなぜ武術を始められたのだろうか？

「……武術を始めたのはそうだな……9歳の頃になる。あの時は兄さんがまだ生きていて、暇さえあれば俺につきっきりでこれを教えてくれた」

そう言って取り出したのは片手剣のグラディウス。月光を反射して今の思いを表しているかのようだ。

「……お兄様は今？」

「任務中に殉職してな……今はもういない」

「……すみません、辛いことを聞いてしまって」

「うんにゃ、もう終わったことだし全然構わないよ。それでその時

俺は10歳、子供ながらに兄さんの死を漠然と理解したよ。それで決めたんだ……兄さんみたいになるって。それが俺が武術を始めたきっかけ」

「そうですか……ん、きっかけ？」

「そう、きっかけ……俺の話には続きがあつてな……まあ、だらしねえ四苦八苦の人生を話すだけなんだがな」

「是非お聞かせください！！」

「わかった……まあその後も兄さんを目指して頑張っていたんだけど……ある時気づかされた。俺はただ兄さんになりたかっただけなんだって」

「それはどういう……」

「借り物の武術ってわけさ。自分の剣を持たず、ただ借り物の技術で強くなつていく。滑稽で醜いものさ」

自嘲気味に笑い、昔の行動を皮肉る。

しかし、アインハルトはその気持ち痛いほど分かる。

サリエルさんとの二度目の再会で言われたことを考えてみたら……自分もまるつきりそれにはまっていたことだからだ。

「それが気づいても修正する……つまりは自分の剣を見つけ、磨き上げるのに膨大な時間がかかる。そんな中途半端な状態でドミニクス……俺のライバルなんだけど、勝てる訳もねえ。結果は惨敗……それからだったな」

「なにかあつたのですか？」

「病床で考えて考え抜いて……自分はなんのために剣を振るうのかを問うた。それで見つかったよ」

「一体何を見つけたのですか？」

「俺が剣を握り戦う理由。考えてみれば簡単だった……ただ、守りたい物を守るために俺は剣を握り戦うんだってこと」

そんなありふれた理由で武術を？

いや、ありふれた理由だからこそがんばれるんだ。

守りたい物……それはサリエルさんのお仲間……つまりヴィヴィオさん達だ。

だから、どんなに辛く苦しい訓練にも耐えられる。力がなければ守れないんだから……

「そこで変わった俺はドミニランスに勝てた……と言ってもほとんど運だけだな」

「で、今のあなたがあると……」

「そうだ。悪いな、こんなつまんねえ話聞かせちまってよ」

「い、いいえ。十分ためになりました。辛いことを話してくださいさって本当にありがとうございます」

「ん……じゃあ、俺からも一言言っておこうかな？」

立ち上がって、正眼に剣を構えるサリエル。その矛先にはアインハルトがいる。

ゴクリとつばを飲み込む音がやけに大きく響いた。

「アインハルト、お前はあの拳をなんのために振るう？」

「……」

「過去のため？ 自分のため？ 悲願のため？ 全部違うな……お前の拳には、全く意味を伴わない」

「それはどういう意味で！？」

「簡単に言えば、拳が軽いんだよ。拳つて言うのはな、自分の想いとか支えてくれている人とか一緒にがんばれる仲間とかの想いが詰まっついてこそ重くなるんだ。それが無いお前の拳なんて軽い軽い……」

「ではどうすればいいのですか！？」

構えを解いてニカツと私に笑いかけてくる。

「簡単じゃねえか、自分の拳に意味を持たせる」

「そんな簡単につ」

「お前の周りに……誰がいる？」

「あつ……」

そうだ、今の私にはヴィヴィオさんがいる。ノーヴェさんがいる。リオさん、コロナさん……他にもたくさんの方が私を支えてくれている。

「昔前の私だったら……誰もいない。」

「見つけさせてくれる仲間がいるじゃねえか？」

「……はい」

「ゆっくりでいい。いつか本当に自分の拳の意味に気づけたのなら……お前はきつと強くなる。その時、見せてくれよ……俺はいつでも待っているぜ、リベンジ」

「はいっ!!」

やっぱりこの人は分かっている。私がもう一度サリエルさんと戦いたいと言う事を。そして勝ちたいと。

絶対にこの人を認めさせるんだ。私の拳は軽くないって……

「そろそろ戻ろうか？ 夜風は当たりすぎると毒だ」

「はい」

二人はようやくロッジに戻っていった。

アインハルトは強い決心をして、ようやく眠りについた。

第八教導 驚き……なんでこんなにがんばれるのですか!?(後書き)

ただラブシーン入れたかっただけだ。

後悔はない!!

どうも、どうでしたか?

とりあえず訓練内容とサリエルの語りを書いてみたんですけど……

キャラが勝手に動いてしまいました。

まあそれは置いといて……次回は意外なあの人がでてきますよ

それでは

第九教導 一戦目……いきなりド派手な陸戦試合！！（前書き）

作者「え〜と、今回も遅れて本当にすみません。なんか……書いても書いても終わりが見えなくて……（泣）」

サリエル「予定としては三巻突入したもんな。後は二試合目とその後を書いて合宿編は終わりか？」

作者「おう。一試合目より二試合目の方がより文章のボリュームが増えそうなんだが……」

サリエル「あ〜、キャラ14人動かすもんな。大丈夫なの、お前？」

作者「集団戦闘の描写がここまで難しいとは思ってなかった。原作キャラの所を削ったりして何とか頑張ってみたけれど……精進あるのみ!!」

サリエル「それが一番の課題だ。それではどうぞ閲覧してください」

作者「感想、意見、質問はいつでも待ってますので〜」

第九教導 一戦目……いきなりド派手な陸戦試合！！

翌日、日が昇ってすぐに起きたサリエルは体の重さにベットから起き上げるのに苦労した。

疲労がたまるのはわかっていて。それとどう付き合い、どう戦っていくのが今回の目的だ。

まだ寝ているみんなを起こさないように、リビングに向かう。するとすでに起きているメガーヌが朝食の下ごしらえをしていた。

「おはようございます、メガーヌさん」

「あら、早いよね？ まだ寝ていてもいいのに……」

「今日は何と言っても試合ですから。早めにコンディションを掴んでおきたいんです」

「そう……」

「じゃあ、ちょっと走ってきますね」

まだ冷たい朝の空気を胸一杯に吸って、ゆっくりと走りだす。

一歩一歩コンディションを確かめるように足を出す。

足がやつぱり重いな……それに全身がピリピリと痛い。

完璧な筋肉痛……さて、この状態でどうやって戦う？

省エネで効率いい体捌きでやっていってもいいが、それではどうしても終盤息切れしてくる。

だったら、できる限り全開で行くのが普通だろう。もとより俺はそれ以外の戦い方を知らない。

体の強張りがとれた所でストレッチをするためにロッジに戻ると……

「あれ？」

「……来ちゃいました」

「ウーノ！？ どうしてここに？」

髪をポニーテールに縛り、VネックのロングTシャツの上にフォーマルな上着とタイトなスカートでロτζジの前に立っていた。

驚きだ……まさか来るなんて……そんなこと一言も言っただけ……いや、三日前のあの笑みがそれを語っていたんだ。まさかこんな方法でデバイスの整備に来るとは……

「仕事はどうしたんだ？」

「お姉様にお休みをいただきました。たまには休んできなさいと……」

「姉さんだって、休んでないだろうに……」

「それに……あんなに激しい試合をするのに整備をろくにしていないうデバイスでは耐えられません。大至急整備しますので貸してください」

言うが否や懐からグラディウスを、首にかけていたヘルメスをひったくって机の上に乗せて、整備に取り掛かる。

本来設備が整った場所でない、繊細に作られている姉さんのデバイスは整備できない。しかし、そこは稀代のマイスター、マリーナ・イシュバロンの専属助手。そんな場所がなくてもテキパキと解体して部品別に分けていく。

今やウーノがこの二つのデバイスの専属整備士だ。最初のころはさすがに姉さんとの出来のの違いに違和感を感じたが、今ではそんなことは全くない。

むしろ俺に合わせるかのように、グリップや刃の重心の位置などを微調整してくれている。

本当に尽くしてくれるのだ。ありがたい……

「ストレッチでもしててください。その間に仕上げますから」

「悪いな、いつも」

ぐっと足を延ばしつつ、ストレッチをして体の張りをできる限り取っていく。

しばらくやっている、ノーヴェエが起きてきた。

「オツス……ってウーノ姉!? なんでここにいるの!？」

「おはよう、ノーヴェエ。ちょっとそのめんどくさがりのために私がこうやって出張整備に来てあげているのよ」

「めんどくさがりじゃない。ただ後でいいと思って……」

「そういうことにしておきましょう。ノーヴェエ、後でジェットエツジも見てあげますからね」

「ありがとう、ウーノ姉。それじゃ、あたしはちょっと歩いてくるわ」

「いつてら〜」

その後も続々と起きてきて、ウーノに挨拶していく。面識の無かったアインハルト、リオ、ユウとは軽い自己紹介をかわしていく。

ストレッチを始めて1時間……ようやく体の張りがほぐれてきたところで一通りのシャドーに移る。

流れるように……空気を裂くように拳や蹴りが宙を舞う。サリエル自身の打ち方もあるのだろうが、本当に綺麗なシャドーだ。

散歩から帰ってきたみんなもそのシャドーを見ると、足が止まりずっと見てしまう。

最後に小気味のいい斬り裂き音を響かせて、サリエルはシャドーを止めた。

「ふう……ん、みんなどうしたんだ?」

「……すごいです!! 私、あんなに綺麗なシャドー見たの初めてです!」

「ありがとな、リオちゃん。さ、ちょうどメシも出来たところだし

行こうぜ」

集まっていたみんなもワイワイとロッジの中に入っていく。しかし、ウーノは手が離せないのかまだデバイスを机に広げたまま作業している。

その姿を見たサリエルは自分の朝食とウーノの朝食を持って、元の所に戻っていく。

「ほら、先に食っちゃえ」

「あと少し……この部分が終わってからで……」

「姉さんもそうだ。仕事を最優先で他は後回し。いい加減その癪治せ、ほら」

「ですが……」

「冷めちまったら、メガー又さんに失礼だ。さっさと食え」

「……はい」

強引に押し付けられた皿とカップスープをしぶしぶ受け取る。

一口食べてみると、たちまち笑顔がこぼれた。それを見届けたサリエルはようやく自分の分を食べ始める。

中でワイワイ他のみんなが食べている中、二人が外の空気と一体化したかのように静かに食べていた。

「サリエル、この前変更したところはどうですか？」

「ああ、大分弾幕が展開できるようになった。それで今日の試合で例のアレを使おうと思っているんだが……」

「アレをですか？ 確かに现阶段でも使用は可能ですが……」

「とりあえず一発撃って、その後調整すればいい。とにかくデータが欲しい」

「分かりました。ロックを解除しておきますね」

「ありがとな……で、仕事の話はここまでで、家族の話はしょうか

「？」

「えっ？」

「姉さんは元気にしてる？」

「あつ……えつと……はい、今も新技術開発で研究室にこもっています」

「姉さんらしいや」

いきなりの話題転換に戸惑ったものの、そこから家族の話に移り変わった。

なかなか実家に帰らないサリエルにとって、家族の話はなかなか聞けないものなので自然と顔が優しいものに変わる。

ウーノも久しぶりのサリエルとの会話にいつになく饒舌になる。

朝食を食べ終えてウーノはコーヒーを、サリエルはお茶を飲んでいるところで話が途切れた。

「……ウーノ、少し痩せたか？」

「そうですね？」

「前見た時より細くなっている感じがあるからな。ちゃんと休んでいるか？」

「大丈夫です。食事もちゃんと取っていますし、睡眠時間も取れています。ですから心配しなくても大丈夫ですよ」

「それならいいんだけど……」

大丈夫と行っておきながら、最近の自分の生活を顧みる。

ここ最近は、ずっとお姉様の助手をしてろくな休みがなかった。食事はほぼ固形栄養食品とインスタントスープ、出来合いのサラダだけ。睡眠時間は平均四時間とかなり不規則な生活をしている。

今日の休みでしっかりリフレッシュしないと……

しかし、この人はよく見ている。いつもは見えないようでしたっかりと見ている所がサリエルの美点だ。

……もし、私とサリエルが普通に出会っていたならば、私は自分の想いを告げていたでしょう。しかし……

「サリエル、そろそろ始めるから訓練場の方に行こ？」

「ああ、分かった。じゃあ、ウーノ、後は頼めるか」

「任せてください」

フエイトに手を引かれて訓練場に向かうサリエル。

途中どちらからともなく腕を絡めて寄り添いながら歩いていく二人に、ウーノは自分の姿を重ねる……がすぐにその想像を頭から追い出す。

今はこれでいいんだ。私が想いを告げたところで二人が混乱するだけだ。

だから、今の関係のままでもいい……どうせ叶わないのだから……

「……人生ままなりませんね、マイスター」

「そうね、グラディアス。あなたもそうでしょう？」

「はい。私もマスターへの心配事が無くなれば、全てのことが潤滑に進むと思っています」

「……ありがと、励ましてくれて」

すでに組立が終わって、パラメーターのチェックをしているグラディアスが沈んでいるウーノを見て励ました。

デバイスに励まされるなんてちょっと間抜けだけど……元気が出た。人生ままならない。だからドクターの計画も失敗に終わったのだ。それに……どんな形でもいいから彼を支えられたらいい。

さあ、私の仕事をしないと……笑われちゃう。

再び部品状態にばらされたヘルメスを丁寧に組み立てていった。

朝食を終えた全員は訓練場に集合していた。
すでにチーム分けは昨日のうちに伝えてあるのでチーム別に別れて
の集合だ。

「はい、全員揃ったね。じゃ、試合プロデューサーのノーヴェさん
から!」

「あ……あたしですか? え……ルールは昨日伝えた通り赤組と
青組六人ずつのチームに分かれたフィールドマッチです。ライフポ
イントは今回もD S A A公式試合用タグで管理します。あとは皆さ
ん怪我の無いよう正々堂々頑張りましょう」

『はい!』

「正々堂々する気なんてサラサラねえけどな?」

「まあまあ、兄さん……」

「早速卑怯すると宣言したサリエルとエリオは二試合目から入って
もらうから、そのの所よろしくな」

そこからは各自一斉にセットアップして作戦会議に入る。
ここで改めてチームメンバーの確認をしておこう。

赤組

F A	ノーヴェ	L I F F E	3 0 0 0
F A	アインハルト	L I F F E	3 0 0 0
G W	フェイト	L I F F E	2 8 0 0
W B	コロナ	L I F F E	2 5 0 0
C G	ティアナ	L I F F E	2 5 0 0
F B	キャロ	L I F F E	2 2 0 0

二試合目から……G W エリオ L I F F E 2 8 0 0

全体的にバランスが整っていて、スピード感のある攻撃と基本に忠実な射撃が特徴的なチームだ。
対する青組は……

青組

FA	ヴィヴィオ	LIFE	3000
FA	スバル	LIFE	3000
GW	ユウ	LIFE	2800
GW	リオ	LIFE	2800
CG	なのは	LIFE	2500
FB	ルーテシア	LIFE	2200

二試合目から……	FS	サリエル	LIFE	1500
----------	----	------	------	------

フリーストライカー

突破力のある前線に弾幕が展開できる後衛をいる攻撃的なチームである。サイドに配置しているガードウィングもなかなか侮れない。ちなみにサリエルのポジション、フリーストライカーは基本的なこととはフリーアタッカーと一緒にアタッカーより攻撃的に動くことを目的としていて攻撃の要を担うこともある。
しかし……

「何で俺のライフこんなに少ないの？」

「ハンデだ。みんなと一緒にするとすぐに終わるだろ？」

「とほほ……」

これじゃいつもと変わんねえよ……

がつくりと肩を落とすサリエルはエリオと一緒に訓練場の外に出て、メガーヌさんとセインがいる崖まで行く。

すでにガリユーがドラを鳴らす準備をしていて、いつでも開始できる状態だ。

みんながポジションに着いたところで……

「それではみんなな元気に……試合開始〜!!」

「ウイングロード!!」

「エアライナー!!」

「行くよ、リオ!!」

「オツケー、ヴィヴィオ!!」

「コロナさん、リオさんの相手をお願いしても?」

「はい、お任せくださいッ!!」

ちびっ子達はそれぞれ各々のポジション同士でぶつかり合いそうだ。ガードウイングもフェイトとユウがぶつかるみたいだな。実力が未知数のユウに対して、フェイトはどう出るか……

「行こうか、レクス」

『どこまでも、マスター』

「ユウ君か……デバイスからしてクロスレンジが得意そうだけど……」

ユウのバリアジャケットは黒い半袖のアンダーシャツに腰の左右にアーマーの付いた灰色のロングスボン、そして赤いジャケットを羽織ったものだ。手にはかぎ爪がついた手甲に脚甲……文字通りの格闘型だ。

しかも普段の姿より大人びて見える。年齢にして16〜17歳ぐらいい見える。

その姿を見て、サリエルは鼻を鳴らして口角をつり上げる。

「どうしました?」

「いや、あのユウってガキ……ヴィヴィオやアインハルトと同様の
身体系強化魔法を使ってやがる」

「ええ!？」

「それに……体つきがしっかりしてやがる。ちょうどエリオが二年
成長した感じだ」

「僕を……ですか？」

「ああ、俺みたいに骨格にあつたがっしりとした筋肉じゃなくて、
必要最低限絞りに絞り込んだ筋肉……そういう奴らにはある天性が
備わっている場合がある」

「それはなんですか？」

「体重移動がとにかくうまいんだ。誰かに教わったものではない……
自分の感覚がどんな体勢からでも打撃に一番体重を乗せられる方
法を知っているんだ」

「つまり……細くても攻撃力があると？」

「そうだ。ま、その天性を活かせるようになるにはバランス感覚を
鍛えないとダメだな」

笑いながら説明している最中、サリエルはずっとユウの事を観察し
ていた。

……備わっているかも知れねえな……天性を活かせる土台が。

今のサリエルは大体一攻防見れば相手の実力が判断できる。しかし、
ドミニランスやアインハルトと言った立っているだけで分かる強者
は見ただけで分かる。

ユウもうつすらだがその気がある。本当にうつすらだが……

珍しいな……あの歳であそこまで鍛え上げられるなんて……

デバイスも特殊だ。拳打専用のデバイスを使う人は多くいるが、か
ぎ爪がついたデバイスはなかなか見ない。

一見普通のデバイスと比べてみると、リーチがあつてかぎ爪がつい
た方が有利と思われるが実のところそうは変わらない。

かぎ爪がついている分、リーチと攻撃力はあるが取り回しが若干悪

くなる。体術が応用できるとはいえ、踏み込み方や間合いの取り方は変わってくるしかぎ爪を利用した攻撃方法も覚えなくてはいい。

それ故に扱いきれる者は少ない。これが普及しない理由だ。

このユウはどのように扱ってくるかがとても楽しみだ。

サリエルはユウばかり見ているが、あちこちで1on1の戦闘が起こっている。

フロントアタッカーのノーヴェとスバルは共にウイングロードとエアライナーを展開し合って、空戦魔導師さながらの空中戦をしている。

どちらも同じ戦闘スタイルなので一步も譲らない。

「さすがにやるね、ノーヴェ!!」

「つたりめーよ!! 仕事じゃともかく格闘技じゃ……」

「とはいえ、あたしもお姉ちゃんだから……」

「負け(ねえ/ない)!!」

少し離れたところでは同じくフロントアタッカーのヴィヴィオとアインハルトが展開されたウイングロードとエアライナーの上にて対峙している。

(立ち合うのもこれで三度目)

(格闘技ではまだまだアインハルトさんにはかなわないけど……魔法もありなら!!)

手のひらに弾核を形成して、ヴィヴィオから仕掛ける。それに合わせてアインハルトも構えを取り、警戒する。

下から行くと思せかけて……フェイント。上に飛んで、集束した弾核を一気に撃ち出す。

「一閃必中！！　デイバイン・バスター！！」
「っ！？」

高速砲！？　初撃でここまで強いものを出してくるとは……

一瞬反応が遅れたせいがかすったようだ。しかし、かすっただけではダメージが少ない。

そんなことは承知なのか、ヴィヴィオは次の攻撃を準備する。バインドを展開して捕まえようとするも、アインハルトは素早く反応してその場から離脱する。

すかさずそれを追って、クロスレンジに持ち込む。ヴィヴィオはとにかく先手先手を取っていくようだ。

「はあああつ！！」

「くっ！？」

鋭いハイキックをガードするも受けた腕がミシミシときしむ。

一ヶ月でここまで鍛えてくるとは……さすがはヴィヴィオさん。

ですが……

次の攻撃の合間にアインハルトはヴィヴィオの軸足を刈って、バランスを崩す。

崩れたところに打ち下ろし。片手でガードするもアインハルトの拳がその程度で止まるはずもない。

ウイングロードからたたき落とされて地面に激突するほどの威力……

…アインハルトもこの一ヶ月で成長している。

ヴィヴィオさん……あなたは強いですが、まだまだ真っ直ぐです。

距離が離れたが、アインハルトはいつも通りに構える。本来ならば自分の距離で戦うのだが……

起き上がったヴィヴィオも不審に思う。

かまえた？　アインハルトさんにもミドルレンジが？

でも、魔法の撃ち合いなら……！！

「ソニック・シューター・アサルトシフト!!」

「霸王流『旋衝破』」

「ファイアツ!!」

早い弾幕で隙を作って一気に飛び込む。お兄ちゃんには通用しないけど、アインハルトさんなら!!

多くの魔力弾が迫る中、アインハルトはゆるりと脱力して回避する。そぶりは見せない。

よし!! アインハルトさんは受けに回る。足を止めてくれれば着弾の際に回り込める。

魔力弾に少し遅れて、ヴィヴィオもアインハルトとの距離を詰める。が、次の瞬間誰もが目を疑うような光景が広がった。

飛んでくる無数の魔力弾をアインハルトは……太極拳のように全て受け流し止めた。

嘘ッ!? 受け止めた!? バレットシエルを壊さずに!?!
当たる前提で前に出たヴィヴィオは止まらない。

「霸王流……旋衝破!!」

そのままそっくりソニック・シューターを打ち返して、なすすべもなくヴィヴィオは自らの魔力弾の餌食になってしまった。

二人の戦いを見ていたサリエル達は驚嘆の声を上げて、アインハルトの技術に感心する。

「すっげ〜!! 何今のっ!? 弾丸反射?」

「リフレクト……吸収放射……どれも違うな。本当に受け止めて、そのまま返した?」

「サリエル君の言うとおり、そのまま受け止めて投げ返したのよ」
「そんな事できんの?」

「真正^{エンシエン}古代ベルカ術者なら理論上はね」

それにしてもあの年齢での技術……一体どれだけ苛烈な修練を？
攻撃をし終えたアインハルトがヴィヴィオの状態を確認していると……いきなりバリアジャケットの一部がはじけ飛んだ。

「うおお！？ なになに？」

「見とけよ……ヴィヴィオのカウンターがかすったんだ。打点がずれていなかったら、今頃アインハルトが地面に激突していたな」

しかし……あのタイミングでのカウンターが打てるのか。

自分に置き換えてみても不可能ではないが至難を極める。やはりヴィヴィオは……

アインハルトもサリエルと同じ考えだった。

追撃しようとしたが、ティアナからの通信が入り一度ストップする。

「アインハルト、ストップ！！今のダメージならヴィヴィオは一
旦下げられる。その隙に先陣突破で青組のCG なのはさんのとこ
ろに斬り込んで！！」

「はいっ！！」

ティアナの指示を受けて、アインハルトは一気にかけて出す。

「ティアナさん、一気に斬り込ませるみたいですね」

「いささか性急すぎるな。今のアインハルトになのはさんは重すぎる……本来ならスバルが行くか、ティアナ自身が援護してやるべき
なのだが……」

「足止めでしょうね。青組も何か色々考えているようだし……」

確かに……どのポジションも足止めに徹底している。戦況の変化も

今アインハルトが前線を突破した程度だな。

ヴィヴィオは一旦下がって回復するみたいだ。

戦場全体を見てみるが……どいつもこいつもやりやがる。

リオちゃんとコロナちゃんは独特な魔法を……おそらく無機質錬成に変化を持たせた魔法を使っているのがコロナちゃん、世にも珍しい炎雷混合変換を持っていてそれを駆使して戦っているのがリオちゃんだ。

はあ……どうしてヴィヴィオの世代にはこんなにも才能豊かな奴らが多いんだろうな。おじさんちよつと凹んじまうぜ……

GW同士で戦っているフェイトとユウもお互い譲らずに斬り結んでいる。

「はああつ!!」

「っ!？」

バルディッシュをレクスで防ぎながら、その体勢のまま蹴りを入れる。

一歩下がってそれを避け、もう一度斬りかかるうとするが下がった分だけユウが前に詰めた。

前に出ると同時に繰り出した突きを辛くも避けるが、フェイトの前髪がパサツと舞い散る。

この子、強い……さっきから全力で攻撃しているけどクリーンヒットが取れない。

まさか……エリオやサリエル以外にここまで苦戦するなんて思っていなかった。

焦りが見え始めるフェイトに対して、ユウは至極冷静に相手の動向を観察していた。

……息が切れてきている。後一押しすればこっちの流れが傾く。

しかし、ユウもそれほど余裕を持っていない。相手が相手、管理局でも雷神と評されるフェイトと真っ向から斬り結んでいるのだ。

身体的な疲労もさながら、精神的な疲労も半端無い。ダメージもそろそろ無視できないものになってきた。

一旦引くか、このまま押し切るかを考えているとルーテシアから通信が入る。

「ユウ、こちらルーテシア！！ ヴィヴィオの復帰まで後もう少し。それまでフェイトさんの足止めをよろしく！！」

「わかった。出来るだけ頑張る」

通信を閉じて決断……ユウは再び前に出る。

フェイトもバルディッシュを構え直して、ユウの攻撃に備える。

「業炎一閃！！」

「キャッ！？」

まずハイキックに炎熱を纏わせて避けさせた。次にハイキックした足が地面につくや否や、軸足にして体ごと回転させてその勢いを拳に乗せて打ち込む。

バルディッシュだけでは防げないと直感し、プロテクションを展開して防御するがそれをかち割って無理矢理フェイトの体を吹き飛ばす。

無論ダメージはある。プロテクションで拳の軌道がずれなかったらそのままダウンしていたかも知れないほどだ。

ここを好機と見るやユウは一気に拳を、脚を舞わせる。

フェイトも体勢を崩しながらそれを凌ぎ、反撃の一手を撃とうと試みるがあまりに苛烈な攻撃の隙間を縫って反撃するのは至難の業だ。このままでは押し切られる……と思った矢先、横から高速の魔力弾が降り注いだ。避けるために一旦その場から離れて、体勢を整える。

「大丈夫ですか、フェイトさん！？」

「何とか……強いね、あの子」
「相当鍛え込んでいるみたいですね」

九死に一生を得たフェイトをどう攻め込むか思案しているユウ。
ふう……何とか押し切れたな。これで流れは俺に来る。

やっぱりこの旅行についてきて正解だ。こんなにも楽しい戦いが出来るんだから。

もっとも……この強い人たちとやり合いたい。

「ユウ、そろそろヴィヴィオが復帰するから礼の作戦に移るわよ」
「了解」

「青組の皆さんもいつでも動けるようにお願いしますね」
『了解!!』

青組全体がある作戦に向かって、統一された動きを見せる。
それを敏感に察知したのは赤組FBのキャロだった。

「ティアさん、ルーちゃんが何か企んでいます!!」

「あの子もサリエルに劣らないぐらい悪巧みを考えるからね……アインハルト!!」

「はいっ!!」

「向こうの作戦の要は間違いなくなのはさんよ!! 全力でなのはさんを止めて!!」

「承りました!!」

フィールドを素早くかけるアインハルト。その目線の先には……

「ヴィヴィオさんのお母様!! 一槍お願いいたします!!」

「私でよければ、喜んで!!」

意気込んで向かってくるアインハルトを見て、なのははフツと笑みを浮かべる。

アインハルトちゃんか……ヴィヴィオに勝ったぐらいだからそれ相当の実力を持っているのは分かる。

これは楽しみだね。こういう才能ある子と戦うのは楽しいし。

アクセルシューターを展開して足を止めようとすると、アインハルトはその程度では止まらない。全て手で受け流して距離を詰めかける。

しかしここは歴戦の強者であるなのは。捌かれたことを気にせず、次の手を打つ。

ほぼノーモーションでフォトンスマツシャーを撃ち、今度こそ足を止めさせる……と思われたが。

「はぁあッ!!」

「あらっ?」

なんとパンチでなのはの砲撃を相殺したのだ。

さすがのサリエルもこれには驚いた。

「あのやろ……なのはさんの砲撃をパンチ一発で相殺しやがった」

「そんなことが可能なんですか!?!」

「砲撃を相殺するに必要なのは一撃の威力……つまりアインハルトのパンチはなのはさんの砲撃に匹敵すると言う事だ。俺でもなのはさんの砲撃は背筋が凍るものなのに……あいつはっ!!」

アインハルトは攻める。砲撃を相殺したおかげで一気に自分の距離に持ち込むことが出来た。

対してなのはは、距離が近すぎるせいか受け一辺倒になってしまっている……否、受けながら分析しているのだ。

うん……まだ荒削りだけど土台がすくしくっかりしてる。きつとす

「ごい量の基礎トレをやってるんだろっな。」

渾身の攻撃しているのに、一つもクリーンヒットを取れないアインハルトもなのは技術を素直に感心する。

「読まれているみたいに防がれている。だけど、このまま攻め続ければ！！」

「ふうん……ちょっと攻めの意識が行き過ぎているな」

「ですね。なのはさんにはアレがありますから……」

左拳でレイジングハートを打ち払って、なのはに隙を強引に強引に作らせた。

よし、右拳廻り打入る！！

開いたところに素早く右フック。完璧に入ったが……腕がその場から動かなくなった。

「カウンターバインド！？ この状況から！？」

「あゝあ、なのはさん必勝パターンだな」

「近接対策のカウンターバインドから至近距離からの砲撃……これを逃れられるのは兄さんしか知りませんね」

「俺は炎盾があるからな。爆発で砲撃を相殺してその後ゆっくりとバインドを外させてもらうさ」

「あら、アインハルトちゃんにもバインドをすぐ外せる方法があるわよ？」

距離を取ったなのははカートリッジをロードして、砲撃をチャージする。

砲撃……避けられない……防御……無理。

いや、まだ手はある。

脱力した静止状態から、足先から下半身へ……下半身から上半身へ回転の加速で拳を押し出す。

押し出された拳がバインドを突き破って、砲撃チャージ中だったなのはにその拳圧が届く。

「おいおい……なんつゝ無茶苦茶な破り方なんだ」

「ねゝ奥様、霸王っ子はさっき何したの？」

「脱力状態から加速と炸裂点を調整する撃ち方を極めるといふんな應用が利くようになるのね。アインハルトちゃんがやったのは静止状態から全身を使った加速で全威力を炸裂させる撃ち方。極めればシールドもバインドもアインハルトちゃんの前では意味を成さなくなる。繋がれぬ拳、「アンチエイン・ナックル」ができれば」「そしてそれを打撃に應用すれば、格闘家が一度は夢見る幻の技……音速拳、通称「マツハ突き」が撃てる。全く……水斬り一つであそこまで進化するなんて……」

アンチエイン・ナックル……スバル達が得意とするバインド解除方法だ。サリエルも幾度もなくバインドを砕かれた経験がある。

それをアインハルトが今回で習得した。その成長速度は未恐ろしいものだ。

昨日はいつかりベンジしにこいつて言っただけ……その日は案外近いかも知れないな。

そう思えば、自然と自分に問う。

負けるのか？ 自分と成長速度と才能が段違いに上のアインハルトに？

問いかけて……愚考だと鼻で笑い、不敵な笑みを浮かべる。

冗談……俺はそう簡単に踏み台にはならない。文字通りに叩きつぶしてやるさ。

全力を持ってアインハルトと戦いたいものだ……この体がぶっ壊れるくらいな。

そうサリエルが自問自答をしている間にも戦況は止まることなく動いていく。

バインドを解いたアインハルトだったが、結局なのはさんの砲撃に落とされてライフが二桁まで持つてかれた。治療されるまで動けない状況だ。

とどめを刺そうと魔力弾を展開するが、遠方から飛来してきた魔力弾を後頭部に受けて中断せざるを得なかった。

「いったく……この弾丸、ティアナツ!?」

「アインハルト、よくやったわ!! おかげでチャージとシフトも完了!! これが赤組勝利の篝火……クロスファイア・フルバースト……!」

ティアナ渾身の射撃魔法、クロスファイアがフィールドを駆け巡り各地で混戦していた戦いに一槍入れる。

その隙にキヤロがアインハルトを回収して、回復させる。

が、同時にノーヴェも距離が取れたことから後衛攻めに転じた。

「さて……ノーヴェがこっちに攻めてくるわね」

「ルールー、これだけ治つてればもう平気!!」

「そうね。アインハルトも治療中だし、コロナのゴライアスもダウンしてる。ここが好機かな?」

ルーテシアはもう一度戦況を吟味して好機だと確信し、青組全員に通信を入れる。

「青組の皆さん、予定よりちょっと早いですが……作戦、発動します!!」

『了解ッ!!』

ルーテシアの号令と共に、まずヴィヴィオが迫ってくるノーヴェを迎撃する。その後ろにはスバルが待ち構えた。

ユウとなのははフェイトを、ルーテシアとリオが後衛……キャロと回復中のアインハルトを相手に選び、これでシフト構成が完了した。

「2on1!？」

「考えたな……一人は回復中、一人はダウンしている……これを好機と捉えて強敵を二人がかりで素早く撃破しようつてか？」

「ですが、CGのティアナさんがまだ残っています。これでは……」

「ティアナとて全てがカバーできる訳じゃない……これはピンチだな」

しかし、試合が始まってもう長い。そろそろ戦域に分散してくる魔力も十分だ。

ティアナも動いてくる……それも最高の魔法で。

サリエルの思惑通り、ティアナは陣取っていた家屋の屋上を飛び降りて姿を消す。

戦いながらそれに気づいたなのはも動く。ユウと協力してフェイトとの戦闘を徐々に中央へ移動させる。

「……案外勝負が早く決まるかも知れねえな」

「どうして？ 赤組劣勢とはいえまだまだ……」

「なのはさんとティアナ、二人に共通する最強の魔法はなんだ？」

「うーん……あっ!？」

「そう、おそらく二人は集束砲でブレイカー一気に決めるつもりだ」

と、サリエルが推測している間にも戦況は流転し続ける。

なのはとユウがフェイトの一瞬の隙を突いて一気にライフを削り、スバルとヴィヴィオも連係攻撃でノーヴェを撃破寸前まで追い込む。FBのキャロも懸命にアルケミック・チェーンで相手を捕らえようとしますが……捕まらない。

「うつふふ」 当たらない当たらない!!」
「それはそうだよ。当てるためじゃなくて……撃墜のための布石だから!!」

そう……アルケミック・チェーンは捕まえるために展開したのではなく、二人を一直線上に誘導するために展開したのだ。
そして、その線上にいるのは……

「ゴライアス、パージブラストツ!! ロケット・パンチ!!」

ダウンから回復したコロナはゴライアスの腕を元祖スーパーロボットよろしく飛ばした。

あまりのことに驚き、避ける間もなく二人は……撃墜された。

「撃墜成功!!」

「勝利の、V!!」

二人ともVサインを掲げてルーテシアトリオを撃破したことを喜ぶが……それを壊すかのように一つの魔力弾とバインドが飛んできた。

「へうへう!!?」

「っ!!?」

「はい、キャロ撃墜、コロナちゃん捕獲」

「えへ!!? なのはさん、いつの間に!!?」

「勝ったと思った時が危ない時。現場での鉄則だよ」

さて……タイミングは今!!

なのははプラスター1を発動して、自身最凶最悪の魔法を数個集束し始める。

同時にティアナもそののはから教えてもらった同じ魔法で対抗し

ようとする。

「赤組生存者一同、なのはさんを中心に広域砲を撃ち込みます!!」

「コロナはそのまま。動ける人は合図で離脱を!!」

「分裂多段砲で敵残存戦力を殲滅。ティアナの集束砲を相殺します」

「!!」

「「スターライトーーーーッ!! ブレイカーーーーーッ!!」

」

なのははモード・マルチレイドで、ティアナはシフト・ファントム
ストライクでスターライトブレイカーを全戦域にぶっ放した。

訓練場は……まるでどこかの最終戦争のごとく爆炎をあげて崩壊し
ていった……

「……これ、なんて最終戦争？」

「ま、集束砲同士が激突すればねえ……」

「……エリオ」

「はい？」

「俺は今、心底あの場所にいなくてよかったと思っている」

「……僕もそう思っていたところですよ」

「てか、殲滅任務でもめつたと見ねえぞ、こんな光景……」

爆煙が晴れていき、この廃墟に生き残ったものとは言えば……

フェイトは直前のユウの一撃によって撃墜され、そのユウはと言う
とティアナのスターライトブレイカーが直撃して目を回してダウン
している。もちろん撃墜。

拘束されていたコロナはかろうじてゴライアスで防御するが防ぎき
れず、ライフ二桁で戦闘不能に。なのはも相殺しきれず撃墜された。
そして残っているのは……

「ケホツ、ケホツ……な、何とか生き残った」

スターライトブレイカーを何とか相殺してティアナが生き残った。が、まだ二人フィールドを駆け巡っている。その一人が……

「ティアナさん、覚悟!!」

「ヴィヴィオ!?　つてか、何でほぼ無傷!？」

ヴィヴィオはスターライトブレイカーが当たる直前、スバルが庇って無傷である最終戦争を生き残れたのだ。

当然スバルと戦っていたノーヴェはその直後のヴィヴィオによる攻撃で撃墜された。

何とか迎撃しようと魔力弾を連射するティアナだが、スピードに勝るヴィヴィオはそれをスイスイ避けていく。

ヴィヴィオが自分の距離に入るうとした時、生き残ったもう一人がその前に立ちふさがった。

「霸王・空破断(仮)!!」

「ッ!？」

技を放ちながら割って入ってきたアインハルトによってヴィヴィオはダメージを受けながら後退せざるを得なかった。

「ヴィヴィオさん、ティアナさんはやらせません」

「ご……ごめん、アインハルト。さっきのでもうやられちゃった」
「ええっ!？」

守ったはずのティアナがいつの間にか撃墜されていて驚く。

それをモニターで見ていたサリエル達は何で撃墜されたかがしつかり見えていた。

「今度はあたしにも見えた！！　ヴィヴィオ、ティアナに何か飛ばしたでしょ？」

「単発のソニック・シューターか。チャージも必要ないからほぼノーデイレイで撃てるから攻撃受けながらも撃てるな」

しかしまあ……あの土壇場であの発想……つくづく天性の物だ。

おそらくアインハルトも同じ事を思っているだろうな。

ヴィヴィオとガチンコになったアインハルトもサリエルが思ったようなことを感じていた。

やはりヴィヴィオさんは思っていたとおりだ。

相手の攻撃を覚えて対策する学習能力。

速くて精密な動作。

何より相手の攻撃を恐れずに前に出て撃ち込める勇氣。

それらが重なって出来るこの子の戦闘形態ファイトスタイル、それは……カウンターヒッター！！

アインハルトの右ストレートをかわして、合わせるように左でカウンターを入れる。

隙間を縫ってきた攻撃に反応しきれず、顔に直撃して体勢を崩してしまう。

それを逃さず、ヴィヴィオは自身最高の攻撃を繰り出す。

「一閃必中！！　アクセル・スマッシュ！！」

バネのきいたアッパーがアインハルトの顎を的確に捉えて脳を揺らす。

それだけでアインハルトは意識を手放し、ダウンしていく。やっつたっ！！

しかしヴィヴィオが喜ぶのもつかの間、倒れながらもアインハルトは無意識に蹴りを繰り出し、それに反応することが出来なかったヴ

イヴィオはまともにもらう。

そして……両者ノックダウンで試合が終了した。

試合時間19分35秒。赤組青組共に、撃墜5名、行動不能1名という試合結果になった。

「いやあ……結局引き分けてねえ」

「それほどいい試合だったってわけさ」

「この調子なら二試合目ももっと白熱しそうな予感がするわ」

「そりゃ……俺とエリオが入りますからね。さ、下に行つて気絶している奴らを起こしに行こうぜ」

「はいっ……！」

エリオとサリエルは下に行き、メガーンとセインも休憩中に必要なおやつとドリンクを用意するために一度ロッジに戻る。

ようやく……俺の出番だ……！！

さっきから体がウズウズしてたまんなかったんだよね………これでようやく発散できるぜ。

どうやって料理していこうかな？

サリエルがウキウキと自分の番が来たことを喜びながら、気絶している者の介抱に奔走した。

第九教導 一戦目……いきなりド派手な陸戦試合！！（後書き）

どうでしたか？

意外な人物とはウーノでした。まさに予定外の人物……

それで陸戦試合は……これでも削った方なのですよ？ 当初の予定だと20000文字超えそうな勢いでしたから、いくつか原作の戦闘は削ってみたのですが……

まあ、そこら辺は私の技量不足ですね。精進します。

では、次回は二試合目をお楽しみに！

第十教導 二試合目……蒼の重騎士、駆ける！！（前書き）

作者「二週間……本当にお待たせしてすみませんでした！！」

サリエル「もういいって……お前が遅れるのは昔から分かっているのだから……」

作者「途中からなぜか書けなくなって……ヒドイ時なんて数十文字で一日が終わる時があった。」

サリエル「昔からそうじゃねえか。調子がいい時で一日3000文字、悪い時は100程度で終わるじゃねえかよ」

作者「やっぱりオリジナルの展開は難しいと痛感しました。だけど、次話は何とか一週間であげられるように頑張ります」

サリエル「お前のその口約束は飽きた。次、破ったらどうする？」

作者「えっ？」

サリエル「俺的にはフルボッコが一番にいいと思うんだが……どうだ？」

作者「……考えておきます。それでは、どうぞ閲覧してください」

サリエル「感想、意見、質問があればいつでも待ってます」

第十教導 二試合目……蒼の重騎士、駆ける！！

第一試合目は引き分けという形に終わった。

それぞれが死力を尽くして戦いぬき、気を失うほど激しい戦いだっ
た。

起こされたみんなは一度休憩を取るために集合した。

「それでは皆さん！！」

『お疲れ様でした〜！！』

笑顔で全員が先ほどの戦いをねぎらっているが、アインハルト一人
だけが少々浮かない顔をしている。

これで……陸戦試合も終わりですか……

本当はもっと戦いたかったし、サリエルさんとも手合わせしたかつ
たけど……仕方がありませんね。

「じゃ、おやつ休憩と陸戦場の再構築したら2戦目行くからね」

「2時間後にまたここに集合！！」

『は〜いつ〜！！』

「……えっ、二戦目……？」

「あ、あれっ？ 言ってませんでしたっけ？」

「今日一日で三戦やるんですよ！！」

「今度はサリエルさん達を入れて、作戦組み直したりして！！」

またやれる……あの強い人たちともっと戦える。

ぐったりしている体がグンと体温を上げてそのことを喜ぶ。

疲れなんて関係ない。今すぐでもいいぐらいだ。

「よかった……もっとやりたかったんです」

「はいっ!!」

「こいつもまあ……とりあえず休憩行ってこい。なのはさん、俺が再構築やっておきますから」

「ありがとうね、サリエル君」

ゾロゾロとロッジに戻っていく中、コンソールを開いてカタカタと訓練場の再構築を始める。普段から教導でやっているのでその手際は見事な物である。

その姿をなぜか……休憩に行くはずだったアインハルトが見ている。

「……休憩に行つてこいよ?」

「ちよつと先ほどの戦いの事についてお聞きしたいと思ひまして……」

「アインハルトか……いや、マジでビックリした。あのなのはさんのバインドをパンチの威力だけで砕いたんだからな。まあ、後は全体的に成長しているなって思ったぐらいかな」

「本当ですか!？」

「ああ。特にあのリフレクト……ほら、ヴィヴィオのソニック・シューターをそのままそっくり返した技。なんていうんだ?」

「霸王旋衝破ですか?」

「そうそう。それには本当に驚いた。アレだったら誘導制御型の魔力弾はほぼ無効化できる」

サリエルもあのようにやるうと思えば出来なくもない。しかし、返せて一個でその一個も至難を極める。

まず弾道を読み、受け流すのが簡単な弾道の魔力弾を選択して、そこから弾の回転はどうなっているか、威力はどれくらいなのかを勘案して手のひらで優しく受けるようにしてようやく返せる状態になるのだ。それをほぼ一瞬でやらなくてはいけない。

たぶん特殊な技法を使っているのは分かるけど……まあ、習得は無

理だろうな。

「ま、見せてもらった分対策と弱点が分かったけどな」

「……弱点ですか？ 霸王の拳にそんな物はっ」

「意外とあるもんだよ。それは次の試合のお楽しみというわけで…

…」

「もちろん……本気で来られるのですよね？」

「そいつはどうか？ だけど、試合って言うんだからそれなりの力は出すつもりでいるけどな」

嘘だ。この人はまさに本気でかかってくる。

その証拠に目がキラキラと輝いている……自身が持っている全ての経験、実力を発揮して存分にフィールドを駆け巡るだろう。

この前は本気で相手にしてもらえなかったが、今回こそは！！

「……胸を借りるつもりで挑んでいきます」

「そいつは結構。ほら、俺と当たりたかったら万全の体制でな。休憩に行つてこい」

「分かりました。失礼します」

ようやくアインハルトも休憩に入って、カタカタとパネルを叩く音だけが辺りに木霊する。

先ほど言ったように、霸王旋衝破の対策はすでに練れてあるし、弱点も発見してある。

後はクロスレンジ……真つ向からぶつかっていけば、経験で勝るこちらの勝機は揺るがない、が。

油断してあっさり負けるのも嫌だから、気を引き締めていこう。再構築をしながら、サリエルは次の試合の戦術を考えていく。

一方、休憩に入ったアインハルトは出されたおやつで糖分を補給しながら、サリエルの事を聞き回っていた。

「サリエルさんは一体どういう戦い方をされる方なのですか？」
「そうね……良く言えば器用で臨機応変、悪く言えばめちゃくちゃね。基本的なスタイルは双剣、片手剣を使つての接近戦だけど自分に流れを呼ぶために蹴りや素手での攻撃もしてくるわ」
「それからサリエルオリジナルの魔法にも注意が必要だね。ちょうど映像があるから見ておくといいよ」

映し出されたのはサリエルが誰かと戦っている映像だ。

巨大な魔力刃を軽々と振り回して、相手を追い詰めている。これは……要注意の魔法だ。

他にも魔力刃をそのまま飛ばしたり、引いていく相手に拳に集めた魔力弾を撃ち込んだりしていた。

映像を見ていく内に、アインハルトはサリエルの特徴に気づいていた。
「……」

とにかく場の流れを掴むのと支配するのがうまい。常に自分のペースで戦えるよう相手の二手も三手も先を読んで攻撃している。

戦い方を知っているのだ。さすがは歴戦の強者。

「それに加えて射撃魔法も使ってくる……クロス、ショート、ミドルレンジで幅広い戦い方が出来るのがあいつよ」

「ロングレンジが唯一の弱点だけど……アインハルトじゃ、難しいでしょ？」

「……残念ながら」

「でも、クロスレンジなら真っ向から対抗できそうね。次も私と同じチームだしきっちり対策立てていけばあいつに勝てるわよ」

「全力で頑張ります！！」

クロスレンジ……自分の距離での戦いか……

試してみたい気持ちはある。今の自分があの人にとれだけ通用する

のか……

しかし同時に怖い。今の自分がどれほど弱いかを知ることが……
私は本当に……こんな事でサリエルさんに言われた拳の意味を見出すことが出来るのだろうか？

手のひらに目を落として自分の拳が軽いか重いかを握ったり開いたりして確かめる。

しかし、そんな事で分かるようなものなら最初から忠告されない。結局の所、自分で解決していくしかないのだ。なら、前に進むだけうだうだと後ろを向いて悩むより、こちらの方がいいに決まっている。

そう考え改めてアインハルトは、次の試合のためにゆっくりと体を休ませていくのであった。

二時間後、再び訓練場に集まった一同はチーム別に別れて作戦を煮詰めていく。

ちなみに二試合目の試合メンバーは……

赤組

F A	アインハルト	L I F E	3 0 0 0
F A	スバル	L I F E	3 0 0 0
G W	フェイト	L I F E	2 8 0 0
G W	エリオ	L I F E	2 8 0 0
C B	ユウ	L I F E	2 6 0 0
C G	ティアナ	L I F E	2 5 0 0
F B	ルーテシア	L I F E	2 2 0 0

ちなみにユウのCBはセンターバックというポジションであり、フ

ロントアタッカーの後詰的なポジションである。
今度の赤組は中盤が厚く、前線も突破力のある二人が遠慮無く斬り込んでいける布陣だ。後方からの援護も申し分ない。
対する青組は……

青組

FA	ヴィヴィオ	LIFE	3000
FA	ノーヴェ	LIFE	3000
GW	リオ	LIFE	2800
WB	コロナ	LIFE	2500
FS	サリエル	LIFE	1500
CG	なのは	LIFE	2500
FB	キャロ	LIFE	2200

前線に師弟コンビ、左右に仲良し二人、後ろには教導官コンビとコンビネーションに長けた構成でいかに連係プレイが取れるかが鍵になりそうだ。

そして何より両チームとも一撃を秘めた人物がいる。

今回の試合は……とても波乱な予感がしてならなかった。

「それで今回はどのような作戦で行くのですか？」

「まずはポジション同士のぶつかり合いで行くわ。ユウは私とルーの護衛を頼むわ」

「分かりました」

「それで注意事項のだけど……サリエルとは絶対に1on1で戦わないこと。最低二人でぶつかれる時以外の戦闘はなるべく回避するよつに」

「どうしてですか？」

「どうしても何も……あいつ、1on1になると勝つために何でも

してくるのよ。それなら行動が制限される多対一の方がまだいい
て事。倒せるかも知れないしね」

「はあ……」

そこまで警戒しなくても大丈夫なのは……内心思いながらアイン
ハルトは作戦を了承する。

ティアナとしては1on1でサリエルに当たってそうそうに落とさ
れるより、多対一でじっくりサリエルを攻略しながら他の人を相手
にしていった方が効率がいい。

赤組で1on1でサリエルに勝てる相手はフェイトさんとスバル、
エリオしかいない。私やユウ、アインハルトでは足止めが精一杯だ。
この作戦がいかに功を成すか……
一方青組の作戦とは言つと……

「じゃあ、サリエル君お願いね」

「いや、普通はセンターガードのなのはさんでしょ？俺なんてそ
んな上等な作戦は考えられませんよ？」

「練習練習 小隊指揮資格も持っているんだからたまにはしない
と……ね？」

「はあ……分かりました。それじゃ、さっきと同様ポジション同士
のぶつかり合いから行きましょう」

「……お兄ちゃん、それは作戦とは言わないよ」

「それプラスだ。中盤からある作戦を展開していききたいと思ってい
るので、ちよつと寄ってください」

全員を寄せて、こそこそと作戦内容を通達していく。

最後まで聞いた六人は驚き半分、面白さ半分の顔を浮かべてその作
戦を承諾する。

「じゃあ、その作戦で……中盤からはなるべく中央に誘導するよう

にお願いします。序盤は足止め程度に、終盤生き残った人は各個撃破で行きましょう。俺は隠れながら各フォロワーに回ります」

『了解ッ！！』

「赤組も手ごわいけど全力で当たればこっちだって負ける要素がない。しっかり行こうぜ！！」

『オオ〜！！』

両チーム作戦会議が終わって、自分のポジションについていく。

サリエルもアグレッツサーフォームを展開して、一度フィールドを渡す。

先ほどと変わらず市街……しかし、再構築したのは俺だ。

どこに何を仕掛ければいいか、しっかり把握済み……面白くなりそうだぜ。

「それじゃ、第二試合目も元気に……試合開始！！」

ガリユールがドラを盛大に鳴らして二試合目が始まった。

誰もがポジション同士でぶつかり合おうとする中、サリエルはすぐさまステルス性に長けるガンナーフォームに切り替え、姿をくらしさせる。

「ティアナ、開始早々サリエルの姿が消えたわ。間違いなく仕掛けてくるわよ」

「あいつのことだから狙いは私かルーテシアか。みんな、奇襲に警戒して。いつでも向かい撃てるように！！」

『了解ッ！！』

ティアナが指示を飛ばしている間、サリエルは物陰に隠れながら敵陣を進み、トラップを仕掛けていった。

トラップと言ってもディレイブレイカーを数カ所に分けて設置する

だけなのだが、それだけでも結構な効果がある。

「ふう……今何ヶ所仕掛けたっけ？」

『五ヶ所ですね。作戦ポイントの近くに星の光を、リュミエール・レトワールそこに至るまでの四カ所にレイブレイカーですね』

「よし、後二カ所仕掛けてティアナを狙撃しに行くぞ」

昔姉から教えてもらった星の光は最近になって攻撃パターンの一つとして使うようになった。無論マリーナのようにデイベイン・バスター並の威力は無いし、数もわずか二個と少ない。しかもこれは魔力弾核形成補助装置を介さず作らなければいけないので結局一個生成するのに8秒ほどかかる。

それでも威力は他の射撃魔法と比べて高いし、何より唯一の誘導制御型だ。攻撃の幅を広げるために使い出したのだがこれがなかなか使える。

計画通りさらに二ヶ所にトラップを仕掛けて、敵陣の奥深くへと音もなく侵攻していく。上を見上げてみるとすでにスバルがヴィヴィオとやり合っているのが見える。

そこでサリエルは違和感を感じた。ヴィヴィオがぶつかっているならばノーヴェもアインハルトとぶつかっていてもおかしくない。

しかし、二人の姿はまるで見当たらない。何かがあると踏んだサリエルは警戒を強めて奥へ進んでいく。

苦労して見つからずに進み、援護射撃をしているティアナの姿が確認できた。

さらに近づき、ヘルメスの銃口をティアナに向けて照準する。が、結構小刻みに動いているのでリードしてもこの距離だと外れそうだ。元々ヘルメスはリボルバーを素体としているため、補正があっても狙えるのは大体100m程度が限界だ。

現在距離は140m程度。これだけ離れていたら、動かれるとさすがに当たらない。

「こちらサリエル。現在ティアナを狙える位置にいるが動いていて撃つても当たらない。誰か足を止めてくれ」

「……私が足を止めてみるからその間をお願いね」

「ありがとうございます、なのはさん」

全体通信でティアナの足止めを頼むとなのはさんが答えてくれた。すぐに魔力弾がティアナに集中して、止まってそれを迎撃し始めた。今なら一撃で狙える。ティアナ……甘かったな。

ピアッシング・ショットを選択して、ティアナの頭に照準をポイントする。こちらに気づく様子は全くない。

引き金に手をかけた瞬間、後ろから不意に強い気配と殺気を感じた。振り向けばワンテンポ遅れる。サリエルはそのままの体勢でもう一つの拳銃を展開して、勘で後ろに撃った。

「っ!？」

狙いが逸れた攻撃が俺が隠れていた廃墟の壁を叩く。その衝撃でもう片方の引き金を引いてしまい照準がずれてしまったのか、ティアナには当たらなかった。

振り向いて魔力弾を乱射しながら距離を取り、相手を確認してみる。

「ちっ、アインハルトか」

「サリエルさん。あなたの相手はこの私です」

「ノーヴェとぶつかっているはずなのにな……」

「ノーヴェさんの相手はユウさんがしてくれました。これであなたと、心置きなく戦えます」

構えていつでも前に出れる状態になるアインハルト。が、サリエルは至極冷静に状況を確認している。

ティアナは……こちらに撃ってくる様子はない。なのはさんの攻撃がどうも激しいようでこっちに構っている場合じゃないようだ。
loniか……多分注意が行ってると思うけどなあ……しゃーない。

「グラディアス、術式構築」

『All right』

「それでは、一組お願いします!!」

「お前が持てばな!!」

真っ直ぐにヴァリアブル・バレットを撃ち込んでアインハルトの回避を誘う。案の定アインハルトはそれを最小動作で避けて一気に距離を詰めようとする。

だがサリエルはすぐさま左の拳銃でショット・クラスターを放つ。拡散する弾丸が相手の勢いを止め、その間に元の距離を取る。

ガンナーフォームでも接近戦は出来なくもないが、やはりアグレッサー、アサルトフォームに比べると質は格段に落ちる。

今は……向こうの切り札を潰すまで剣は抜けないな。距離的にも離れて戦っていたらダメージは負わない。

つかず離れずの距離からバレットとクラスターを交互に連射して、アインハルトを近づかせない。

しかしそれでもアインハルトは距離をじわじわと詰めてくる。ショット・クラスターとヴァリアブル・バレットの連射力には結構な差がある。その間を縫って確実に前に出ているのだ。

ちっ……バレットじゃ牽制にはならないし、クラスターじゃ連射が効かないから一気に近づかれる。

もう一度距離を取ろうとバックステップを踏み込んだ瞬間、アインハルトには無いはずの射撃魔法が飛んできた。

ちっ、あのリフレクトか!? バレットを返されたな……

慌てて手について回避し、牽制を加えるがすでにダッシュしているアインハルトは止まらない。真っ直ぐに拳を勢いよく打ち込んでき

た。

それを慌てず銃床で受けてバレットを撃ち込むが素早く動かれてまるで当たらない。避けてリズムに乗ったのか、連打を繰り返して追い詰められる。

背には壁、前は猛攻を繰り返してくるアインハルト……さて、どうしたものか？

追い込まれながらもサリエルは冷静を崩さない。避ける攻撃は避け、受ける攻撃は全て銃床で受けて対処していく。

この攻防が二分ほど続いただろうか……優勢だったアインハルトが息を入れるためか、一度距離を取った。

「……っ!？」

「持った方か。あんだけ堅い銃床を殴ったり蹴ったりしたんだからな、壊れもする」

「……なんて防御スキル。あなたはどこまで強いんですか？」

「どこまでも。さあ、ここからは俺のターンだ!！」

ここでようやくアグレッシブサーフォームを展開して、アインハルトの肩口にグラディアスを振り下ろす。

鋭い斬撃をいなして、カウンター気味に左フックを繰り返すがいきなり目の前を覆った陣羽織の裾に阻まれる。

視界が一瞬遮られたせいかわ、拳から手応えが伝わってこない。しかも相手の次の行動も予測できない。

全身に緊張を走らせ次の攻撃を待つ。その瞬間、真横から脚が鎌のようにアインハルトの体を捕らえた。

「ぐっ!？」

「はああっ!！」

サリエルの攻撃は続く。着地した際にその勢いをそのままに振り下

ろす。

これも何とかいなしてバックステップで一度リズムを作ろうとするが、それを許すサリエルではない。左手に魔力を貯めて剛翔閃で追撃をかける。

いきなりの魔力弾に驚きながらも旋衝破の要領で上に流す。が、その隙にサリエルが一気に距離を詰めて水平斬りを素早く当てる。

防御が間に合わず、まともに喰らい吹き飛ばされる。攻撃が当たったことに慢心せず、ガンナーフォームに切り替えて一気にケリをつけようとする。

「星の光、セツト。ライトハンド、バレット!!」

『All right!!』

吹き飛んだアインハルトに向かってバレットの弾幕を張りながら、左手で魔力弾が出来るまでの時間を稼ぐ。

壁に当たり煙が朦々と上がるがそれでも撃ち続ける。アインハルトも煙幕の中襲いかかってくる弾幕に足を前に出せないでいた。

前に出て、自分の距離で戦わなければいけないのは分かっている。しかし、この煙幕の中むやみに前に出れば弾幕の餌食になるし、あの人のことだから何か罠を張って待っているに違いない。

だが、自分にはこの拳しか活路を開くことはできない。アインハルトはできる限り弾幕を避けながら煙幕から出ようと必死にもがく。

いくつか被弾しながらも苦勞して煙幕を抜けたが……待っていたのは最大級の罠、サリエルの中でもっとも威力がある射撃魔法、星の光を最大までチャージして構えているサリエル。

「こいつで……終わりだ!!」

それを私に向かって投げつけるように発射する。蒼色の魔力弾は乱数軌道を織り交ぜながら私を撃墜しようと肉薄する。

私はゆるりと脱力して霸王旋衝破の構えを取る。これは最初から考えていた作戦……

ティアナさんから聞かされていたサリエルさんが唯一使える誘導制御型の射撃魔法、なおかつもつとも威力があるこの魔法を霸王旋衝破で返せれば、いかに頑強なサリエルさんでも一撃で倒せる可能性は高い。

私相手だと使ってくると思っていたけど、まさか本当に使ってくるとは思っていなかった。この千載一遇のチャンスを無駄にするわけにはいかない。

襲ってくる魔力弾を柔らかく手のひらで受け止めようとするが……威力がある分難しい。しかし、それを何とか受け止めて自分の制御下に置く。

サリエルさんは決めに行って撃つたのだからフォローが続かない。これは確実に当たる。

だが、投げ返そうとした時アインハルトは気づいた。サリエルのフォームがいつの間にか変わっていることと……こちらを罠にはめたことに喜んでいるかのようににやりと笑っていることに。

何を馬鹿な……そういえば、この旋衝破の弱点を見つけ、対策を考えついたと言っていました。

ただこの状況でその弱点も対策も関係ないはず!!

「霸王旋衝破!!」

「それが甘いつて言うんだよ!!」

先ほどよりスピード乗せて返された星の光を^{リュミエール・レトワール}あろう事かサリエルは自らの剣で打ち返そうとする。

巨大な魔力刃を展開して、^{リュミエール・レトワール}星の光を……そのまま返してきた。

そんな馬鹿な!? あれほど細心を払って返したのに!?

もちろん決めるつもりで返したアインハルトは防御することもままならず、さらにスピードに乗って威力が加算された星の光を^{リュミエール・レトワール}直で受

けてしまう。

吹き飛ばされて着地した地面が蒼く魔力陣を描きながら発光し、バインドでアインハルトを捕らえる。先ほど手について回避した際に設置した物だ。

「霸王旋衝破の弱点は……自分から行かなければ後のフォローが続かないことと、返した魔力弾がさらに返ってくることを想定していない。ま、俺はそこをついたただけだけど……致命的だったな」
「くっ……」

「その横になつている状態じゃアンチエイン・ナツクルも使えまい。撃墜されな、オールレンジブレイカー」

フォトン・ステップを駆使して瞬時にディレイブレイカーをアインハルトを囲むようにいくつも展開する。

仕上げに指を鳴らして、絶妙なタイミングですらしながら隙間無くディレイブレイカーを発射する。アインハルトは為す術もなく、刃の嵐に巻き込まれる。

朦々と煙が立ちこめる中、サリエルは相手の状態を確認する。

……絶妙なミディアム加減だな。さすがは俺。

アインハルトのライフは二桁。生きてはいるが行動不能と絶体絶命のピンチである。

ヘルメスを展開してとどめを刺そうと狙い定める……その時。

「プラズマランサー!!」

「ッ!？」

横から聞こえて来た声に反応して、直感的にプロテクションを展開する。直後、無数の雷弾が激しくプロテクションを叩く。

さらに下からローラー音を響かせてアインハルトを救出するスバルの姿も見受けられた。魔力弾が飛んできた方向からはフェイトがバ

ルディツシユを構えて突っ込んでくる。
グラディアスで何とかバルディツシユを受け止めながら、ヘルメスでスバルに撃ち込むが地上では圧倒的に速いスバルにサリエル如きの魔力弾が当たるわけもなくそのまま離脱されてしまった。

「チツ!？」

「行かせないよ!! スバル、後はよろしく!!」

「了解です!! ルーラー、お願い!!」

「結局私任せ!? 全く……彼方より此方へ、若き碧眼の霸王を我が元へ!!」

安全圏に離脱したアインハルトはキャロに転送されてすぐさま治療に入る。スバルはそのままフェイトの援護のために来た道を戻る。サリエルはと言うと数合打ち合って、一旦距離を置く。いつの間にか後ろにはスバルがいつでもウイングロードを展開できるように用意している。

「はあ……フェイトとスバルとのマッチアップか。これはちょっときついぞ?」

「さて……ここからどうしたものか?」

「フッフーン……さすがのサリエルもあたしとフェイトさんが相手だときついでしょ?」

「私もリオとちよつとやり合ってきたけど全然疲れてないし……今日もきつちり落としてみせるよ」

「……ってかいいの? 二人が俺の相手をしていても?」

「「えっ?」」

「ヴィヴィオ、リオちゃん!! 手が空いているなら、後衛攻めだ。」

「一気にルーテシアとアインハルトを落としまえ!!」

『了解ッ!!』

「しまった!？」

「そっか……私達がサリエルを相手にするって事はヴィヴィオとリオちゃんフリーになるんだ」

サリエルには二人以上でかかる。これは毎年行つ陸戦試合の鉄則である。

だが裏を返せば、敵にフリーパスを与えてしまう弱点も秘めている。本来なら数の均衡が崩れた時に敢行するのが一番理想的なのだがその間に他のメンバーが落とされたら元も子もない。

なら、フリーにしても二人で当たり、可能な限り速くサリエルを倒すことが結果的に被害が少なくなる。

「さあ、どうするよ？ 言つとくけど、1on1だったら負ける気はしないからな」

「くっ……」

「大丈夫です、フェイトさん。僕がフォローに回りますから!!」

「エリオだと……馬鹿な、コロナと戦っているはずじゃ……」

「お兄ちゃん、コロナちゃんは今治療しています。エリオ君が思いっきり……」

マズい、計算が狂つた……コロナちゃんがエリオを押さえておいてくれたら、ユウがカバーに回ってもノーヴェがついてきて3on1と圧倒的有利な立場で試合を進めることが出来た。

しかしコロナちゃんが治療中ということでエリオがそちらに回るこゝとができ、そのハンディキャップが無くなってしまった。不利とはいえ、アインハルトが戦線復帰出来るだけの時間は稼ぐことは出来る。

そうならば今度はこちらが危つくなつてくる。くそつたれが……

「……だったら、お前らを落としてやんよ!!」

『Set Assault Form』

グラディアスをツインブレイドモードで展開して、本気で落としかかる。

時間はかけていられない。ここは一刻も早くどちらかを落とさなければ俺達に勝ちはない。

相性がいいのは……フェイトよりスバルだが、ここは一本が取れそうなフェイトだ。

スバルにセイバーシュートで牽制を入れながら、フェイトに斬りかかる。バルディッシュで受けられるが、すぐさま返しの左で脇腹を狙う。

負けじとフェイトもハーケンスラッシュを展開してサリエルの剣を受け、肉薄するが……技術に勝るサリエルにダメージを与えるには相当の苦勞がある。

しかし、それが二人になれば……苦勞も軽減される。牽制が無くなった隙にウイングロードで一気にスバルが近づいてくる。

くそっ、タイミング的に防御が間に合わねえ!? 先日試したばかりのフィールドで切り抜けるしかない!!

「クツ!？」

『Alle W?nde zu Oishi sch?tzen
Field』

三角錐に展開されたフィールドが二人の攻撃を何とか受け止める。

しかし、見る見るうちにフィールドにヒビが入っていく。それもそのはず……フェイトのハーケンスラッシュは元々バリア貫通能力が高い魔法であり、スバルのナツクルはその重さに加えてバリアに無理矢理割り込んでくるというスバルのIS“振動破碎”がオートで発動していることもあって貫通力は随一だ。

止められただけで上等……ここから反撃だ!!

カートリッジを片方二つ、合計四つロードしてハダウン・ブレイカ

ーを展開する。

ちょうどその時にフィールドが破られ、攻撃がサリエルに突き刺さると思われたが……凄まじい剣捌きによってすんでの所で止められた。

続けざまに連携でダメージを与えようとするが、ハドウン・ブレイカーを振り回されて一旦引くしかなかった。

「オラアアツ!!」

「きゃああつ!?!」

ハドウン・ブレイカーを斬りかかれフェイトはプロテクションとバルディッシュで受けるが、その重さに思わず声をあげて驚く。

元々この魔法は相手のバリアを文字通り「叩き割る」目的で作られたものだ。すでにプロテクションを破壊し、バルディッシュもミシミ音を立てている。

もう片方で迫ってくるスバルを追い払いながら、フェイトに集中する。

この力……去年と段違いすぎる!?! なんてことすればここまで力がつくの!?!

ここ四年、めつきりサリエルと手合わせすることが少なくなったフェイトはいかにも重そうに見えるハドウン・ブレイカーを片手で空気のようには扱うサリエルに驚愕する。

訓練を欠かしていないとはいえ、ここまで力に差が出てくるなんて

……悔しい。

ハーケンスラッシュからジェットザンバーに切り替えて、真っ向から斬り結ぶ。

二つの魔力刃が交差するたびに激しく魔力の残滓が飛び散る。どちらも死力を尽くしているのが目に見えて分かる。

スバルはこの二人の斬り合いに入ることが出来ずにいた……というか、入れないのだ。

援護しようとしてもクロスレンジだと誘導されて同士討ちという最悪な事態も考えられるし、何よりこの目でも微かにしか捕らえられない高速の斬り合いに飛び込んでいけばこちらが活け作りにされてしまう。

リボルバーシユートなどでの援護も考えたが、返って邪魔するだけだ。

このままなにもせず立っているか、無理を承知で援護に行くか、フェイトに任せて他のフォローに回るか……決断に迫られる。

数瞬悩んだ後、フェイトが善戦しているのを見て他の所をカバーしに行く選択をした。

それを横目で見たフェイトも納得した。今なら自分一人でサリエルを押さえておける。スバルは他の所に回った方が確実でいい。

……それにこの斬り合いを止めたくない。これほど体が温まってキレがあるのは久しぶりだ。

「はぁあっ!!」

「ぐっ!?!」

一瞬の隙を突いて、ザンバーの側面がサリエルの肩を叩くがそれに怯むことなく、サリエルは攻撃の手を緩めない。

片方の剣でバルディツシュを押さえながら、フェイトを斬る。プロテクションで弾かれなかったがそれを粉碎してダメージを与えることが出来た。

そしてサリエルもまた、フェイトとの斬り合いで血を滾らせている。ここ一年間で一番身体が動いているし、キレがある。

何より本気を出せているという充実感がサリエルの動きに躍動感を与える。自分の実力より一歩先を行くフェイトとこれほどまで斬り合えているのだから当たり前だ。

やっぱりフェイトは強いや……会心の攻撃を入れているのに一度しか有効打を取らせてもらえない。しかもこちらが一瞬でも隙を見せ

れば、そこを的確に突いてくる。

このままやり合っていたら、さらなる高みに連れて行ってくれるだろう……しかし、もうそれは叶わないな。

自分のライフを確認してみると、すでに三桁……それも500を切っている。

対してフェイトのライフはまだまだ2100とたつぷり残っている。

このままやり合っていたら先に力尽きるのは俺だ。

離脱してそろそろ作戦を始めたのだが……いかんせん機がない。

今そのそぶりを見せるだけで墜とされるだろう。

せめて誰か俺の方に加勢に来てくれれば離脱できるのだが……

と、思ったその時。

「フェイトさん、援護します!!」

「ユウ君!? 来ちゃダメっ!!」

フェイトが警告するが時すでに遅し……サリエルはフェイトにフラッシュ・マインを使い目をくらませ、フォトン・ステップを使ってユウに向かって突進する。

「おわっ!?!」

何とか突進を避けるユウだが、すれ違い様に攻撃されて体勢を崩す。その隙にサリエルは一気に離脱して、またも姿をくらませた。

ようやく目が見えるようになったが、逃した獲物は大きかった。後5分ほど斬り合っていたら間違いなく落とせたのに……

ユウも体勢を立て直して追おうとするが姿の見えないサリエルを追うのは無理がある。隠密行動スキルを持ち合わせているから探すのにも一苦労だ。

「フェイトさん、ユウ……聞こえますか?」

「うん。ごめん……サリエルを逃しちゃった。だけどライフをかなり削れたから後一步だね」

「サリエルが隠れた……か。そのまま二人で後衛攻めに向かってください。フェイトさんはなのはさんを、ユウはキャロと治療中のコナを」

「了解ッ！！」

すぐさまフェイトは飛び立ち、ユウは演習場を駆ける。横を確認してみるとエリオとスバルがノーヴェ、ヴィヴィオ、リオといい勝負をしている。しかし突破するにはまだまだ時間が必要みたいだ。

これならアインハルトが復帰するまでの時間を稼げる。その間に私はなのはを落としてみせる！！

フェイトが意気込んでいる一方、何とか離脱できたサリエルは作戦ポイントに到着する。

ライフはとつくに三桁……作戦を発動するにはちょうどいい頃合いだ。

「全員に通達。ライフが三桁切ったので作戦を発動する。全員手はず通りに頼むぜ？」

『了解ッ！！』

「さて俺も……ヘルメス、バスターモード」

『All right . Change Gunner Form
and Buster Mode』

アサルトフォームからガンナーフォームに切り替わり、またヘルメスも巨大な短身の手持ち型のキャノン砲に……グラディアスも長大な砲身を変わってヘルメスとドッキングする。

このバスターフォーム……昨年の年明けより取り組んでいるマスターオブブレイカーソードに変わる自身の必殺技として開発した唯一の砲撃魔法を行使するためのフォームである。

本体となるヘルメスが魔法の行使とその反動や弾道計算、サリエルにかかる負荷を軽減する役目を……砲身となるグラディアスが収束、拡散、出力調整と言った細かい制御を担当する。

だが、まだまだ開発途上でしかもサリエルが今まで砲撃を使用してこなかったので1からノウハウを構築していかなければならなかった。ミッドチルダ式の砲撃では誰もが使ってるが故に対策も取られやすい。

演習場中央に照準を定め、グラディアスがバイポット代わりに二本のアンカーを地面に撃ち込む。これで発射態勢がなった。

「集束開始」

『All right』

砲身の前で弾核が形成され、周りの魔力残滓を集めながら徐々に大きくなっていく。

今回が初使用………どういふ結果をもたらすかは分からないが、まず相手側は一網打尽に出来るだろう。

まあ、俺の身体にも何らかの異変は間違いなく出るだろうけどな。誰が残っていたら一発で撃墜だ。

だからこそ、俺がいる場所にたどり着くまでにトラップを仕掛けておいた。

にやりと笑いながら、集束を続ける。最大出力まで集束するのにはまだまだ時間がかかる。

一方、スバル達の援護をしていたティアナは、消えたサリエルに動きがないことを不審に思う。

変ねえ………普通ならここら辺で仕掛けてきてもおかしくないはずなのに………

それに向こうはなのはさんの援護射撃も止まっている………それに心なしか、戦線を中央に移動させられている気もするわ。

ノーヴェ達は若干だが後ろに下がりながら戦闘をしている。まるで

どこかに誘導するかのように……
援護射撃をしながらティアナは考える。

「ティアナさん、遅れましたが復帰しました」

「よし、ならこのまま後衛攻めしているフェイトさん達の所に……」

アインハルトを後衛攻めに行かせようとした時、ティアナの横目に何かピンクの魔力光が膨れあがっているのが見えた。

ハツとなつとすぐさまその方向に目を向けてみると、なのはがスターライトブレイカーの準備に入っていた。その横でバインドによって捕獲させているフェイトが……

「マズい！？ 今撃ち込まれたら全滅は免れない！！ 何とかして止めないと……」

と、動き出そうとするがルーテシアから通信が入る。

「ティアナ、私から見て11時の方向に巨大な魔力反応を感知！！」

誰かが砲撃魔法を使おうとしているわ！！」

「なんですって！？ でも一体誰が……」

ルーテシアから見て11時方向……私から見たら7時方向。確かに誰かが集束しているのが分かる。

しかし、青組にはなのはさん以外に砲撃魔法が使えるのはヴィヴィオくらいだが……現にヴィヴィオはスバル達と戦っている。

……考えられる可能性は一つ。サリエルしかない！！

「スバル、アインハルト、すぐにあそこで砲撃準備しているサリエルを撃破して！！」

「えっ、でも今はっ」

「早く！！ このままだとなのはさんとサリエルから十字砲撃を撃たれて私達は全滅よ！！」

クロスファイア

「分かったっ!!」
「コウ、後衛攻めはやめ!! こっちのフォローに回ってきて!!」
「ですが、コロナの攻撃が激しくて……」
「何とか引き付けながら……頑張つて!!」
「りよ、了解ッ!!」

ティアナもスターライトブレイカーを相殺しようとチャージを開始しようとするが……諦めて、直接なのはさんを倒そうと前に出た。今からチャージして相殺できたとしても横からサリエルの砲撃で倒される。なら、サリエルはスバル達に任せてなのはさんを倒せば、万事解決だ。

幸い手が止まっている今なら楽に倒せる。他のみんなは、中央で手一杯……

ティアナはフィールドを駆けるが、降り注ぐ魔力弾に足を止めざるを得なかった。

「誰ッ!?!」

「私です、ティアさん!!」

「キャ、キャロ!?!」

「なのはさんのところには行かせません!! シューティング・レイ!!」

さらに降り注ぐ魔力弾にさすがのティアナも下がりが、応戦する。

時間が1秒でも惜しい時にこの足止め……強行突破してもいいがそれ相応のダメージを覚悟して行かなければならない。

一方、スバルとアインハルトはサリエルを見つけるが……

「……この広い通りの奥にぽつんと一人」

「間違いない罫を張っているでしょうね。どうぞ来てくださいますとばかりに誘ってますから」

「けど行かないと始まらない」

「最低どちらかを止めないと私達チームの敗北は必須ですからね…
…行きましようー!!」

二人は全速力で通りを走り抜けようとする。しかし、燕の羽がその行き先を阻もうとする。

「くっ!?!」

「アインハルト、落ち着いて。サリエルの魔力刃はそれほど威力がないから少々無視して一気に抜けよう!!」

「分かりました」

そこから次々と刃が降り注ぐが、適度に払いのけながら前に突き進んでいく。

その様子を砲撃を用意しているサリエルの目にも飛び込んできた。

「まずいな…ヘルメス、あと何パーセントだ？」

『後19%でチャージ完了です』

「…最悪、95%で撃つぞ。それでもデータは得られる」

『了解です』

『マスター、どうしても拡散率が下がりません。このままでは収束しきれずに威力が分散する可能性があります』

「できる限り、調整を続けてくれ。最低限の収束が出来れば何とかなる」

スバル達がここにたどり着くまでにチャージが完了するかは微妙だ。罫を仕掛けてあると言っても、スワローブレイカーのみだからな…
…後は隣に浮いている星の光だが、これは撃つた後の保険として使いたい。

そうこうしているうちにもスバル達は近づいてくる。あと一分もし

たら、自分の距離に入ってくるだろう。

「こちらなのは、キャラロがティアナを足止めしてくれている間にチャージが完了したよ。そっちはどう?」

「あと……8%で完了です。合図はどうします?」

「そっちに任せるよ」

「では、通信で合わせましょう」

と、繋いでいる間にもスバル達は眼前まで迫ってきた。間に合わないか……

仕方がない。チャージしきれなかったけど、撃つしかねえ!!

「なのはさん、お願いします!!」

「よし……スターライト……」

「ヴァリアブル……」

「ブレイカアーツ……」

直後、桃色の砲撃と蒼色の砲撃がフィールドに奔った。

巨大な破壊の奔流は中央で戦っていた物達を巻き込み……十字の焼き跡を刻みつける。

その光景もさることながら、砲撃をクロスファイアで使おうと考えたサリエルも悪魔的思考を持っている。

もつとも……砲撃は範囲が広いため、味方も巻き込まれるが。

奔流が収まり、爆煙が晴れてくると……瓦礫の上でルーテシア、ユウ、エリオ、ノーヴェ、ヴィヴィオ、リオ、コロナが目を回して伸びていた。

ティアナも砲撃に巻き込まれてダウン。キャラロはティアナの最後の攻撃が直撃して撃墜。なのはは砲撃に巻き込まれる直後にバインドを解いたフェイトの最後の一撃によって撃墜。言わずもがなフェイトも巻き込まれて撃墜。

残ったのは……

「あ……やっぱり反動はあるな」

『魔力再チャージまで一切の行動は出来ませんからね……一応残っているトラップの発動は可能ですが』

『やはり収束率をもっと上げないと威力が伸びません。それにマスタアの身体にも負担が大きすぎますし、他にも色々問題が……』

「それはおいおいウーノと一緒に解決していこう。さて、終わりのはずだが？」

巻き込まれたとしても明らかになのはさんの砲撃外にいた俺だけが残っているはずで、とっくに終了のブザーが鳴ってもおかしくないのだが……

目の前の爆煙も晴れてきて、見えてきたのは……無傷のインハルトと、インハルトを身を挺して守ったスバルの姿だ。インハルトに至ってはほぼ無傷……先ほどと同じ状況だ。

いや、今回はこちらにヴィヴィオは残っていない。本当の生き残りは俺とインハルトだけ。

「チツ……最後に残るのがまたお前だなんてな」

「へっへっん……見た？　これがレスキュー魂だよ！！」

「庇いきるスバルもスバルだが……まあいい。来なよ、これが本当に最後だぜ？」

「言われなくても！！」

インハルトは大地を蹴ってサリエルを肉薄する。動けないサリエルはせめてもの抵抗で砲身をインハルトに向けるが、なんの威嚇にもならない。

拳を振りかぶり、最後の―撃を決め込もうとした時、インハルトは気づく。

なぜ防御さえしようとしなののか？ この人の性格ならまだ抵抗して
てくるはずなのに……

魔力切れ？ 砲撃の反動？ だったら好都合。ここで終わらせる。
勢いよく打ち出された拳がサリエルに……届くことはなかった。最
後に残っていた星の光がアインハルトの身体を撃ち抜いたからだ。
まさかここで……最後の最後まで抜け目が無い人。

地面に打ちのめされて、ここで終了のブザーが甲高くフィールドに
木霊した。

第十教導 二試合目……蒼の重騎士、駆ける！！（後書き）

どうでしたか？

サリエルの狡猾さ、勝利への飽くなき執着心を感じ取ってもらえたら嬉しいです。

しかし、他のメンバーを動かすのがめっちゃむずかしい。集団戦闘に関してはまだまだ練習が必要ですね。

それでは次回は、休息と最終日の模様をお送りしたいと思います

第十一教導 安らぎ……思い思いの休息（前書き）

作者「もう……二週間に一回更新になっちゃったよ……」

サリエル「就活もあるし仕方がないと言えば仕方がないが……もうちょっとがんばれないか？」

作者「がんばりたいよ！！ だけど……所々詰まっちゃっんだよ！！」

サリエル「うーん……なんでかな？ ネタはあるんだろ？」

作者「とりあえず最新刊までとその後の番外編的な物は考えている……」

サリエル「それを文章に起こすのが難しいか……書け！！ 書き続けるんだ！！」

作者「それしかないよね。それでは、どうぞ閲覧してください」

サリエル「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ！！」

第十一教導 安らぎ……思い思いの休息

二試合目は最後までもつれ込んだが、最終的にサリエルの機転により青組が勝った。

その後昼食を挟んで第三試合が行われ、その試合も前の二試合と遜色ないほど盛り上がった。

そして、日が暮れて夜が見えだした頃……戦いを終えたみんなは思い思いに疲れを癒やしながらくつろいでいた。

「さすがに3連戦はきついわねえ」

「ホントだね」

露天風呂から上がり、リクライニングチェアでゆっくりとしているティアナとスバル。

多少の疲れが見えるものの、先ほどの戦いに十分な成果が得られたようだ。

「でも、おかげさまで大分実戦勘が戻ったかも」

「よかったよかった……あっ、ノーヴェ、みんなはどうしてた？」

「さすがに年少組はぐったりしていたぜ。今頃ベットの上で動けなくなっているだろうな。フェイトさん一家は部屋でのんびりしてるし、なのはさんとメガー又さんはキッチンで談笑中。それでサリエルが……まだガリユーとやり合ってるぜ」

「……あいつが人一倍動いていた癖にまだ動くの？」

「ホント、少しは休めばいいのに……」

「あいつなりの訓練方法なんだろう？ なのはさんとメガー又さんが談笑してるって言ったけど、下ごしらえしながらだったからな。多分夜も食っていないサリエル用の夕飯だと思うぜ」

「はあ……そこまでして強くなりたいのかしら？」

「……………」

ノーヴェは理由を知っている。サリエルに残された時間が少ないからああやって自らの時間を削るかのごとく訓練しているのだと……負け続けてきた人生の中でようやく見つけた大切な人、場所を守る。それには強さがある。しかも明確な相手がいるわけでもないので、常に最高の物を求めていかなければならない。

そのつらさが伝わってくるのは、あの時サリエルがポツリと話してくれた古傷の事を聞いたから、感じられるんだ。

人に頼ればいいのと思うが、あいつ自身こういったことを人に頼るのは嫌いだろっし、自分でなんでもやるうとする癖がある。

だから、周りはさりげなくフォローしていけばいい。フェイトさんもそれが分かっているし、姉貴達も昔からそうしている。

「まあ、あいつにはあいつなりの考えがあってああやって頑張ってるんだ」

「そうだね。いざというときは頼りになるし」

「変に気を遣ってウザがられるよりはましか……………」

ノーヴェ達が談笑している一方、二階ではうめき声が響いていた。

「う……………腕が上がらない」

「起きられない……………」

「……………動けません」

「ほ、ほんとに……………」

「……………ヤヴァイ……………」

「限界を超えて張り切る過ぎるからだよ」

年少組のヴィヴィオ、アインハルト、リオ、コロナ、ユウはベットの上で寝っ転がって身体の悲鳴に呻いていた。

その様子を年長者の余裕を見せつつ、心配そうに見つめるルーテシア。

「ルーちゃん、何で平気なの〜?」

「そこはそれ、年長者なりのペース配分がね」

「……すげえ」

「みんなもそのうち分かってくるわよ。サリエルなんかまだガリユーと訓練しているみたいだし」

「あれだけ動いて……砲撃撃って……そこからまだ訓練だなんて……」

底なしの体力を持つサリエルに全員が驚愕して口をあんぐりとさせてしまう。

しかし、すぐにおしゃべりが再開して今日の陸戦試合の話をし始める。

……それにしても、この子達はやっぱりすごいな。

コロナさんのゴーレム創成と操作、リオさんの独特の魔法戦技、そしてヴィヴィオさんのカウンター。

特に一戦目で喰らったあの右拳昇打はすごかった。不思議な加速で飛んできた……反撃できたのも完全に偶然、一瞬で意識を遮断された。

それにサリエルさんの防御スキル、剣技、トラップの仕掛け方も目を見張る物を感じた。そして、そこでまだ底を感じさせない強さにも再三驚かされた。

みんなの総評をしながらじっとヴィヴィオを見つめているアインハルトに気づいたのか、ヴィヴィオがごろんとアインハルトの方に寝返りを打つ。

「アインハルトさん、どうかしました?」

「え……あっ、いえ……なんでもありません」

顔を赤らめて、ヴィヴィオの顔が予想以上に近いことを恥ずかしがる。

その頃、サリエルはガリユーにグラディアスを突き付けて、勝利を宣告していた。

ようやく今回の合宿メニューが終了して、グラディアスをしまいなから安堵のため息をついた。

「よし……ガリユー、お前との対戦結果は19勝11敗か。ここまですぐで付き合ってくれてありがとな」

「……」

「お前も疲れただろうから、ゆっくり休んでな。さて、俺は風呂に行くとするか……」

疲れをほぐすかのように肩を回すサリエルをその場で見送って、ガリユーは少しばかり歩く。

しかし、数歩歩いただけで近くにあった木にへたり込む。さすがのガリユーもサリエルに付き合わされて相当疲れたようだ。

ロッジに戻ったサリエルはすぐさま脱衣所に向かい、汗びっしょりの服をポンポン脱いで風呂に向かう。

汗を一通り流したら、湯船にゆっくりつかって大きく息をつく。

やっと終わったか……今回は一段とつらかったな。

膝をさすりながら、脚全体を自分でマッサージしていく。今日はフットン・ステップを多く使ったから膝も脚もパンパンになっている。湯船から上がり、腰にタオルを巻いてゆっくりとストレッチする。体温が高く、周りが蒸気で囲まれているここならかちかちに固まった筋肉もほぐしやすい。

グググと反動をつけて筋をしっかり伸ばし、筋肉の緊張を解いていく。この緊張が解ける瞬間が何とも心地よいことか……

一通りし終わって、もう一度身体を湯で流して脱衣所に戻っていく。簡単に着替え終わるとタイミングを計ったかのようにウーノが遠慮無しに入ってきた。

「お疲れ様です。ドリンクをお持ちしました」

「サンキュ。メシは？」

「今、メガーヌさんとなのはが作っています。もう少し待っていてください」

「へい……」

受け取ったドリンクを一気に喉に流し込んで、水分が少なくなっていた体内を一気に潤す。

甘めのドリンクが染み渡るのを感じながら服を着ていく。

「あつ、ウーノ。今日の砲撃どうだった？」

「データは取れました。軽く見てみましたが、やはりまだまだ完成にはほど遠いですね」

「だよな……拡散率を上げると威力が分散するし、かと言って収束率を上げすぎるとただのレーザーみたいな細い砲撃になっちゃうんだよな」

「他にも反動やデバイスへの負担、チャージ時間など改善が必要になつてきますね」

「そこら辺はこれからじっくり取り組んでいこう」

「はい。それと……」

「ん？」

「え……その……もしよかったら、身体をほぐすマッサージでもしてあげましょうか？」

何ともまあ珍しい。あのウーノが俺にマッサージとな？

普段そつという事を言ってくるような奴じゃないのに今日はどういっ

た心変わりなのだろう。

「前にシャルマル女医と話をする機会がありました……」

「俺の身体の状態を聞いたと？」

「……はい。ですから、少しでも力になればと思います……サリエルが倒れでもしたら、母様を始めいろんな人が悲しみますから……」

「そういう事ならしてもらおうかな？ どこでする？」

「リビングなら今空いてますからそこでしましょう」

「了解」

伸びをして、二人一緒に脱衣所を出る。今思えばウーノがこうやって積極的に何かをしてくれるのは初めての経験かも知れない。

普段はもうちょっと素っ気なく、このように自ら何かをするっていうタイプではない。

四年という年月がこのようにウーノの性格を丸くしてくれたのだろうか？ それだったら全然いいのだが……

リビングについて、カーペットが引いてある場所につつぶせになって寝転がり、その横にウーノがちょこんと座って脚をマッサージし始める。

「サリエルくん、ご飯もうちょっとで出来るから待っていてね」

「マッサージされているんでいくらでも待ちます」

「今日は結構フォトン・ステップ使ったもんね。痛む？」

「大丈夫です。そこら辺の自己管理はしっかりしていますので……」

キッチンからメガーヌさんとなのはさんの声が聞こえて、返事を返す。あとちょっとでご飯か……腹減ったな。

それにしてもウーノのマッサージは本当に気持ちいい。的確に張っている部分を探り当て丹念にほぐしていく。時折ツボを刺激して普

段気づかないようなコリもほぐしてくれる。
膝を中心にマッサージを受けて、とろけていると二階からフェイトが降りてきた。

「あれ、サリエル？ なにしてるの？」

「マッサージ受けてんの。これが気持ちいいったら……」

「……ふうん」

「エリオとキヤロは？」

「上で眠たそうにしていたよ。あの様子だと戻る頃には眠っちゃってるね」

フェイトはジトツとウーノを見た後、キッチンに向かいなのは達の手伝いに加わる。

「まずい……若干嫉妬しているな。明日きっちり埋め合わせしておかないと……」

ウーノもその視線に気づいたようで、最後に一揉みしてマッサージを切り上げた。

張りが残っていた筋肉もほぐされて、先ほどより身体が軽く感じられる。膝の痛みも大分治まった。

立ち上がってテーブルについてメシを待つ。

「そういえば今回の総評はどうでしたか？ サリエル教導官？」

「何でそんな改まって……そうですね、チビ達に関しては相当レベルは高いですよ。スバル達もそれほど腕は落ちていませんでしたし、何かと収穫はあったと思いますね」

「ヴィヴィオ達、今年からインターミドルに出られるけど正直な話……どこまで行けそう？」

「……まあ、エリートクラスまではいけるでしょう。そこから先は難しいでしょうね」

「えっ、ヴィヴィオ達ならもっと上まで目指せそうだけど……」

「そう思うだろうけど実際の所は大違いだぞ、フェイト。エリートクラスになれば、ヴィヴィオぐらいの実力者は掃いて捨てるほどいるし今すぐにも前線で戦えるぐらいの実力を持った奴もいるんだ。まだまだ成長過程にいるヴィヴィオ達がそういう猛者達に叶う道理はない」

去年、地区予選準決勝当たりから見えていたが近年の競技者のレベルは本当に高い。まだ十代前半だというのに自分の魔法を完成させている才能豊かな子もいれば、大人顔負けの実力を持っている子もいた。

その中に今年からヴィヴィオ達が飛び込んでいく。どこまでも真剣で苛烈な戦いの舞台に……

そこで始めて知ることになる。悔しくて毎晩眠れなくなるであろう本当の敗北を……悔しさをバネに全てを犠牲にしても勝ちたいという執着心を……その先に待っているであろう全身が震えるであろう勝利を……

サリエルはふと自分もこういう世界から入っていったらどんなにこの人生が変わっていたらと思う。

競い合える仲間がいて、勝ちたいライバルがいて、毎日張りのある日々を送れたに違いない。決してあんなどろどろしている世界とは無縁だった。

……過ぎたことを思っても仕方がないか。

「サリエルのお弟子さんはどこまで行けそう？」

「そうだな……組み合わせさえよければ地区予選準決勝にはいけるだろうな。アレはアレで相当強いし、才能もある」

「あつ、随分と自信があるんだね？」

「そりゃ、俺が一年間教えましたから……今年のインターミドルで台風の目になりますよ」

それにできればヴィヴィオ達と同じ組になって欲しいものだ。俺の思惑としては、同年代の相手に負けて敗北を知って欲しい。そこから得られるものは多数あるし、何より火がつく。負けず嫌いのヴィヴィオだったらなおさらだ。俺の弟子と戦ってより一層ストライクアーツに打ち込んでもらいたい。

「フフフツ、期待しているね。はい、出来ました」

「よしっ……では、いただきます!!」

テーブルに並べられた数々の料理にどんぶり山盛りのご飯、ジョッキになみなみつがれたお茶を目の前にサリエルは気合のいただきますとは正反対に驚くほど静かに食べ始めた。

軽く五人前もあった料理が次々と消えていく。山盛りだったご飯も見る見るうちにその山が低くなっていく。

スバルもビックリな光景だが、旅行ではいつものことなのでウーノを除いたみんなはサリエルの食べる姿を微笑ましく見ていた。逆にウーノは面を喰らったかのようにその姿を凝視している。

そして30分後、ジョッキにつがれていたお茶を一気に飲み干してごちそうさまをする。

「ふう……食った食った」

「あれだけ食べて、大丈夫なのですか？　いつもの倍以上食べていましたけど……」

「旅行の訓練後はいつもこんなもんだ。体力が枯渇しているし、オーバーワーク寸前で筋肉がタンパク質を欲しているしな。あとはぐっすり寝て超回復を待つさ」

サリエルは立ち上がって、リビングにいる全員に寝ることを伝えて二階に上がっていった。

ようやく一段落ついたリビングに安息の時が訪れる。なのはとメガ

「又さんも二階でごろごろしているヴィヴィオ達にジュースを持って行った。

残ったフェイトとウーノは互いに言葉をかけることなく、まったり……いや、少しピリピリした雰囲気醸し出していた。

そんな雰囲気嫌ったのか、ウーノは未だ手つかずだった自分の荷物からある物を取り出した。

「フェイト、姉様から頂いた物なのですが……どうですか？」

「……お酒？」

取り出したのはワイン。しかも見た感じ結構年代物のようだ。

フェイト自身あまり飲酒はしないので、それほど酒が好きなのではない。

ウーノはどれほど飲めるか分からないけど……いい機会だから、付き合おうかな。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

「ありがとうございます。それでは、外で飲みましょうか？」

二人分のワイングラスを棚から下ろして、外のテーブルに二人は座る。夜風が疲れた身体を気持ちよく撫でる。

ウーノがフェイトのグラスにワインをつぎ、自分のグラスにもつぐ。

「……家族に、乾杯」

「乾杯」

チンとグラスを合わせて一口含んでみると……甘い香りが鼻から抜けてきた。

てつきり相当苦い物だと思っていたが呑んでみると案外そんな事はなかった。さすがはマリーナさんの見立てだ。

もう一口飲んでグラスをテーブルに置く。ウーノはすでに一杯目を飲み終えて、新たについていた。

「……先ほどは申し訳ありませんでした」

「えっ、私謝れるようなことはしてないけど……」

「サリエルのことです。あなたに許可無くマッサージしていたので少し怒ったのではないかと？」

「……ああ」

確かにいい気分はしなかった。言ってくれば自分がしてあげたのにも思った。

嫉妬はだめだと思っている。だけど、どうしてもサリエルが他の女の人と接していると心がざわついてしまう。

私って、こんなに嫌な女だったのかな……

「ごめんね。自分でも悪いって分かっているんだけど……」

「しょうがないですよ。私だって一応女ですからそういう感情はわかります」

「どうしてもね、気になっちゃって……サリエルって誰にでも優しいからもしかして気があるんじゃないのかなって思っ……」

「……フェイトはあの人のどこが好きになったのですか？」

「えっ？」

いきなりの話題転換に呆気を取られるがすぐに言葉の意味を理解した。

普段の時に言うにはちょっと恥ずかしいけれど……今は家族二人、しかもお酒が入っている。

ウーノとの親交を深めるにはもってこいかな。

「そうね……一見一匹狼に見えるけど、実は仲間思いで自分の弱い

ところをしつかり受け入れている所……かな？」

「弱いところを受け入れている？」

「うん。サリエルって弱音をめつたに吐かないし、冷静だけど昔は違ったの。六課にやってきた時の印象は、シユバリエネットワーク事件唯一の被害者なのに明るく振る舞えているから強い子だなんて見えて……だけど実はその姿は仮初めで必死に昔の自分を隠している姿で、段々それが分かってくると何とか昔のサリエル……ラグナの感情が知りたくなっていったって、ドミニランスに始めて負けた後私だけに弱い自分を見せてくれた。それからかな？ サリエルを支えてあげたいって考え始めて、気づいたら好きになっちゃった」

「そんなことが……」

私はその頃敵対していたのだから知らなくて当然だ。今のサリエルの良さを知っていても昔のことは知らない。

これが昔から知っているアドバンテージってものですね。ちょっと悔しいと思いつつも、仕方がないと納得をする。

「……ウーノってサリエルの事が好きなの？」

「……はい」

「やっぱり。なんとなくそうかなって思っていたけど、そうだったんだ」

「……申し訳ありません」

すでに見透かされていたとは、さすがは妻の勘と言ったところか。フェイトからすれば、すでに自分がいるのにサリエルの事を好きになるのは甚だおかしいと思っただろう。

嫌われても仕方がない。私には謝ることしかできない。

しかし、次に出てきた言葉は罵倒でも侮蔑の言葉でもなかった。

「謝らなくていいんだよ。だって、あんなことがあっても分け隔て

なく優しく接してくれたなら私だって好きになっちゃおうよ」

「えっ？」

「一度仲間として認めたらとことん付き合おうのがサリエルだから……難しい立場にいたウーノ達の事は人一倍気にかけていたし。私ばかり聞かれるのもなんだから、ウーノはサリエルのどこを好きになったの？」

「見ていないようでちゃんと見ているところですかね。それだけ相手のことを思っているのが分かります。私なんか最初の頃はドクターと妹達しか信じていませんでした。その中でサリエルは常に私達のことを考えてくれていて、だけど私達の前では何もしていないと嘯くのです。謙遜というか……変に気取ってないと言いますか？そこに惹かれましたね」

「そっかそか。だけど、好きだって言ってもサリエルをあげる訳じゃないんだからね？ あれは私の夫で世界で一番大切な人なんだから」

「分かっています。私は内助の功に徹しますから」

フェイトがここまで自己主張してくるのは珍しい。それほどサリエルのことを愛しているからだろうか？

私も盗ろうなんて大逸れたことは思っていない。今の関係が一番だ。普段なら恥ずかしくて言えないことも酒の力でぺらぺらと出てくるウーノもフェイトも頬を紅く上気させて、さらに身内話を展開していく。

フェイト自身あまりイシュバロンの家に行くことが少ないので、エリアのことやグライドのことを知るにいい機会だった。

二人が楽しそうに酒を飲み交わす姿を、二階から降りてきたメガー又となのはが微笑ましく見守る。

四年前まではお互いに敵対し、憎み合っていた者がここまで打ち解けているのは本当に一つの奇跡だ。

人生何がどうなるか本当に分からない。そのことを強く実感する旅

行二日目の夜だった……

夜もすっかり更け、月が西に向かって降り始めた頃、アインハルトは不意に目が覚めた。

中途半端に寝てしまったせい、こんな時間に起きてしまった。再度眠るにも少々時間がかかりそうだ。

他のみんなを起こさないようにそっとベットから降り、窓に映る月を見ている。その時に目に映ったのは外で夜風に当たっているサリエルだった。

こんな時間になぜ……と思いながら、上着を羽織って外に出て行く。

「どうしたのですか？」

「ん、アインハルトか……いや、中途半端に目が覚めちゃってな。

お前もそのクチか？」

「はい……」

「……インターミドルに出るんだろ？」

「はい。ヴィヴィオさん達の話聞いて、私も出てみたいと思いましたが」

「いいことだ。お前のような頭の硬い奴はああいうところできつちよ揉まれてみるのが一番いい。経験にもなるしな」

頭が硬いとは失礼な……確かに硬いかも知れませんが。

しかし、インターミドルの話聞いた時心が沸き立った。

あんなに動いて、身体はもうクタクタだったのに新しい戦いがあると聞いて、まだ見ぬ強い相手がいると知ったら……グンと体温が上がった。

サリエルさんにもそういう経験があったのだろうか？ これほど強さを求めているのだから一度や二度はあったはず。

「サリエルさんは強い人と戦う時、どのような思いをしますか？」

「ん？ もうちょっとわかりやすく言ってくれないか？」

「ええっと……そうですね。強い人と戦う時に血が滾ったり、体温が上がったりすることはあるって聞きたいのですけど……」

「ああ、そういう意味か。OKOK……そうだな、俺が強い奴と戦う時は二つの変化がある」

「二つ？」

「一つはなのはさん達やライバルのドミニランスと戦う時。体中がかあぐって熱くなったり、心が沸き踊るったりするんだ。もう一つは民間人を平気で殺したりするような凶悪犯やJ.S事件の首謀者、スカリエツィなどの犯罪者と対峙する時。この場合、血が滾ったりなんかしない。逆に渴くんだ」

「渴いていく？」

「そう。そういう奴らと戦う時は血や心が一気に渴いていって……一つの戦闘兵器として成り立たせるんだ。ま、こういう経験は無いだろうから分からないと思うが？」

「……ちよっと、分からないです」

渴いていくって……普通はどんな相手にしろ熱くなるものだが……
一体サリエルさんの感じ方はなんなのだろうか？

「どんな相手にも熱くなる。それはそれでいいことだが、一歩間違えれば戦闘狂に墜ちてしまう。俺も結構そういう人を見てきたが……
バトルジャンキ
…大抵は人殺しになつていたよ」

「人殺しに……ですか？」

「強者を倒しても倒しても収まらない戦闘衝動。それを他の物で抑えようとして、血を欲しがる。だから人を斬る。一時的に衝動が収まっても次の衝動は前のより激しい物へと変わって、より多くの人を斬る。そしてそのサイクルは永遠に続く」

「……わたしがそれになるとも？」

「いや、アインハルトは確かにその気があるが限りなくこっち側の

人間だ。安心しな」

だからサリエルさんは二つの変化があるんだ……

なのはさん達……つまり仲間内では血を滾らせ、凶悪犯には自らの罪を知ってもらったためにただ冷酷に戦うのだから。

自分が修羅へ墜ちないために、しっかりと感情を制御している。

まだ20代前後というのにすごいメンタルコントロールを持っているのだ。

「それは置いといて……どうだ、見出せそうか？」

一瞬何をと思ったがすぐに分かった。自分の拳に目を落とす。

サリエルさんに言われた拳の意味……自分はなんのために拳を振るい、なんのために戦うのか。

さすがに昨日の今日で見出せるはずもない。しかし、道は何となくが見えている。

その最初のステップはインターミドルの舞台でヴィヴィオさんともう一度拳を合わせる事。

それが終わった後に何が待っているかは分からない。だけど……多少の期待感と高揚感はある。

「私は今まで昔の霸王みたいに命を賭けた戦いを続けていかなければ、彼の悲願にたどり着けないと思っていました……だけど、今日の手合わせやヴィヴィオさん達が教えてくれた公式魔法戦の舞台を知って、間違っていると気づきました」

「……」

「私の悲願は変わりません。ですが、ヴィヴィオさん達と一緒に競い合って……いつかクラウドに追いつき、追い越し、あの日のオリヴィエ殿下より強くなって……私達の悲願を叶えるために頑張っていこうと思います」

「……焦りが思いへと変わり、自分の歩もうとした道が間違っていることに気づいたか……ま、それで上出来だ」

「はい……まだ遠い未来かも知れませんが、いつか自分の拳の意味を見出せると思いました」

「上等上等。よし、アインハルト。手を出してくれ。」

何をするか分からないが言われたとおりに手を出してみる。

すると、サリエルさんは私の手首をしっかりと掴んでくる。何となく私もそれに倣って手首を掴み返す。

太く、強そうな手首……だからこそクロスレンジでの粘り強さがあるのだろう。

「これは俺が絆を繋ぐ時のちよつとした儀式さ。アインハルト、今日からお前は俺の友として、戦友にして、教え子だ。お前の身に何かあればすぐに駆けつけ、迷った時は背中を押す」

「っ……ありがとうございます!!」

「知りたいことや教わりたい技術があれば何でも聞いてこい。あつ、恋愛事は勘弁な？俺はほとんど経験がない」

「フフフッ……」

「ほら、ガキはもう寝ろ。俺はもうちよつとここにいるからさ」

「わかりました。それでは、お休みなさい」

どこか嬉しそうな表情でアインハルトはロツジに戻っていく。

それを見届けたサリエルは、羽織っていた航空隊の制服の胸ポケットから電子タバコを取り出して点火スイッチを入れる。

辺りをグレープフルーツの匂いで充満させながらサリエルはアインハルトが今後どうなるか考える。

もう喧嘩師みたいなことはしないと書いていたが、やはり過去の霸王の夢は追い続けるらしい。

つまり霸王流の強さを証明すること。結局の話、過去に囚われたま

まだ。

過去ばかり振り返っていると早い段階で成長が止まる。そう言っ
て逆に未来だけを描いていると行き詰まってくる。

今を見続けなければ強さは止まる。かと言ってこれがまた難しい。
しかし、アインハルトなら大丈夫だろう。ヴィヴィオ達という大き
な競い仲間を得たのだから……

そしていつか自分がなんのために拳を振るうかを見出した時、気づ
くはずだ。

自分の拳は……過去の偉人の悲願を達成する物ではないと。

そうなってくればいいのだが……

ひとしきり吸い終わって考えていてもしょうがないとばかりに勢い
よく立ち上がる。

さ、俺も寝よう。明日は昼までには起きてフェイトとゆっくりした
いし。

エリオとキャラロがいるが……そこら辺は空気を読んでくれるだろう。
そんな事を考えながらサリエルはロッジに戻り、合宿旅行二日目の
夜は更けていった。

次の日、昼前まで寝ていたサリエルは自分の体をしっかり点検して
下に降りていった。

ぐっすり寝たおかげで疲労はどこにもない。心なしか少しばかり身
体全体がポリリウムを増したような……

昼飯は各自弁当でとることになっていて、俺はフェイトと一緒にピ
クニックがてら外を歩くことにした。案の定エリオとキャラロは空気
を読んで二人つきりにしてくれた。

今日も快晴でそよ風が俺達を優しくなでつける。

「いい天気だね」

「そうだな」

「エリオとキャラロも来ればよかったのにね」

「だな。でもいいじゃねえか……こうやって二人で歩く時間が出てたんだから」

「うん」

エリオ達も今頃ピクニックでもしているだろう。ってか二人はもうちよつと距離を縮めて欲しい。

アレじゃまだまだおままごだ。エリオ自身奥手なので自分から行かないのは分かっている。ならキャロに頑張ってもらわないと……

「そっぴや、昨日一度戻ってきた時若干酒臭さかったけど何か飲んだ？」

「えっ！？ 私そんなに匂った!？」

「いや、気にならない程度だったけど？」

「それでもちよつとシヨツク……ウーノが持ってきてくれたワインと一緒にいろんな事を話しながら飲んでたんだ」

「なるほどね……どんなことを話したんだ？」

「いろんな事　まずね……」

フェイトの話の聞きながら、さりげなく手を握る。

気にした様子もなく握り返してくれた。あつ、ちよつとひんやりしている。

相槌を打ちながら、そろそろ腹が減ってきたので木陰でご飯を取ることにした。

バケツトを開けながらフェイトはまだ話を続ける。その顔が本当に楽しそうだ事。

入っていたサンドイッチをハムハムしながら、気持ちよさそうな芝の上に寝転がった。フェイトもなぜか俺の隣に寝転がる。

「サリエル……今回の旅行はどうだった？」

「いつもより楽しかったな。アインハルトやユウ、リオは見所ある

し、スバル達も変わっていなかった。ヴィヴィオがいつも以上に楽しそうな顔をしていたから俺的には満足だ」

「私もそう思ってた。今回の旅行は今までの物より楽しかったな〜って」

「そうだな。退屈せずに済みそうだな」

「インターミドルも近いしね。忙しくなりそう……」

そういえば今日から参加申請の受け付け開始だったよな？
とりあえず連絡入れておくか。

モニターを展開して、ある場所に通信を繋ぐ。

「……はい？」

「俺だ。サボらず訓練していたか？」

「あつ、先生！！ それはもちろん！！ 先生のメニュー通りしっかり頑張っています！！」

「それならいい。今日から参加申請が出せるけど、出るよな？」

「もちろんです！！ この日のために一年間頑張ってきたんですから！！」

「よし、じゃあ俺名義で出しておくからそれでいいな？」

「お願いします！！」

「帰ったらちゃんと稽古つけてやるからな、ナオト」

「わぁ……楽しみにしています！！」

モニターの向こうで小躍りして喜ぶ少年……ナオト・パラベラムが頭を下げて礼を言い、通信を切った。

しばらく稽古をつけてやれなかったからな。あいつにはもうちょっと構ってやりたいんだが……

「ナオト君、嬉しそうだったね」

「あんまり構ってやれないからな。上を目指す者にとって不憫な環

境なのに、あいつはよくついてきてくれている」

「素直なんだよ。それからサリエルとの稽古がすごく楽しいからあややって慕ってくれるんだよ」

「だといいいんだが……」

ヴィヴィオ達を見ながら、それに隠れてナオトを見るのは骨が折れる。さらに仕事も重なってくる。

自分が選んだ道なのに、本当に大変だ。でも泣き言なんか言ったられない。

少しでも多くの子供に技術を、経験を伝えないと……

……考えてもしょうがない。案外長いこと現役やれて結構な人数教えられるかも知れないし……とにかく今はゆっくりするか。

「さて、みんな思い思いに過ごしているし俺達もゆっくりするか」

「うん。てか、私はサリエルの隣にいられるだけで十分だな」

「おいおい……ま、俺もそうだけど」

腕を回して抱きついてきたフェイトの肩を軽く抱いて、俺達はそのままずっとしゃべり続けていた。

こうして今年の合宿旅行が終わった。長いようで短かった四日間。

水遊びに、温泉に、激しくも収穫のあった陸戦試合×3、ピクニックやのんびりタイムを思いっきり満喫した。

そしてこれが終わると激動のD S A A公式戦インターミドルが待っている。

10代でもっとも熱く、激しい戦いはもうそこまで迫っていた……

第十一教導 安らぎ……思い思いの休息（後書き）

どうでしたか？

私的にはこの回、結構うまく書けたと思うんですけど……

そしてついに出てきました。蒼の重騎士の日常もう一人の主人公、ナオト・パラベラム。

彼はもしサリエルがインターミドルに出ていたなら……と言っIF的要素も兼ね備えている人物です。

使う武器や使用する魔法は違ってくると思いますがそういう感じで見えてくれたら嬉しいです。

それでは、次回はインターミドル前の特訓風景をお送りしたいと思います。

第十二教導 特訓……足りないところを補いましょう!! (前書き)

作者「クリスマスに更新って……なんだか悲しいな(涙)」

サリエル「今日はフェイトとクリスマス……ミッドチルダで最も高いビルの展望ホールでディナーだ」

作者「……みんな、俺と一緒に幸せになればいいのに……」

サリエル「僻むな。男を下げるぞ?」

作者「うるせえ!! いいもん!! 俺にはライトニングがいるから!!」

サリエル「うわあ……今更FF13かよ。いくら続編が出たからって、それはないだろ?」

作者「ああ、ライトさんいいよ!! 厳しいけど優しいし、戦う姿がめっちゃ凛々しいからますますいい。しかも結構胸があるっていうのもポイントだな!!」

サリエル「だめだこいつ早く何とかしないと……」

作者「それは置いて……ここでお知らせです」

サリエル「一つ指摘がありましたのでこの前書きの場をお借りして伝えます。なんの指摘かというとD S A A公式戦インターミドルについてですが……私は男女混合のつもりで普通に話を進めていたところ、原作では女の子限定の大会と指摘を受けました。どうやら藤

真拓哉先生がツイッターでつぶやいていたそうです。ですから、この青の重騎士の日常で行われるD S A公式戦インターミドルは、男女混合という形を取らせていきたいと思います」

サリエル「違和感が出るかも知れないが、ここは一つパラレルワールドという事で勘弁してくれよな？」

作者「それでは、そのことを考慮して閲覧してください」

サリエル「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ！！」

作者「それではリア充の皆さん……クリスマスを楽しんで……爆発しろ！！」

サリエル「やめとけって言うのに……」

第十二教導 特訓……足りないところを補いましょう!!

四日間の合宿旅行が終わり、ここミッドチルダに帰ってきた。行きは転送できたサリエルとウーノも臨時便に同乗し、帰りもなかなか騒がしかった。

「ミッドチルダに到着」

「車回してくるからちよつと待っててね」

「帰りはバイクがないから俺も一緒に乗らないと……」

前の教導は遠くて教導した隊員に送ってもらったからな。ヘリオンは今家で待機している。

「でもみんな、明日からまた忙しくなるわね」

「インターミドルに向けてバッチリトレーニングしなきゃ」

「はいっ!! でも大丈夫です!!」

「うちの師匠コーチがトレーニングメニューを作ってくれますから!!」

「それにサリエルさんもついているしね」

五人でワイワイとインターミドルのことで盛り上がっている。

そんなヴィヴィオ達をコーチであるノーヴェがちよつと困った顔で対応するが、まんざらでもなさそうだ。

それにしても……インターミドルか。

DSA公式戦インターミドル。若い魔法戦競技者には夢の舞台。だけど、夢見る競技者が最初に「決定的な敗北」を知る場でもある。敗北を知ることはいいことだ。勝利より多くの事を教えてくれるから。

「よし、まずは選考会だ。ここでいい成績取っておかないと上に進

むのが難しくなるぜ？」

「だね！！ 選考会で成績がよかったら「エリートクラス」から地区予選がスタート出来るし……」

「地区予選を駆け上がった、都市本戦に出て……その上、都市選抜で世界代表に選ばれたら……」

「世界代表戦だな。そこまで行って優勝できれば……文句なしの「次元世界最強の10代女子」だな」

この時アインハルトの胸がドクンと高鳴る。

数多の強者を打ち倒し、駆け上がった先にあるのは最強という称号。これなら霸王流の強さを証明できるのではないか？

間違いなく証明できる。ここまで駆け上げれば……

「でもそんなのは私達にとっては遙か先の夢……」

「狙うなら10年計画で頑張らないと……」

「でもいつかきつと……」

「俺だって……いつかは……」

「そんなのじゃ、いつまで経っても世界一になんてなれねえよ」

「……えっ？」「……」

「やるからには常に上を目指す。そんな遙か先の夢だとか10年計画とかいつかとか先を見ているばかりじゃダメダメ。常に今を頑張つて、強くなつていくんだ。だから初参加の今回も死ぬ気で当たつていけ。案外いいところまで進めるかも知れねえぞ？」

「……はいっ！！」「……」

先を見たつてしょうがない。常に今を見ていかないと前に進めない。日々の小さな積み重ねが自分を強くし、その積み重ねが多い者が戦いで勝利していく。

これはいつの時代も同じだ。

「……ノーヴェさん、率直な感想を伺いたいのですが、今の私達どこまで行けると思えますか？」

「そうだな……元々ミッド中央は激戦区なんだ。DSAALの選手として能力以上に先鋭化してる奴も多い。その上での話として聞けよ……ヴィヴィオ達三人は地区予選前半まで。ノービスクラスならまだしも、エリートクラス相手じゃまず手も足も出ねー。インハルトとユウもいいとこ地区予選の真ん中へんまで。エリートクラスを勝ち抜くことは難しいだろうな」

やはりノーヴェも同じ見立てか……

強いと言ってもヴィヴィオ達はまだ10歳なのだ。先に生まれ戦いに身を投じてきた者に勝てる道理はほとんど無い。番狂わせもあるかも知れないがそちらは宝くじに当たるくらいの確率だ。

インハルトもまだまだ荒削りな部分がある。ユウも同じく……

「……でも、まだ二ヶ月あるよね！？ その間、全力で鍛えたら？」

「相手も鍛えてくるからまあどうなるかは分からないな」

「あたしもサリエルも勝つための練習を用意する。頑張つて、あたしの予想なんかひっくり返してみせろ」

「……はいっ」「……」

「んでな、まずは基礎メニューを作ってみたんだ。デバイスに送るから出してくれ」

「さ、さすがはノーヴェ……」

「仕事早っ!!」

各々がデバイスを出してジェットエッジから基礎メニューを送られる。俺も確認がてらメニューをもらう。

ざっと目を通してみると……なるほど、やっぱりノーヴェはコーチに向いている。

一人一人に合った練習メニューを組んでいる。しっかりみんなを見

ている証拠だ。

「基礎トレは今まで以上にしっかりやる。その上で……コロナはゴーレム召喚と操作の精度向上」

「はいっ」

「リオは春光拳と炎雷魔法の徹底強化、武器戦闘もやってくぞ」

「はいっ!!」

「ヴィヴィオは格闘技全体のスキルアップとカウンターブローの秘密特訓」

「はいっ!!」

「ユウはスピードと技の精度向上、炎熱魔法の強化に取り組んでもらう。陸戦試合を見た限り、フェイトさん相手にいい勝負をしていたが押し切れなかったのは技がしっかり決まっていなかったからだろう。それにパワーが強いせいでスピードが犠牲になっている。それを残しながらスピードも両立していくぞ」

「お願いします!!」

的確に各々に足りない部分を言っていき、自覚させる。

教え子は課題が見出せ、コーチはそれに沿ったメニューを作ればいいのだ。

本当にコーチに向いてるよ……ノーヴェは。

「で、アインハルトは……あたし達が変に口を出して霸王流のスタイルを崩してもなんだ。かわりに公式戦経験のあるスパー相手を山ほど探ってきてやろう。それと絶対強者をな」

「絶対強者？」

「これはサリエルに頼るしかないんだけど……管理局員の中でも指折りの強さを持っている人とやってもらう。そう言う機会はめったとなないからいい経験になるぞ……できそうか、サリエル？」

「……教導隊や親父に頼めばそれなりに数は用意できると思う」

「じゃあOKだな。お前は戦いの中で必要な物を見つけて掴む。それが一番かと思うんだが……どうだ？」

「ありがとうございます!!」

絶対強者ねえ……確かにいい経験にはなると思うが、上を知りすぎると焦る可能性もある。

そこら辺のコントロールはノーヴェにお任せするか。ただスパーとなると……

「え〜？ 私もいろんな人とスパーやりたい〜!!」

「やりたいです〜!!」

こうやって年頃の好奇心で目を輝かせてヴィヴィオ達が寄ってくる。

「お前らは順番があるの!! コーチの言うことちゃんと聞け!!」

「「「「は〜い」「「「「」

本当に子供はアグレッシブなこと……大人のこちらも見習いたくなるよ。

そんなやりとりをしながら少しするとフェイトが車を回してきた。

空港で解散することとなり、ウーノはそのまま本局へ用事があると言って電車へ、スバルはティアナを連れて家に帰り、俺達はみんなを送り届けながら家に帰ることになった。

……そういえばもうそろそろ……

「ノーヴェ、今度の休み、会いに行くんだろ？ みんなの予定はどうなんだ？」

「ああ、大丈夫だつて。デイエチもウエンデイもバイト休むって言うていたしチンク姉も休暇を調整してくれた。そっちは？」

「トーレ、セツテ共にOK。ウーノは姉さんが何とかしてくれるだ

るっ」

「じゃあ、今度の休みに海上隔離施設にGOだな!!」

「……誰に会いに行くのですか？」

「ノーヴェの一番上の姉にさ……そうだ、ちょうどいいや!! アインハルトも連れて行こうぜ!!」

「うっん……あたしはいいけど、他の奴はどうかな？」

「俺が何とかする。よし決定!!」

トントンと決まっていって行くが当のアインハルトはついてきていないようだ。頭の上に？マークをたくさん浮かべて状況を把握しようとする。

「あの……出来れば説明をっ」

「当日までのお楽しみ。これだけは言える……いい経験になるぜ！」

「はあ……」

急に予定が組まれてしまつて生返事を返すしかなかった。

その後はリ才達の親御さん達に挨拶をしながら送り届け、最後になのは達を家に届けてようやく我が家に帰ってきた。

教導含めて2週間ぶりの我が家……やっぱり帰る家があるっていいな。

「ただいま」

「おかえり、あ・な・た？」

「……珍しく新婚雰囲気を出したな」

「たまには、ね。洗濯物出しちゃって」

「うっい」

自分のバックからばいばいと洗濯物を洗濯機の中に放り込んで航空

隊の制服もハンガーに掛ける。
部屋に行つてジャージに着替え、リビングでとりあえずソファに座つて一休み……

「はい、ココアでよかつたよね?」

「サンキュ……あゝ、インスタントだけでどうまいや」

「贅沢言わないの。モーガンさんみたいに力カオから作れるわけ無いんだから」

「分かつてるつて。フェイトが入れてくれるならインスタントでも十分うまいから」

愛用のマグカップになみなみつがれたココアをゆっくりと飲みながら身体を休める。フェイトもキャラメル・ラテを持って隣に座つてくる。

両手で持つて飲む姿がなんだかとても萌えて頭を撫でてやる。すると嬉しそうに目を細めてこちらにすり寄ってくる。

今この時は二人だけの時間……誰にも邪魔されない甘い時間。

「ねえ……サリエル?」

「ん?」

「キス……して?」

「チヨコレートくさいぞ?」

「私だつてキャラメルの味がするよ?」

「……一回だけだぞ?」

コップをこぼさないように離して、顔をこちらに向けてくるフェイトに軽くキスをする。唇を当てると軽くキャラメルの甘い香り。すぐ終わるつもりだったが、フェイトが唇に吸い付いてきて必然的に長いキスになった。

そうなれば旅行から燻っている情欲の炎が燃え上がるのも必然でキ

スはどんどん激しい物へと変化していく。
いつの間にかコップを置いて押し倒してくる。これは……相当溜ま
っていたんだな。

ようやく長く深いキスが終わって、フェイトが離れる。二人の間にはもつと繋がっていたいと言わんばかりに銀色の橋が架かっていた。

「サリエル……私、もう……我慢できない」

「俺もだけど……まだ昼間だぜ？」

「そうだけど……して？」

「ナオトの稽古もあるしな……今日一日オフなんだし、夕飯食って一緒に風呂入ってそこからでもたっぷり時間があるわけだし、な
？」

「……う〜」

「夜まで待つてくれたら……後悔するほど可愛がってやるからさ」

実際サリエルの可愛がり方は半端無い。こういう言葉が出てきた後の朝は大抵フェイトは身体の節々が痛くなる。

……これ以上先の発言は18禁になりそうなので止めておこう。すでに前の文章でも危ないし。

「……分かった」

「悪いな。さて、俺はナオトの稽古でも行ってやるか。夕方までには帰ってくるから」

「……いつてらっしやい」

フェイトにどいてもらって、カップに残っているココアを一気に飲み干す。

チャチャツと水筒など必要な物を自分で用意している傍ら、フェイトはクッションを抱えてこちらをじっと見ている。

お預けされて相当ご不満のようだな。俺だって辛いのに……

「じゃあ、行ってくるな……あつ、俺がないからって一人でするなよ？」

「ッ!? バカッ!! そんなことしないよ!!」

「ハハハッ、いつてきまゝす」

クッションを投げられてそそくさと玄関から退散した。やっぱりフエイトをからかうと面白い。

車庫からヘリオンを出しながら、ナオトへ市民公園の公共魔法練習所へ来るよう連絡しておく。

ヘリオンに乗って、一度スロツトルをフルで回してからゆっくりと発車する。久しぶりの感覚に思わず背筋に震えが走った。

案外早く公園に着き、ベンチに座って待つこと数分……

「ハッ……ハッ……ハッ……先生〜!!」

「ナオト、久しぶりだな!!」

ナオトが息を切らせて走ってきた。この様子でいかにこの子が俺との稽古が楽しみだったかが伺える。

ちょうど一年前に偶然この公園で俺が夜のトレーニングをしていたら、散歩していたナオトと出会った。

子供がこんな時間にと……思いながら続けているといきなりこう言ってきた。

(僕を……強くしてください!!)

どうやらナオトは雑誌で俺のことを知って、しかも俺が近くに住んでいることを調べてここで待ち伏せしていたみたいだった。

最初は渋った。何せその時すでにヴィヴィオとコロナちゃんを教えていたのだから以上他の教え子を増やしても負担になるし、どっち

かに偏っておろそかになりそうだったからだ。

そこで軽いテストを試してみることにした。一分間でどれだけ動けるかと言うテストだったが……これには驚いた。

まずは身体のバネ。とにかく柔らかく、これを鍛え上げればどんな上質のバネが出来るだろうかと知らず知らずに妄想していた。次に頭の回転の速さと勘。一分間であれこれ試していたが、これが全て最善手になっていて天性の物だと感じずにはいられなかった。最後に底が見えない潜在能力。これを開花させたなら、俺はともかくもつと上にいる強者さえ倒せてしまうような才能の持ち主だった。結局俺はナオトを教え子として認め、ヴィヴィオ達とは別のメニューで細心の注意を払いながら大事に育ててきた。

「ふう……今日は何をしますか!？」

「アップもちょうど走ってきただろうし、組み手から入るぞ? 俺がいない間でもどれだけ鍛えていたか、見てやる」

「お願いします!!」

すぐさまナオトが構えて、意識を戦闘の物へと切り替える。サリエルはその姿を見て満足したようにだらりと脱力した。

ナオトの構えはオーソドックスタイプで中段に拳を構えたものだ。サリエルの方針で今のところはパワー、スピード、ディフェンスをバランスよく鍛えているため一番効率のいい構えをさせている。

もう少し年を取れば、自分のスタイルが見つかるだろうからその時に合った構えを教えるつもりである。無論このまま行っても全然問題ない。

さて……俺がいなくてもしっかし稽古していたかな?

「いつでも来いよ?」

「では……行きます!!」

鋭い踏み込みから中段突き。後塵には微かな魔力放出の後がついた。よし、教えたとおりに出てきたな。

サリエルはその中段突きを軽くないなして次の攻撃に備える。返す刃でナオトが左拳をややフック気味に繰り出す片手で受け止められしてしまう。

しかし、めげることなく攻撃を続ける。速いパンチを連射して目くらまし代わりに使い、ローキックにつなげる。

視界が一瞬遮られたせい、ガードが若干遅れながらもローキックを防御する。

続けざまにボディにパンチを叩き込まれる。さすがのサリエルもその衝撃に苦悶の表情を浮かべる。

動きが止まったのを見て、ナオトが飛びながらアッパーを打ち込もうとするがそこはちゃんと防ぐサリエル。

両者、一度距離を取って息をつく。

「ふうん……真面目にトレーニングしていたようだな」

「はっ！！」

先ほどと同じく魔力放出をして中段突きを繰り出す。今度のはスピードが若干上がっている。

サリエルはナオトの手首を掴んで関節を極めながら、脚を払って投げける。

空中で体勢を立て直して地面に着地した瞬間、筋肉の収縮を利用して鋭いダッシュでテイクダウンを奪った。

マウントポジションを取ろうとするが、いち早くサリエルがジャックナイフで起き上がって何とか凌ぐ。

攻撃してないとはいえサリエルがここまで押されるのも珍しい光景である。

連打でサリエルを追い詰めていくナオトの顔は非常に嬉々としている。

速射砲のように速いパンチを全て受け流し、その一つを選び取って掌底のカウンターを叩き込む。

バランスを崩したところにさらにローキックを叩き込んで転かし、拳を突きつけて組み手を終了した。

「なかなかよかったぞ、ナオト。とくにローキックからボディの繋ぎが早くて防御をする暇もなかった。」

「あつ……ありがとうございます!!」

「だが、不用意にパンチを出し過ぎ。さっきみたいにタイミングを計られてカウンターを取られるのがオチだぞ?」

「あう……反省します」

「他の所は悪くなかったからいいとして……今日は体捌きの確認と修正、後はフィニッシュブローの練習をしていこう」

「分かりました!!」

そこから二時間ほど、サリエルとナオトは動き続けた。

自らもレクチャーしながらナオトの体捌きを理想的な物へと修正していく。元々素直な子供なので吸収力は抜群である。

修正し終わったら、再び軽い組み手を行ってしっかり出来ているか確認をする。例えばナオトは純粋なクロスレンジファイターなのでいかに相手の攻撃をいなして一気に懐に飛び込む体捌きを教えてあげる。

サリエルの満足がいくものに出来上がると、今度はヘリオンの座席シート下のボックスからミットを取り出して、ナオトオリジナルのフィニッシュブローの練習に取りかかる。

腰を落として構え、左手に右手を添えて衝撃に備える。このフィニッシュブローは脆い右手で受けるとミット越しても碎かれる可能性がある。

「来な」

「……行きますすー!!」

魔力を右手に貯めて、なんの変哲もない打ち下ろし気味のパンチをミットに打ち込む。

理の叶ったフォームで打ち出されたパンチはパンツと小気味のいい音を立てて……そこで終わりかと思われた。

しかし、次の瞬間サリエルの左手に衝撃が走り、3mほど身体が土を盛り上げながら跡を作って後退した。

まるで杭打ち機を打ち込まれたかのような衝撃……これがナオトのフィニッシュブローである。

「……いつてえ。でも、いい出来だな」

「先生に教えてもらった「ストライク・パイル」……いつ打つてもすごい威力ですね?」

「そうだろ? 魔力を腕に貯めて、パンチを打ち込んだ瞬間その魔力を一点に放出することによって凄まじい貫通力と威力をたたき出す。まあフォトン・ステップの応用だけだな」

「踏み込みのクイックスタンディングもその応用ですよね?」

ナオトが踏み込む時に起こる魔力放出もフォトン・ステップの応用である。

いわばフォトン・ステップは古代ベルカ式の魔力放出の基本を応用した物であって、厳密な名前はない。

サリエルの定義としては足から出せばフォトン・ステップと呼んでいるが、他の使い方をすれば名前も変わる。

クイック・スタンディングも下腿部分と足裏から微弱な魔力放出で通常より早く動ける魔法である。

ナオトには他にも色々な魔力放出を教えてある。

「ああ、そうだ」

「でも、本当にこれが試合で通用するんですか？」

「大抵の人間は日常生活を予測しながら生きている。しかし、この予測が外れた時はひどく脆い物へと変わる。戦いだって同じさ。相手の予測を裏切れればそれだけで機先を制することができる」

「つまり、相手の予測を裏切って驚かせるんですね？」

「そういう解釈でいい。こういう小技はなかなかストライクアーツでも見ることがないから確実に通用する」

「へへっ…… D S A A公式戦インターミドル、楽しみだな…… 先生に教えてもらった技を存分に振るえるんだから！！」

嬉しそうにシャドーをしながらナオトがインターミドルの意気込みを語る。

……そういえば、ナオトは何で強くなりたいんだろう？

弟子にした時に聞いとけばよかった……それに将来何になりたいかとかも気になる。

「……ナオトはどうして強くなりたいんだ？」

「えっ？」

「ただ強くなるってだけじゃ、自分から行動はできないだろうし……」

……なんでだ？」

「そうですね……僕って見かけによらずすごく負けず嫌いなんですよ？」

確かに……シュツと整った顔立ちで一般的にイケメンに分類される人種だ。戦いとかそういうのは苦手ですべてを平和的に解決しそうな感じに見える。

「この前、学校の腕っ節の強い同級生に喧嘩を売られて……買ったのはいいですけどボロ負け。その場にうずくまって泣きじゃくりましたよ」

「誰もが通る道、か」

「それですこしでも強くなるうって……見よう見まねで腕立てとか腹筋とかして、後は格闘系の雑誌を見たりとかしてもう一回挑みました。今度はこっちから喧嘩を売ってね」

「……結果は言わずもがな、だな」

「はい。ボコボコにされてどこが悪かったのかと雑誌を見ていると……先生の写真とコメントが載っていたんです」

格闘雑誌か……確かに去年の今頃に取材を受けたような記憶はある。その時言った言葉がこの出会いを実現させたのだ。

「この公園でたまに自主トレしているって書いてあって……会えるのを信じてここで待っていました」

「……で、何で俺を選んだ？」

「家から近かったこともありですけど……先生って、優しそうだったから……じゃダメですか？」

「……クククツ、俺が優しいか？ まあたしかにそうだろうな。生徒には先生を選ぶ権利はある。あれから一年経つが、今もその腕っ節の強い同級生へのリベンジが強くなりたい理由か？」

「いいえ。先生と一緒にトレーニングしていたら、そんなことはどうでもよくなつて……今は、大会で待っている強い人たちと戦うことが強くなりたい理由です。強くなつて恥ずかしくない戦いをしたいから強くなりたいんです！！」

「結構結構。今はそんな簡単な理由で十分。理由を難しくするのは大人になってからで十分だ」

些細な理由で始めた格闘技が、いつの間にかその理由が消えて違う理由にすり替わっているなんてのはよくあることだ。

子供のナオトがこれだけの理由を言えば十分……後からもっとちゃんとした理由が加わってくるのは間違いないからな。

後は……夢の方が？

「強くなりた理由は分かったとして……お前は将来何になりたいんだ？」

「プロ格闘家とかインストラクターとかいっぱいやりたいことはありますけど……やっぱり先生の側にいることが夢ですね？」

「おいおい……つまりそれは管理局に入りたいていうのか？」

「まあそうなりますね。先生と一緒に教導したり、もし先生が部隊を持ったりしたら僕はその下で働けたらいいな〜って思っているぐらいですよ」

「つまり、まだ具体的に何になりたいかが決まっていないと？」

「です！〜！」

こいつも変わっているな……俺みたいな奴の隣で働きたいって……他にもいい上司はたくさんいるのに……ナオトは俺のどこに惹かれたのだろうか？

……それは聞かないでおこうか？ 人それぞれ好みがあるんだから。しかし、ナオトがいった部隊を持つ、か……

確かにそういう話が来たら、いつかは受けようと思っている。けど、それはまだ十年以上先を考えていてしかもその時にまだ現役でいられたらの場合だ。

俺の性格上、椅子に座って指示を出すだけっていうタイプじゃないとわかりきっている。現場にいないと落ち着かない。

目をつけている生徒とナオト……副官か前線隊長に出所したドミニランスを据えれば理想的なんだけど……夢物語だな。

「さ、後三発打っていいから全力で来い」

「え〜……もつと打ちたいです！〜！」

「それ以上打つと肘に負担がかかるからダメだ。ほら、文句を言うんなら止めるぞ？」

「やります!!」

「この後、実家に行ってデバイスを作成してもらおう予定だし……インターミドルにはCLASS3以上のデバイスを装備しないと出れないからな」

「やった!! ついに……僕のデバイスがもらえるんだ!!」

ストライク・パイルを打ち込みながら、手放して喜んでいるナオト。しかし、サリエルの心の中はその姿を見て多少複雑になる。

何しろデバイス作成を頼むのは姉さんだ。本局でも随一のマイスターに頼むとなると金がかさむ。

身内にはただで供給、整備しているけど……他人になると一気にビジネスになるからな……姉さん、そういうところはしっかりしているし。

今月の給料もまた吹っ飛んでいくのか……

その後、きつちりと三発打ち込みフォームなどの修正をしつかりしてから、ヘリオンに乗って二人はイシュバロンの実家に向かった。もちろん、事前に姉さんが家で仕事していることは確認済みである。ナオトは始めて来たのでサリエルの実家の大きさに驚き、辺りをキョロキョロしながら中を歩いている。

目的の姉さんの部屋にたどり着き、ノックをしてから入った。

「姉さん、頼みたいことがあるんだけど……」

「はいはい、どんな要件で……って、あら？ その子は？」

「俺の一番弟子。ナオト、挨拶しな」

「初めまして、ナオト・パラベラムです!!」

「ラグ……サリエルから聞いているわ。姉のマリーナです」

がつつちりと握手をして、とりあえずの挨拶を済ませる。

「それで頼みたい事って何？」

「今度インターミドルがあるから、ナオト用にデバイスを作っ
て欲しいんだ。もちろん、お金は払うよ」

「……まあお金はいいとして、どういうデバイス？」

「ガントレットとレガースが展開できるタイプ。基本的に手や肘、
膝に負担がかからないようにするデバイスだな」

「インテリ型？ アームド型？」

「近代ベルカ式だからアームド型。それと将来カートリッジシステ
ムを搭載できるようにスペースを作っておいてくれない？」

「今立て込んでいる仕事はないけど……ナオト君は今何歳？」

「11歳です！！」

「そう……」

手を顎に当てて、先ほど言われた注文を全て見比べながら考える。

まだ11歳ということは身体が出来上がっていない。そのため、今
後の成長を見通しておかないとその都度調整していかなければなら
ない。

さらにカートリッジシステムを今後積むということは余分にスペー
スを設けなければいけない。マリーナのデバイス作成の信条上、そ
ういうスマートではない構造を嫌う。

また、ガントレットとレガースを装備するタイプは類を見ない。一
からノウハウを習得しなければいけないので、作成するにも時間がか
かる。

さて……どうしたものか？

「……ウーノ！！」

「呼びましたか？」

隣の部屋で作業していたであろうウーノが駆け込んでやってきた。

「基本設計はあなたに任せるから、デバイス作りなさい」

「……今からですか？」

「この子用にね。仕様はアームド型で、武器はガントレットとレガース。注意点としては関節部や打撃部に負担がかからないような設計をお願い。あと、いつかカートリッジシステムを積むようだから、それを見通した設計をしてみなさい」

マリーナはスラスラと先ほどの要望をまとめた物をウーノに言いつけ、タブレットにそれをメモさせる。

一通りメモをして、次に取りかかるのは使用者の身体のデータを取ることだ。

ウーノに促されて、隣の部屋でデータを取るためにナオトはマリーナの部屋から出て行った。

「さ、時間がかかるからグラディウスを出しなさい。久しぶりに私が整備してあげる」

「おいおい……この前、ウーノに整備してもらったばかり」

「グラディウスは私が作った最初のデバイスよ。他のデバイスより古いし、なによりもう7年も使っているから微妙な調整は私がしないとガタが来るのよ。だから、貸しなさい」

「はあ……わかった。グラディウス、いいよな？」

「一向に構いません」

了承を得て、胸ポケットに入れてあるグラディウスをマリーナに渡す。

すぐさま、グラディウスの状態をモニターに表示して細かなパラメータを凄まじい速度に見ていく。

たまにスクロールが止まり、パラメータの違いを読み取ればすぐに

グラディアスをいじって、調整していく。

「うーん……やっぱりあちこちガタが来始めているわ。なのはちゃんのリジングハートやフェイトのバルディッシュみたいにならねど大規模な改造は加えていないから、基本構造は作成時のままだからね……いくら頑丈だからと言ってもガタが出ないって言うほうがおかしいわね」

『ですが、マイスター。私はまだまだ頑張れます!!』

「もちろんですよ。ガタって言っても基本フレームにエラーが出ているとかそういう深刻なものじゃないわ。これからもしっかり整備していけば大丈夫よ」

「バスターモードでの砲身負担もあるから……苦勞をかけるな、グラディアス」

『いいえ。私はマスターの力になれたらそれでいいですから……マスターが無茶をしなくなったら私の心配もなくなるのですけどね』
「違いねえ」

本当にこの子達の会話を聞いているとただのマスターとデバイスの会話には聞こえない。

長年付き添った友人のように親しげに話している。私が作成したデバイスをここまで育て上げた人はまだ見ない以上、ラグナは素直にすごいと思う。

しかし……その関係も長く続くかどうかは分かったものではない。先ほどはとりあえず大丈夫と言ってるが、四年前の無茶とブラスターシステムの過負荷がいまもまだグラディアスの上げさせずにいたこうしてちよくちよく自ら整備しているが、その傷跡はすぐに浮き出てくる。基本フレームが負荷によって劣化し、疲労しやすくなってしまうからだ。

今は荒事が少ないから整備の回数ですぐに治るが、これが大規模な事件などに巻き込まれでもしたら……フレーム同士が干渉しあって

違和感を生じさせたり、最悪の場合戦闘中に壊れるという事態にまで発展する。

将来的には大々的な改造……基本フレームの換装や砲撃負荷に対応した素材に交換しないと、この子の寿命は後……

「ほら、母さんにも挨拶してきなさい。ナオト君も時間がかかりそうだし、私もこの子の整備をしなきゃいけないからね」

「わかったよ。どれくらいで終わりそう？」

「終わったらヘルメスに連絡入れるから、それまでゆっくりしてなさい」

「了解」

母に挨拶するためにサリエルは部屋を出て行き、残されたマリーナは深くため息をついてグラディアスの整備に取りかかる。

この子を失うことになったら、ラグナは間違いなく絶望の底まで悲しむ。私達やフェイトを除けば、常に支えてきたのはグラディアスだからだ。

二人の七年間……一般的に見てもあまりに濃い七年。

それを崩壊するようなことは絶対させたくない。製作者であり、希代のデバイスマイスターである私があんとしてでもこの子を持たせてみせる。

その決意を現すかのように、彼女の目は真剣で額に浮かぶ汗も気にしない。

サリエルが帰ってくるまでマリーナは隙無く……完璧に新品同様に仕上げるようグラディアスの整備を続けていた。

夕陽も西へ半分以上沈みかかったところでナオトの身体検査とグラディアスの整備が終わり、エレアに結構な量の総菜を持たされて帰

路についた。

ナオトのデバイスは二週間ほどで出来上がるらしい。ウーノが初めて作るらしいから使わない俺でも完成品が楽しみである、

途中有名店のスイーツを買い、ナオトに分け与えて家まで送り届けた後にようやく家に到着した。

玄関をくぐり、リビングを見てみると待ち疲れたのかフェイトがソファで安らかな寝息を立てて眠っていた。

その姿に柔らかな笑みを浮かべて毛布を掛けてやり、台所に向かつて米を炊くことにした。おかずをもらった以上、ご飯を炊くだけで十分だ。

味噌汁も作るうかと考えたが、この後控えている事に備えて無駄な体力を使うのは止めよう。

しばらく米を研いでいると、ごそごそと何かが動く気配を感じた。

我が娘がようやくお目覚めかな？

「……あれっ？」

「お目覚めのようだな、フェイト。母さんからおかずもらって来たよ」

「サリエル、帰ってたんだ……」

「今は……六時ぐらいだから、あと一時間もしたらメシ食おうな。さて……」

ジャーにお釜をセットして、炊きあがるまでソファで身体を休める。モニターを広げて、これからの予定とナオトのトレーニングメニューを確認していく。

えっと、来週は月一回のアレでその次の週が……ん？

モニターに目を向けていると隣でフェイトがクッションを抱えてジトツとこちらを見てくる。理由は言わずもがな、構ってくれないからだ。

無論これはわざとやっている。この方がより一層燃え上がるからだ。

それを無視し続けている俺に、フェイトが頬をふくらませてより一層睨みながら唸ってくる。

「……………」

「あとちよっとの辛抱じゃないか。俺だって我慢してるんだ」

「だったら、今からしようよ」

「却下。明日も早いんだからちゃんとメシ食って一緒に風呂入ってからだ」

「そ、そうだね。ご飯食べて一緒にお風呂……………って、ええ!？」

案の定驚いた。こついう不意打ちで言うとフェイトは一気にしどろもどろになる。

このまま一気に俺のペースに持ち込むのが一番いい。戦いも情事も俺の性分でやらせてもらう。

顔を真っ赤にしたフェイトに顔を寄せ、耳を甘噛みしてこつ囁く。

「安心しな。今夜は……………寝かせないぜ?」

「んっ……………ああ……………」

重く、低音を聞かせてフェイトに告げる。それを聞いたフェイトは背筋に甘い電流が走り、サリエルに支配されていく背徳感を感じた。その後、しっかりとご飯を食べた後、一緒に風呂に入って二人は一晩中愛し合ったのはまた別の話……………

第十二教導 特訓……足りないところを補いましょう!! (後書き)

……この話は……18禁に引つかかるかも知れないな。

だがしかし!! 後悔はない!! ソロモンよ、私は書いてやった
!!

若干テンションが壊れ気味で吸いません。

それで前書きでも言いましたが、青の重騎士のD S A A公式戦イン
ターミドルは男女混合で行っていきます。名前だけでも新キャラを
出そうかと考えていますのでどうか楽しみにしてください。

それでは次回はついにあの人満を持して登場します!! さよな
ら

第十三教導 邂逅……昨日の敵は今日の友（前書き）

作者「新年あけましておめでとございます……って言ってももう八日も過ぎていますが……」

サリエル「年内に投稿してけばよかったものの、まあいい。で、今年の目標は？」

作者「とりあえず単行本に追いつくことと、ファンタジア文庫大賞の一次選考突破です！！」

サリエル「よし、絶対に実現しろよ」

作者「分かってるって。では今年もどうぞよろしくお願いします」

サリエル「感想、意見、質問はいつでも待っているぜ」

第十三教導 邂逅……昨日の敵は今日の友

帰ってきてから一週間が経った。ヴィヴィオ達はインターミドルに向けて、ノーヴェの考えてたメニユーをオットーとデイードが補佐しながらしつかりこなし、技術的なことをサリエルに教わりながら頑張っていた。

その一方でサリエルも自身の弟子、ナオトを鍛え上げながら公務に精を出していた。ここ三ヶ月は教導ばかりだが、ほとんど近場なので終わればすぐにナオトの稽古に立ち会えることが出来る。

そして今日……アインハルトのスパイ相手もかねて、ある人物に久しぶりに会いに行く。

今は海沿いの道をヘリオンで走っている。その後部座席にはヘルメットを被らされたアインハルトが振り落とされまいとしつかりサリエルの腰に手を回して、身体を保持している。

前には大型の軍用車が……乗っているのはナンバーズで、今日は全員集合だ。中ではセインとウェンデイを中心にどんちゃん騒ぎになっている。運転するトーレと助手席に乗るウーノ、前の方でその姿を見守るチンクにうるさそうにしているセツテとノーヴェはそのやかましさに辟易しているが、どこか楽しそうな様子だ。

「……そろそろ連れてきた理由を教えてくださいませんか!？」

風切り音がうるさいのか、少々大声でサリエルに問いかけるアインハルト。

多少聞き取りづらいものの、質問の意味を理解したサリエルは口角を釣り上げて答える。

「お前のスパイ相手さ。俺が知っている限り、このミッドチルダで最強の存在だ!！」

「最強……ですか？」

「ああ。昔は何人ものエースを倒してきた奴だ。今もその名前は管理局で知れ渡っている」

まあ悪い方に……だがな。本当ならば今も活躍しているであろうエースを徹底的に殺してきたのだ。

その中に俺の兄さんも……含まれている。

しかし、過去の話を蒸し返すほど小さい男ではない。今はよき理解者として、良きライバルと言う立場にいるんだから。

そう……今日会いに行く人物とはドミニランスのことである。

半年前から模範囚と認められ、四月に本人が強く希望した海上隔離施設へと移ってきたのだ。月に一度程度の身内面会日があり、その日にサリエルとナンバーズ達はドミニランスに会いに行くのだ。

施設の局員は、最初は面談日の設立を聞いて渋った。理由は簡単、いくら模範囚とはいえ、相手は世界最強の存在。加えれば戦闘狂という面もある。

だが、サリエルが全責任は自分が持つと言い放ち、ただの一局員はその剣幕に押されて渋々面会日の設立を許可した。

そして現在に至る。潮風を浴びながら道を走っていると、海上隔離施設が見えてきた。

「あそこだ！！」

「確か……更生施設ですよね？ 今日会うのは、犯罪者なのですか

！？」

「うーん……犯罪者と言えば犯罪者だな」

その言葉を聞いた瞬間、アインハルトの顔に嫌悪感が浮かんだ。

予想はしていたが……すこし傷つくな。アインハルトみたいな純粹な奴は白を敬い、黒を蔑む傾向があるからな。

確かにドミニランスは犯罪者だが、犠牲者でもあるのだ。人の欲望

が暴走し、その形となって生まれてきたんだから……

「そんなに嫌そうな顔をするな。根はいい奴だから……」

「……はい」

「ほれ、降りな。こっからは船だ」

船着き場の駐車場にヘリオンを止め、臨時で運行している管理局の船に全員乗る。

ちなみにドミニランスの保護責任者は親父で今回の臨時船も親父が用意してくれたものだ。本当に息子には厳しく、娘には甘い。

元気な奴らは甲板に出て潮風に当たり、大人な奴らはその姿を中から微笑ましそうに見守っている。

アインハルトもノーヴェに手を引かれて甲板に出ている。あつ、セツテまでででたら。大方セインやウエンデイに無理矢理連れ出されたんだろう。

かと言うサリエルは操縦室で今日船を用意してくれた親父の部下に挨拶していた。

「すみません……親父が無理言っちゃって」

「気にすんなや、坊主。大将には返しきれない恩があるからな……」

それに友の頼みとあらあ聞かないわけにはいかねえよ」

「……親父が変わって礼を言います。本当にありがとうございます」

「礼はいいって。くすぐつてえからよ……」

照れくさそうに鼻を搔いて、サリエルの頭をグシャグシャと撫でる。聞けばこの人……昔、任務で親父の指揮に感動を受けて、わざわざ転属希望まで出して下についたらしい。年もそんなに離れていないせいか、転属してすぐに仲良くなり親父が気軽に話せる数少ない友人となった……ということを知っている。

階級も二佐と大将で離れているが二人の間に上下関係は無いようだ。

くしゃくしゃにされた髪を軽く手櫛で梳いて紐でまとめておく。潮風で髪がべとべとになるからだ。

船は間もなく隔離施設に着き、サリエルを先頭にゾロゾロと中を進んでいく。途中何度か検査を受けてようやく中に入ることが出来た。しばらく廊下を歩くと昔ウーノ達と会っていた中庭にたどり着き、日当たりのいい場所でゴロンと寝ている人物がいた。その姿がなんと男を誘っている事やら……

呆れたため息をついて声をかける。

「全く……女なのにそんな誘うような格好で寝るなよ、ドミニランズ」

「あたしの勝手だろ？　むしろ欲情して襲ってくる奴がいたら見てみたいよ」

「ははっ、違いねえ……襲った瞬間、顔面が崩れているよな？」

「あと手足の骨を折るね。まあ最初の顔面を避けたら抱かれてやつてもいいかな」

「その後フルボッコと……ホント、お前を抱くにも命がけだな？」

「あたしほどの女を抱くんだよ？　それぐらいのリスクがあってもいいじゃない？」

血なまぐさくかつ下劣な会話は続く。その様子にアインハルトは才口オロとするばかりであった。

何とかしようとノーヴェ達に救いの目線を送るが、当のノーヴェ達はその光景をいつものことばかりと普通に見ている。

そんな会話が少し続いた後、ドミニランズが不意に手を伸ばしてきた。

「まったく、久しぶりだっというのにヒドイ挨拶だね」

「本当にだ……久しぶりだな、ドミニランズ」

その手を取って立ち上がらせ、がっちりと握手を交わす。

どうやらこれらの会話はいつもの挨拶だったらしい。今回はこれほど下劣にでたが基本的に毎回内容は変わる。

ここでようやくナンバーズがドミニランスの元へ駆け寄り、思い思いの挨拶をしていく。

まず飛び込んだのは元気いっぱいセインとウエンディだった。同時に飛び込んできた二人を軽々受け止めて一ヶ月ぶりの再会を喜ぶ。

「ドミニ姉、久しぶり〜！！」

「元気にしてた！？」

「ああ、あたしはいつでも元気だよ。二人に元気を分けてもらっているからね、セイン、ウエンディ」

二人を抱いたまま喜び合っていると今度は年長組のウーノ、トーレ、チンクが寄ってきた

「お久しぶりです、ドミニお姉様」

「姉上……お変わりなく」

「久しぶりだな、ドミニ姉」

「仕事の方はうまくいっているかい、三人共？」

「私の方は順調です。やりがいを感じていますし、先週ついに初めてデバイスを作らせてもらえることになったんですよ！！」

「私の方も……まあ変わりありません。なにせアレが上官ですから……」

トーレがスツと指を指した方向は、アインハルトに何か説明しているサリエルの方だった。

意味を理解したらしく、苦笑いでトーレの頭を苦労を労うように撫でてやる。

「チンクはどんなのだい？ ゲンヤのおっさんと仲良くやっているかい？」

「父上とはいつも通りだ。みんなも本当の父のように慕っている」「そうかい……みんな、うまくやっているんだね」

唯一の家族である妹達がこのミッドチルダの社会を楽しみながら生きていくことに幸福感を覚える。

あの忌々しい敗北から四年間。あたしが罪を背負った代わりに妹達は普通の生活を手に入れた。姉としてしてやれることを出来た。

後はサリエルとの決着……憎み合う敵同士ではなく、同じ立場……好敵手としての決着と世界を見て回り、今なお疼いている好奇心を満たすことだけか……

他の妹達にも一人一人しっかりと再会の喜びを分かち合って、ようやくサリエルの方に再度向き直る。

「……で、見慣れない子がいるみたいだねえ」

「紹介するよ。ノーヴェの教え子だ」

「アインハルト・ストラトスです」

「ん……へえ……静かでいい闘志だ。伸び代もまだまだ見込めるし、この子は強いね」

「っ!?!?」

「だろ？ 事実、素手での勝負で俺と引き分けている」

「ほお……あたしに勝ったあんたと、ねえ……素手とはいえ、それはすごいよ」

褒められているが、アインハルトはひどく居心地が悪かった。ドミニランスの狂気……いや、禍々しいオーラのせいだ。

それに当てられて全然落ち着かないのだ。サリエルのオーラが相手を思いやり包み込むような陽のオーラなら、ドミニランスのオーラは相手を完膚無きまで叩き伏せ屈服させる陰のオーラだ。

じりじりとアインハルトとドミニランスの間に緊張が高まってくる……が、それを破るかのようにポカリとサリエルがドミニランスの頭を小突く。

「いつまで相手煽ってたんだ？　しまえ」

「へいへい。全く……ちよつと遊んでやったぐらいで……」

「……聞いたところ、あなたは犯罪者と？」

「そうだね。管理局や人から見たら、あたしは罪深い罪人さ」

「ドミニランス……」

こうやってはずけずけと物を言う姿勢はドミニランスの長所でもあり、短所でもある。

元々嘘がつけないのか、竹を割ったような性格で遠慮無しに言葉を吐いてしまう癖がある。褒める時も、貶す時も、だ。

少しは自重するようにとサリエルが止めに入るが……心配するなと睨まれた。

「嬢ちゃん、今日はどんな用事で来たんだい？」

「サリエルさんに言われてあなたとスパーリングを」

「そうかい……あたしとスパーをねえ……だったら、まずはその凝り固まった考え捨てて、礼を尽くしな」

「えっ？」

「罪人が汚い？　考えが危ない？　染まるのが嫌だから私は近づかない？　あたしから見りゃ、あんたの方がよっぽど汚くて危ないね」

「……」
「人っていうのは誰だって平等なんだよ。その平等を壊し、不平等にするもつとも大きな原因は人の先入観だ。先入観でそいつの平等が崩されるんならたまったもんじゃないよ」

ドミニランスの言葉は重い。いつも通りしゃべっているが、一つ一

つに重さがあった。

横で聞いている俺も感心させられる言葉……アインハルトにはさぞいい説教だろう。

人は優劣をつけたいがために価値観を設け、差をつける。その価値観を一番決定づけるものは先入観と聞く。

初見、人づて、イメージ……それで固められた価値観を覆すのは容易ではない。

アインハルトはドミニランスのことを犯罪者という烙印を押し、知らず知らずに自分より下だと価値を決めていたのだ。そこにドミニランスは腹が立ったのだろう。

……敵だった頃はただの戦闘狂かと思っていたが、こうやって四年間付き合ってみると意外にちゃんとした考えを持っているだったわかった。まあこれも先入観で見ていたせいだろうな。

「嬢ちゃんが格闘家だったらやることは一つ……直に拳をぶつけ合って、相手のことを感じるんだよ」

拳を突き出し、アインハルトにドミニランスなりの誘いをかける。これが一番かもな……俺も剣を交えて、こいつの深い感情を知ることになったんだから。

「……先ほどの事も含めて、本当に申し訳ありませんでした。許してもらい、もしよければ……私とスパarringをしてくれませんか？」

「そうそう、そうやって礼を尽くしたら自分も相手も気持ちいいってもんだろ？ さっきのことはあたしも気にしてないから、やろっか」

「よろしく願います」

アインハルトが非礼を謝り、ドミニランスが許すかのように構えを

……だらりと脱力する。

その瞬間、先ほど煽ってきたオーラとは比べ物にならないほど強い殺気に包まれる。

ビリビリと肌を切るような錯覚に陥りながら、負けじと構えて気合を込める。

その姿を見たドミニランスはにやりと口角をつり上げて笑う。

「いいねえ……こうやって改めて見てみると強さがはっきりと分かるよ……ついうっかり本気を出しそっだよ」

「だめだ。お前の本気は人を殺しかねない」

「分かってるって。でも、ついうっかりってあるだろ？」

事実、うっかり本気を出してしまいそうなほどアインハルトは強いだろう。構えから見て感じ取れる。

なるほど……これならサリエルが徒手格闘で引き分けるのもうなずける。あいつは剣以外は二流だからな。

構えは近代格闘術とは違うが、何となくかび臭さが漂ってくることから古流の格闘術だということは分かった。

さて、このあたし相手にどう仕掛けてくるかな？

構えもへったくれもないこの脱力した姿は、案外攻めやすそうで攻めづらい一つの構えである。隙がありそうなものだが、常時気を自分の周りに巡らせているので間合いに入れば自動的に迎撃できる。

様子を見てみると、意を決したかのようにステップを踏み始め、地面を力強く蹴って真っ直ぐに右をつきだしてきた。

悪い選択肢ではない。得体の知れない相手にはまず強い右からというのはセオリーだ。

その右拳を柔らかく受け止め……否、掴んだ。

アインハルトもその行為に驚き、自分の元へ戻そうと力を入れるがドミニランスの手から拳を引き抜くことが出来ない。

しかも次の瞬間、いきなり膝から崩れ落ちたのだ。何が何だか分か

らずにアインハルトはパニックを起こす。

「……柔か」

「姉上も優しいな。力よりためになる技を少しでも見せようっていう魂胆だろう」

「いい経験になるだろうな……あたしが知る限り、ドミニ姉より強くて、技が冴える奴は見たことがねえ」

「おいおい……あいつに勝った俺はどうなるんだ？」

「サリエルは例外だ」

「なるほど、イレギュラーって奴だな」

失礼な言われ方だが、まあ大方合っているだろう。

崩れ落ちたアインハルトはそのまま投げられて背中を強打する。肺から空気が絞り出されて息が出来なくなる。

そんな事はお構いなしに今度は寝技で腕の関節を極める。その電光石火の所業にアインハルトは驚きっぱなしだが、負けてはいられない。すぐさま腕を曲げて関節を極めさせず、ドミニランスの手首に手刀を打ち込む。

すると、痺れたのか掴む力が弱まった。その隙にするりと腕を引き抜き、返す刀でマウントポジションを取ろうとする。

しかし、その程度で捕まえられるほどドミニランスは甘くはない。背筋の力だけでアインハルトごと起き上がり、一度仕切り直す。

一瞬の静寂の後、仕掛けたのはドミニランス。大地を割るかのような踏み込みから左フックを仕掛ける。

ガードして自らも攻撃しようとするが、鋭いアッパーカットが割り込んできて顎を引いて避ける他無かった。

ドミニランスの猛攻が始まる。多彩なパンチを上、下、右、左と隙無く打ち込んでなおかつ、時たま足を使つての牽制もある。

ここまで技術が冴えている人と戦うのは初めてのアインハルトには全てが目新しく、感動に打ち震えていた。

自分の頭の固さには本当に参る……こんなにも強くて素敵な人とのスパークをフィにしようとしたのだから……

サリエルさんとまた違う技の持ち主……これならサリエルさんのライバルということももうなずける。

なら、全力を出して……精一杯先ほどの非礼を謝ろう。

「はあああつー!!」

「いいねえ……若いつて。そうやって恐れず前にでれるから」

多彩なパンチの一つを選んでカウンターをジャストミートさせる。さすがのドミニランスもいやがったか、衝撃を和らげるために横に飛びながらつま先でアインハルトの水月を蹴る。

振り切つて打つてしまつたせいでまともなそれを食らつてしまい、苦痛の表情を浮かべながらもドミニランスを追撃する。

だが、アインハルトとてあれだけパンチを連射されて無傷なわけではない。ほとんどはガードしたが、いくつか喰らつてしまつた。

ただ一発のカウンターを成立させるためにこのダメージ……割に合わない。が、これしか方法がない。

実力差がありすぎる。おそらくドミニランスさんは素手が本分ではない。もつと多彩な武器……それこそ太刀や銃、槍といった武器が本分だということが伝わってきた。

そして……事戦いに関して純粋。この人は戦いを純粋に楽しんでるんだ。決して許されることではないが、だからこそ迷いが生まれることもなく強い。

鳩尾の痛みに耐えながら、体勢の整っていないドミニランスに霸王断空拳を打ち下ろして打ち込む。

が、なんと片足で体勢を立て直したドミニランスは両手で霸王断空拳を防いだ。防がれたことに落胆するより、驚きがわき上がってきた。

また……私の断空拳が防がれた。サリエルさんもこの人もなぜ私の

拳を止めることが出来るのだろうか？

一歩下がって仕切り直そうとするが、それより早くドミニランスが構えを解いた。

「やめだやめ……これ以上やったら本当にマジになっちまうよ」

「えっ……？」

「さっきのパンチはあたしを本気にさせるに値するものだからね……

…今も両手が痺れてるよ」

「……ありがとうございます」

「いいってことよ。あたしも久しぶりに満足がいく相手だったからね」

不完全燃焼だが、収穫もあった。

これが……ミッドチルダ最強の存在。サリエルさんがそう言うのも頷ける。

この人の強さの底が全く分からない。普通ならばある程度は分かるのだが、ドミニランスさんはまったく見えなかった……まるで濃い霧を手で掴もうとするが掴めないように。

そしてなんとなくだがこれ以上上の存在がないと言うことも理解出来た。こういう事を経験しておけばいざというときに冷静に対処できる。

「……まだやり足りないって言うなら、今度はトーレとやればいい」

「私がか？」

「興味あるだろ？」

「……ないと言えば嘘になる」

「だったら決定だ。じゃあさっそくっ」

「その前にお昼ご飯にしようよ。私お腹すいて来ちゃった」

「あたしもッス。もう十二時も過ぎているッスよ？」

腕時計で確認してみると確かに十二時を過ぎている。

十時に出発して一時間かけて駐車場に着いて、そこから船に乗り継いで検査やら何やらで時間結構取られたからな……しょうがないかどうせ今日は夜までずっといることだし、昼飯の後で存分にやらせた方がいいな。

「わかった。じゃあメシにしよう」

「わーい!!」

「今日は私が母様と一緒に作りました。それと……」

「私とデイエチも頑張って作ったぞ」

各自シートを広げて、ウーノとデイエチが自分達のランチボックスを広げていく。

まずウーノの方だが……ミッドチルダでは結構珍しい純和風な弁当だ。

三段式の籐かごにぎっしりと詰められた数々の品。一番下がおにぎりで、二段目には煮物や漬け物、温野菜と言った副菜が、三段目には唐揚げ、卵焼き、ぶりの照り焼きなどと言った主菜が敷き詰められていた。そういえばウチの家は少々特殊で母さんがこう言った違う世界の料理に凝っていることを思い出した。ウーノはそれを受け継いで作ったのだろう。

対してチンクとデイエチはサンドイッチやオムレツ、メンチカツやスパゲッティといった洋風にまとめている。少々形が不細工なものや崩れているものはチンクが作ったのだろう。

広げられた弁当に各々好きなものを取り、思い思いの昼食を取り始める。

その輪の中心にアインハルトがいて、みんなからいつもは聞けない事を質問されている。当の本人は少々困惑気味であるが、一つ一つ丁寧に答えている。

そんな輪から離れてサリエルとドミニランスが並んでその光景を見

ていた。

「どうだった？」

「ん〜……マジになりそうだったのはホントだよ。あんなに小さいのにアレだけできれば上等だし、最後のパンチなんか2ランク上の相手でも通用するよ」

「珍しいな……お前がそこまで評価するなんて」

「ノーヴェの手前、それぐらい言っておいてもいいと思ってね……あの子はいいいコーチになれる」

「性に合ってるんだろうな。教え子のことをしつかり把握できているし、それぞれに合った指導もしている。偏った考えを押しつけないところがノーヴェのいいところだ」

「他のみんなも順調に社会に適応している……四年経ってようやく安堵出来るようになってきたよ」

まだタルタロス軌道拘置所にいた頃はナンバーズ誰一人会うことは出来ず、サリエルがその近況報告に月一回行っていただけだ。

この時はまだ妹達に会うことは許されず、サリエルの報告だけを知っていたので常に不安を感じていた。

ナンバーズは特殊な生まれ、そして元犯罪者……人はそれを聞くだけで差別を凶つてしまう。

だが、二年もその報告を聞いている内に徐々に不安が解消されていくのが分かった。妹達は差別されることなく社会に受け入れられていたからだ。

そして今年、ようやく海上隔離施設へ移されて初めて妹達に会って……心の底から安堵した。

「……ありがとう、サリエル」

「ん？ いきなりどうした……お前らしくもない」

「妹達が住みやすい環境を作ってくれたことにとりあえず礼を、ね。

サリエルだろ？ 妹達のためにさりげなく頑張ってくれたのは？」
「そんなことないさ。俺はほんのちよつと頑張っただけ。ほとんどはスバルやティアナ、はやてさん達が身を粉にして頑張ってくれて、あいつら自身も自ら適応しようとして頑張ったから今が出来上がったんだ」
「謙遜しちゃって……いい男だよ、全く」

実際他のみんなに比べたら俺なんて本当にちよつとしか頑張っていない。

ただ……戦闘機人でも人と同じということを書いてきただけ…… たったそれだけだ。

無論、肉体言語で語ることもあったが苦にはならなかった。むしろ、分かってもらえるためなら進んでその手段を取った。

おにぎりをパクついて、漬け物をかじりながらドミニランスの話に相槌を打っていく。

と、突如神妙な顔をして俺の方をのぞき込んできた。

「……どうした？」

「いや、丸くなったなあ……って思ってたね」

「顔がか？」

「違つよ、性格がだよ。四年前とか一昨年までは全然余裕が無くて常に気を張っている感じだったのに……今は柔らかい感じがするんだよねえ……」

「たぶん、家族が出来たからじゃないかな？ 帰れる場所があつて、当たり前の幸せが側にあつて……だから自分に余裕が出来て、性格が丸くなったと思うぞ」

「当たり前の幸せか……あたしも最近そのことばかり考えてたんだよ」

「ほつ？」

「昔は戦っている時間が幸せだった……だけど、それが終わると幸

せ以上の渴きが襲ってきた。それを埋めようとまた戦って、渴いて……その繰り返し。だけど、今は違う。こうやってみんなと青空……って言ってもムシヨの中だけど、ご飯が食べられるっていう人から見れば当たり前前の幸せだけで……心が満たされるんだよ」

ドミニランスが言っていることは十二分に理解出来る。

何かをしている時の幸せはたしかに普段の幸せより刺激的なものだ。しかし、それが終われば幸せも終わり、どこか心に穴が空くような感覚になる。いわゆる現実に戻るといふ奴だ。

これが戦闘という凄惨なものになれば、なおのことその感覚に陥りやすい。そしてその感覚は普通のより強く、そして穴が空くではなく心が渴いていくというものだ。

さらに夕チが悪いことに、それは麻薬のようなもので次にその渴きを潤そうとすれば、前回よりも強い幸せでなければならぬということだ。

そんな麻薬にどっぷり浸かっていたドミニランスは今、別の幸せ……本当に普通の幸せで満たされているという。

「サリエル……当たり前前の幸せであたしは満たされるけど、この幸せをずっと感じていても……いいのかい？」

どこか寂しげな顔を浮かべて、ポツリと呟いた。

ドミニランスらしからぬ言葉を聞いて、サリエルは笑い飛ばそうとするがふと考える。

こいつは……今までの罪に気づいて呟いたのか？

思えば、昔からそういう気配があったがこれほど強く感じたのは初めてだった。

この面会日を決めてからまだ二回目で、このような意識が生まれるのはいい事だが……それではいつしか罪の意識に押しつぶされてしまう。

前にディエチがそういう兆候があったから対処法が分かっているけど……ドミニランスの場合、自我が強すぎるから諭すだけでは納得いかない。

ここはやっぱり……そう思ってサリエルはデコピンをした。

「つて!？」

「バカ、お前らしくもない……」

「なんだつてえ!？」

「お前も俺も……誰もが幸せを享受する権利がある。そんなに思い詰めるな」

「分かってるんだけど……どうしても考えちまうんだよ」

「考えるとは言わないが……そう言っただけで当たり前前の幸福から逃げていると悲しむのはあいつらだぜ?」

指さしたのは今も楽しそうにランチボックスをつついているウーノ達の方だった。

ドミニランスもそれが分かっているようで先ほどの寂しげな表情を少しだけ明るくさせた。

「俺との最初の約束、覚えているだろ? ウーノ達は今ここで精一杯幸せに生きている。俺もそれに尽力を尽くしてきたつもりだ」

「……ああ、そうだね。やっぱり悩むのはあたしらしくないねえ」

「そうそう。何事にもさっぱりしているのがよっぽどお前らしい」

「まったくだよ……約束と言えば、サリエル……アインハルトと引き分けたんだつて?」

「うっ」

「引き分けだったからいいものの、これで負けていたら首を捻っていたところだよ」

「面目ない……」

「いつかあたしがリベンジするまでに負けたら……本当に殺すから

ね？」

本当に……殺す、か。

ドミニランスとの二つめの約束……勝ち続けるという約束。その約束が今の俺の強さを支えている。いつの日か、また戦うために強さを維持し、積み上げていかなければならない。

ドミニランスもまた同じ……今度こそサリエルに勝つためにトレーニングを欠かしていないという。

ユーミルもオーディンも無くなった今こそ、自分の真価を問われると嘯っていた。

しかし……その決闘の日まで俺が現役でいられるかというところ……不安に駆られる。

……今は考えないでおこう。この瞬間を楽しもうじゃないか。

「……分かってるって。ほら、俺達も輪に加わろうぜ。みんな、お前に話したいことが山ほどあるんだ」

「そうさね。姉としてそれは聞いてあげないと……」

二人はウーノ達の輪の中に入り、昼食を進めていく。

その中でサリエルはふと自分の胸の内に暖かいものが流れ込んでくるのが感じられた。

それがなんなのかすぐに分かり、フツと柔らかい笑みを浮かべる。

ああ……やっぱりこれが俺の当たり前の幸せなんだ。

こうやって、気の許せる親友達となんの変哲のない話を交わしながら、メシを食べていく……

フェイトと一緒にいる時もいいけど、スバル達やウーノ達とワイワイ騒ぐのもいい。

ドミニランスもこの当たり前の幸せを感じてくれたらいいんだが……

「……どうしたの、サリエル？」

なぜか笑みを浮かべていたサリエルが気になったのか、隣にいたデイエチが顔をのぞき込んできた。

「いや、何でもねえ……デイエチが可愛いつて思っていただけ」

「ツノノノ そんなこと……」

「おやおや〜？ サリエルはデイエチに興味がおありなのかなあ〜？ フェイトという最愛の妻がいながらも浮気だなんて……」

「からかってやっただけだよ。実際デイエチは可愛いし」

「なんならもらってくれてもいいぞ？ デイエチは料理も出来るし、気配りも出来る。なによりお前のことを好いているからな」

「いや、チンク……俺がフリーだったらOKなんだが、な？」

「サ、サリエルのお嫁さん……はう〜……」

一人で何を想像したのか、デイエチが真っ赤になった顔を両手で覆いながら卒倒した。

その姿を全員が大笑いして、一部がサリエルをからかい始める。

そんなからかいを適当に流しながら、改めて思う。

今、俺って本当に幸せなんだな……

陽光が燦々と降り注ぐ中、そんな楽しい一時が過ぎていった。

夕方、ここでようやくお開きになった。

昼食の後にインハルトがトーレ、セツテとスパーをした後、サリエルとドミニランスの兩人から色々なアドバイスをもらった。

そして、帰り際自分の独房に戻ろうとするドミニランスにサリエルがこんな事を聞いた。

「ドミニランス、一つ聞いてくれないか？」

「ん？」

「もし近い将来、俺が部隊を持つことになったらお前を入れようと

思っているんだが……どうだ？」

「……人の下につくつていうのは嫌いだけど、あんたの下ならいいかな？ 唯一気を許せるあんたの部隊なら楽しくやっていけそうだし……かと言つて、副官ぐらいじゃないとやらないけどね？」

「そうか……」

「いきなりこんな事聞くなんて……どうしたんだい？」

「いや、興味本位だよ。それじゃ、また来月」

「ああ」

副官か……たしかにそれぐらいじゃないとあいつに合わないな。

これを聞いておいたのは、本当に気まぐれ……この先どうなるか分からないし、仮に現役を引退しても部隊を持つとは限らないしな。

でも、その時が来たら……絶対に招集する。今まで目を付けておいた生徒も含めて。

そんな事を考えながら帰りの臨時船に乗り、ヘリオンに乗って帰路につく。後ろには行き同様アインハルトが腰にしがみついている。

「今日はどうだった？」

「……非常にいい経験になりました。皆さん本当に強くて、経験豊富で……優しい人たちでした」

「だろ？ 犯罪者だからって、精神まで荒んでいる訳じゃないんだ。事実、俺だって最初はドミニランスのことが嫌いだった」

「えっ？ 今ではあんなに仲良くされているのですか？」

「ああ。ちよつとここじゃ言えないような関係で本当に血で血を洗うような激闘の末に俺達は和解したんだ。そこからは親友さ」

「そうだったんですか……」

「外面で推し量ることは誰にだつて出来る。だけど、その外面で決めつけているとその人の本質を図ることが出来ない。アインハルト、お前は人の内面から推し量れる人になれ」

「……努力します」

「よし。じゃあ、家に送っていく前に甘いものでも買っていくか？」

「甘いもの……ですか？」

「おう。糖分補給にな……言っておくけど、こういうのはあんまり断るなよ？ 年下は年下らしく大人に奢られとけ」

「……はい！！」

運転しているトーレに一言声をかけてみんなに別れを告げ、ヘリオンのスロットルを入れて行きつけの洋菓子店に向かう。

こうして、今日も終わっていった。

余談だが、シユークリームを食べているアインハルトは年相応の顔をしていて、なんだかいつもの雰囲気とはかけ離れていてすこし笑ってしまった。

アインハルトはかなり恥ずかしかっていたが……それもいい思い出だ。

第十三教導 邂逅……昨日の敵は今日の友（後書き）

はあ……若干スランプかも。執筆スピードが全然上がらないし、やる気も……それほど持っていない。

でも、頑張つて今年も進めていきたいと思っています。

今回は久しぶりにドミニランスを登場させました。いやあく本当に久しぶりだったな……

では、今回はインターミドル開会式をお送りしたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1395w/>

魔法少女リリカルなのはVivid 蒼の重騎士の日常

2012年1月9日00時47分発行